9810 Space Design

スペースデザイン ISSN 0563-0991
第409号1998年10月1日発行
毎月1回1日発行
昭和40年2月5日第三種郵便物許可

SD

特集

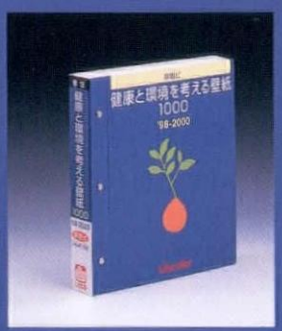
オフィス環境の近未来 Office Environments for the Near Future

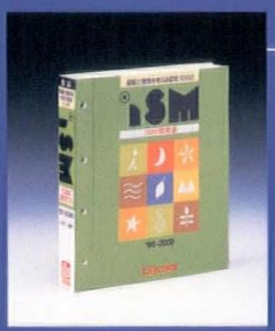


Monthly Journal of Art and Architecture

健康と環境を考える壁紙1000
'98-2000

リリカラは、1996年4月、業界に先駆けて
壁紙にRAL品質基準を導入するなど、
健康と環境を守る製品づくりにいち早く取り組んでいます。
現在、90%をこえる商品にRALあるいはISMマークを表示。
今後、廃棄物の処理法や量の削減などの新たなテーマに挑み、
さらに、人と環境にやさしいものづくりをめざします。





収録商品

- ■土に還る壁紙［生分解性樹脂使用］
- ■ジオエース［水性樹脂使用］
- ■エコール［リサイクル紙使用］
- ■エコール・汚れ防止タイプ
  ［リサイクル紙／エバールフィルム使用］
- ■紙
- ■無機質系素材

壁紙・カーテン・カーペット・タイルカーペット・フローリング・クッションフロア

ひとにうれしい　地球にやさしい

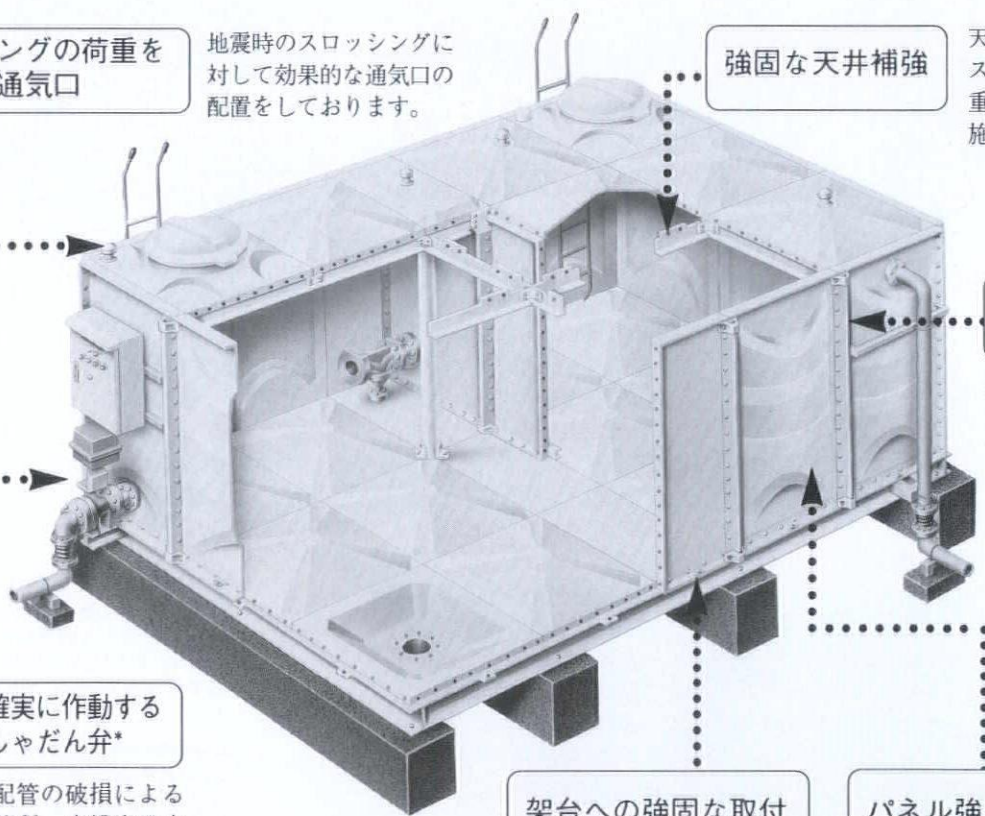
リリカラ

〒160-8315 東京都新宿区西新宿7-5-20 Tel.03-3366-7865

BRIDGESTONE

新・耐震基準
優れた耐震性でひとつ上をいく
安心をお届けします。

ブリヂストンパネル水槽は、衛生性、保温性、配管仕様、止水性といった独自の技術により高い評価を頂いております。そして、この度、求められる耐震基準に適合させ、緊急時には水槽内の水確保のために作動する緊急遮断弁も品揃えさせる等、皆様により安心してお使いいただける商品として生まれ変わりました。



スロッシングの荷重を回避する通気口

地震時のスロッシングに対して効果的な通気口の配置をしております。

強固な天井補強

天井には地震時のスロッシングの荷重に耐える補強を施しております。

水槽外壁面の連続補強

外壁面を連続した金属で補強してあります。

緊急時に確実に作動するスーパーしゃだん弁*

地震時に、配管の破損による水の流出を防ぎ、水槽内の水を確保する事を目的とした緊急時の保水用遮断弁です。

＊［オプション仕様］

架台への強固な取付

新耐震基準に基づいて本体と架台を確実に締結しています。

パネル強度アップ

耐震性に優れたパネルを採用しています。

スーパーウォータータンク HI型 1.0G/1.5G/2.0G

スロッシング対策適合品

株式会社ブリヂストン 建築用品販売部 東京都中央区日本橋3-5-15同和ビル 〒103-0027 TEL. (03) 5202-6864 FAX (03) 5202-6869

National/Panasonic

A V & C F L A P S

AUDIO
音響システム

VISUAL
映像システム

COMMUNICATION
通信システム

COMPUTER
コンピューターシステム

FOOD
食品流通システム

LIGHT
照明システム

AIR & AQUA
空調・水管理システム

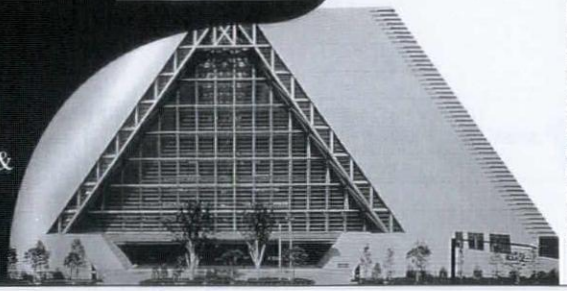
PASSAGE
搬送システム

SOFTWARE&
SYSTEM
ソフトウェア・
システム





ここにはあります人と自然と技術の調和が



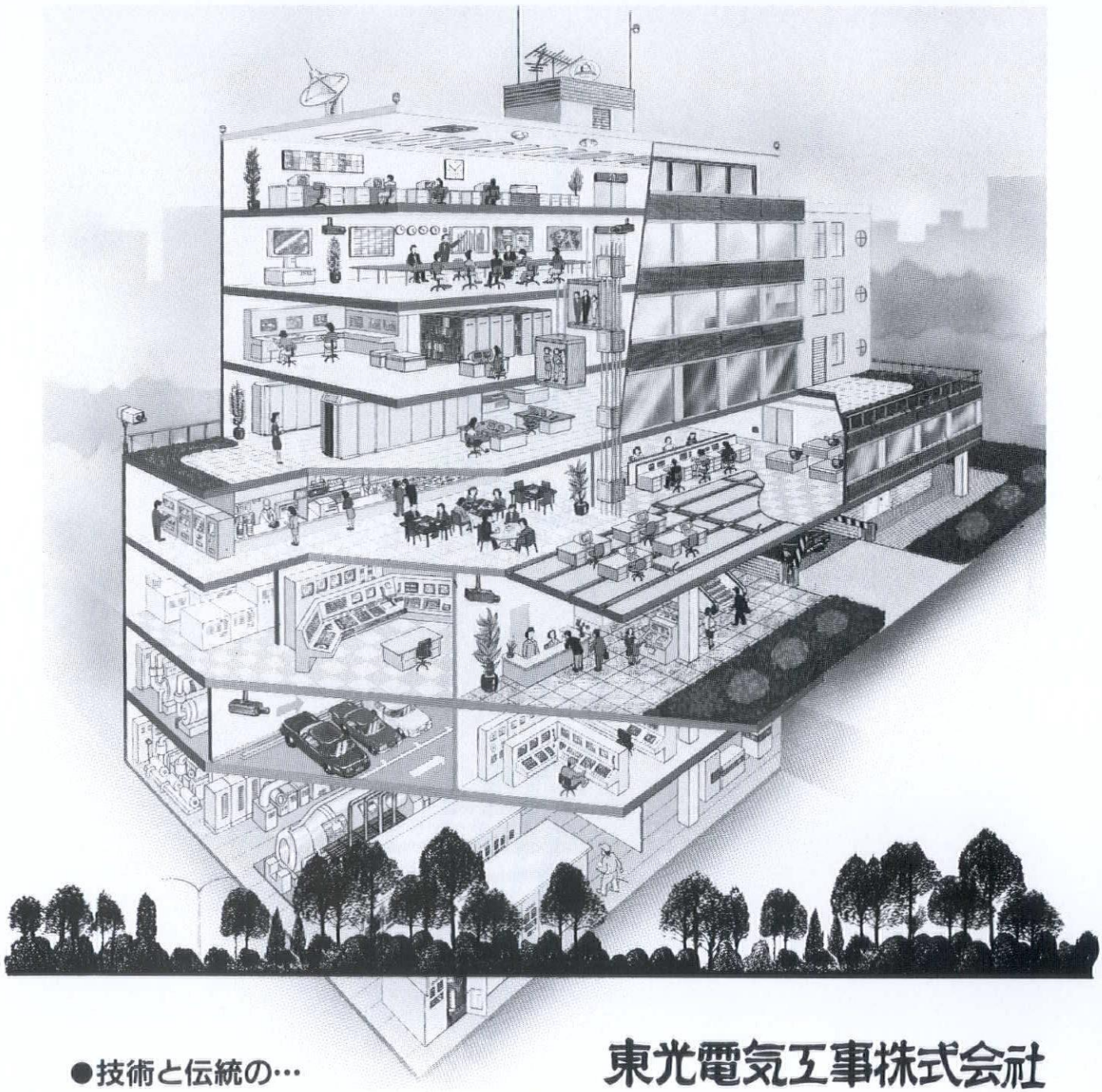
松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。

松下電器産業株式会社

建設システム営業本部	☎03-5500-7504
北海道支店	☎011-207-7722
東北支店	☎022-711-3551
新潟支店	☎025-246-1031
関東支店	☎0286-37-2241
神奈川支店	☎045-651-5051
建設システム営業本部中部支店	☎052-951-6010
長野支店	☎0262-26-3990
北陸支店	☎0762-23-1121
静岡支店	☎054-247-5155
建設システム営業本部関西支店	☎06-949-2111
中国支店	☎082-247-5272
四国支店	☎0878-26-1711
九州支店	☎092-431-1100
沖縄支店	☎098-869-2926

快適さは…安全、確実が基本。

快適な環境づくりに、豊かな経験。



●技術と伝統の…
内線工事■外線工事

東光電気工事株式会社

本社　〒101-8350 東京都千代田区西神田1-4-5　TEL.(03)3292-2111

支社所在地／札幌・仙台・大宮・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・広島・福岡

自由の女神さま、
グラリときたら、ユラリと踊ってください。



東京湾の海風がほのかに香るお台場海浜公園に、今年、フランスから、どえらいVIPがやってきました。「自由の女神像」です。

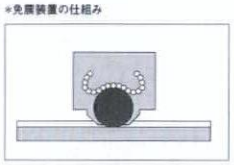
ちなみに、アメリカ合衆国建国100年を記念してフランスが寄贈したのが「ニューヨークの自由の女神」。その返礼にアメリカがフランス革命100年を記念して贈ったのが、この「パリの自由の女神」です。もし日本で地震に遭って"パリッ"なんてことでもあったら、それこそシャレではすみません。

地震対策には知恵が必要です。大切なお預かりもの、ということに加え、女神は年齢100歳をはるかに超えるご老体なのですから。(失礼!)もちろん地震のことなど考えてつくってあるはずもありません。そしてわたしたちは、こんな課題に挑戦しました。「女神の本体には一切補強を加えないで、震度7の揺れに耐えること。」

この難問を解決したのが、「台座の下に入れた6基の免震装置」です。台座の下のボールがコロコロころがり、地震の揺れを吸収。像に加わる力を1/5以下に減らします。これで、もしほんとうに大地震が来たとしても、女神さまは台座ごとユラユラ踊っているように見えるんじゃないかな。もちろん、地震なんて来ない方がいいことは、言うまでもありませんが...。

以上、わたしたち鹿島の仕事の一部を、ここにご報告いたします。

*免震装置の仕組み



ボールベアリングが転がる動きで地震の揺れを吸収します。オイルダンパが動きすぎを制御するので心配ありません。なお、免震装置の下には、マットスラブによる直接基礎を施し、地下12mまでの地盤改良工事も行っています。

*自由の女神像



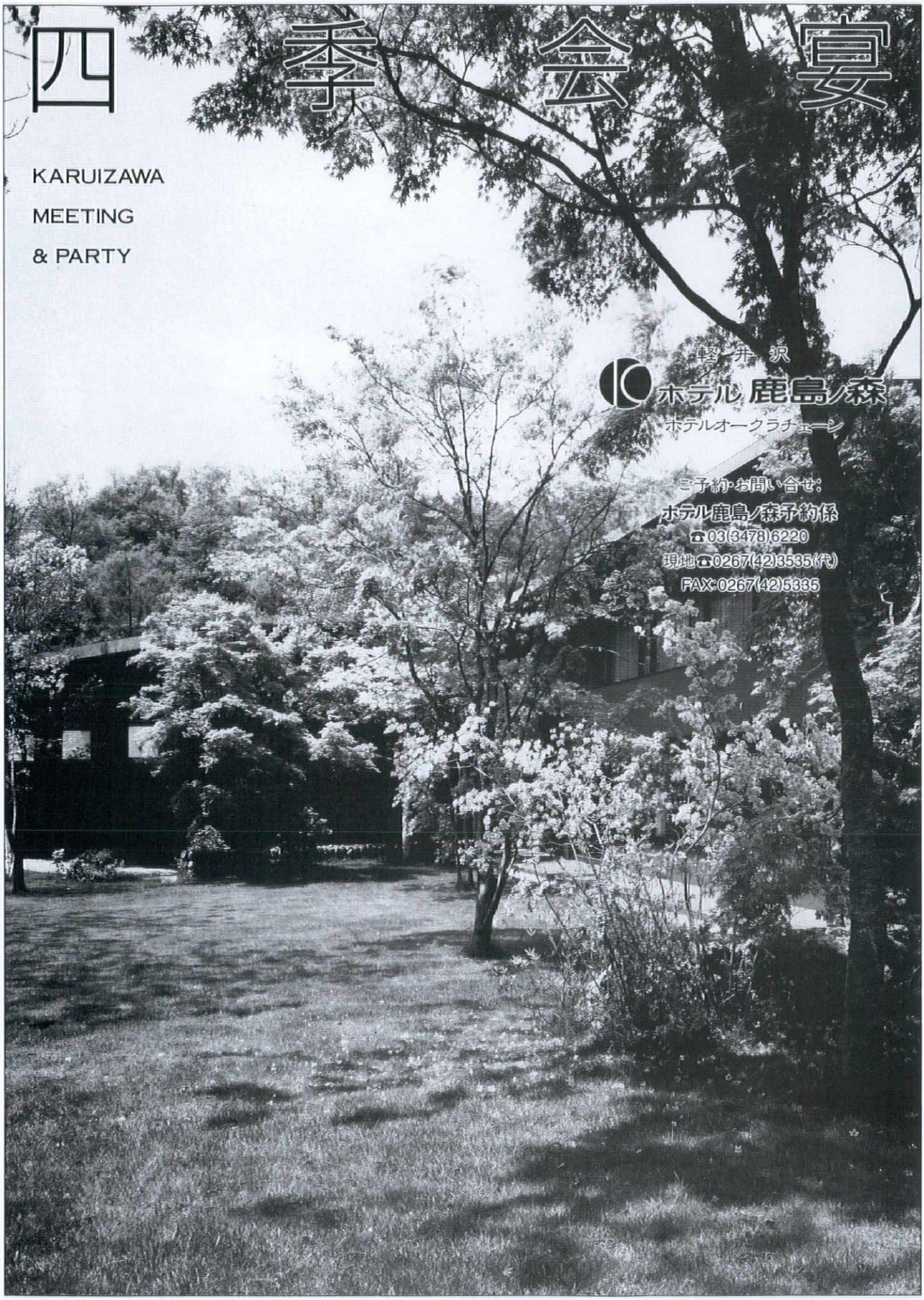
1998年1月までお台場海浜公園に展示されています。

自由の女神像移築
主催　「日本におけるフランス年」実行委員会
　　株式会社フジテレビジョン
共催　東京都

J'aime la France

鹿島

東京都港区元赤坂1-2-7　〒107-8388
http://www.kajima.co.jp/



広告についてのお問合せの際は<SDを見て>と御明記願います



ロビーラウンジ

ようこそ、クラシカル・エレガントな世界へ。

19世紀初頭のヨーロッパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。
ドアマンに迎えられホテルに一歩脚を踏み込めば、
あなたの新しい物語がはじまります。

(客室&施設)

●ビジネス向き、女性向き、観光、ファミリー、個人滞在用と、目的に応じて選べる全404室。(シングル¥15,000～ ツイン¥25,000～) ●ジャグジー、ヒーティングルームなどを付帯した2,000㎡の"ガーデンプール"。●クラシカルなインテリアや絵画で統一された趣のあるロビー。●個性的なステンドグラス、パイプオルガンを配したチャペル〈3F〉。ガーデンプールの一角に設けられたガーデンチャペル〈5F屋外〉。厳粛な神殿(八幡殿=やひろでん)〈3F〉。●最大800名様まで可能な大宴会場(永代)、中、小、さまざまな8つの宴会場。●最新設備を完備したビジネスセンター。●心身の健康管理と増進、心の交流を目的とした新しいタイプのヘルスクラブ"ジ・イースト"。●都内初のホテル直結型多目的ホール"イースト21ホール"。

(レストラン&バー)

●フランス料理を主としたコンチネンタル料理……【ブラスリー ハーモニー(2F)】
●本格的広東料理……【中国料理 桃園(2F)】
●アフリカンムードのメインバー……【バー エレファント(2F)】
●旬の素材が織りなす食の芸術……【日本料理 さざんか(21F)】
●四季折々の味覚…【鉄板焼 木場(21F)】●心に残る夜景…【カクテルラウンジ パノラマ(21F)】



チャペル

HOTEL East 21 TOKYO

地下鉄東西線『東陽町駅』より徒歩7分。
東陽町駅～ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

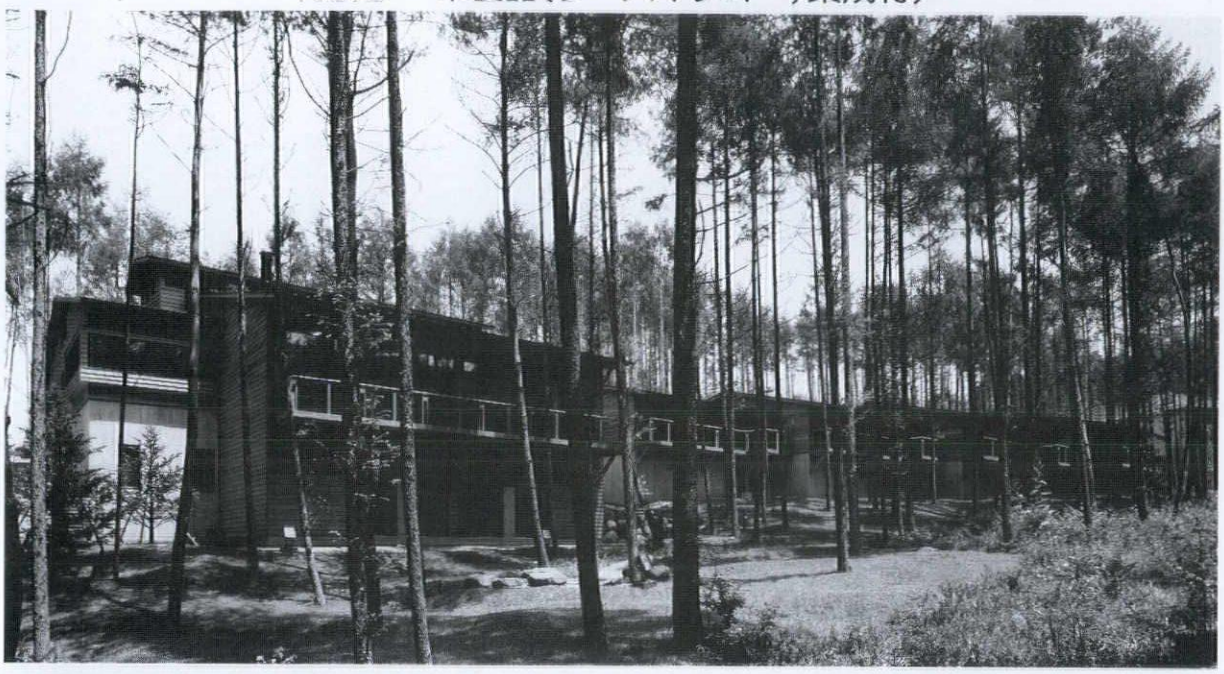
ホテル イースト21東京

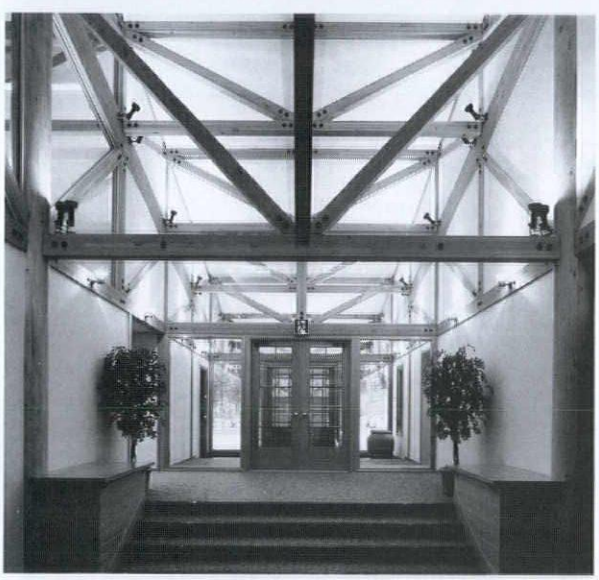
〒135-0016 東京都江東区東陽6-3-3
TEL 03(5683)5683㈹ FAX 03(5683)5775

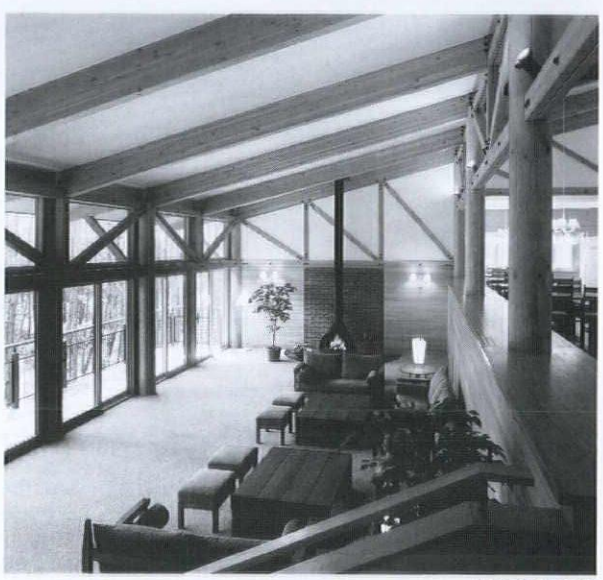


大興物産の海外建材シリーズ

No.6　木製品(ツーバイフォー,集成材)







大興蓼科山荘

大興物産は、米国ツーバイフォーシステム用各種部材をパッケージ輸入しており、
企画段階から調達・施工段階までトータルなコーディネーションを致します。

お問い合わせは、大興物産株式会社・海外調達部まで。
〒107-8318 東京都港区元赤坂1-5-31(新井ビル) TEL 03-5474-6054 FAX 03-5474-6386

建設資機材の総合商社

鹿島グループ　**大興物産株式会社**

本　社　〒107-8307 東京都港区元赤坂1－6－4 安全ビル

本　社	☎(03)5474-6060 FAX(03)5474-6076	札幌営業所	☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074	四国営業所	☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
東京支店	☎(03)5474-6072 FAX(03)3423-1915	東北営業所	☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867	九州営業所	☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
横浜支店	☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996	関東営業所	☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719	シンガポール オフィス	☎65-3440590　FAX65-3446714
名古屋支店	☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179	北陸営業所	☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248		
大阪支店	☎(06) 762-5661 FAX(06) 762-1074	広島営業所	☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270		

マルチメディアのNEC

NEC

エクセレント・モバイル、誕生。



● 軽さ約1.25kgの超軽量ボディ。

●マグネシウム合金を採用した薄さ25mm、軽さ約1.25kgの超軽量コンパクトボディ。
●ディスプレイは、10.4インチTFTカラー液晶。
●MMX®テクノロジPentium®プロセッサ200MHz搭載。
●メモリは、64MB標準装備。HDDは約2.1GBと大容量。

● 最大約11時間※のバッテリ駆動が可能。

●携帯利用に便利な最大約11時間のバッテリ駆動。※
※別売の大容量バッテリパック2個とバッテリケースを装着し、さらにAPMモードを使用した場合。

● 優れた操作性&拡張性。

●B5ファイルサイズノートパソコンながらキーピッチ※(17.5mm)を実現。
※キーピッチ:キーボードのキーの横方向の間隔。キーの中心から隣のキーの中心までの長さ。
●電源ONのまま取り外し可能な(ホットドッキング対応)
CD-ROMベースなど別売の豊富な拡張機器をご用意。
●スクロール機能付きNXパッドを採用。



CD-ROMベース(別売)

● 流れるようなウェーブサーフェイスデザイン。

●スマートなデザインに加えて、パールライトチェリーとウォームグレーのツートンカラーを採用。
●手のひらをのせられるパームレストには、ラバー加工を施し、長時間のキー入力でも快適。

● 先進のメール機能搭載。

●高速56KbpsのFAXモデムを搭載。インターネット利用も快適。
●プリインストールした「モバイルメール」では、シンクロナイズ機能に対応。
また、ファンクションキーによる簡単操作で電子メールを送受信。





Windows®98 搭載

スタイリッシュなB5モバイルノート

LaVie NX

ラヴィNX

ラヴィNX LB20／40A オープン価格

Quality for you PC98-NX
安心と品質をあなたに

●当社は国際エネルギースタープログラムの参加事業者として、本製品が国際エネルギースタープログラムの対象製品に関する基準を満たしていると判断します。

Designed for Microsoft® WindowsNT® Windows®98

*ソフトウェア、周辺機器、増設ボード類等はWindows®98のもとで動作可能なものをご確認の上ご使用ください。Windows®98の正式名称はMicrosoft®Windows®98 Operating Systemです。Microsoft、Windowsは米国Microsoft Corporationの米国およびその他の国における商標または登録商標です。本パーソナルコンピュータは、オペレーティングシステムを標準搭載しています。

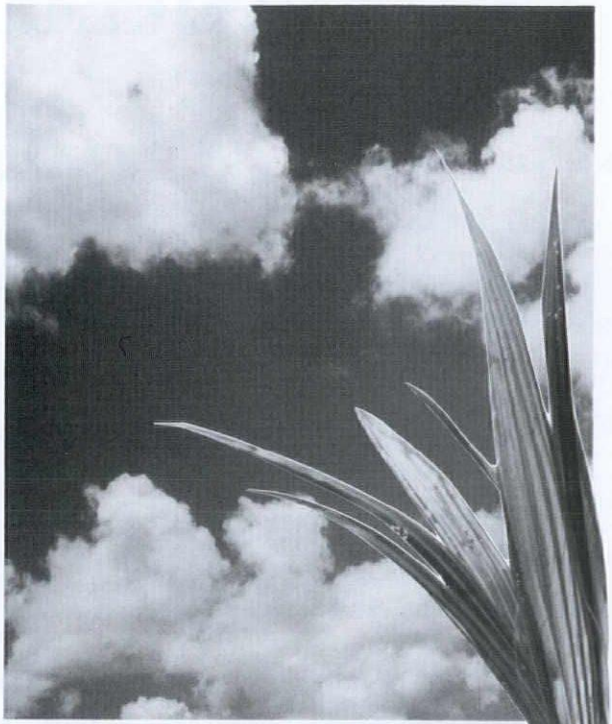
*ご使用の際は、必ず「取扱説明書」をよくお読みのうえ、正しくお使いください。

Windows®98の本命　NECは常に最適なパソコンの利用環境の提供を目指します。

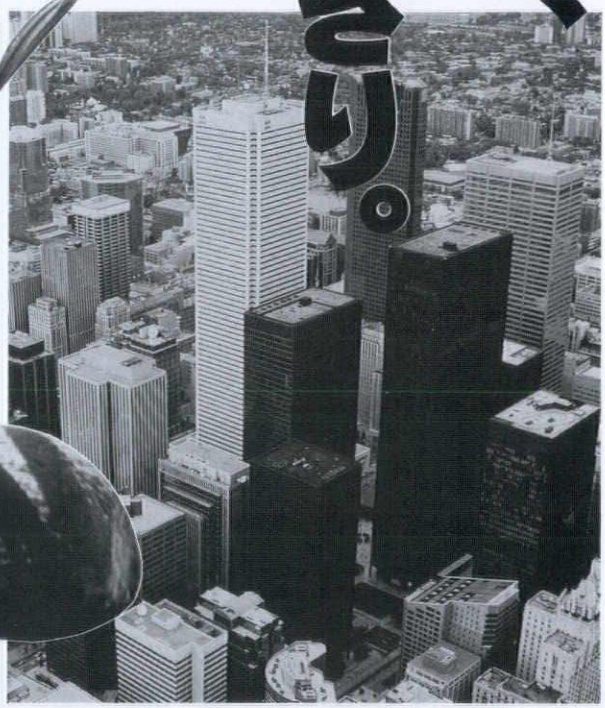
LaVie NXに関する情報を下記の情報提供サービスにより提供しています。
●「NECパソコン情報FAXサービス」
東京:03-3769-9821 大阪:06-304-9821
LaVie NX 6013 (14枚) ※枚数は変更になる場合があります。

●NECパソコンインフォメーションセンター:フリーダイヤル0120-60-9821受付時間9:00～17:00(祝日を除く)
●インターネットでの情報はこちらへ 98 Information http://www.nec.co.jp/98/
携帯電話・PHSではご利用頂けません。電話番号・FAX番号はよくお確かめの上おかけください。

〈本広告に関するカタログを差し上げます。〉
ハガキに郵便番号、住所、氏名、年齢、電話番号、勤務先を明記のうえ、〒108-8001 東京都港区芝5-7-1 NEC10-28530 LaVieB5(SD 9/25)係までお送り下さい。



この世に雨の、降るかぎり。



自然が私たちに雨と光を与えてくれる限り、
今日もどこかで新しい生命が芽生えます。
私たち日新工業の防水材料も、
人々が快適な暮らしを望む限り、
建築と共に今日もどこかで生まれています。
多様化する都市空間の生活環境づくりにおいて、
日新工業はつねに新しいトレンドを見据え、
時代のニーズにフレキシブルに応える
防水材料・工法を開発しつづけています。

アスファルト防水　合成高分子シート防水　塗膜防水　改質アスファルト防水　土木防水　シングル葺き

マルエス S 日新

総合防水メーカー

日新工業株式会社

営業本部 〒103-0005/東京都中央区日本橋久松町9-2 ☎03(5644)7211(代表)

札幌 ☎011(281)6328(代表)　名古屋 ☎052(933)4761(代表)
仙台 ☎022(263)0315(代表)　金沢 ☎0762(22)3321(代表)
大宮 ☎048(642)5811(代表)　大阪 ☎06(533)3191(代表)
東京 ☎03(5644)7221(代表)　高松 ☎0878(34)0336(代表)
千葉 ☎043(227)9971(代表)　広島 ☎082(294)6006(代表)
横浜 ☎045(316)7885(代表)　福岡 ☎092(451)1095(代表)



より快適な水環境をめざして。



文明の栄えた土地には、必ずといっていいほど豊かな水がありました。
自然に恵みを与え、生命を育み、人々の暮らしをうるおしてくれる“水”。
地球規模の環境汚染が問題となっている今、
西原は、都市のより快適な水環境の創造を通して、
社会に貢献してまいります。

水と人のあいだに
NISHIHARA

株式会社 西原衛生工業所

東京都港区芝浦3-6-18　TEL.(03)3452-7441大代表　支店／札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋　事業内容／給排水衛生設備、冷暖房設備、消火設備の設計、施工

いい環境は情報を活かします。

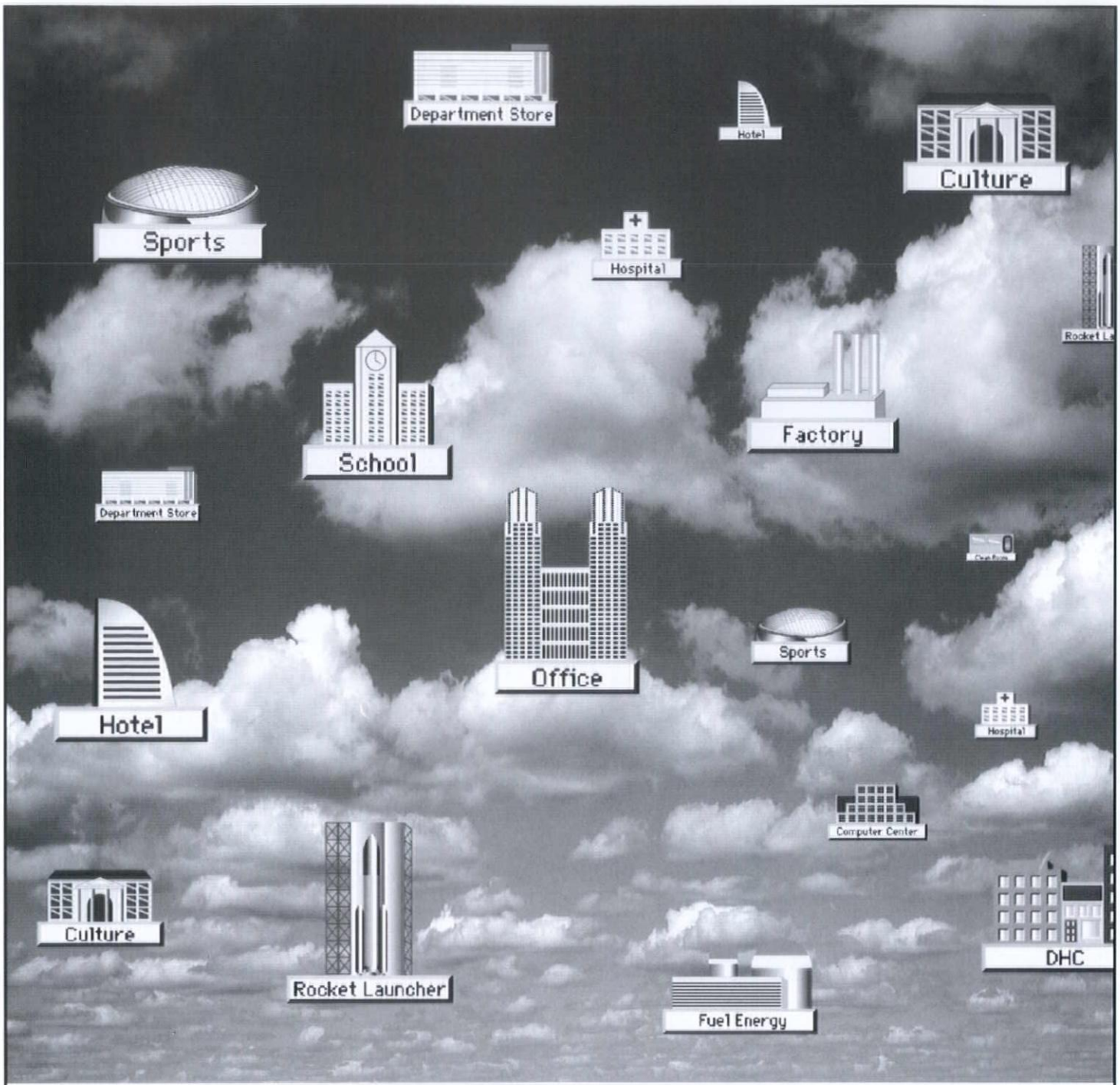
情報ネットワーク時代への
イトーキからの回答。
「家具」から「配線」を解放した新しいシステムです。



コミュニティアイランド

オフィスはいま、情報機器の進化や組織変更などにスピーディ、スムーズに対応することが求められています。
「コミュニティアイランド」は、家具から配線を解放、通信や電源をネットワークラインに納めることで自由なレイアウトを可能としています。
業務内容の変化による瞬時のレイアウト変更や効率的なファシリティ管理にも威力を発揮します。
情報化オフィスのことならイトーキにお任せ下さい。

株式会社イトーキ
東京都中央区銀座1-8-19 〒104-0061 Telephone 03 3566-5211
お客様相談センター 0120-164177



空気のメニュー。

オフィス、工場、学校、病院…。それぞれの建物には、もっとも適した空調システムがあります。
新菱冷熱は「さわやかな世界を創る」という思想のもとに、
用途に合わせたオーダーメイドの空調システムを、設計・施工しています。
バリエーション豊かな私たちの空気のメニューから、21世紀の新しい都市環境が始まります。

新菱冷熱
SHINRYO CORPORATION

本社：〒160-8510 東京都新宿区四谷2-4 ☎03-3357-2151(代)　支社：札幌・仙台・千葉・横浜・名古屋・大阪・富山・広島・福岡

CHUDENKO

確かな歩み未来まで……



総合設備の設計施工　電気・情報通信・計装・空調・給排水・水道施設

株式会社 中電工

本店／広島市中区小網町6番12号　TEL.(082)291-7411
支店／広島・岡山・山口・島根・鳥取・東京・大阪

最先端のハーモニー。

さまざまな先端技術が調和して、「快適」という名のハーモニーを奏でる。トーエネックのエンジニアリングは、まさにそんなイメージです。電気設備をはじめ、情報通信・冷暖房・空調・防災設備など…。システム設計から施工・保守まで、高度で総合的な技術力を活かし、全国主要都市を拠点に幅広いネットワークでみなさまにお応えしています。オフィスビルやマンション、ホテル、工場、さらにはコミュニティ施設。あらゆるスペースを、心地よい技術のハーモニーで包み込みたい。インテリジェント&ヒューマン。私たちは、トーエネックです。



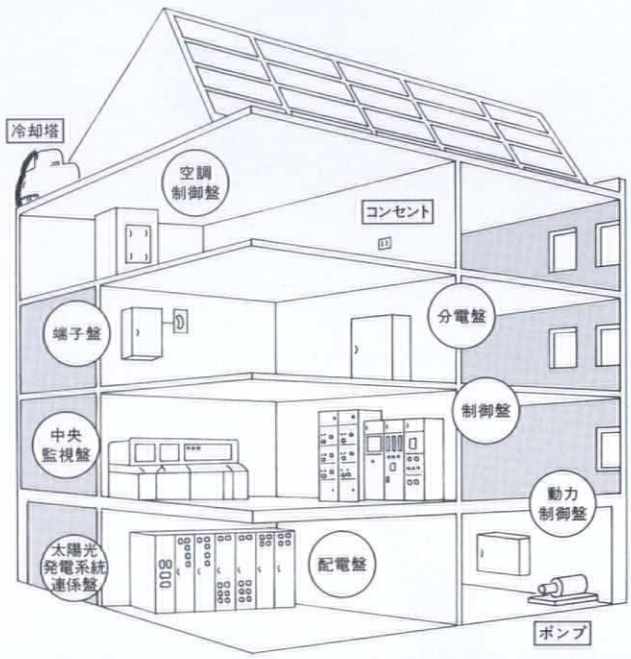
先端技術で、システムする。
TOENEC

株式会社 トーエネック

本　店/名古屋市中区栄1-20-31　〒460-0008 ☎(052)221-1111
東京本店/東京都豊島区巣鴨1-3-11　〒170-0002 ☎(03)5395-7111
大阪本部/大阪市淀川区新北野3-8-2　〒532-0025 ☎(06) 305-2181

見えない電気を交通整理
それはKAWADEN





川崎電気株式会社

●本　　社／山形県南陽市小岩沢225
●東京本社／東京都港区芝浦3－7－4

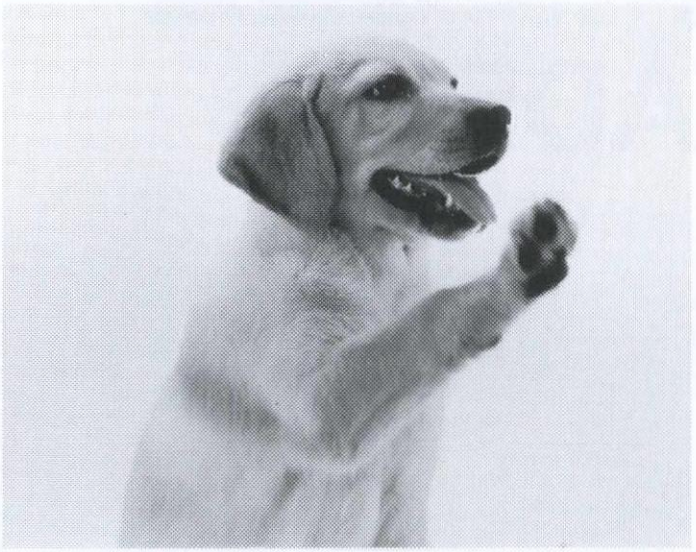
信頼と確かな技術で未来を築く

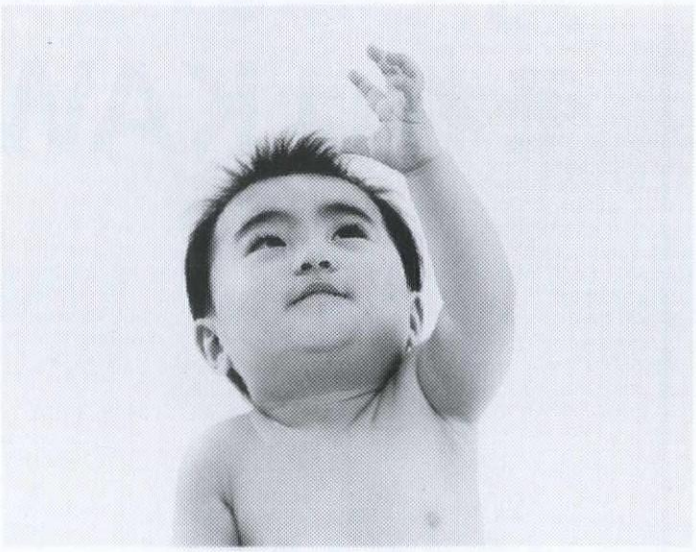
大栄電気株式会社

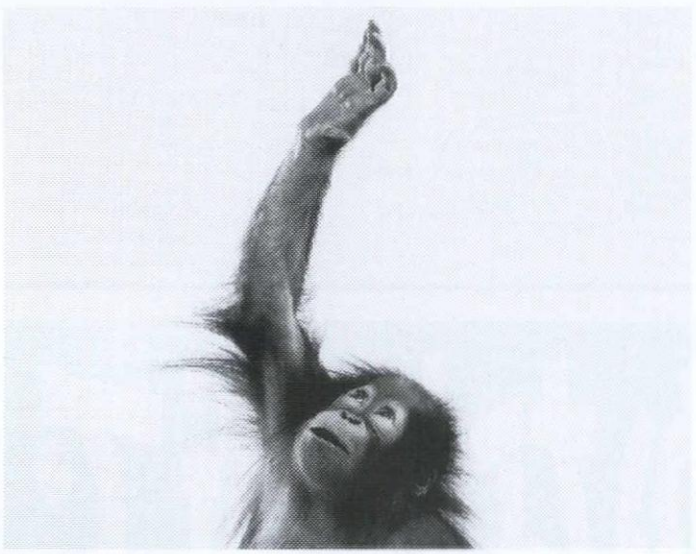
代表取締役社長　伊藤　赳

本　　社　東京都中央区銀座3－7－10　TEL03(3562)0311(大代表)　FAX03(3562)0300
支店営業所　大阪,名古屋,北海道,東北,北関東,東関東,神奈川,浜松,神戸,四国,中国,九州,沖縄

KANDENKO









大切なのは、
何かをつかもうとする心。

電気は光・熱・情報・音響などに姿を変え、私たちの暮らしを支えています。関電工はこうした電気を、住宅で、オフィスで、劇場で、工場で、環境への配慮と安全性を第一に具体的なシステムや設備のカタチでお届けしています。そしてつねに、さらなる可能性を広げようと、新たな夢を描き、日夜さまざまな研究を続けています。今までも、これからも、関電工の技術はいつもあなたの近くにいます。

いつも、人に優しい技術で未来へ。

関電工

本社：〒108-8533 東京都港区芝浦4丁目8番33号
☎：NTT 03(5476)2111 TTNet 03(4431)2111

SD

バックナンバー

鹿島出版会
東京都港区赤坂6-5-13
電話：03-5561-2550
振替：00160-2-180883
Home Page Address:
http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm
年間定期購読料
26,000円（特別定価号＋消費税、送料込み）

SDバックナンバー常備店
［東京］
八重洲ブックセンター
03-3281-8203
三省堂本店（神田）
03-3233-3314
書泉ブックマート
03-3294-0011
紀伊国屋本店 03-3354-0131
大盛堂書店 03-3463-0511
［大阪］
旭屋書店本店
柳々堂 06-443-0167
［札幌］
旭屋書店 011-241-3007
［横浜］
有隣堂本店 045-261-1231
［京都］
大龍堂書店 075-231-3036
［大学生協内書店］
東北工業大学　東京工業大学
法政大学工学部　早稲田大学理工学部　関東学院大学

9610　中世の光と空間　1988円
フランス中南部のロマネスク建築を紹介。ル・トロネ修道院、他。写真＝堀内広治、文＝羽生修二、他［ふたつの都市考〈近代都市と芸術展〉〈未来都市の考古学展〉］［97の椅子プロジェクト］

9611　栗生明　2548円
彼のみごとなディレクションに裏付けられた、コラボレーションの結晶を紹介。岡崎市美術館、植村直巳冒険館、カーニバル・ショーケース、他。［田窪恭治のサン・ヴィゴール・ド・ミュー礼拝堂プロジェクト3］

9612　SDレビュー1996　1988円
第15回SDレビュー誌上発表。ユストス・ピザール＋ペーター・ルーゲ、高橋昌巳、城戸崎和佐建築設計事務所、他［伊丹潤の近作より：石彩の教会、木の教会、土の教会］

9701　葉祥栄：カリステニクス　3059円
地方自治体主体のまちづくりプロジェクトを紹介。事例：くまもとアートポリス、クリエイティブTOWN岡山、長崎アーバン・ルネッサンス、白石メディア・ポリス、他

9702　木を生かした架構と空間　1988円
木の性質を生かした国内外の25例を紹介。金山の火葬場、モルジュのホール、他。文＝川口衛、今川憲英［アジアを熱くする新世代建築家たち：IAA国際会議より］アジアの都市・建築の現在、未来を問う。

9703　ミニマル・スペース・アーキテクチュア　1988円
ミニマルでシンプルな建築表現が特徴的な、4人の建築家を紹介。ジョン・ポーソン、小川晋一、岸和郎、石田敏明。文＝丸山洋志、他［東京国際フォーラム］写真＝堀内広治

9704　拡張するデジタル・デザイン　3059円
コンピュータとネットワーク技術による、建築・都市の新しい環境を造り出すプロジェクトを紹介。文＝田島則行、山口重之、桂 英史、マイケル・ベネディクト、藤幡正樹、久保田晃弘、坂村健、奥出直人、両角光男、他

9705　アフラ＋トビア・スカルパと「ベネトン」　2000円
アフラ＋トビア・スカルパによるベネトンのオフィス社屋、ショップなどを紹介。文＋インタビュー＋写真＝豊田博之［都市ビサとカルマッシの仕事］カーサ・ムーティ、ヴェルディ劇場修復計画など

9706　柳澤孝彦：劇場の空間構成　2000円
新国立劇場、東京オペラシティビル、三鷹市芸術文化センター、他。文＝長友宗重、本杉省三　対談＝川向正人×柳澤孝彦［装飾を排したフォルムデザイン――スウェーデンのグッドデザイン展より］

9707　加速都市・香港1997　2000円
「速度」をテーマに激動する香港の姿を捉える。参加作家＝アラン・チャン、タイクーングラフィックス、洋川敏、江頭慎、他　監修＝村松伸、小嶋一浩、木下光　文＝松田直則

9708　R.ヴェンチューリ＋D.スコット・ブラウン　2447円
日本での処女作（メルパルク日光霧降）を中心に90年代の作品を紹介。シアトル美術館、他。文＝香山壽夫、安山宜之、他［岐阜県営北方住宅プロジェクト］談＝磯崎新

9709　駅空間の新曲面　2000円
コミュニティ性を重視した駅を紹介。JR矢吹駅、JR大曲駅、他。国際コンペとして衆目を集めたJR京都駅も併せて紹介する。文＝宮林敬幸、饗庭孝男、他。対談＝横尾忠則×原広司　写真＝大野繁



9710
ガラス建築
光学的、構造的特性など、ガラスの性質を幅広く採り入れた作品を紹介し、ガラス建築の現在と今後の可能性を探る。ガラス建築23作品、他。座談会＝伊東豊雄×難波和彦×今川憲英、他
3000円



9711
隈研吾
ポストモダン以降の建築における言説を続けてる隈研吾。今年建築学会賞、ヴェネディクタス賞を受賞した近作を紹介する。慰霊公園、他。文＝飯島洋一、グレッグ・リン、対談＝槇文彦×隈研吾
2800円



9712
SDレビュー1997
第16回SDレビュー誌上発表。建築研究室高安重一事務所＋佐久間達也＋横爪宏直＋重富博之、川人洋志、藤本壮介、松澤穣、他。［光と色が彩る空間――チェコのガラスアーティストたち］写真＝鈴木豊
2000円



9801
SDレビューの15年
これまでのSDレビューを一挙に振り返る。出展作、建築界での意義などを再確認し、今後の方向性を探る。文＝槇文彦、原広司、飯島洋一、中筋修、他。座談会＝元倉眞琴＋鈴木了二＋栗生明＋小嶋一浩
2800円



9802
都市へ向かう透明性：スイス・ドイツ語圏の建築
スイス建築の背景、建築の生まれる文脈を捉えながらその魅力を探る。文＝貝島桃代、ハンス・フライ、他。往復書簡＝篠原一男×ヘルツォーク＆ド・ムロン
2200円



9803
表層革命再考：チェコ・キュビスム-ロンドキュビスム建築
現存するプラハのキュビスム建築を撮り下ろし写真により紹介する。撮影＝鈴木豊。［香山壽夫のドローイングと空間］文＝香山壽夫、八木幸二、鈴木恂、青木淳
2000円



9804
次世代のマルチ・アーキテクトたち
30歳代の若手建築家たちの作品と創作活動を紹介し、時代性を浮かび上がらせる。インテンショナリーズ、みかんぐみ、他。［デスクトップ・コミュニティ］
2000円



9805
空間演出の最前線
建築家とデザイナー、アーティストとのコラボレーションの具体例を紹介。藤江和子、中村鎮平、新宮晋、他。［カーロとリベラの家］
ファン・オゴルマンの建築とメキシカン・モダン
2000円



9806
風景創出の現在：ランドスケープ・アーキテクトの挑戦
「公共的な価値」によって自然の風景と区別され、積極的な社会性が意図されている事例を紹介。佐々木葉二、ブレイスメディア、三谷 徹、登坂 誠、他。
3000円



9807
シーラカンス
彼等の12年間の建築活動の軌跡を、作品紹介を中心に振り返る。作品：吉備高原小学校、大阪市水上消防署、（仮称）外ヶ岡交流拠点施設、他。論文：原広司、土居義岳、インタビュー：山本理顕
2600円



9808
光のデザイン・ヴォキャブラリー：LPAの仕事1990-1998
LPAのデザイン言語を40に厳選して紹介する本書は、光が生み出す空間を全般的に考察する本格的な照明バイブルである。
文＝磯崎新、面出薫
2500円



9809
ディテールが創る風景：細部に宿る美と技巧
建築作品のディテールを写真と図面で紹介する。宮崎浩／Plants Associates、渡辺明設計事務所、竹中工務店、谷口建築研究所、KAJIMA DESIGN、他。
2300円

SD

現代の建築家、ハードカバー・シリーズ

鹿島出版会がホームページを開設いたしました。
SDをはじめ、当社で出版している書籍の検索が出来ます。是非ご覧下さい。

Address: http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm



アルヴァ・アアルト

巨匠A.アアルトの全主要作品を掲載した総特集。A.アアルトのデザイン・ヴォキャブラリー：武藤 章、アアルトの年表1899-1976、アアルト建築所在一覧。

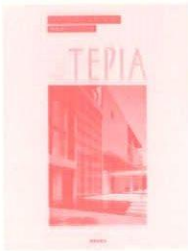
3090円



高松 伸

88年度建築学会賞受賞作のキリンプラザ大阪を中心とし、1988年までの全主要作品を一挙掲載。精緻なる細部と大胆な素材の扱い、独特な造形により、磨ぎ澄まされた独自の作品を創り続ける高松伸の世界を紹介する。繊陣Ⅰ、Ⅲ、他。

3800円



槇事務所のディテール/TEPIA

機械産業情報会館（TEPIA）というハイテクの殿堂にふさわしいデザインを支える、精密かつダイナミックなディテールの仕組みを写真とドローイングの構成で解剖する。槇文彦のディテールとしては初の作品集。

6800円



菊竹清訓

メタボリスト菊竹清訓の初期から1980年までの作品集。第三世代の建築/とりかえ論1950-1960年/方法論の時代1960年-1970年/私の中の菊竹清訓の作品：内井昭蔵、他/作品データ・主要作品分布図。年表、他。

3090円



早川邦彦

プロジェクト、商業施設、都市型複合建築、集合住宅、住宅、コンペ案まで、初期の作品から1988年までの全主要作品を一挙に紹介した早川邦彦の初作品集。SKY VILAGE、ラビリンス、成城交差点の家、アトリウム、他。

4300円



磯崎新❸ 1985-1991 part 1

キーワードを軸に自らの作品をいくつかの流れに分けて、つくばセンタービル以来、1985-1991年の作品群を紹介。水戸芸術館、サンジョルディパレス、お茶の水スクエア、他。

4800円



白井晟一

孤高の建築家・白井晟一の珠玉の作品集。懐霄館、ノアビル、聖アキラ館、吟雪軒、尻別山寮、虚白庵、他。論文＝磯崎新、針生一郎、浅野敏一郎、白井昱麿、座談＝大江宏＋藤井正一郎＋宮内嘉久。作品文献年表1935-1975年。

3605円



ドイツ表現主義の建築

1920年代のドイツを席捲した表現主義の嵐。そこにはレンガとガラスを素材とした自由奔放な造形と多様な表情をもった建築が生まれた。近代建築誕生の母体となり、現代にも影響を与える表現主義建築の全容を紹介。B.タウト、他。

3300円



磯崎新❹ 1985-1991 part 2

part 1 同様、自らの「自註」と共に作品を紹介してゆく。ティームディズニービルディング、北九州国際会議場、シュトゥットガルト現代美術館、パラディアム、［蝶々夫人］舞台美術、他。

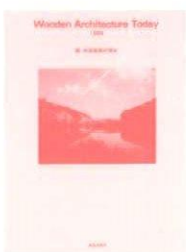
4500円



象設計集団

独自の造形理念により常に新鮮な作品を生み出し続ける象設計集団の初めての作品集。そのユニークな建築群の生々しい姿を視える。安住町農協町民センター、名護市庁舎、宮代町立笠原小学校、進修館、他。論文=荒俣宏、宇佐美圭司、他。

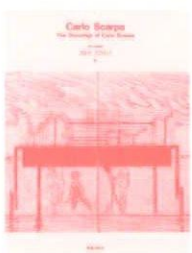
4000円



続・木造建築の現在

海外61作品、国内13作品の木造建築を紹介。豊かで暖か味のある空間を生み、またあらゆる空間構造に対応できる木構造を再評価する。インタビュー：坪井善勝、杉山英男、内田祥哉。対談：今川憲英×安村基。

3708円



カルロ・スカルパ図面集

ブリオン家墓地を始めとする主要作品のドローイング約150点を収蔵。ブリオン・ヴェガ墓地、フェルトレの遺跡博物館、ヴェネツィア大学文学・哲学部校舎増改築、他。文：豊田博之、カルロ・スカルパ、他。

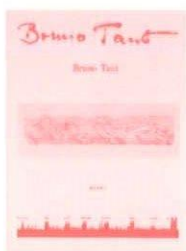
3500円



槇 文彦❷

槇文彦の80年代の活動を知る第2作品集。そこには増々精緻さと多彩さを加えた作品群が見て取れる。スパイラル、藤沢市秋葉台文化体育館、前沢ガーデンハウス、慶應義塾日吉図書館、電通大阪支社、京都国立近代美術館、他全21作品。

4326円



ブルーノ・タウト

1933-36年滞日期間の活動を中心に、没後40年を記念した特集。作品＝熱海の家、ボスポラス海峡に臨む自邸、ヴァイネルト通りの集合住宅、グレル通りの集合住宅、他。タウトの工芸品と著書、他。

2575円



安藤忠雄❸アンビルト・プロジェクト

'70年代からの見逃せないアンビルト作品29点を紹介。JR京都駅改築設計競技案、岡本ハウジング、I計画、伊豆プロジェクト、水の劇場、中之島プロジェクトⅠ・Ⅱ、Iギャラリー、大淀の茶室、他。

3800円



伊東豊雄

風のように、光のように変様する建築。独自の感性で貫かれた作品群、その初期から1986年までの軌跡。中野本町の家、シルバー・ハット、レストラン・ノマド、馬込沢の家、風の塔、東京遊牧少女の家具、ホンダクリオショールーム他。

3914円



ボザール：その栄光と歴史

ボザールの全貌を紹介。アカデミーの功罪：高階秀爾、ボザール―その歴史と思想：三宅理一編、ボザールの成立とネオ・グレコの形成、折衷主義の世界、近代の憂愁、戦後のボザール、パリ・オペラ座の図面と写真、他。

2575円



都市デザイン｜横浜

横浜市の20年にわたる都市デザイン活動の足跡を辿り、これからのアーバンデザインの課題と展望を探る。座談会：都市づくりの新局面へ向けて、槇 文彦×長原慎×小澤恵一、他。

5000円

9810 Space Design

スペースデザイン 第409号
1998年10月号
都市・建築・芸術の
総合誌

SD

5 特集
オフィス環境の近未来

6
Thrilling Office
仲 隆介

8
現代オフィスインテリアの
変遷
岸本章弘

64
オフィスの変化を
デザインする
小倉善明

40
未来のオフィス
・イトーキ総合研究所
・地主廣明+オフィス環境
研究所

44
オフィスを彩るモノ
益田文和

46
Future@Work
The Exhibit at Seattle

66
オフィスを知るための
キーワード
月舘君枝／システム・オー

12
電通インタラクティブ・
ソリューション・センター

15
日本ヒューレット・
パッカード八王子事業所
ビジネスセンター

16
宝島社

18
横商エンジニアリング

20
高橋土建
カムホームアクト新堀

22
ケツト科学研究所
札幌営業所

22
ベルシステム24
One to One Park

24
ボルシェ・ジャパン本社

26
アルソア本社

29
NTT中央研修センタ

30
乃村工藝本社4号館2、3階

32
宝酒造

34
ソニー・ピクチャーズ・
テレビジョン・ジャパン

36
JRバス関東

38
チューリッヒ保険
日本支社ダイレクト・
カスタマー・ケア・センター

50
Hummer Winblad

52
Wired Digital

55
LA Cellular Custmer
Call Center

58
Sullivan Higdon & Sink

60
Scottish Enterprize
National

62
DEGW office

73
木造密集市街地の将来像を考える
向島国際デザインワークショップ

74
ワークショップのすすめ
山本俊哉

77
Making FAC(ad)ES
クライン ダイサム
アーキテクツ

77
継続されるべき「模索中」
藤野雅統

78
活気のある文脈の継承法
ティートス・スプリー

81
京町家再生の手法
時を超えて生きる空間を求めて

84-98
祇園望月
橋弁慶山町会所
アルトレタント
ミホプロジェクト
セカンドハウス

82
失われた時と空間を
求めて
長尾重武

100
景観保全から
京町家再生へ
望月秀祐

102
再生する町家
京都都心部の将来と
町家再生の展開
宗田好史

70 連載：森島紘史の起こし絵図——日本のかたち紙考
10. 秋風 — 森島紘史

107 展覧会レポート：
自然の中に展開された「夢」 — 村井久美

110 ニュース：
ベトナム　ホイアンでの民家修復 — 篠崎正彦

112 書評

114 メトロポリタン・ライブラリー — 渡辺武信

117 お知らせ

118 海外レポート：
[ニューヨーク] 給水塔 — セドリック・シュレー

119 海外レポート：
[ミラノ] 1968年とミラノ——30年前の熱狂と陶酔 — 杉本あり

120 海外レポート：
[パリ] 建築教育におけるアトリエの存在 — 山名善之

編集長：相川幸二
編集スタッフ：
寺田真理子　高木伸哉
大野由美　飯塚りえ
高森和志
制作協力：久世健
勅使河原馨／guild
(有)シンクス

発行人：平田賴那
編集人：長谷川愛子

発行所：鹿島出版会
〒107-8345 東京都港区
赤坂6丁目5番13号
電話：
(03) 5561-2551 営業
(03) 5561-2555 編集
FAX：
(03) 5561-2561 営業
(03) 5561-2565 編集
TELEX：
02422467 KAJIMA J
振替00160-2-180883番
Home Page：
http://www.kajima.co.jp/
group/publish/index.htm

印刷・製本：
凸版印刷株式会社
〒174-0056 東京都板橋区
志村1丁目11番1号
電話：
(03) 3968-5111 案内

取次店：トーハン・日販・
大阪屋・太洋社・
栗田出版販売・誠光堂・
鈴木書店・西村書店・中央社

定価：2,000円
[本体1,905円]

年間直接購読料：26,000円
特別定価号+送料込み

表紙：電通インタラクティブ・
ソリューション・センター
表紙写真：鷹尾 茂
表紙デザイン：小泉均

9810 Space Design

Monthly Journal of Art and Architecture
No.409
October 1998

SD

5 **Special Feature:**
Office Environments for the Near Future

6 Thrilling Office
Ryusuke Naka

8 Changes in Contemporary Office Interiors
Akihiro Kishimoto

64 Designing Changes for an Office
Yoshiaki Ogura

40 Offices of the Future
·Ito-ki Office Environment Reseach Institute
·Hiroaki Jinushi + Institute of Office Environment

44 Decorations for the Office
Fumikazu Masuda

46 Future@Work
The Exhibit at Seattle

66 Keywords for Understanding Offices
Kimie Tsukidate / System O

12 Dentsu Interactive Solution Center

15 Hewlett-Packard Japan Hachioji Branch Business Center

16 Takarajima

18 Yokosho Engineering

20 Takahashi Constructors, Inc. Come Home Act

22 KETT Electric Laboratory

22 Bell System24 One to One Park

24 Porsche Japan

26 Arsoa

29 NTT Central Training Center

30 2nd and 3rd Floors, Building No. 4, Nomura Kogei Head Office

32 Takara

34 SONY Pictures Television Japan

36 JR Bus Kanto

38 Zurich Insurance Japan Branch Direct Customer Care Center

50 Hummer Winblad

52 Wired Digital

55 LA Cellular Customer Call Center

58 Sullivan Higdon & Sink

60 Scottish Enterprize National

62 DEGW office

73
Considering the Future of Urban Districts Crowded with Wood-construction Architecture

74 How to Workshop
Toshiya Yamamoto

77 Making FAC(ad)ES
Klein Dytham Architects

77 "Groping" That Has to Be Continued
Masato Fujino

78 Methods of Preservation in a Lively Context
Titus Spree

81
Machiya Restored:
The Future of Central Kyoto and the Development of Machiya Restoration

84-98 Gion Mochizuki
Hashi Benkei-yama
Old Town Hall
Altore Tanto
Miho Project
Second House

82 In Pursuit of Lost Time and Space
Shigetake Nagao

100 From Landscape Preservation to Kyoto Machiya Restoration
Hidesuke Mochizuki

102 Machiya Restored: The Future of Central Kyoto and the Development of Machiya Restoration
Yoshifumi Muneta

70 The Okoshi-e of Hiroshi Morishima: Forms of Japanese Tradition in Paper
10. Autumnal Breezes — Hiroshi Morishima

107 From the Exhibition:
Dreams Unfolding in Nature — Kumi Murai

110 News:
Folk House Restoration in Hoi An, Vietnam — Masahiko Shinozaki

112 Book Review

114 Metropolitan Library — Takenobu Watanabe

117 Announcements

118 Topics Abroad:
[New York] Water Tower — Cédric Schärer

119 Topics Abroad:
[Milan] 1968 and Milan: Excitement and Intoxication 30 Years Ago — Ari Sugimoto

120 Topics Abroad:
[Paris] The Significance of Studios in Architectural Education — Yoshiyuki Yamana

Chief Editor: Koji Aikawa
Associate Editors:
Mariko Terada
Shinya Takagi
Yumi Ohno
Rie Iizuka
Kazushi Takamori
Production Cooperation:
Takeshi Kuze
Kaoru Teshigahara/guild
Digital Studio SINKS

Publisher: Kanna Hirata
Executive Director:
Aiko Hasegawa

Published by
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka,
Minato-ku, Tokyo 107-834
Japan
TEL:
03.5561.2551 [Manageme
03.5561.2555 [Editing]
FAX:
03.5561.2561 [Manageme
03.5561.2565 [Editing]
TELEX:
02422467 KAJIMA J
Home Page:
http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm

Printed in Japan

This Copy: ¥2,000
¥30,000 a year
¥50,000 two years

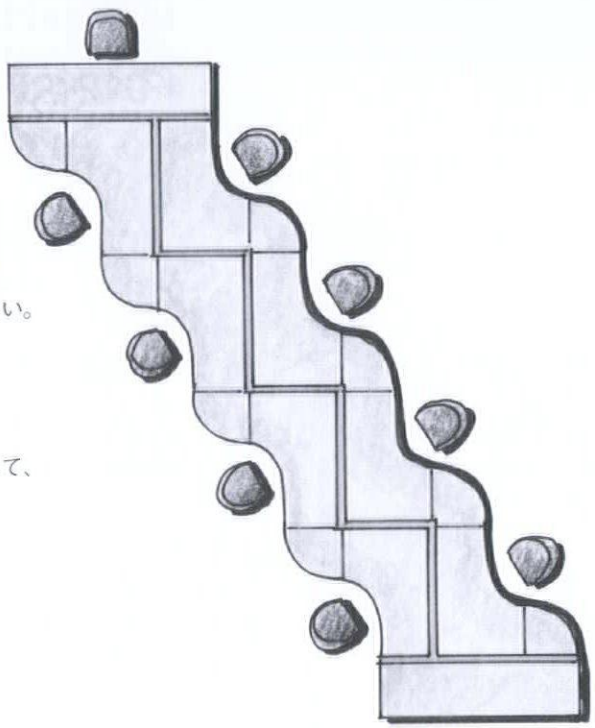
Order Form: Page128

Cover:
Dentsu Interactive Solutio
Cover Photo: Shigeru Tak
Cover Design:
Hitoshi Koizumi/NID

特集

オフィス環境の近未来

私達の生活を劇的に変えた情報通信技術は、
オフィスのありかた、私達の働き方にも、
同様に大きな影響を与えている。
いつでも、どこにいても、情報が送受信できるようになった今、
「9時から5時まで」という、オフィスワーカーの
典型的な就業形態は、意味を失いつつある。
本特集では、技術がもたらしたワークスタイルの変化と、
それをサポートするオフィスに焦点をあてて、先端的な事例を紹介する。
国内のオフィス・デザインは、家具メーカーの力に負うところが少なくない。
メーカーはそれぞれ、研究所を持ち、幅広い調査・研究に基づいて、
変化するワークスタイルに適した、新しいオフィスを模索している。
一方で、戦略的な企業の中には、設計事務所とのコラボレーションによって、
さらに生産性を上げようと試みるところもある。
国内ではこうした事例を含め、15件のオフィスを紹介する。



Thrilling Office

仲　隆介

今、オフィスが面白い

写真1は欧米で話題になったノンテリトリアルオフィスの例である。1990年代のはじめから、欧米のオフィスが大幅に変化している。日本でも、FMコンサルタントやオフィス家具メーカー、オフィスインテリア事務所などを通じて、同様の変化が見られるようになってきた。この変化に建築家がほとんど関与していないのが気になっている。それはさておくとして、情報化が進み、オフィスにおけるワークスタイルが大きく変りつつある。情報ネットワークにより、オフィスワーカーは場所の束縛から解放されて、様々なワークプレイスを移動しながら働くようになってきた。オフィスもワークプレイスという新しい概念とともにオフィスビルを飛び出し、オフィスの概念そのものを変えようとしている。拙稿では、欧米各国で起きている現象を分析し、オフィスがどのような方向に向かおうとしているのか、そして、日本はどのような状況にあるのかを考えてみたい。同時に、「オフィスの世界では、建築家はもはや指揮者たりえないのだろうか」という問いも考えてみたい。

オフィス革命

1. 幕開け

アメリカでオフィスの勉強をしていた時、オフィス革命の推進者であるマイケル・ジョロフ氏から、「毎月、『Fortune』を読みなさい。オフィスを箱（建物）として考えても何も見えてこない。中身を見なさい。そして中身が見えるようになる一番の近道はアメリカビジネスを理解することだ」とアドバイスを頂いた。実際、ビジネスから多くを学んだ。詳細は拙著『変化するオフィス』（丸善＝刊）に譲るが、当時、国際競争の激化により、企業はオフィスの知的生産性を上げないと生き残れない状況であった。そこで、アメリカ企業は、情報技術を駆使して効果的に働くために、仕事のやり方、組織構成などすべてを変えた。改革はオフィスにもおよび、オフィスを「目的に応じて使い分ける生産性を上げるためのツール」と捕らえ、よりよいツールを目指して、オフィス・コンサルタント、ファシリティ・マネジャーなどと共に様々な試みを始めたのである。オフィス革命の幕開けであった。

2. へんなオフィス

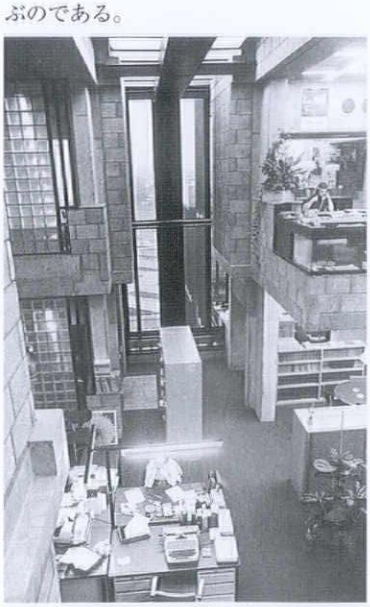
数年前にマンハッタンにある広告会社を訪ねた（写真1）。正直、びっくりした。そして感激した。感激したのはとびきり美人の秘書がオフィス内を案内してくれたからではない。オフィスの様相が日本で慣れ親しんだいわゆるオフィスの風景を超越していたからだ。こんなオフィスが存在し得ることに感動したのだ。個性のない空間に無愛想なオフィス家具が置かれ、机上には書類が氾濫する我が日本のオフィスとなんと異なることか。貧しい環境のオフィスで一生懸命仕事をしている我々をあざ笑っているようにも思えた。デザイナーはイタリアの建築家、ガエターノ・ペッシェ。見様によっては、ふざけたデザインである。個人的には好きだが、日本の普通のおじさん、おばさんが見たら、しかめっ面をするようなデザインだ。感動したのは、デザインが面白かったからではない。そこにしっかりと新しいワークスタイルが存在していたからだ。メガコンペティション時代に突入したビジネスにおける新い働き方をしっかりと視野に入れてのデザインであったからだ。社員は毎日会社に来るわけではない。仕事に必要な情報はネットワークを通じてどこにいても手に入る時代である。資料を求めて会社に来る必要はない。自分もしくはチームの生産性を上げるために必要ならば会社にくるのだ。また、情報社会では、生のコンタクトがとても重要であり、ワーカーは数少ないコンタクトのチャンスを求めて飛び回りながら働いている。オフィス内で働くときの形態も多様だ。こういった新しいワークスタイルをしっかりと考えたワークプレイスを実現していた。昼間はルーティンワークしかできず、知的作業は他の社員が帰って静かになった夜しかできないといったオフィスで、しかも、たとえ効率が下がっても毎朝9時に行かなければならないような働き方では、生産性など上がりはしない。

3. 都市のオフィス化

ワークプレイスはオフィスを飛び出し、至るところで会社と同様の作業環境を手に入れることが可能になってきた。ある人は空港のビジネスクラスラウンジで電子メールを送り、出先の会議の合間に街なかのビジネスセンターで報告書を書き、近くに支社があれば、本社に帰らずに支社のスポットオフィスで仕事をする。会社に行く必要がない日は、自宅近くのテレコテッジから本社のファイルにアクセスして仕事をする。こういった遊牧民的働き方をするためには、情報ネットワークの整備が不可欠であるが、同時に都市自体がオフィス化する必要がある。実際、欧米の都市では、テレコミューティングセンター、ビジネスセンターなどのオフィス機能を提供する施設が新たに都市の仲間入りをしたり、従来の図書館などにオフィス機能が加わるなど、都市のオフィス化が着実に進んでいる。

4. オフィスの都市化

オフィスに机と椅子だけがあればいい時代は終わりつつある。オフィスで行われる仕事が高度化、専門化してくると、今まで以上にその作業に適した作業環境が求められるようになる。作業が多様化して、同じ机が並んでいるだけでは使い物にならないのだ。ノンテリトリアル・オフィスは、仕事場を共有してスペースを有効利用することにより、集中できる場所、チームワークのやりやすい場所、作業スペースの大小などを自由に選択できるオフィス環境を実現している。都市の中で必要に応じて建物を選択するように、新しいオフィスでは、仕事の内容に応じて適切な場所を選ぶのである。



ヘルマン・ヘルツベルハー設計の〈セントラルベヘーア社〉

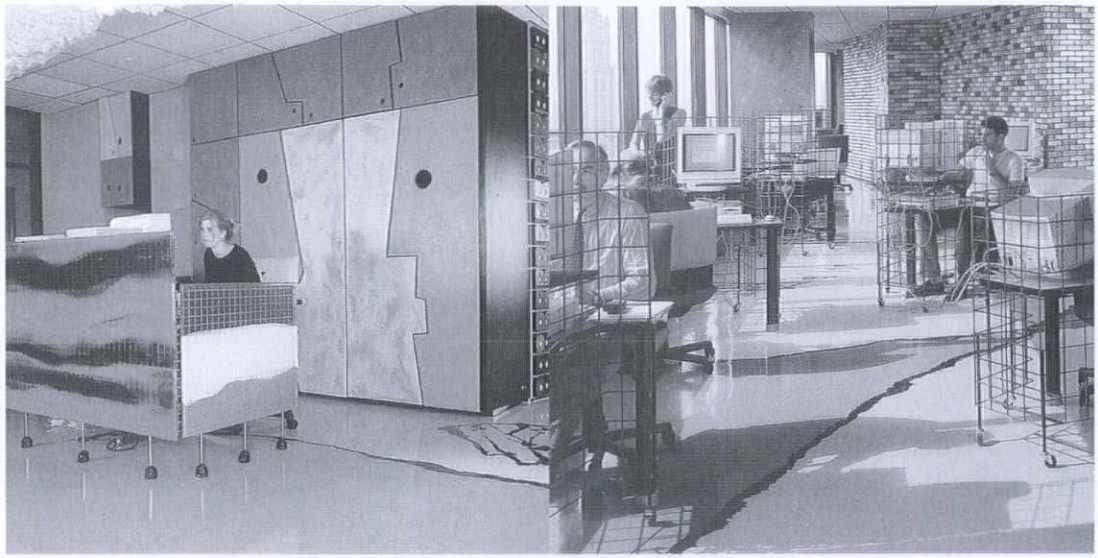


写真1、ガエターノ・ペッシェ設計の〈シャイアット・デイ（ニューヨーク）〉。左はエントランス、右は執務空間

5. 家具メーカーの取り組み

家具メーカーが頑張っている。家具を売るために付けたしでレイアウトを考えていた時代は過去の話であり、本格的なオフィス設計やコンサルティングができる実力を備えてきている。彼らは、働き方、オフィス環境、情報環境のバランスが取れて初めて生産性の上がるオフィスが実現できるというコンセプトのもと、FM、フレキシビリティ、チームワーク、コミュニケーションなどのキーワードを頼りに、様々な試みを展開している。例えば、イトーキのTRANS　ONEコンセプトにもとづいたコミュニティ・アイランド。新しい働き方のポイントであるチームワークと個人ワークを効果的に組み合わせることができ、かつ、フレキシビリティの高いシステムになっている。オカムラのPROFISはパーティションの高さが女性の力でも簡単に変えられる工夫がされているなど、個人作業のコントローラビリティに優れながら、同時にグループ単位でのコントローラビリティにも優れている。また、オカムラでは面積データを蓄積する努力を長年続けており、こうした積み重ねがあるから、様々な提案が説得力を持ってくる。コクヨは、ノンテリトリアル化など様々な試みを自社内で実践し、その経験をオフィスコンサルティングに活かしている。例えば、社内向けサービスを提供する東京オフィスサービスセンターは、働き方、組織の在り方、オフィス環境すべてを改革した。これは日本においてオフィス改革を進める際の好例といえる。今回紹介できなかったが、他のメーカーも様々な試みを行っている。彼らは、新しい働き方を可能にする家具の開発、自社でのオフィス実験、さらに長年のオフィスプランニングの経験を通して多くのノウハウを蓄えており、単なるオフィス家具販売からオフィスデザイン全般にその仕事の範囲を拡大しようとしている。

6. 最後に

日本のオフィスは欧米に比べると5年は遅れており、まだオフィス革命が本格化してはいない。しかし、数年前の欧米と同様の変化が見られるようになってきている。新しいオフィスづくりのノウハウも輸入され、ノンテリトリアルタイプのオフィスも登場してきた。さらにテレワーカーの数も増加しており、ワークスタイルも変わりつつある。今後、オルタナティブ・オフィシングの動きが本格化し、ノンテリトリアル・オフィスなど、スペースコストの高い日本に有効なオフィス形式が試行されることになろう。こうしたオフィス改革が進むほどに、執務空間の豊かさが問われるようになる。使い勝手や効率と同じくらい、働く場所の雰囲気、味がとても重要になる。だが現実は、日本でオフィスにここまでを求めている人は少ない。一方、アメリカはコストと効果が最優先の国ではあるが、保つべきデザインの基準が広く一般に常識として備わっている。だから豊かなオフィスが実現できるのだ。はっきり言ってしまえば、日本にはそういったセンスがない。きれいな家具が置いてあれば満足する程度のセンスでしかない。機能さえ満たしていれば空間のデザインなどどうでもいいという例も珍しくないほどだ。これは今まで質のよいオフィス空間を提供してこなかった建築家の責任でもある。需要がないから作らないという理屈は通らない。少しでも環境の質を高めていく努力をするのは、環境デザインに関係する人間の役割であったはずだ。オフィスが豊かな人生を過ごす場所の仲間入りをするのは、そういった質の高いオフィスが登場してからだ。そのためには、現状の建築家が箱だけ設計して、それとはまったく関係なしに家具メーカーが家具を置くだけという仕組みでは限界がある。筆者はいまだに、20年以上も前にできたヘルマン・ヘルツベルハーのセントラルベヘーア社の執務空間を超えるオフィスを知らない。もちろん、外観、エントランスホールなどでは目を見張るようなオフィスが日本にもたくさんある。しかし、どのオフィスの紹介を見ても、肝心の執務空間が紹介されていないことが日本の現状を象徴している。冒頭で、「オフィスの世界では、建築家はもはや指揮者たりえないのだろうか」と問うた。指揮者になろうともしていないのが現状の今は、答えを保留するしかない。この際、家具メーカーであろうが、FMコンサルタントであろうが誰でもかまわない。全体をしっかりとコントロールできる指揮者の登場を待つのみである。しかしである。細々とではあるが設計をやっている人間としては、やはり建築家に期待したい。FMや企業分析など、できないことはいろんな人と共同すればいい。家具メーカーなどに心強いパートナーになってくれる人達は多い。試しに設計の初期の段階から彼らと共同し、最後にオフィスに家具が置かれるまで付き合って見てはいかがか。どうか箱を積み重ねて、派手なエントランスホールをつくることがオフィスの設計だと思わないで欲しい。組織設計事務所が箱だけ設計して、家具メーカーがオフィス家具を置いただけのオフィスはもううんざりだ。もっといろんな可能性が追求されてしかるべきで、その結果としていろんなオフィスが登場していいはずなのだ。唐突であるが、例えばタンポポオフィスができないかと思う今日このごろである。



藤森照信設計の〈タンポポハウス〉

●なか・りゅうすけ／宮城大学講師

現代オフィスインテリアの変遷

岸本章弘

	社会動向	情報技術	マネジメント	職務内容
日本	戦後日本の産業の基準作り JISの制定：1950 建築基準法の制定：1950			定型事務作業中心
欧米	戦後経済ブーム オフィス開発の高度化	電子式卓上計算機、テレックス 電動タイプライターの普及	テイラー主義者による人間関係研究（米）	書類処理工場としてのオフィス
日本	高度成長期 アメリカ文化の影響大	電子式卓上計算機、タイムレコーダー	縦型組織	
欧米				
日本	低成長期 オイルショック 省エネルギー時代 JISの改定	定型業務処理 ワープロ、ファクシミリ、オフコン、PPCコピー	効率化、標準化、省エネルギー重視	QC活動
欧米	石油危機（1973）以降のインフレと不景気 北欧で社会民主主義的オフィス・デザイン（欧） エネルギー使用と環境問題意識の高まり	クラリカル・ワークへのワープロの普及	企業の多国籍化	企業内オフィス機能の多様化

現代オフィスインテリアの変遷

今、世界規模でビジネス環境が激変する中でマネジメントの在り方が見直され、同時にそのツールとしての情報技術が大きな進展を遂げようとしている。そうした変化の中で、これから我々はどのように働き、そのためにはどのような環境が必要なのか。そして、それらはどのようにデザインされるべきなのか、再考の時が来ている。これまでオフィスはどのような背景の基でどう変化してきたのか。現代のオフィスの変遷をたどりながら変化の要因を探っていくことも、今日の問いに向かうアプローチのひとつとして、次に求められる課題をイメージする際の示唆を与えてくれるだろう。

システム化とオープン化

第二次世界大戦以後の新しいオフィスの方向付けは、先ず米国を中心に始まった。50年代末から60年代前半のオフィス形態の革新がそれである。この時期の建築と設備技術の発展は、奥行きの深いオフィスビルのデザインを可能にした。そして、建築からインテリアまでのシステム化の始まりでもあった。1959年に完成したユニオン・カーバイド本社ビルには、モジュール化された内装システムと、それらを活用した組織の構造と階層の合理的な表現など、当時のオフィスインテリアの特徴が見て取れる。

同じ頃、ドイツに生まれたオフィス・ランドスケープのコンセプトは、オフィス内での作業のプロセスやコミュニケーションの流れに沿った有機的とも言えるオフィスプランと共に大きな注目を集めた。このコンセプトの登場によって、人と組織をオフィスワークの機能的な関連性に沿って空間に配置するという考えが広がり、結果としての新しいオープンオフィス形式が生み出された。

オフィスビル	建築設備	インテリア	オフィス家具	
高層化、建築のマスプロダクト化 大部屋型の定着 新丸の内ビルヂング：1952	人工照明と空調設備の普及	大部屋対向島型レイアウト	グレーのスチールデスク	日本
奥行きの浅いセルラーオフィスの継続（欧） 奥行きの深い大部屋型ビルの登場（米） ユニオン・カーバイド 本社ビル：1959（❶） 	蛍光灯照明の普及 空調設備の普及と標準化（米）	オフィス・ランドスケープ概念（ドイツ）	可動間仕切り：1955	欧米
奥行きの深い無柱均質空間 霞ヶ関ビル：1968			オフィス家具のJIS規格制定：1960 	日本
		ランドスケープ・オフィス（米）（❷） クラリカル・ワーカーのためのオープンプラン配置（米） アクション・オフィス・コンセプト：1964（米）	オフィス・ランドスケープ対応家具（ドイツ） 連結型可動スクリーン ハーマンミラー社のアクション・オフィス2（米）（❸）	欧米
超高層ビル IBM本社ビル：1972 新宿三井ビル：1974	建築部品の標準化：システム天井、スチール間仕切り	オフィスのOA化 グレーからの脱皮始まる 大部屋オフィスの伝統（❺）	米国型オープンオフィスの影響 壁面収納家具システムの登場 デスクのカラー化 新JISによる家具規格変更：1974	日本
セントラルベヘーア本社（オランダ）：1972（❹） 大規模オープンプランへの反動（欧） 奥行きの深いオープンスペースの定着（米）		スペース効率の重視  グループオフィスの多様化（欧）	5本羽脚椅子の普及 パネルシステムの普及 ガススプリング使用の普及	欧米

このオープンオフィスを具現化する上で重要な役割を果たしたのが、ハーマンミラー社のアクション・オフィスである。もともとアクション・オフィスは、オフィスワーカーの作業を行動科学的観点から詳細に分析し、それらを支援する環境要素としてデザインされた家具システム群であったが、こうした特性と構成が、一方でオフィス・ランドスケープに始まったオープンプランの考え方を実現するにふさわしいエレメントの特性に合致した。やがて、アクション・オフィス2の登場と共に、このオープンプランのコンセプトは米国で標準化に向かい、新しいオープンオフィスのスタイルへと定着していくことになる。

こうした一連の変革の要因は、より効率的なオフィスワークの遂行のために、書類やコミュニケーションの流れや個人の行動を詳細に分析し、そうしたニーズに基づく「機能的」な支援環境をつくり出そうとする姿勢と見ることができるだろう。

オープンオフィスの定着と反動

70年代以後、米国ではオープンオフィスがさらに定着し、それらを構成するための柔軟な家具システムとしてのパネルシステムが広く普及した。一方、ヨーロッパでは大規模オープンオフィスに対する反動が見られ、ワーカーを数人づつの小グループにまとめてグループルームに収容する形式の多様なバリエーションが生まれるようになった。こうした形式を建築空間によって規定したセントラル・ベヘーア社のオフィスはその代表的な例だろう。

一方、我が国においては、オフィス建築の主流は米国の後を追うように奥行きの深い無柱均質空間へと移行していったが、そのインテリアプランや家具については従来型の島型

	社会動向	情報技術	マネジメント	職務内容
日本	成長活性期：円高の中で市場の国際化の進行 女性総合職の登場 ニューオフィス推進協議会（NOPA）発足：1987	パーソナル・コンピュータ 通信の自由化（法規制緩和）：1985	CI導入ブーム ファシリティ・マネジメント紹介	平均労働時間2100時間：1987 24時間オフィスの発想 テクノストレス、過労死
欧米	新保守主義の台頭 新市街地開発ブーム	電子タイプライター パーソナル・コンピュータ 携帯電話 電子メールの普及	日本型マネジメントへの注目 IFMA設立：1980	定型業務から創造業務への移行 DTPの普及
日本	成長安定期から低成長期へ バブル経済の崩壊 環境問題のクローズアップ 高齢化社会	ダウンサイジング 電子メールへの注目 携帯電話とPHSの普及、インターネット情報技術 	年功序列から能力主義へ リストラクチャリング 終身雇用制の崩壊 顧客満足の重視	労働意識の変化：余暇の重視 創造性の模索
欧米	80年代からの不況 環境システムの配慮 景気の好転（米）	パーソナル化、小型化、可搬化 マルチメディア 携帯電話システムの普及 インターネット	ダウンサイジングとライトサイジング リエンジニアリング テレワークの普及 プロジェクト／チームワークの重視	定型業務の自動化と外注化 交流と創造性への注目

対向式のデスクレイアウトが長く続くことになる。70年代に入って米国型オープンオフィスの影響を受けてユニット型の家具システムなども登場したが、それらは市場に普及するには至らなかった。一部ではグレー一色のスチール家具からの脱皮の兆候も見られたが、集団の秩序に従い組織階層や地位を視覚化した伝統的なデスクの形式とそのレイアウトが変革することはなかった。おそらく、当時のマネジメントの理念が、オフィスワークにおける個人の効率や作業空間の機能性といったことよりも、グループの役割や組織構造の表現を重視したのだろう。近代的な機能よりも伝統的な意味を重視した形式的なオフィスインテリアであったと言えそうである。

オフィスオートメーション

80年代以降のオフィス変革に大きな影響を与えたのは、パーソナルコンピュータをはじめとする情報技術である。多様なオフィス機器に電力を供給しネットワークに接続するために、オフィスビルでは大量の配線を処理するフリーアクセス・フロアが普及し、米国では高度な情報化機能を備えたインテリジェントビルという言葉が生まれた。また、情報機器の操作を支援しケーブル類を収納するための工夫が、新しいオフィス家具のデザインを生み出した。ビームマウント形式のワークテーブル型システムやタイルスタッキング型の高配線機能のパネルシステムなどがその代表であろう。

また、オフィスの高機能化が進むにつれて、それらを効果的にマネジメントしていくための技術として、**ファシリティ・マネジメント（FM）**の概念が米国で提唱され、より戦略的でシステマティックなオフィス計画への認識が高まっていった。また、この頃から90年代にかけて、コンピュータによってオフィスの定型業務の合理化が推進され、オフィスワークはより創造的になっていくという考えと共に、オフィス内でのインフォーマルな交流に焦点が当たり始めた。米国でパネルシステムに代わるコミュニケーション重視のワークステーション家具が発表され、ヨーロッパでコンビオフィスなどの新しいタイプのオフィスが生まれたのも、こうした流れに沿ったものと見ることができよう。

日本でもOA化の波はオフィスに変化をもたらしたが、それらは組織やビジネスのプロセスを要因としたものよりも、むしろ技術的な要因に負うものが主であった。建築分野では、情報化対応のための配線処理や悪化する作業環境への対応策としての照明環境の改善、家具分野では、配線処理のための連結機能やケーブル収納機能が付加されたデスクシステムの登場などが代表的であった。また、オフィス環境の質的向上を目指したニューオフィス推進運動が好景気の時期に一致したことも手伝って、劣悪なオフィスインテリアの底上げは進んだと言えるだろう。さらに、80年代末の好景気時には**サテライトオフィス**を始めとする分散型オフィスの実験的試行も試みられた。ただし、こうした取り組みの中には、市場ニーズに応じたものというよりは、ビジネスチャンスを探ろうとするサプライヤー側のニーズから始められたものが多く、従って市場に普及定着する性質のものではなかった。

高度情報化時代のマネジメント再考と組織再編

80年代から90年代半ばまで続いた欧米の景気の後退と情報技術の進展を契機に、今日の企業はそのビジネスの遂行と組織の在り方に関して大きな再考を迫られている。新しいビジネスの焦点は、国際市場での企業の競争力の維持と市場の満足の獲得のために、リストラクチャリングやリエンジニアリングといった組織構造の再構築と業務プロセスの見直しを通じて、より迅速かつ柔軟に商品やサービスを開発し市場に提供することに向けられてきたと言えよう。その基本的な方策は、伝統的な肥大化した階層構造をスリムで平坦な構造に縮小再編成し、柔軟で機動性の高い組織に作り変えていこうという動きである。

その結果として生まれてきた新しい組織像は、階層構造上の役職や権限に基づく標準化された業務遂行プロセスに代わって、より高度な知識とスキルを持った個人個人を柔軟につなぎ合わせる、プロジェクト対応型のダイナミックな集団である。そしてオフィス空間にも流動的な組織編成に迅速に対応できるフレキシビリティや、個人の集中作業とグループの共同作業、日常的な交流を両立させるような支援機能

オフィスビル	建築設備	インテリア	オフィス家具	
インテリジェントビル 新宿NSビル：1982 東芝ビル：1984 (6)	ビルディング・オートメーション グレアレス照明 (7)	家具の色彩の多様化 アメニティーへの注目（リフレッシュ・コーナーの導入） 分散型オフィスへの試行（サテライト・オフィスなど）	連結型デスクシステム (8) OA対応デスクの普及	日本
インテリジェントビル（米） ハイテク・ビルによるビジネスパーク開発（欧） SAS本社ビル：1987 (9)	フリーアクセス・フロアの普及	オフィスタイプの多様化（欧）：セルラー、グループルーム、コンビオフィス	ビーム型デスクシステム タイル型パネルシステム (10) 自動制御機構エルゴノミック・チェア コミュニケーション重視のWSシステム (11)	欧米
日本電気本社ビル：1990 東京新都庁舎：1991	先行統合配線	ニューオフィス第2指針：1991 分煙対策	変化しやすい自立可動型システム (13)	日本
高品質のエルゴノミクスと環境への配慮 グリーン・オフィスへの注目	インテリジェントビル・システムの普及	先進的ユーザーによる革新的オフィスの試み： アクティビティ・セッティング、ホテリング、ノンテリトリアル (12) など	再編成の容易なフリースタンディング	欧米

の向上が要求されるようになった。

一方で、オフィスワークのツールとして、また今日のマネジメントの変革を可能にする手段として、そして物理空間としてのオフィスのデザイン上の課題として、情報技術の進展もまたオフィス変革の重要な要因となっている。コンピュータや通信技術の進歩と情報インフラストラクチュアの整備は、コミュニケーションの遠隔化、情報流通の高速化と大容量化、メディアの複合化を可能にし、多様なコミュニケーションを可能にする。特に、今日のパソコンは、オフィス・オートメーションの時代からの定型業務の効率化に代表されるデータ処理ツールとしての役割から、コミュニケーション・ツールへと変化している。

しかし、こうした急速な情報技術の進展は、同時にオフィス機器や設備自体の陳腐化を速めることにもなり、それらを常に更新していくためのコストは組織にとって大きな負担になっている。そして、オフィスデザインの役割も、オフィス空間が常に変化し続けるものに対応しながらも、一方で変化のコストを最小限に抑えることができるように、変化のプロセス自体を取り込んだ対応が求められるようになっている。つまりビジネス上のバリュー・アップとファシリティ上のコストダウンをバランス良く実現できるような解決策が求められているわけである。

そこで、より高度なオフィス変革のニーズに備える欧米の先進的企業は、伝統的な枠組みを超えた革新的なオフィス戦略の構築に向けて進んでいる。**オルタナティブ・オフィシング**と総称されるこうした革新的オフィス戦略には、**ノンテリトリアル**、アクティビティ・セッティング、**ホテリング**など、多様なアイデアとスタイルがあるが、共通しているのは、人と場所の1対1の関係が消え去って選択可能になり、どこに居ても情報ネットワークにつながっているということであろう。そして、そうしたオフィス戦略の多くは、個々の企業の固有のビジネス戦略に応じて構築されるべく、多様なバリエーションを以って展開されている。

これからのオフィスの課題

今日、欧米で起こっているオフィス変革への動機は、ビジネスの戦略やニーズと密接に関連している。その目的は、競争力のある創造的な成果を迅速に生み出すことのできる優秀な人材を確保し、彼らによるチームを効果的に支援できる環境をつくり出すことにあると言えるだろう。

ビジネス環境がめまぐるしく変化し、競争相手はグローバルに存在する。創造的な人材を探し出し雇用を維持するためのコストは決して安くない。彼らを支援する情報機器やネットワーク設備は技術の進歩に合わせて頻繁な更新を必要とする。そして、人間が関わるシステムやプロセスの変更や新しい仕組みの構築には時間がかかる。つまり、我々は今、従来の変化への対応とは違った課題に直面しつつあるのである。我が国においても、主として建築と情報通信の技術的進歩に対する対応は、インテリジェントビルなどによってオフィスのハード面からある程度実現されてきた。しかしながら、グローバルな産業構造の変容と情報技術の進展がもたらすであろう新たな組織構造やビジネス・プロセス、ワークスタイルのニーズへの対応といった、マネジメントの構造や仕組み自体に関わるオフィスの変化は未だ経験していなかったようだ。

世界的なレベルでビジネスの競争が激化する中、もはや企業変革とオフィス変革は避けられそうにない。しかし、目指すべき答えはひとつではない。今日の先進動向を個別に見る限り、あるべき方向と言えるような一般解はますます存在しないように見える。オルタナティブ・オフィスと総称される多くの事例も、個々に検証すると異なった条件の下に成り立っている特種解である。それらは単なるアイデアや製品ではなく、ビジネスの仕組みや制度の変革を必要とするプロセスを伴うものである。したがって、これからのオフィスデザインの課題も、空間の形態や道具の選択そのものだけではなく、それらをプログラムしデザインしマネジメントしていくプロセス自体を計画するところから始まることになるだろう。オフィス空間がより高度なデザインの対象として、その価値に見合うだけの注意を十分に払われるべき時はもうやってきているはずだ。

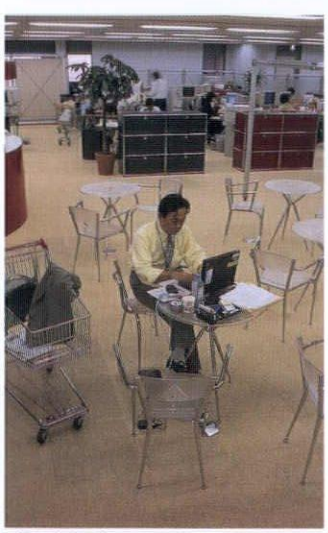
●きしもと・あきひろ／コクヨオフィス研究所

斬新なオフィスはクリエイティブ・ワークを支援する

電通インタラクティブ・ソリューション・センター



この快適な空間もフリー・アドレス



パティオの一席



左が「エスプレッソバー」、奥には局長席が見える

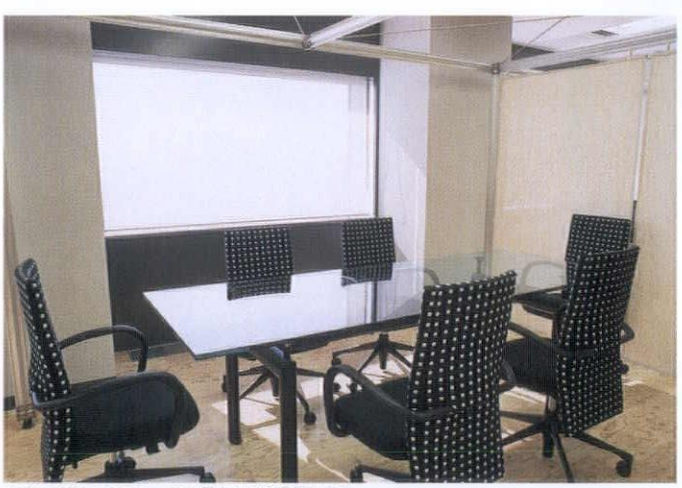
オフィス・デザイン：電通、岡村製作所、イリヤ、秀光、大林組
建築設計：日建設計、東急コンサルタント
所在地：東京都中央区明石町8-1　26階
内装竣工年：1998年1月
面積：645.12m²



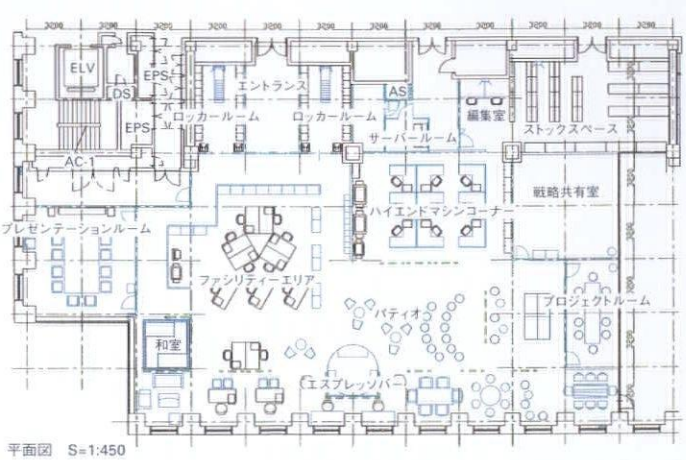
情報センターとしてオフィスの核をなす「ファシリティーエリア」



個人の所有物を収納



フリーアドレスのスペースに置かれる家具類も多様

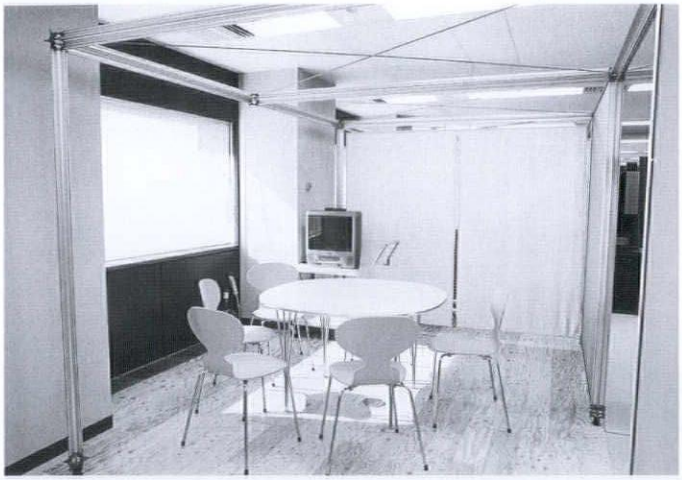


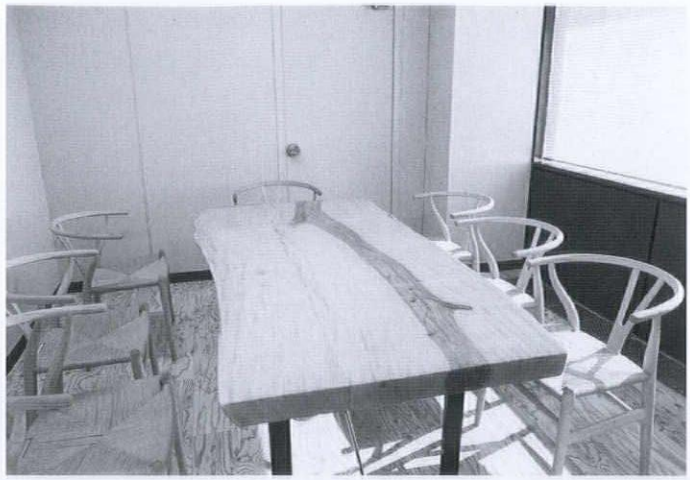
平面図　S=1:450

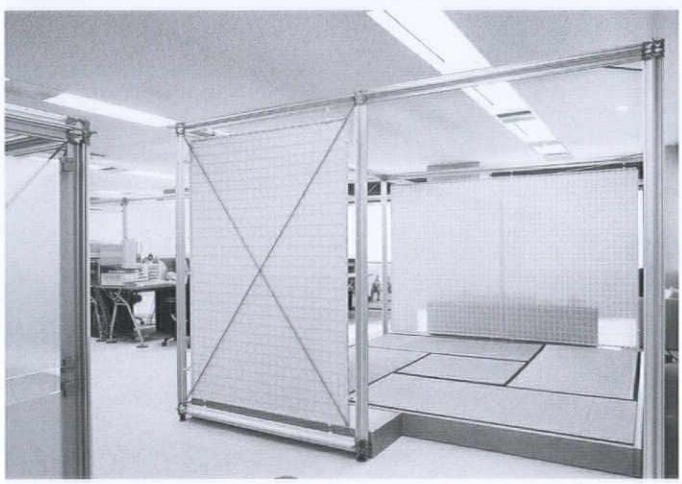
ネットイヤーと呼ばれる通常の7倍のスピードで「インタラクティブ」の世界は進むと言われる。インタラクティブ・ソリューション・センター（ISC）は「仕事の場」を、広告主へのソリューション（問題解決）の場「クライアントサイト」、組織のヒューマンリレイション高揚の場「センターオフィス」と考え、良質なコミュニケーション空間（オフィス）を創出している。

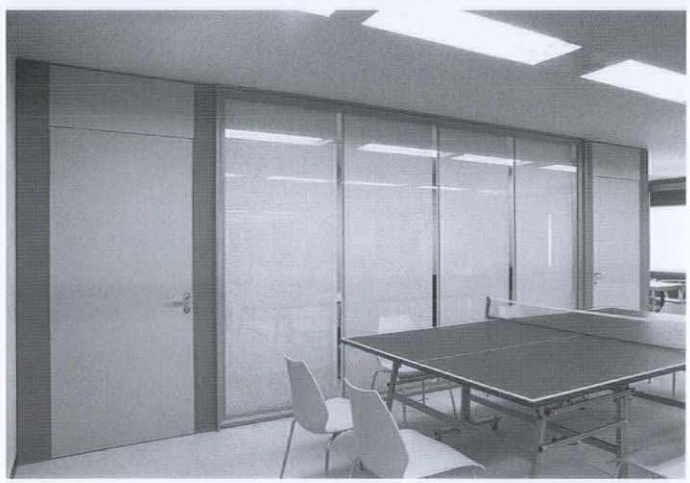
「ネットワーカー」と呼ばれる局員は、隣の席に座る同僚や管理者ではなく、常に最良のビジネスパートナーを求め「地域」「国境」「組織」「時間」の制約を超えたネットワークで働き、今までとは全く異なる「視座と思考と行動」により常に自己変革を繰り返し、仕事にあわせて「オフィス」という物理的な機能空間を自在に「変容」させる。

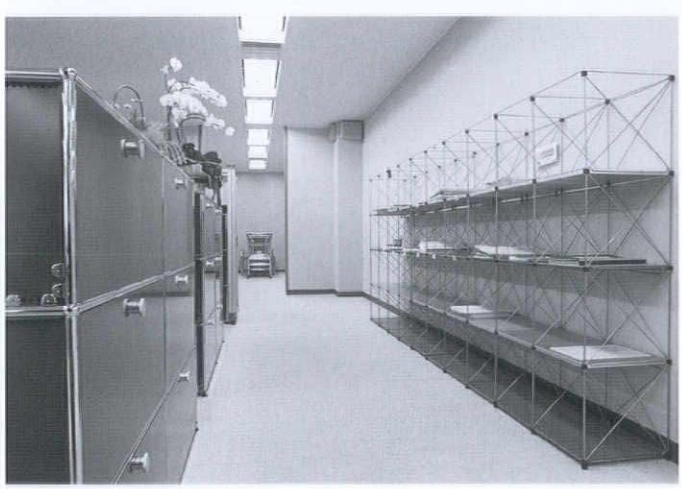
IT（Information Technology）を活用しネットワ



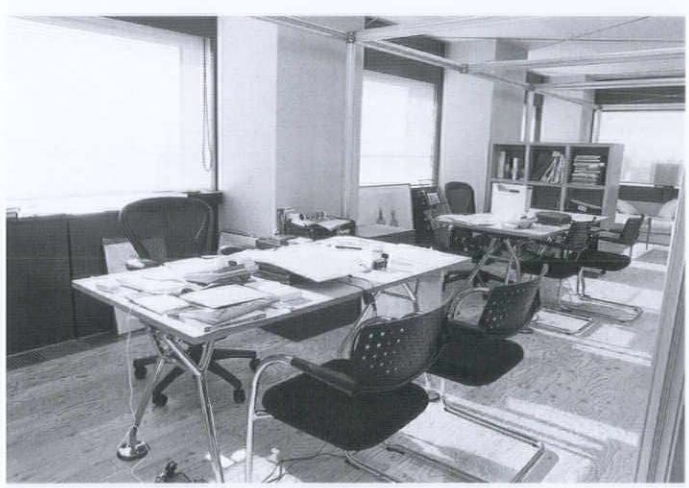








個人宛の書類は、右の棚に入れられる



卓球台あり、和室ありの多様な空間演出がなされる

ーク化する事で、定席に拘束されず「何時でも何処でもオフィス」を実現し、オフィス内は定席（自席）を設ず「適業適所（仕事に適した場所に移動する）」フリーアドレスを運用し、「住まい方」を変革する。

オフィスからは、権威の象徴や装飾的なデザインを排除し「ワークスタイル」の本質を見据えた「チープ・シック」なデザインがシンボリックに配置されている。「エスプレッソバー」と「パティオ」は、時刻とともに姿を変え人が集いフランクに語り合う「変容」と「コミュニケーション」のシンボル。「和室」は日本特有の住まいかた（ちゃぶ台を置けばリビング、布団を敷けば寝室）「フリーアドレス」のシンボル。「卓球台」はデスクにもミーティングテーブルにも使え、邪魔になったら折りたたんでしまえる「可変性」のシンボル。「窓辺のブース」は様々な趣向やワークスタイルを柔軟にサポートする「適業適所」のシンボル。これらのシンボルを展示施設で使用する仮設パーティションで連結し「空間の可変（変容）性」を実現している。

常にビジネスの本質（実態）を見極め最適な環境を維持するため、ISCでは空間デザインと同時に定期的なPOE（Post Occupancy Evaluation）を行い「空間の使われ方」や「ワーカーの意識」の変化を見極め、ワーカー自らが空間をリストラクト（変容）する。空間デザインの未完結な部分は、ユーザーに自らが環境を創出できる楽しさを与え日々刻々と変容するであろうし、空間エレメントはそうした変化を十分にサポートしている。いずれにしても今後目が離せない「楽しみ」なオフィスである。

（鈴木勇二／岡村製作所）

ユニバーサル・プランによりフレキシビリティを獲得

日本ヒューレット・パッカード八王子事務所ビジネスセンタ



パーティションの高さを使い分け解放感とプライバシーを両立させた執務空間

オフィスを構築する上で重要な要素のひとつに「働きやすい環境づくり」がある。

「The YHP Way――人間は男女を問わず、良い仕事、創造的な仕事をやりたいと願っていて、それにふさわしい環境に置かれれば、誰でもそうするものだ」が示す通り、八王子ビジネスセンタは「良い仕事」を生み出すオフィスである。

クライアントでは定期的なPOE(Post Occupancy Evaluation)でオフィス環境の維持・管理・改善を行う。八王子ビジネスセンタではベンチマーク手法から導かれるスペースを基準に、機能的なワークステーション（一人2台のデスクトップパソコンに対応する、広さ2000mm×2100mm、高さ1100mmただし通路側1400mm）をデザインした。

建築基準階は、このスペーススタンダードと「プログラミング」により導かれた理想的なフロア人員構成である約200名を要件に、「18m×24mの無柱空間を3つのユニットで緩やかに結合する」デザインとし、中長期的な人員計画を満足する施設の全体設計が行われた。ファシリティ・マネジメント（FM）による一連のプログラムは、エルゴノミクスに基づいた「内から外」へのデザインにより、優れたオフィスの機能性と快適性をもたらしている。

このため計画の基本となる「スペーススタンダード」の検討は特に重要で、詳細設計とモックアップによる検証が何度も行われた。FM手法は自社ビルの計画だけでなくテナントビル入居に際し適切な「選定基準」の提供において大きな成果をもたらす。ようやく日本でもFM資格制度が導入され第一歩を踏み出したが、世界一高いファシリティーコストを有効活用し「経営戦略」と「快適な執務環境」を実現する有効手段として今後益々運用が期待される。

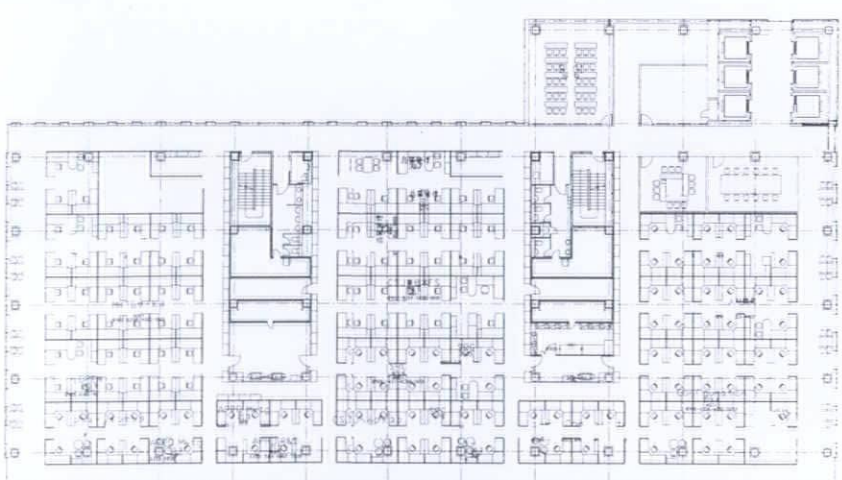
（鈴木勇二／岡村製作所）



施設内の段差には全てスロープを採用



中庭に面したカフェ



4階レイアウト図

オフィス・デザイン：岡村製作所、大林組、
Gensler and Associates Architects
建築設計：大林組
所在地：東京都八王子市高倉町9-1
内装竣工：1996年4月
面積：41,650m²

社内に「庭」のあるオフィス

宝島社

オフィス・デザイン：岡村製作所
所在地：東京都千代田区一番町25 JCIIビル
内装竣工：1996年6月
面積：2,300m²



パーティションを極力使わず頻繁な異動に対応



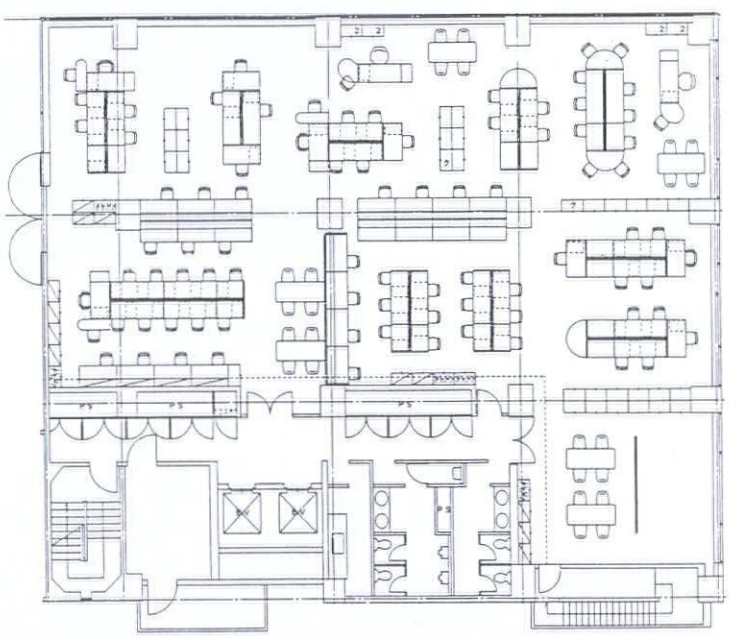
社内LANなどハイテク化も推進



社内の「庭」。打ち合わせだけでなく懇親会のスペースとしても使われる



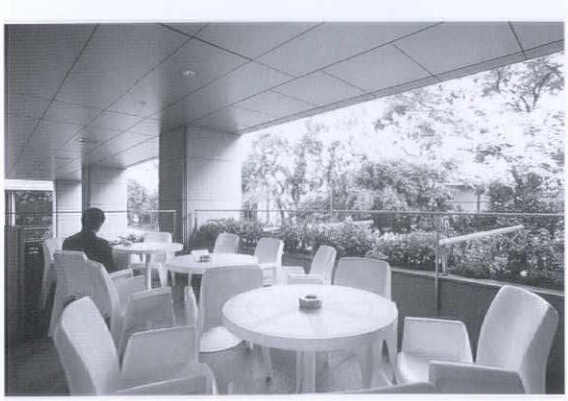
社内打ち合わせ室



基準階レイアウト図

初めにクライアントから提示された内容は、「トップと一般社員のコミュニケーションを第一に考える。但し、部門間はまったく異なったプロジェクトを行っているので、ある程度のプライバシーも確保したい。また、プロジェクトは非常に流動的で、フレキシビリティも確保したい」との内容だった。プライバシーに関しては、部門間に高さ1200mmの収納を設けることにより、収納量と適度なプライバシーを確保した。また、フレキシビリティに対しては、連結机とキャスター付脇机を採用することにより解決した。しかし、コミュニケーションについては、非常に苦労した。現状は社長自ら、社内を回って状況を的確に把握しているとの事だった。つまり、フォーマルなコミュニケーションだけではなく、日常的なコミュニケーションを通じて、情報を集め、意思決定の材料にしていることがわかった。欧米企業では、フォーマルなコミュニケーションより、インフォーマルなコミュニケーションを重視する傾向があるが、考え方はこれとまったく同じである。欧米であれば、会社の庭でバーベキューパーティーといくところだが、日本企業では当然、そのような庭はない。そこで私は、オフィス内に「庭」を作る事を提案した。さすがのクライアントもこの提案には悩んでいたが、ディスカッションを進めていくうちに、話はエスカレートしていった。当初、メンテナンスを考え日本庭園（枯れ山水）を提案していたのだが、「どうせやるなら、生木が良い。そして、そこにホタルを放したどうだろう」「ホタルを飼うなら川を流そう」など、いろいろな意見が飛び交かった。ディスカッション中は、後先を考えず発言していたため、後になって、実際どのように作ろうか、よく悩むことがあった。実施設計にあたっても、クライアント、内装業者、造園業者と激しく討論を行った。結局、ステージと植込みを造り、年に数回植栽に植え替える方法にまとまった。このほかにも、ステージに置かれたグレデンザーには、冷蔵庫、バーワゴン、ターン式のボトル棚が組み込まれ、執務時間は打ち合せスペース、執務時間外は、コミュニケーションの拠点となる。クライアントとのディスカッションの重要さを改めて感じさせられた事例である。

（林 明弘／岡村製作所）



2階バルコニー。豊かな緑がリフレッシュに最適の空間となる

戦略スペースとしての社長室を有するオフィス

横商エンジニアリング

横商エンジニアリング（http://www.yce.co.jp）は、ファクトリーオートメーションの開発及びコンサルタントをメインの業務とする、コンピューターソフトウエアのシステムエンジニアの集団である。

プロジェクトごとにチームを組んで仕事を進める組織形態ではあるが、クライアント先での仕事が多く、日中の在席率も低いといった業務特性により、このオフィスの執務スペースでは、それぞれのチーム環境を重視するといった考え方ではなく、ユニバーサルプラン的なレイアウトを採用している。このレイアウトにより、よりフレキシブルに広々とオフィスを使うことができ、人員の増加時にもレイアウトの組み替え無しで即座に対応が可能となっている。そして、見晴らしが良く開放感のあるペリメーターゾーンには、ミーティングテーブルと小型の電子黒板をセッティングしてあり、チームのミーティングや、デスク上とは気分を変えての個人のシンキングスペースとして使用している。

多目的スペースには、4台のテーブルと電子黒板、データプロジェクター、講演台等をセッティングしている。ここでは、4台それぞれのテーブルでのミーティングはもとより、4台をまとめて多人数の会議スペースとして使用したり、データプロジェクターを用いてクライアントへのプレゼンテーションの場として使用する事もできる。電子黒板をパーティションとして使用すれば、個人のコンセントレーションスペースとしても使うことも可能である。

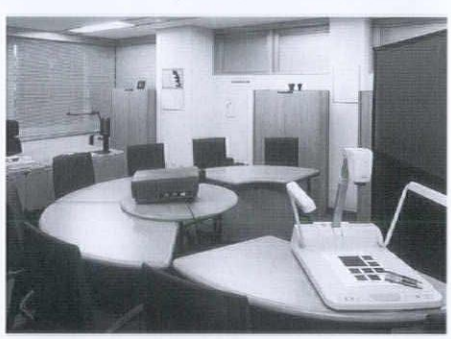
社長室は戦略スペースであるとの考えのもと、象徴としての設えよりも機能面での提案が求められた。そこで、可動式の円形テーブルを採用し、議題の投げ掛けから討議、立案までの会議のプロセスをスムーズに効果的にフォローしている。また、電子黒板はもちろん書画カメラ、データプロジェクターを備え、ヴィジュアル・プレゼンテーションにも対応している。

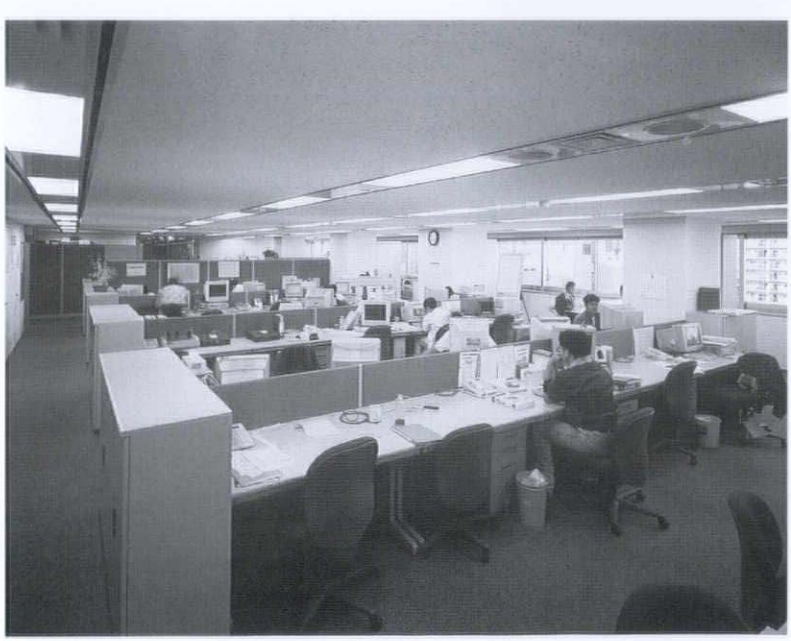


会議に必要とされる設備が充実する社長室

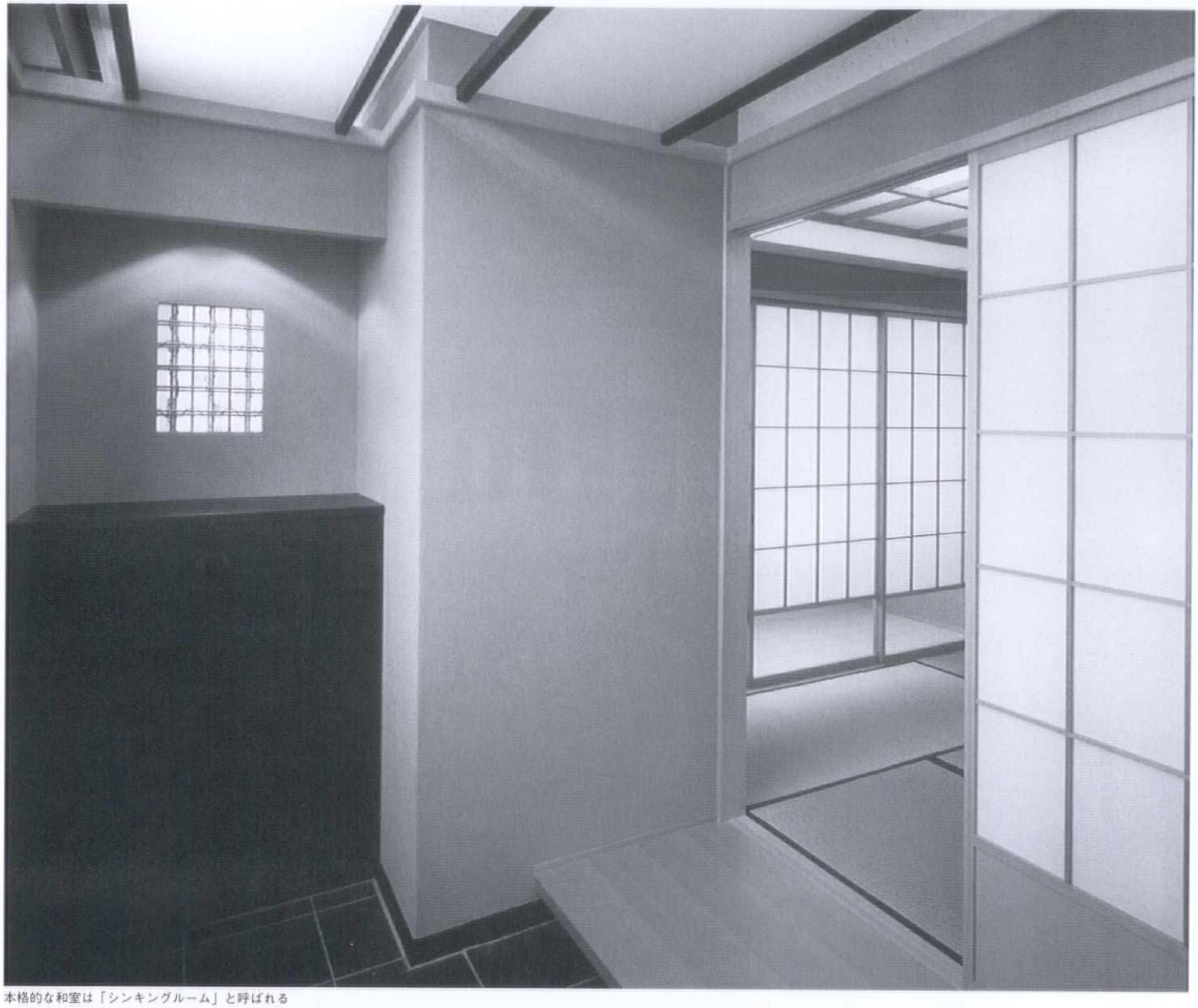
また、このオフィスには、仕事の構想は落ち着いた場でじっくり考えるものである、という社長の考えで、瞑想空間として位置付けられた和室を設けており、常にコンピュータと向き合う形で仕事を進めなくてはならないSEにとっての、発想の転換を促しひらめきを与える場として利用されている。このスペースは、効率では無く、より効果的な仕事を目指すこの企業の、象徴的な空間となっている。

（野中 勉／プラス）

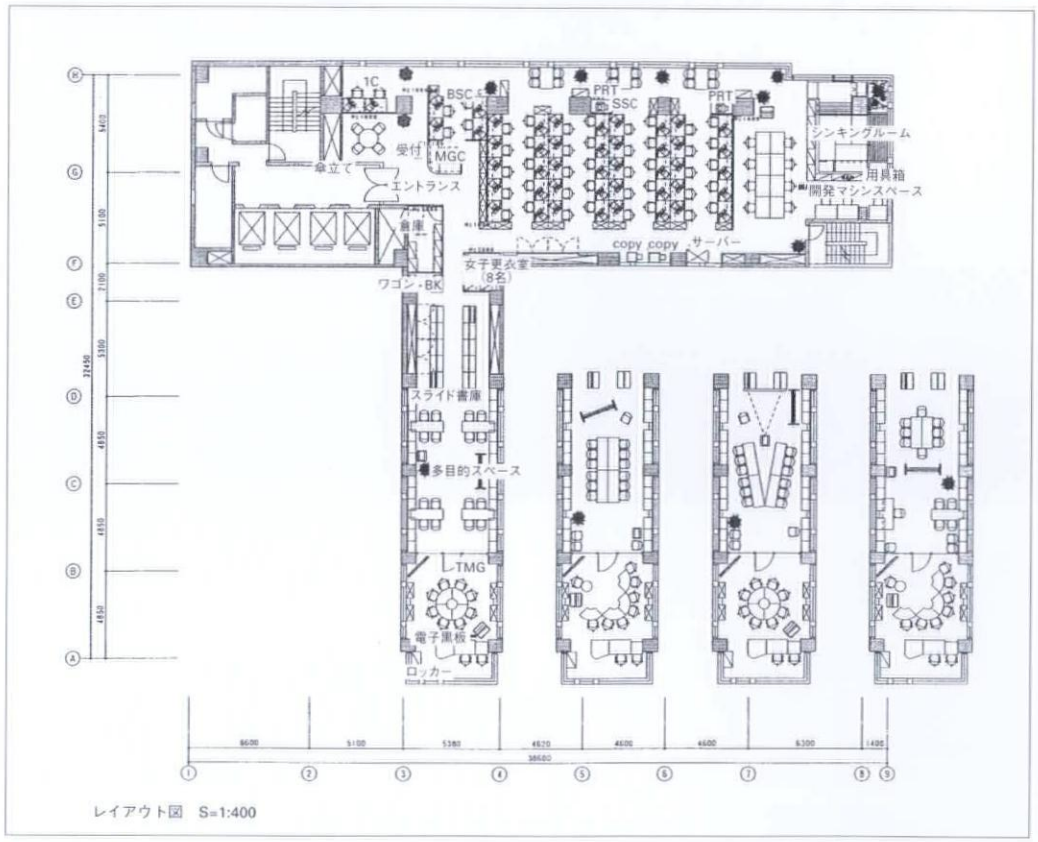




ユニバーサル・プランを採用



本格的な和室は「シンキングルーム」と呼ばれる



レイアウト図　S=1:400

オフィス・デザイン：プラス
建築設計：ビルディング不動産
所在地：東京都品川区西五反田2-30-4BR西五反田8階
内装竣工：1997年7月
面積：約400m²

時間軸とともに機能を変化させるオフィス

高橋工建・カムホームアクト新堀





オフィス・デザイン：伊藤隆川設計室+プラス
建築設計：伊藤隆川設計室
所在地：山形県酒田市大字木川字東中道29-8
内装竣工：1997年11月
執務室部分面積：78.55m²



建築、インテリアなど各分野のエキスパートのコラボレーションによって生まれた空間



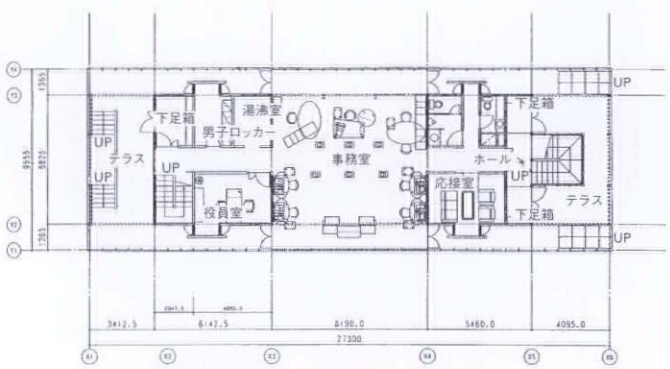
出社時。各々が作業に合わせてワークスペースを作る



ワーカーが帰社する夕刻。机を集めて会議スペースに

地方都市のドーナツ現象は地方都市構造の変化の起因となり商業施設の周辺部への移行とともに、業務施設にも変化が起こると予測。郊外に移ることにより、敷地が広くなり見物は低層になる。であるならば、木造で十分に対応できる。そして、建築、インテリア、照明、ランドスケープ、情報通信等をトータルに建築とともに提案できる。

このオフィスは、土木建設会社の管理事務所であり、役員を含めた当面7人が働く「郊外型木造オフィス」である。朝オフィスに顔を出し、昼間は現場に出向き、夕方オフィスに帰ってきて打ち合わせ等を行うといった典型的な現場型。この行動パターンからは機能が固定された共有スペースを作っても効率が悪い。そこで個人の書類や機器を納める棚と、可動式ワゴン、そして用途フリーなテーブルの3つのコンポーネントで構成されたシンプルなシステムを採用し、「空間の機能は時間軸とともに変化する」というコンセプトにより、状況に応じたフレキシブルな家具の使い方で空間を無駄なく楽しく使いこなすことを可能にしている。（田村克信／プラス）



レイアウト図　S=1:400

少数精鋭のための求心力あるオフィス

ケツト科学研究所札幌営業所

このオフィスは水分計等測定器の製造販売会社である。また会社にとっては創業地でもあり特別な思いがある場所でもある。創業地、企業イメージ、これからの小オフィスのあり方、気持ちよく働ける環境等を考慮して作り上げてもらいたい、というのがクライアントの要望だった。

具体的条件としては、ワーカーは現在3人で将来的にも大きな変化はなく、一般事務の他に倉庫、作業所等を併設する。

営業所で数人のオフィスでは外出も多く、ひとりだけの時もよくある。そして業務もひとりの人がいろいろなことをやらなくてはいけない。また業務内容の変化や、装置類の変更や機器の増加もあり、限られたスペース内での対応はかなり難しい。そしてできることなら少人数でも連帯感や一体感の持てる求心力のあるオフィス環境をつくりたいと思った。

手法的には家具以外はすべて白で構成し、アーチで空間を応接、執務、会議の3つのエリアに分節し、組み合わせ大デスクを置いた。

白の中で場を特定するカーペットと木製家具と装置、道具、そして人がその中で浮かび上がる。白のひとつの空間であり、かつアーチで分節化することにより、場に変化をつくり出す。組み合わせ大デスクがふたつの領域にまたがって横たわっている。

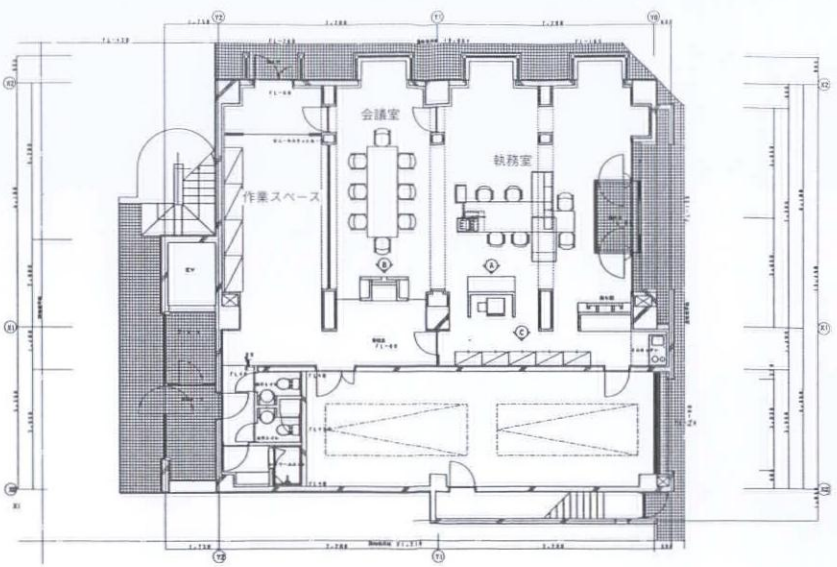
このオフィスでは自席というものがない。事前に仕事の内容、やり方、問題点等を検討した結果、「接客をする」、「パソコンを使う」、「思考する」、「コミュニケーションをとる」という行為を抽出し、その行為に相応しいところで作業をするという方法を取った。9時から5時まで同じところに座ったままというのではなく、作業内容によって人が動く。ひとりでもふたりでも3人でももっと増えても、それぞれに気持ちよく作業ができるようにした。

働く人数を特定してからデスクレイアウトをするという今までのオフィスプランニングのやり方とは全く異なった考え方である。

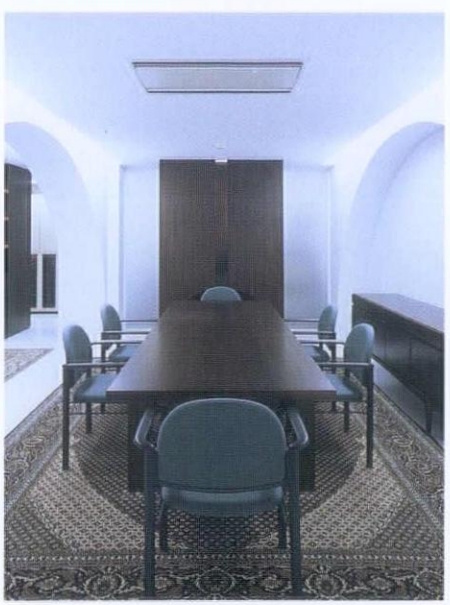
（伊藤宏司／オフィス環境研究所）



サクラ材のデスクは「思考する」「接客する」などの行為を凝縮した機能を持つ



レイアウト図　S=1:100



オフィス・デザイン：伊藤隆川設計室+プラス
建築設計：伊藤隆川設計室
所在地：北海道札幌市西区八軒西3-1-1
内装竣工：1997年5月
面積：130m²

サテライトオフィスの新しい展開

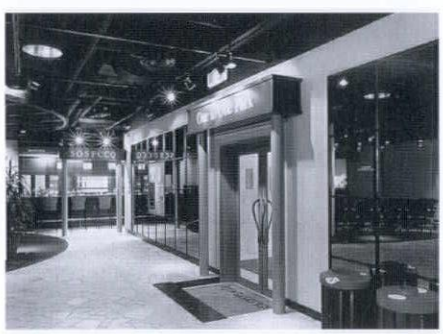
ベルシステム24 One to One Park

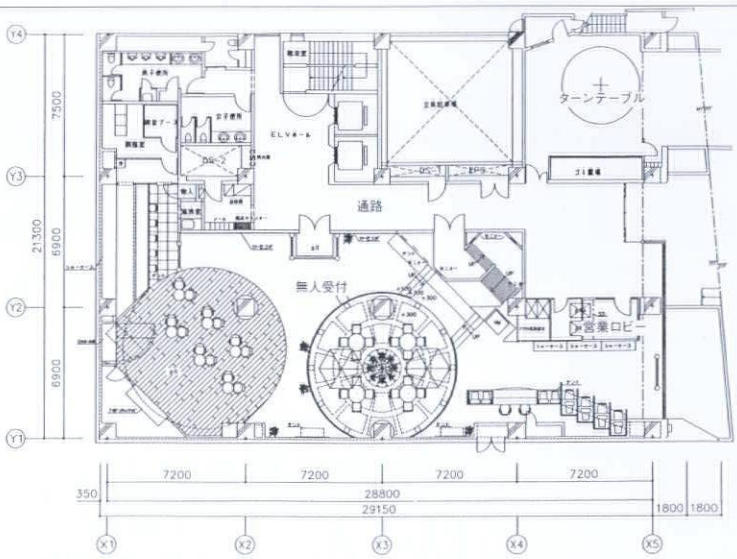
オフィス・デザイン：イトーキ
所在地：東京都豊島区南池袋1-16-22
内装竣工：1997年6月
面積：328.84m²



個人執務キャレルデスク


ミーティング兼執務スペース


サブエントラスとドリンクコーナー



レイアウト図　S=1:400

ベルシステム24はテレマーケティングサービスを主業務とする新しいタイプのサービス会社であり、サービスを担う社員（クルー）が財産の会社でもある。その社員の50%がサテライトクルーとしてクライアント先のコールセンターなどで働いている。ここで課題として表面化したのが、「社員の帰属意識をどのように高めるか」また「社員の情報格差をどのように埋めるか」ということであった。彼ら、彼女らは本社に個人の机を持っていないので、本社に来た時に居る場所がない。知らず知らずのうちに情報格差が広がり、社員という意識が薄まり、サービスレベルの低下や、優秀なクルーの定着率を低めることにもなり兼ねない、との危機感が今回紹介する〈One to One Park〉を作るきっかけになった。

〈One to One Park〉は本社に設置された新しいタイプのサテライトオフィスである。本社に立ち寄ったクルーはこの場所で社内情報にアクセスすることができる。このスペースでは、無線LANのインフラとノートPCの貸し出しにより、公園のような空間のどんな場所ででも、コンピュータ・ネットワークを利用して仕事ができるようになっている。また、カウンターを備えたドリンクコーナー、映画鑑賞などができるプレゼンテーションコーナー、インターネットを備えた情報コーナー、等の各種空間も備えている。

この空間的機能的魅力に加え、ここで利用できる、社員のための研修やカルチャースクールの開催、チケット購入、情報サービス等の各種サービスも充実しており、女性の多いサテライトクルー達に好評を博している。（加藤雅士／イトーキ）

都市型オフィスの新展開

ポルシェ・ジャパン本社

オフィス・デザイン：イトーキ
所在地：東京都目黒区下目黒1-8-1アルコタワー16階
内装竣工：1997年1月
面積：504.53m²



リフレッシュコーナー



ワークゾーン

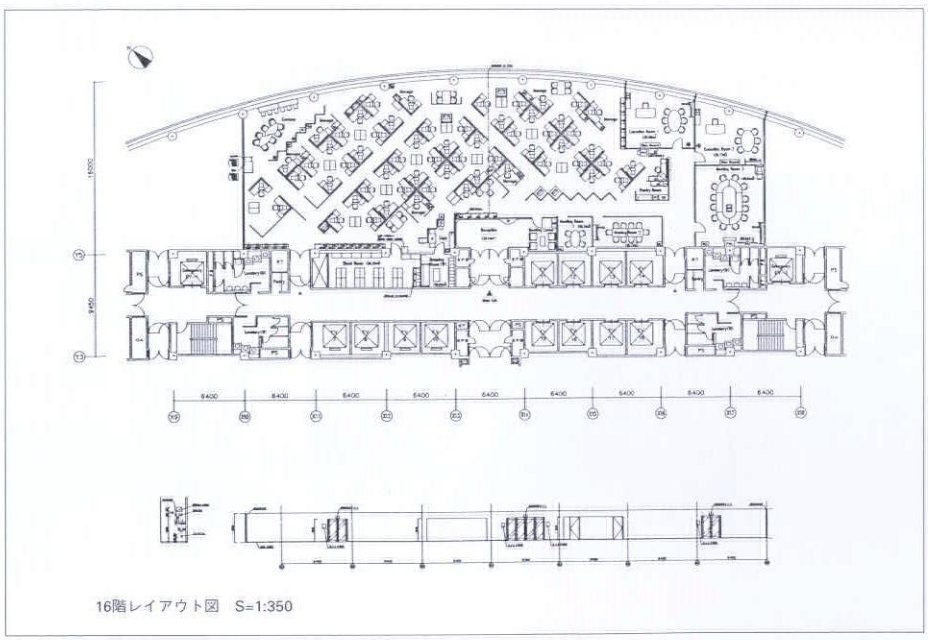
都心の高層ビルに新しく設置されたポルシェ・ジャパンの本社オフィスは、ドイツの第一級の製品イメージにふさわしく、シンプルな美しさと論理的なオフィスづくりを行っている。

都市型オフィスに必要な「限られたスペースを効率良く利用する」条件を確保しながら、「個々のワーカーが最高の効果と可能性を発揮できるような快適な環境を確保する」という目標も両立させている。

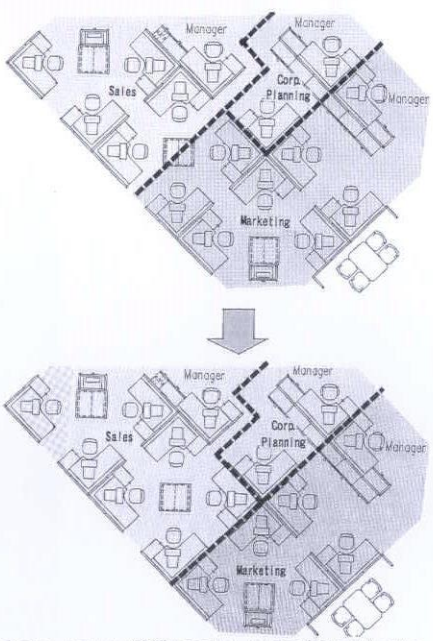
快適性維持とメンテナンス・コストレスのため、ユニバーサルプラン（レイアウト変更なしで、オフィスを維持していく計画方法）の考え方を採用し、徹底的なワークステーションのスタンダード化が図られた。チームオフィス環境を確保するためにパネルシステムを使用し、個人を尊重した、コンパクトなチームオフィスを形作っている。また従来の階層ヒエラルキーを払拭し、オフィスにダイナミズムを与えるため、斜めにレイアウトを行っている。

オフィス運用については、リサイクル処理が可能なタイルカーペット、部品交換、分解リサイクル可能な家具の採用、徹底的なデータの共用化によるペーパーレスの採用等、エコロジー対応をオフィスにも展開し、環境問題の意識の高いドイツ企業の特徴を打ち出している。（加藤雅士／イトーキ）

空間に動きを与える斜めのレイアウト



16階レイアウト図　S=1:350



デスクレイアウトを変更することなく人事の異動に対応できる

リゾート地の本社オフィス

アルソア本社



研修棟1階エントランスホール



社内レストラン

オフィスプランニング：イトーキ
建築設計：マリオ・ベリーニ・アソシエイツ+
竹中工務店
所在地：山梨県北巨摩群小淵沢町2961
内装竣工：1998年5月
面積：8550.59m²



雁行型に配置された執務空間

アルソア本社は、自然指向の化粧品メーカーである。本年5月、その本社機構を渋谷からリゾート地として知られる山梨県小淵沢へ全面移転した。「自然環境が豊かで、四季折々の変化が感じられる地で、来るべき21世紀をリードする、質の高いビジネスの発想、創造性を生み出す」というコンセプトである。

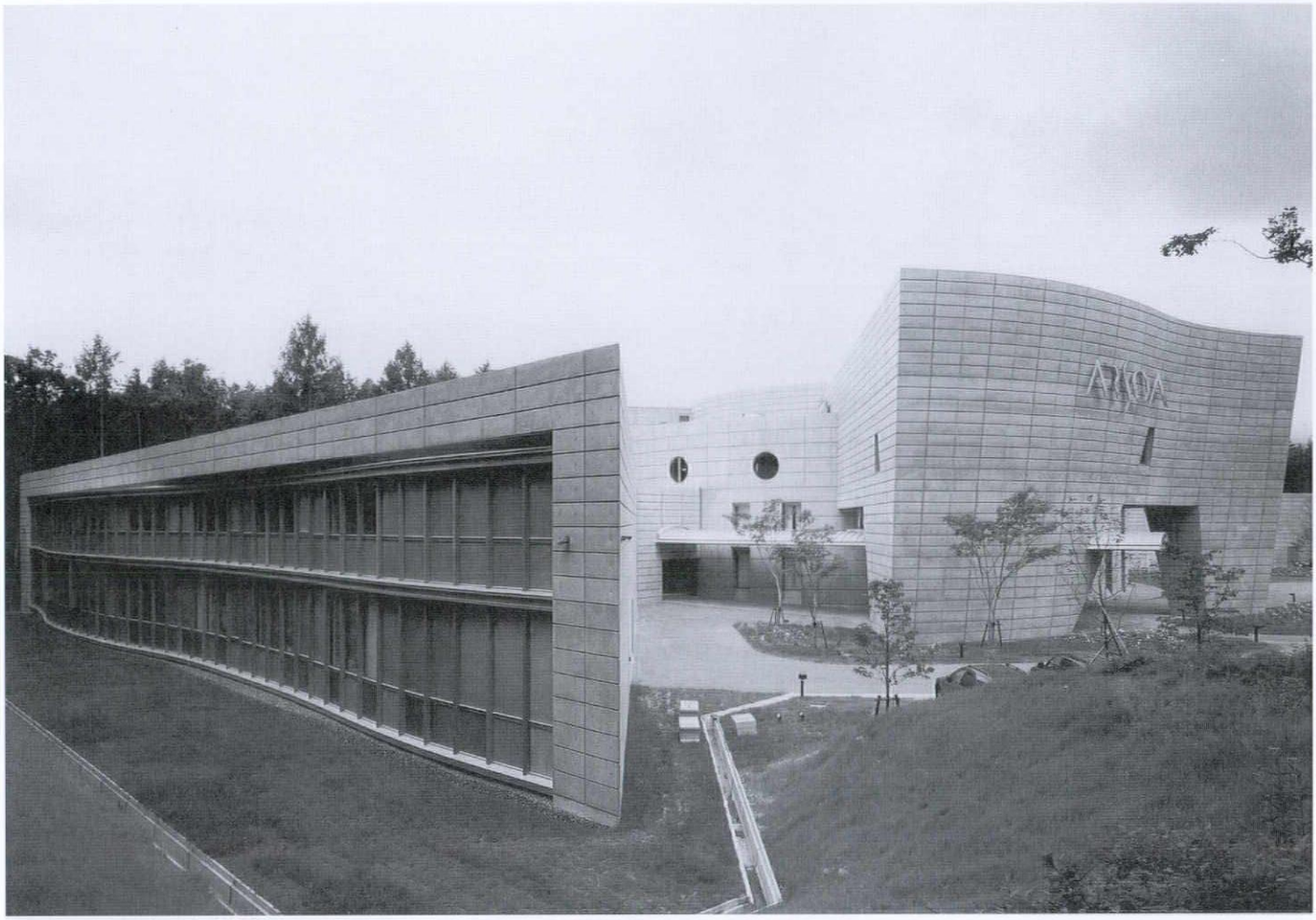
建物は事務棟、研修棟、研究棟に分かれており、製品の開発から販売支援までの機能を満たす複合施設である。建築はマリオ・ベリーニと竹中工務店の共同設計で、自然志向の企業にふさわしく自然と調和し、かつ本社として必要なワーキング機能を満たすものに仕上がっている。

オフィスを構成するに当たっては、オフィス・スタンダード・マニュアルが作成され、ワーカーの快適性と作業の効率化が満足できるよう配慮された。事務棟のオフィスは、幅1400mmのオペレーションデスクを雁行型に配置し、ゆったりとした執務空間を実現した。ファイリングシステムに準拠して収納什器を配置、また個人のワゴンを廃止するなど、ファイリングの効率化を図っている。また、プロジェクトルーム、立ち会議室等新しい試みを取り入れている。情報インフラはOAフロアや統合配線の実施の他、レストランやエントランスなど、オフィス以外の場所にも情報コンセントが設けられ、デスクを離れてもネットワークにアクセスできるよう配慮されている。社内レストランは無添加無農薬のオーガニック料理が提供され、社員の食事や来客のもてなしの他、打合せや作業途中の休憩の場としても活用されている。建物全体がリフレッシュコーナーのような空間になっており、自然を最大限に生かしたリゾート地ならではの新しいオフィスのあり方をこの本社ビルは目指している。この地を訪れる人は一歩この建物へ足を踏み入れただけで、アルソアという企業が何を求めているのかを理解できるであろう。

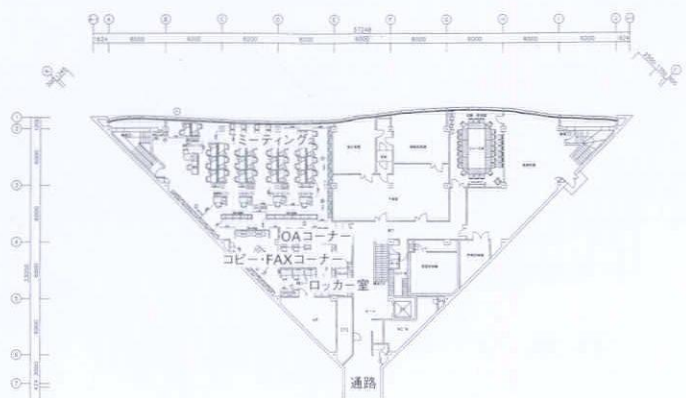
（加藤雅士／イトーキ）



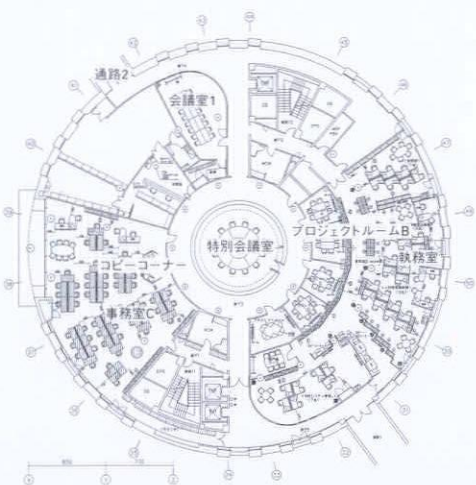
特別会議室



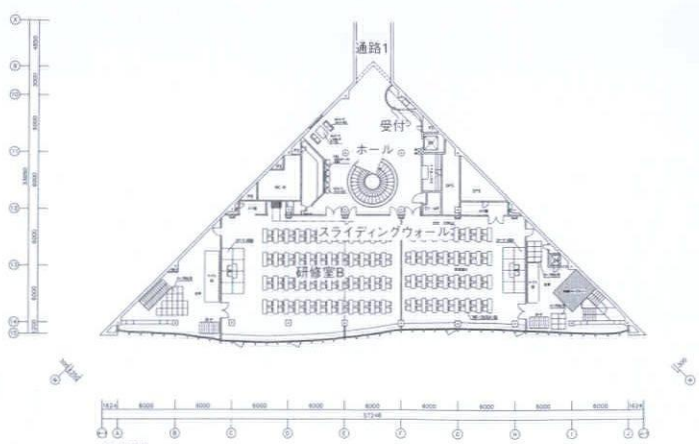
マリオ・ベリーニと竹中工務店の協同設計



R&D棟



メインビル



研修棟

2階レイアウト図　S=1:400

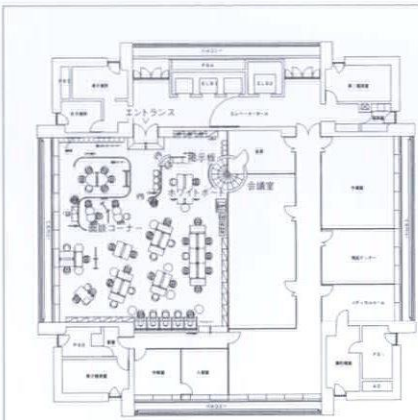
自由なセッティングが可能な流動的ワークスペース

NTT中央研修センタ

このセンターは、研修生の管理を主な業務としており、研修時期はオフィス外へ、研修準備期間はオフィス内でPCによるデスクワークというように、季節によって業務内容が多様に変化する。当然作業の形態も時期や研修内容によって違う。クライアントからの要望は「マルチメディア研修担当部という名にふさわしい先駆的オフィスへのリニューアルを」ということで、流動的な業務にフレキシブルに対応できるよう「グループワークセッティング シナジア」による「フレキシブルワークスペース」を提案。自分たちで用途に合わせた居心地の良い場所を選んで自由にセッティングする。

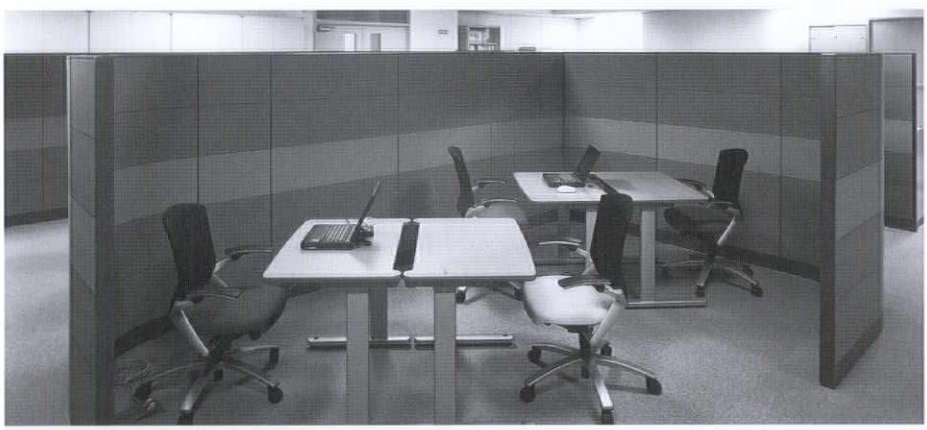
普段は個人集中作業スペースとして利用しているコーナーは、面談を行う際にセミクローズドなコーナーにデスクを移動させ「面談コーナー」になる。無線LAN、構内PHSなどインフラ整備も同時に行われ、先駆的オフィスに仕上がっている。

（荒井裕子／コクヨ）



3階レイアウト図　S=1:600

オフィス・デザイン：コクヨ
建築設計：公社時代の電信電話公社建築部
所在地：東京都調布市入間町1-14
内装竣工：1998年2月
面積：206m²



普段は個人集中作業スペースとして使用



用途に合わせてデスクを様々にセッティング

チーム・コミュニケーションを重視したオフィス

乃村工藝社本社4号館2、3階



ワーカーは作業内容に応じて場所を選択



ノンテリトリアルワーカーには書類やパソコンを収納する個人ロッカーが必要

オフィス・デザイン：コクヨ
建築設計：竹中工務店
所在地：東京都港区芝浦4-6-4
内装竣工：1997年12月
面積：1000m²（商環境事業部2、3階）



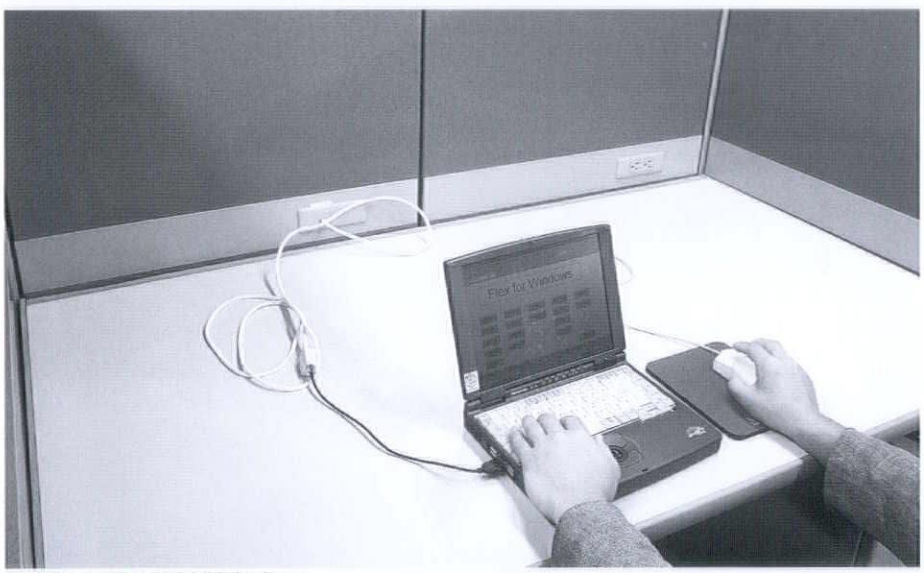
机の形態はさまざま。コラボレーションを支援する

まず各事業部が、営業、企画デザイン、制作管理という3つの異なった機能別スタッフによって構成され、その中で各々の機能（メンバー）が集まったチームによって業務が推進されている。このことから、「上司と部下」という縦よりも、「チーム」としての横のコミュニケーションを重視するように考えた。また現場業務が多い営業、制作管理系スタッフは、在席率が非常に少なく、通路等も必要以上に広い。それに比較して、打合せや作業を行うスペースが少ないという問題が考えられた。

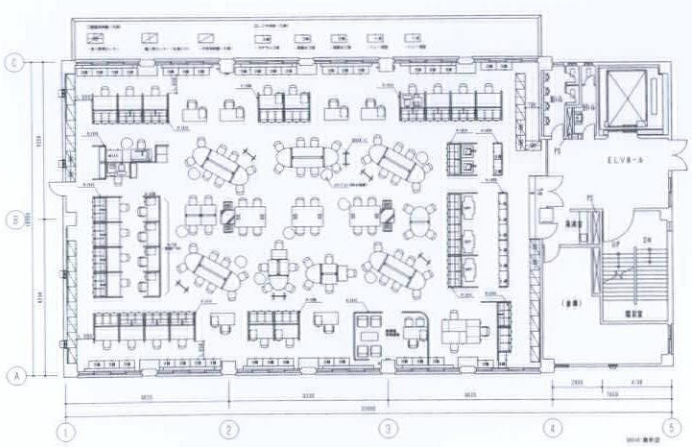
そこで、ワーカーを固定席ワーカーとノンテリトリアルワーカーとに大きく分類、特にノンテリトリアルワーカーには、コラボレーションがしやすいように、様々な形態のテーブル（業務内容に応じてテーブルの移動が可能）を用意し、それをフレキシブルに組み合わせられるようにした。いわゆるノンテリトリアルオフィス実現のため、社内連絡用の構内PHSと、個人用のワゴン（個人書類を収納）と個人ロッカー（端末、ステーショナリー、私物を収納）、個人トレー（郵便や回覧を収納）を用意して、ここを個人の拠り所としている。書類は、当初一人当り3Fm弱に設定したが、今後、さらなる共有化を考えている。これによって、ノンテリトリアルワーカーが社内で軽快に移動（将来的には社外でも）できるように考えている。

また、先行配線を実施しているため、ネットワークにアクセスするための情報コンセントはどこにいても利用できるようになっている。固定席は情報化対応のデスクやパネルによるワークステーションを利用しており、基本的には移動が不可能なため執務エリアの周辺部に配置している（ユニバーサルプラン）。ノンテリトリアル席は、前述のテーブル席と、高さ1400mmのパネルで仕切られたブース席が用意され、業務のシチュエーションに応じた選択が可能となっている。これを適業適所と呼んでいる。

（鹿野勝則／コクヨ）



先行配線により将来の情報通信発展に備える



2階レイアウト図　S=1:400

環境重視の企業精神をオフィスにも反映

宝酒造



自然光を活かした受付ロビー



リサイクル素材、製造過程で環境に配慮した家具を導入した応接ロビー

オフィス・デザイン：コクヨ
建築設計：竹中工務店
所在地：京都市下京区四条烏丸
内装竣工：1998年5月
面積：7350m²



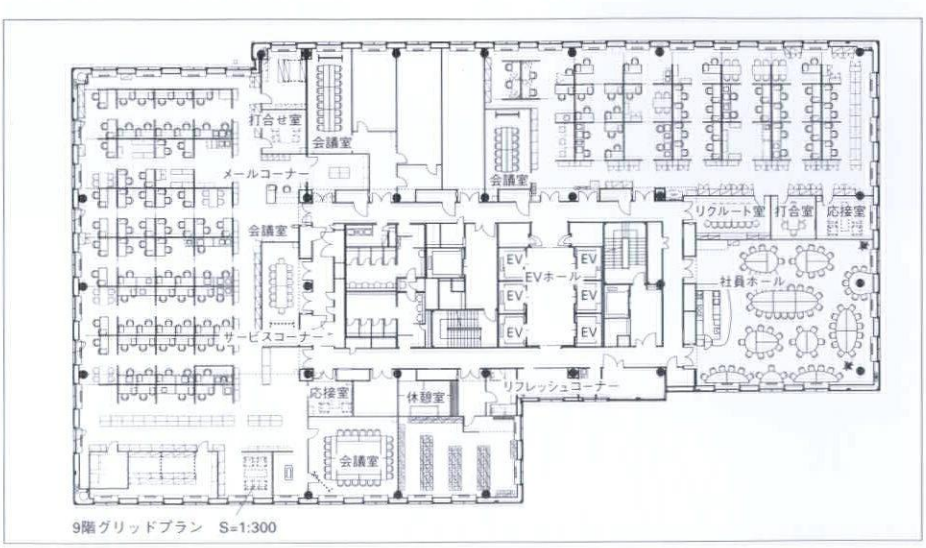
グリッドプランを採用し、チーム内でのセッティングフレキシビリティを確保

「知的創造の場として、創造性が高く」「個人、グループの能力が発揮でき」るオフィスという要望に対して、ここでは「グリッドプラン」という新しいオフィスシステムを導入している。これは組織変更時にも什器を移動せず、人と端末、個人収納の移動のみを可能にしたプランで、エンドユーザーがワークスタイルに合わせてカスタマイズできるフレキシビリティを確保している。いわば「組織変更への迅速な対応、コスト削減」といった管理者の要求と、「自分達にとっての使いやすさ」という相反する要求を満たすことができる。具体的には基本グリッドを設定し、先行統合配線を施したローパーティションを設置。これらパネルで囲まれたグリッド内は、1グリッド4人あるいは6人の使用を基本単位として、用途 、デスク配置、パネル高さ等をユーザーが自由に設定することができる。什器も、配線機能付きデスク（幅1500mm）1台、ワゴン、パネル（高さ935mm）、または、配線機能付デスク（幅1000mm）、パネル（高さ935mm）といった範囲で選択することが可能である。このシステムは、初期投資が必要ではあるが、いったん導入すれば、人事異動にも柔軟に対応でき、部門間の仕切り、部門ごとの領域を不明瞭にしてあるため、他部署との業務コラボレーションがしやすくなる。また、デスク配置における位置や家具がステイタス性を持たないため、部門ごと、個人ごとあるいは職階でも環境の差がほとんどなく、社員モラルの向上も期待できる。また、ワークスタイルが刻々と変化する過渡期にあっては、従来の業務スタイルにも対応できる意味は大きい。

もうひとつ大きなテーマが「エコロジーへ取組む企業イメージを発信する」オフィスの実現であった。クライアントは、ビン、缶、紙パックなどの省資源、ごみ減量化、リサイクル等の実施、さらに清流、ホタル、松、竹などの環境保全活動の実施などを積極的に行っている。

そういった環境への取り組みを具体的に表現する場として、応接ロビーにはリサイクル素材を活用し、リサイクルへの取組みを具体的にアピール。待合いスペースのベンチ、スツールのクロスに再生PETを使用したり、OAフロア、ローパーティションにGライト（リサイクル素材）を充填したり、あるいはガラス廃材を利用したエコロジータイルを各所に利用するなど、全館を通じて「ナチュラル」＋「エコロジー」を具現化した空間に仕上げている。また家具等は製造過程でのエコロジーに配慮したものを採用している。

このオフィスでは、先駆的な「業務改革」と「エコロジーへの取り組み」を環境（空間）面で実現している。（矢部昌洋／コクヨ）



9階グリッドプラン　S=1:300



社員用ホール

贅沢な空間が創造性を刺激する

ソニー・ピクチャーズ・テレビジョン・ジャパン

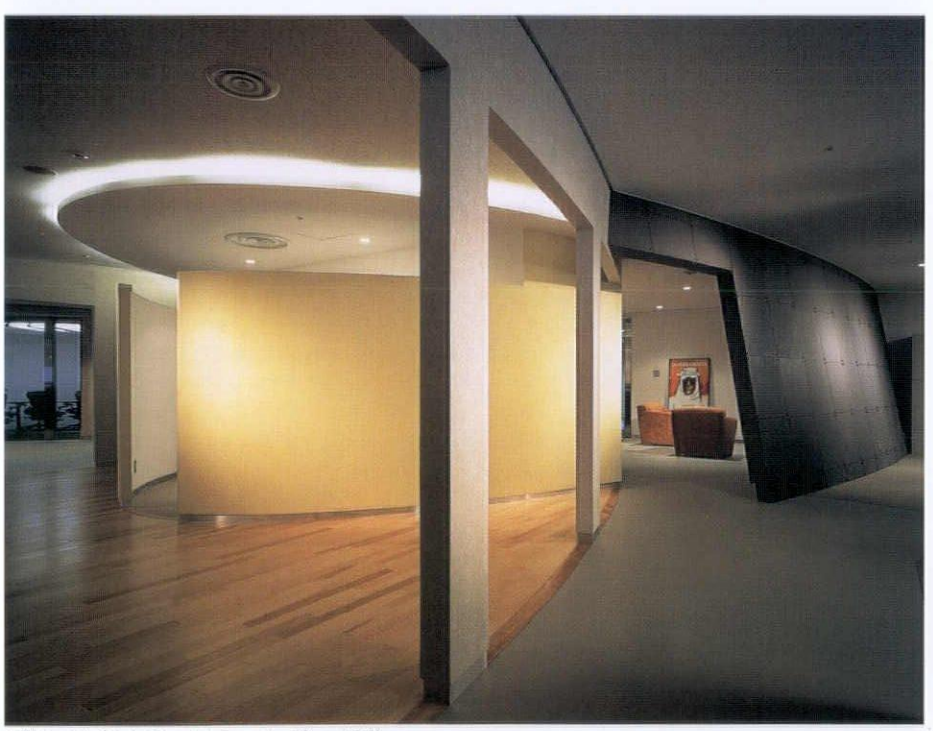
オフィスデザイン：ビー・エイ・イー・デザイン・アンド・ファシリティー・マネジメント
家具：スチールケース、ハーマンミラー、秀光、インターフェイス
所在地：東京都港区海岸1-11-1ニューピア竹芝ノースタワー17階、19階
内装竣工：1998年8月
面積：1940m²



19階受付ロビーからモニター室を見る



受付

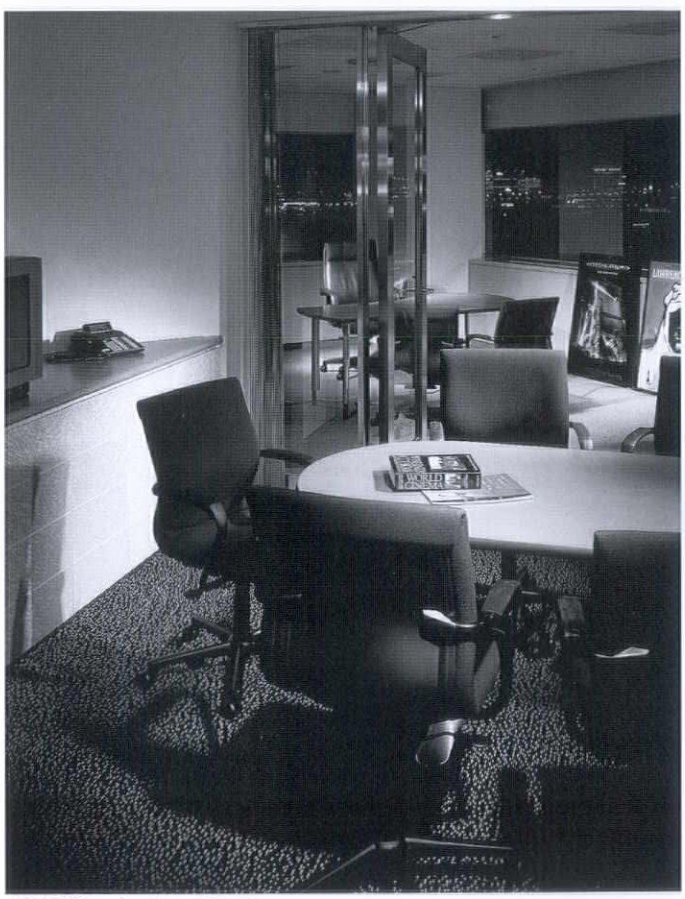


17階ホールからレセプションとチェッカープレートの壁

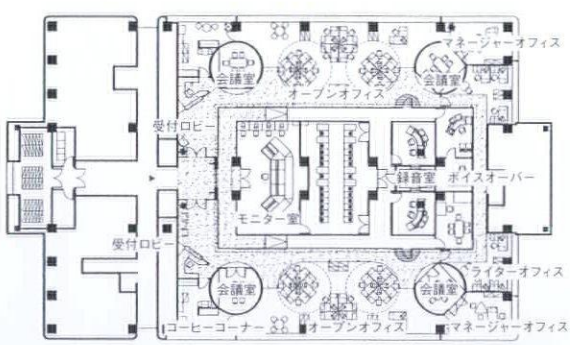
ソニーのグループ企業である、ソニー・ピクチャーズ・テレビジョン・ジャパンのオフィス及び、24時間衛星放送を行うテクニカルオペレーションセンターのための施設である。臨海副都心やレインボーブリッジを望む、JR浜松町駅からも程近いウォーターフロントの高層ビルに位置する。「カジュアルで自由な雰囲気を」というクライアントの話をもとに、デザインは進められた。円と、緩やかな二次曲線を使いゾーニングされた、空間は、日本のオフィス環境にありがちな、単位面積当たりの効率性重視のオフィスとは、質を異にする。曲面によって生じた無駄と思われるようなスペースは、生産性のない空間ではなく、社員個人個人が自由な発想で業務にあたり、心に余裕をもつように用意されたオフィスの「間」である。個人の生産性を高めるために必要な要素であると考えるとともに、クライアントの望む「自由な雰囲気」をも表現する。度重なる議論の末、実施に移されたこのプランは今後どのような結果を生ずるか楽しみである。使われている材料も「カジュアル感」を表すため、素材感のあるもので中心に構成し、ガラス、コンクリート、木製フローリング、ステンレススチール、チェッカープレート、スタッコ調の塗装等が最終的に選ばれた。17階のレセプションエリアは、オフィス中心から延びる二次曲線とオープンオフィスとを分ける三次曲線の壁によって構成されている。その中心にはタペストリーガラスと天井より荷重を支えられた種層ガラスでできたレセプションカウンターが配置されている。この不安定な透明な「ガラスのオブジェ」は、80度の傾きをもって建てられたチェッカープレートの三次曲線の守られるようにその繊細な美しさを放つ。17階、19階、それぞれのコーナー付近に円形のミーティングルームを配置し、特殊塗装を施すことで、均一的空間に陥りやすいオープンオフィスに変化を与えている。（白崎裕／ビー・エイ・イー・デザイン）



19階オープンオフィス



19階会議室、マネージャーオフィス



19階レイアウト図　S=1:700

働き方を変えたオフィス・デザイン

JRバス関東



オフィスの核となる情報センター



集中執務室

これまでのクライアントは外資系の企業がほとんどだったので、今回は珍しいケースだった。

クライアントの社長は経営者として、オフィスに対する造詣が深く、今回のプロジェクトでは単なるオフィスデザインを越えて、今の課題をクライアントと一緒に探していくプログラミングからコンサルティングまで協働している。

まず、新しいワークスタイルの実現を目指して「ノンテリトリアルオフィス」を導入するため、社員の就業状況が徹底して調査された。1週間の執務内容と行動を記録し、その内2日間はそれぞれ10時、11時30分、14時、16時に社員のいる場所をバブルチャートに落とし込む作業が行われた。それによって単独の作業用のデスクの必要数なども割り出せる。結果、執務スペースは機能別にゾーンを設定した。単独作業、共同作業スペースをそれぞれ作り、集中執務室としてデスク1台分程度の個室を用意した。また、社長の考えで、社長室と取締役室を設けず、上下のコミュニケーションを促すことにした。

デザイン上のコンセプトは、ビル窓の曲線の雰囲気を活かし、柔らかさを出すために、オフィス中心部分にも曲線を使用した。また、将来の配線を見越してビル自体の床下が300mmあるので、執務スペースの床を下げ、共通スペースと区分されるようにした。その結果、情報センターの機能も上がり、また執務スペースを見渡すことができるので、コミュニケーションが取りやすくなっている。

コミュニケーションを良くすること、本社機能だけを残す、つまり本社がすべきことだけをする、という原点に立ち返ってデザインを行っている。造作家具の一部にはJRカラーの緑と赤を用いている。

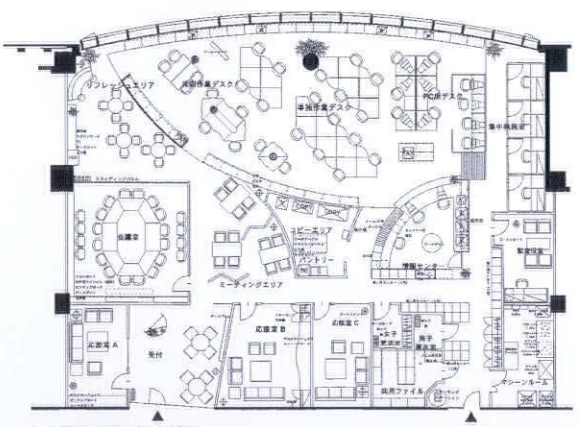
オフィスがノンテリトリアルになれば、そこでの働き方も変わってくる。そういった意味で、オフィスデザインはそこで働く人を規定するものでもある。今回のリニューアルによって、社員のオフィスへのかかわり方も積極的になったという。今後ある時期を見てまた課題を検討することも考えている。

(李泰久／システム・オー・デザイン・アソシエイツ)









レイアウト図　S=1:400

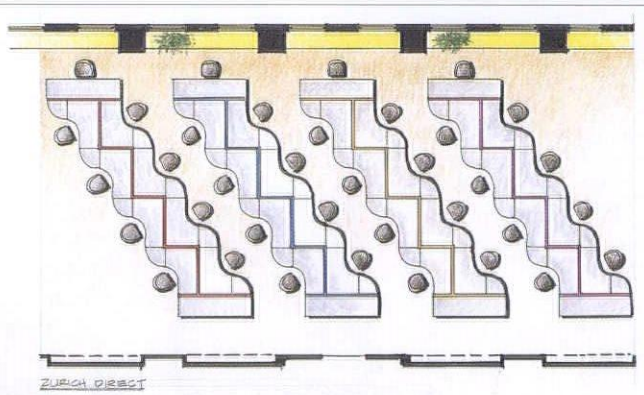
オフィスデザイン：システム・オー・デザイン・アソシエイツ
家具：スチールケース、ハーマンミラー、岡村製作所、ノールインターナショナル、ヤマギワ、山田照明
所在地：東京都渋谷区代々木2-2JR東日本本社ビル12階
内装竣工：1997年9月
面積：513m²

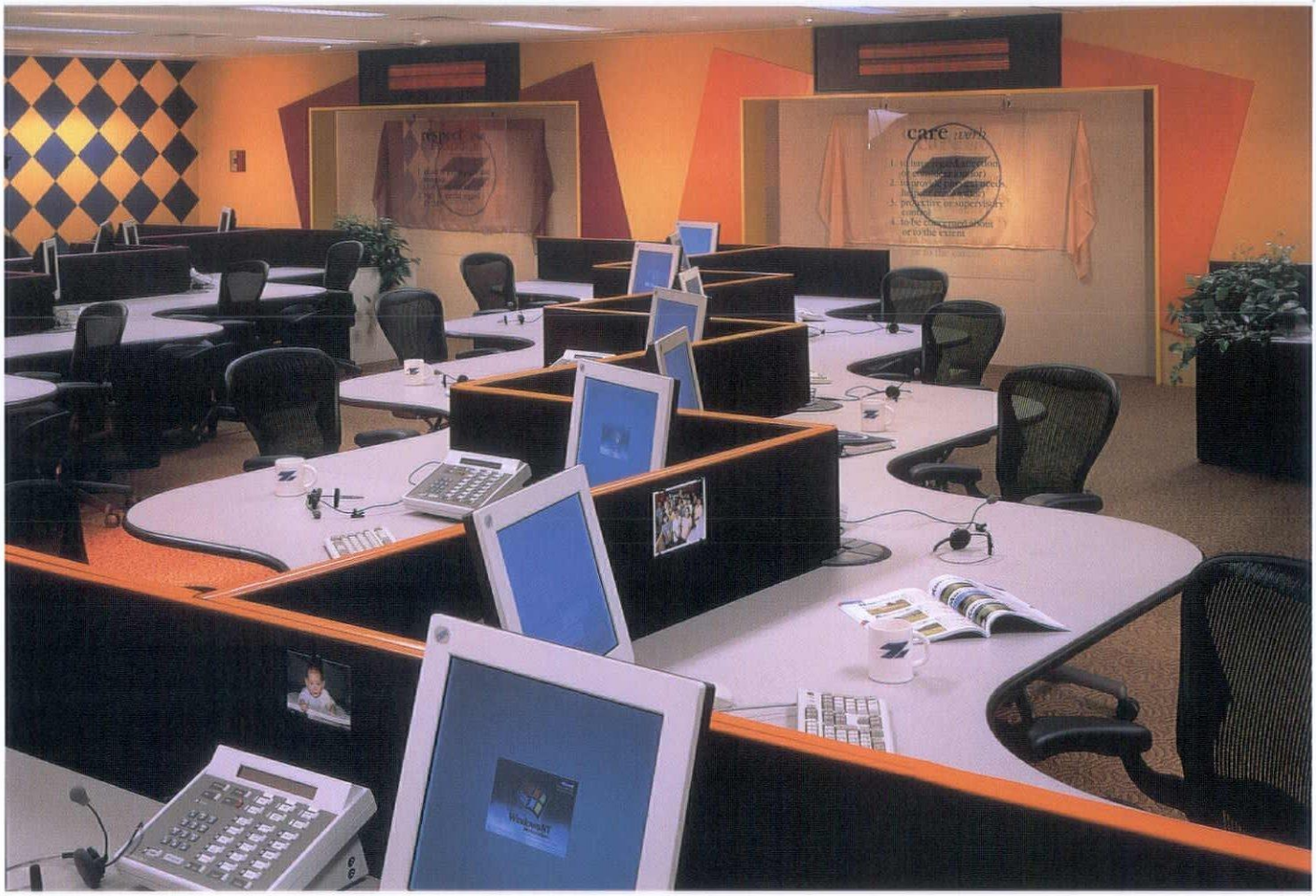
チームワークを喚起する色彩豊かなオフィス

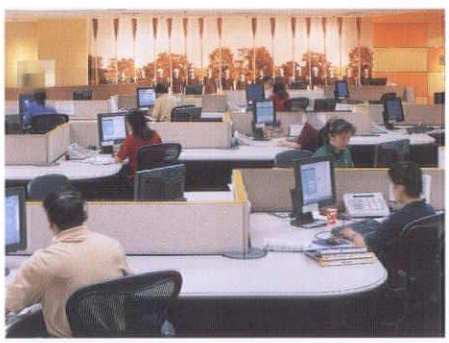
チューリッヒ保険日本支店ダイレクト事業本部カスタマー・ケア・センター

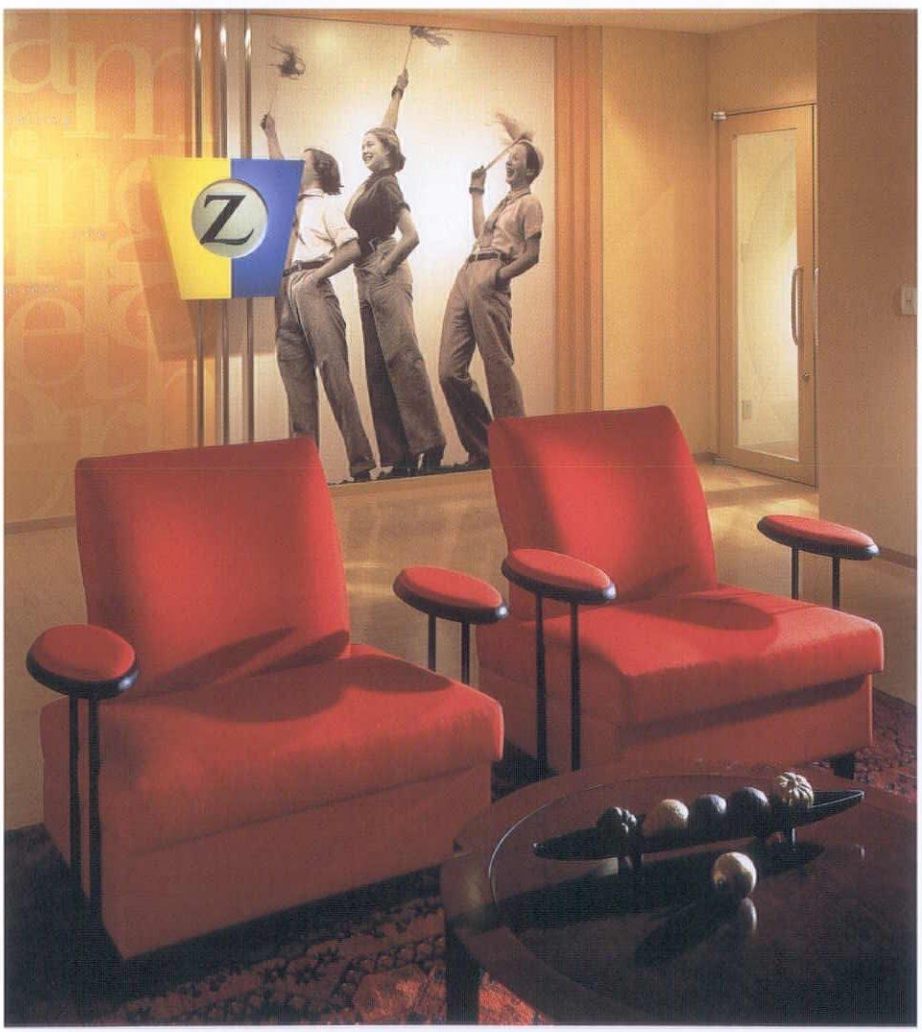


オフィス・デザイン：Gensler and Architect Associates、HOK
所在地：東京都調布市小島町1-32-2京王調布小島町ビル2,3階
家具：スチールケース、ハーマンミラー、ノルインターナショナル
第1回内装竣工：1997年5月（1998年4月に拡張）
面積：957m²（1998年1254m²に増床）









「社員の満足度は、生産性を左右する」。その考え方は、この事例に活かされている。スイスに本社を置く、チューリッヒ保険会社日本支店のダイレクト事業本部内のコールセンターである。

クライアントの要望は、カジュアルで快適な環境を社員に提供し、同時に「チームで仕事をしている」という企業の姿勢をデザインにも反映して欲しいというものだった。また4つのチームが互いの競争意識を刺激し合って、売り上げが伸びるようにとも望んでいた。

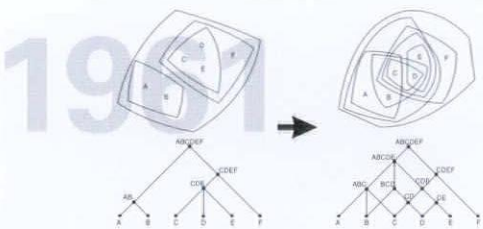
それぞれのスペースには、「チーム」で仕事をしている意識をより一層高める目的で、スポーツに由来した名称がつけられている。メインの執務空間は「アリーナ」。ここには「コーチ」がトレーディングルーム仕立てのデスクの上座に坐る。チーム間の競争意識を刺激するべく、机にはLEDのボードが設置され各チームの電話の通信数が記録されるようになっている。このほか、「リレー・スペース」と名づけられた研修室、「タイム・アウト」スペースは、休憩室となっており、ビデオをみたり、コーヒーを飲んだりできる。オフィス全体にわたって、大胆な色使いとグラフィックが施されている。

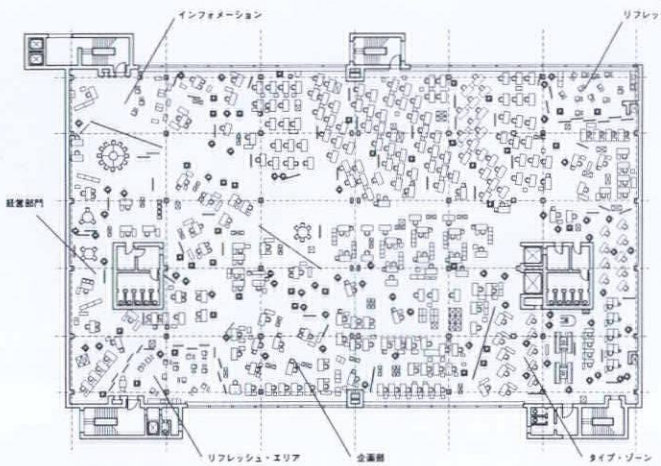
未来のオフィス——NEXT OFFICE PLANNING 2005

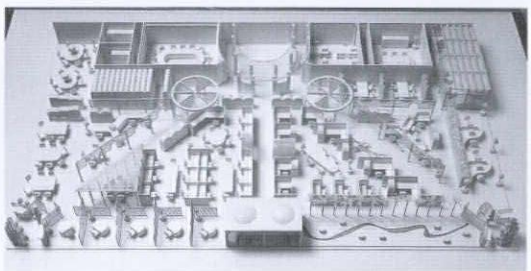
地主廣明+オフィス環境研究所

Buch und Ton 1961

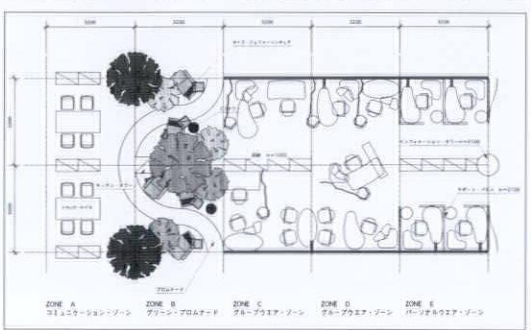
クイック・ボナー・チーム（1961）
セミ・ラチスなコミュニケーションのフローに基づきプランニングされている。建築モデュールに離反し、フリー・ローケイションで有機的な空間を創出した（259名）。



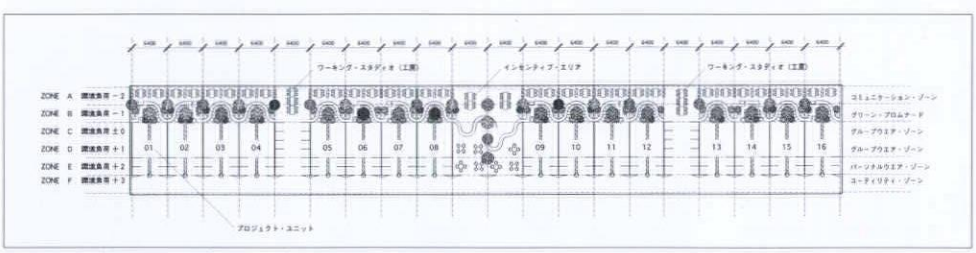




オフィス・スケーピング・プロジェクト（1990）
自己創出系の初期概念モデル。庭園をメタファーにプランニングを考えている。幾何的な放射動線は管理システムを、有機的な迷路動線はコミュニケーションを支援することで、オフィスに潜む対立概念を両立させようとしている。



Nオフィス・プロジェクト　ユニット詳細（1998）
現実の建築モデュール3200に対応している。1ユニットを12名で構成。



Nオフィス・プロジェクト・プロトタイプ（1998）
現実のツリー構造組織という拘束の中で、可能な限りオート・ポイエーシスなシステムを採用したオフィス・プラン。今回のBuch und Ton　2005のプロトでもある。各セクションはプロジェクト・チームと位置づけられ、個環境とグループ・ウエア環境が混在し、ワーカーは場所をその時々のシークエンスで自由に選択できる。



システム家具ープロトタイプ（1996）
Nオフィス、Buch und Ton　2005でイメージされた環境装置としてのオフィス・ファニチュアのプロトタイプ。個環境を自己創出するためにデザインされている。

TO BE NEXT OFFICE

ANYWHERE、ANYTIME、ANYONE

強制労働に代表される様々な拘束（不自由）からの解放が人類の労働の歴史であるように、物理的労働環境であるオフィスでも、インタラクティブな通信技術を背景に、場所と時間と相手といった拘束から自由になろうとしている。

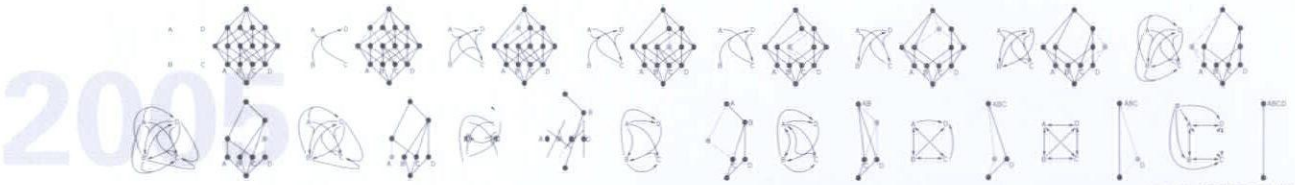
実際、ここ100年のオフィスの歴史は様々な拘束から自由になる歴史であった。オフィスをドキュメント作成を主体とした「事務処理」と考える時代では、管理者は人に合理的で機械化した身体になることを要求し、同時にさぼらないよう一望に監視できるプランニングを採用した。それが、後述するようにオフィスを「知的創造」の場であると認識した時から、コミュニケーションを中心とした年功序列などに左右されないプランが奨励された。さらに、現在ではツリー構造を主体とした組織ネットワークが、すべてと言わないまでも崩壊し、皆がプロパーとして自覚し、序列がない独立したリゾームな組織形態に移行することで組織の束縛からも自由になろうとしている。

以上のことを換言すれば、「事務処理」のオフィスは、ドキュメント・サポートとしての支援装置環境であり、「知的創造」オフィスではコミュニケーション・サポートとしての支援装置環境だった。では、明日は？　この答えは難しいが、もし組織の束縛やA・メーラビアンが言うところの服従からある程度の自由が得られれば、結局「知的生産」は個人に分配される。とすれば明日のオフィスは、あらゆる時と場所で、誰からも拘束されない「個環境」を約束する支援装置といえるかもしれない。

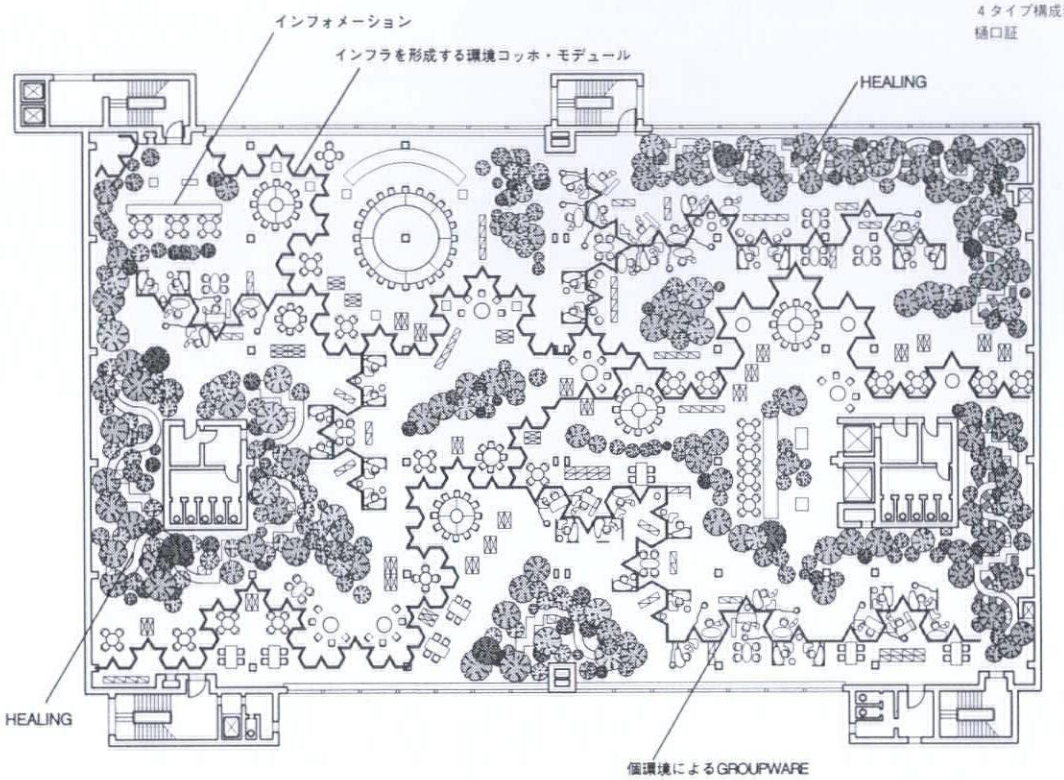
Buch und Ton

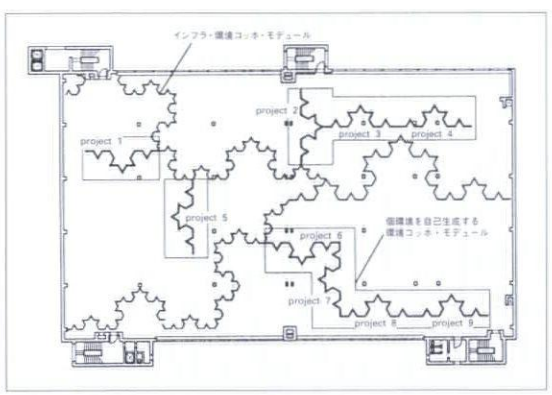
「2005年における、社員50人の総合出版社」。これが今回企画された、オフィスの未来像を考えるモデル・プランの与条件だった。もっとも、これにこだわる必要もないとも言われた。しかしながらオフィス・プランニングにおいて「出版社」というとエポック・メーキングなプランがある。クイック・ボナー・チームが「オフィス・ランドスケープ」を始めて発表したオフィスがBuch und Tonという出版関連の会社だったのだ。だから、今回2005年のオフィスを考える時、この空間を借用することにした。それは、「オフィス・ランドスケープ」がそうであったように、オフィス・プランニングで来るオフィスをイメージしたかったからでもある。

よく知られているように、オフィス・ランドスケープとは、旧西ドイツの経営コンサルタント・チーム、クイック・ボナーが1961年に発表したオフィス・プランニングの手法で、それまでのヨーロッパ型の個室型や、窓際にガラスの個室が並び、中央のオープン・スペースに監視されるワーカーが並ぶアメリカのコンベンショナル・オフィスに替わるものとして提唱されたものである。見るからに奇異なそのプランは、それまでの年功序列や監視と管理を混同していた悪しき習わしを改め、純粋にコミュニケーションを情報のフローに基づいてプランニングを徹底しようとした。一見脈絡がないように並べられるデスク群は、情報とコミュニケーションのフロー



4タイプ構成素の生成関係
樋口証





コッホ・モデュール
インフラ系の環境コッホ・モデュールと、個環境を生成する環境コッホ・モデュールに分かれる。

Buch und Ton 2005

コッホ・モデュールによって個環境を自己創出するプラン。インフラ系のコッホと個環境を生成するコッホに分かれる。自らを創出しつつも変形・破壊・再生産し続けるディス・ローケイションな空間を目指した（50名）。

を徹底すると、おのずと有機的になるとされた。そして、何よりもエポックだったのは、建築モデュールに離反し、アレグザンダーが後に近代の都市を批判するモデルとして採用したセミ・ラチス構造を計画に盛り込んでいた点、また、オフィスを単なる事務処理の場ではなく、インタラクティブに情報を作り出す創造空間と定義した点も革新的だった。

NEXT OFFICE PLANNING

さて、Buch und Tonが2005年にどんな姿になっているのだろうか。それが今回の計画の中心であるが、もちろん未来予測などが正鵠を射るわけがない。だから、ここではプランニングの思想の中心がどこに有るべきかを考えた。そのキーワードのひとつのがオート・ポイエーシス（自己創出系）であった（もちろん、これはクイック・ボナーがノベルト・ウイナーのサイバネティクスを引用したことと無縁ではない）。オート・ポイエーシスとは、辻下徹の定義によれば「構成素は、他の構成素と相互作用して変形・破壊・再構築される。そのような構成素の「集まり」が相互作用の進行によって維持されるとき、その集まりを自己創出系と呼ぶ」。この「構成素」をオフィス・ワーカーと考えるならば近未来のオフィスをイメージ出来るのではないかと考えたのだ。つまり、ディス・ローケイションされたセンター・オフィスで、各ワーカーは、自らを、そして組織を変形・破壊・再構築させながら止揚する力を持ち、それを維持させることができるなら、それはどんな空間になるのだろうかと。

それを具現化するために、今回は自らを相似的に再生産し続けるコッホ曲線を引用して自己創出する空間をイメージしてみた。建築モデュールでいえば2モデュール以上のスパンで構成されるコッホ・モデュールはいわばオフィスのインフラ部分で、空調や照明、ケーブル類が収まるフレームを構成する。そして、そこにはコミュニケーションを中心とした環境装置がまとわりつく。そしてこのインフラ・モデュールを川の流れに例えれば、水を求めて群がる、1建築モデュールで構成されるコッホ・モデュールの、プロパーなワーキング・グループがそれぞれの個環境＝場を自己創出する。もちろん、自らを変形可能な組織ではリーダーはいない。いや、もはや皆がリーダーであり、というよりは皆がリーダーシップを共有している。これで50名。使われない空間は鬱蒼とした茂みとなり、散策するプロムナードが与えられ、次なる自己創出の場として未開の空間を提供している。

今回は、Buch und Tonのオマージュとして、同じ空間を使いセンター・オフィスを対象とした。そのこと自体がナンセンスであり、結局デスクと椅子と収納で構成される個環境がアナクロニックだと指摘されることも承知している。だが、ここでは個環境の物理的な家具形式の未来予測が重要なのではない。重要なのは、自己を変形・破壊・再構築させるといったシステムの構造にあり、それがコッホ曲線のように、自己相似的に再生産し続ける、すなわち、System into Systemの構造をどうしたら具現化出来るのだろうか、という問いを提供したかったのだ。

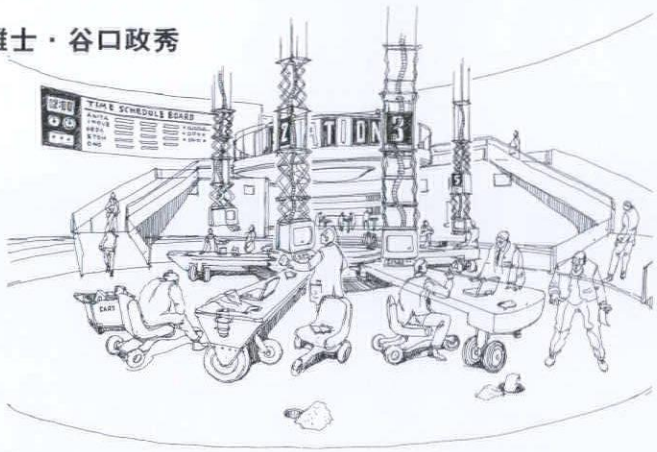
●ぢぬし・ひろあき／東京造形大学助教授

未来のオフィス——効率から創造……そして文化へ

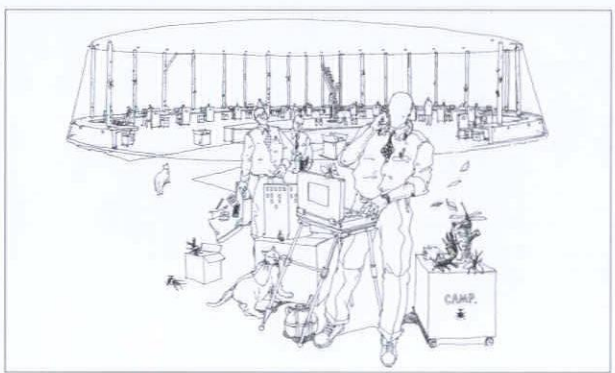
イトーキ総合研究所　加藤雅士・谷口政秀

イトーキ総合研究所ではオフィスの未来がどのように変化して行くかを日常研究している。今回はその中から、未来（?）指向のある、少し日常から離れたようなアイデアを紹介する。こんな考え方もあるのかと笑っていただければ幸いである。

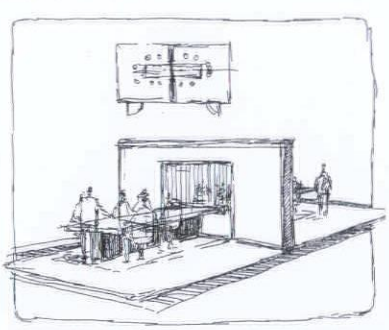
さて、現在から見て、未来のオフィスとは、SFで出て来るようなハイテク満載のオフィスをイメージされるかも知れない。また、それが普通のような気がするが、良く考えて見ると実際には全く違ったものになる可能性が大きい。

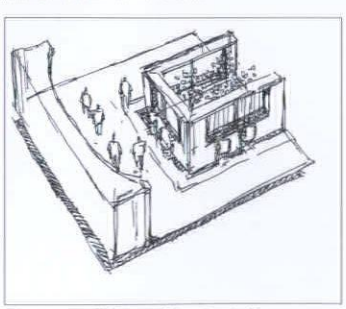


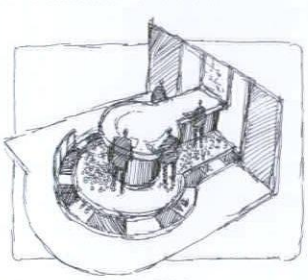
①モバイルオフィス



②キャンピング・オフィス


③隣は何をする人ぞミーティング


④アパートの鍵貸しますミーティング


⑤はだしのオアシス会議室

未来のオフィスとは、未来をいつに設定するかで変わって来る。

現在から近未来の間は、情報機器を使い「仕事効率を最大限にアップさせて行く」時代である。情報通信機器の利用により、人は場所と時間から開放され、ホームオフィス、モバイルオフィシング、ノマド（遊牧民）オフィス等、移動しながら、また、自由な時間に仕事ができるようになる。このような従来の「オフィス概念の破壊」がこの時盛んに試されるようになる。また、マルチメディア通信手段を使い、電子決済、電子会議等、ヴァーチャルなコミュニケーションも盛んに行われる。これにより、オフィスの効率は格段に向上するであろう。この時のオフィスイメージは、オフィスに違った機能を付加したオフィスで考えると解りやすい。例えば、オフィスをエアポートとして見立てたイメージ。営業オフィスであるが営業パーソンはパイロットである。パイロットはフライト（営業活動）から給油（情報補給）に戻りしばらくしてまたフライトに出発する（①モバイルオフィス）。また、オフィスをキャンプ場として見立てたイメージ。ワーカーはキャンピング場のようなオフィスで仕事をする。ガスと電気は通信線と電源であり、炊事場が共同作業スペースである（②キャンピングオフィス）。

このように、違った空間として捉えるとイメージがわかりやすいのは、ワーカーが今までとは違った行動を取るからであり、ワーカーの行動をモチーフとして…のようなオフィスとして用意される。

しかし、いかに効率が上がろうともそこから生まれる知識レベルが向上しなければ何の意味もない。このような効率変革の次に来るのが、人の創造性を発揮させるためのオフィス改革であろう。このために、人の脳の働きや記憶のしくみ等の研究から生み出される人の能力を最大限に発揮させるオフィス環境が工夫されるだろう。

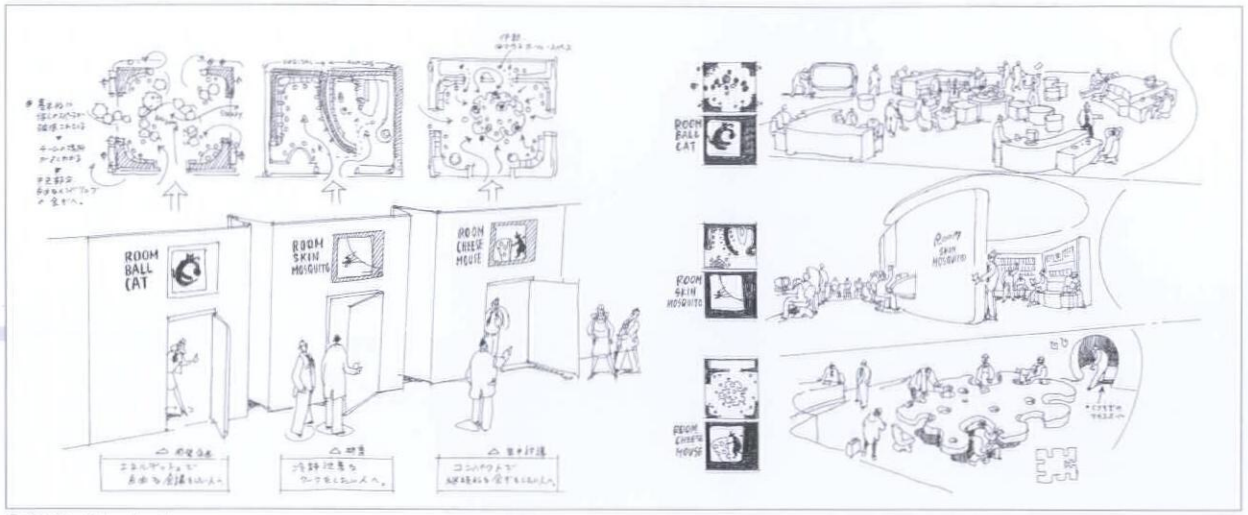
例えば、コミュニケーション密度（お互いの知識共用度）をアップさせる環境の工夫が必要になるだろう。ここで紹介するミーティングコーナーはそれぞれ独自のしつらえを持ち、目的に従って人の脳を刺激する。③「隣は何をする人ぞミーティング」は波板の半透明ガラスを通して隣の会議室での人の動きが感じられ、会議に活気を与える。④「アパートの鍵貸しますミーティング」は普段は窓側のデスク、カーテンを開けると中庭の植木を見ながらお向かいさんと自然に情報交換が出来る。⑤「はだしのオアシス会議室」は床に…川の玉砂利が敷いてあり、つぼを刺激し頭すっきり会議が出来る。

仕事や仲間と共生しながら豊かなライフワークを過ごせるような、人間関係のテーマが浮上し、チームワークや共同ワークによる、創造性発揮を目的としたオフィスが脚光を浴びるだろう。

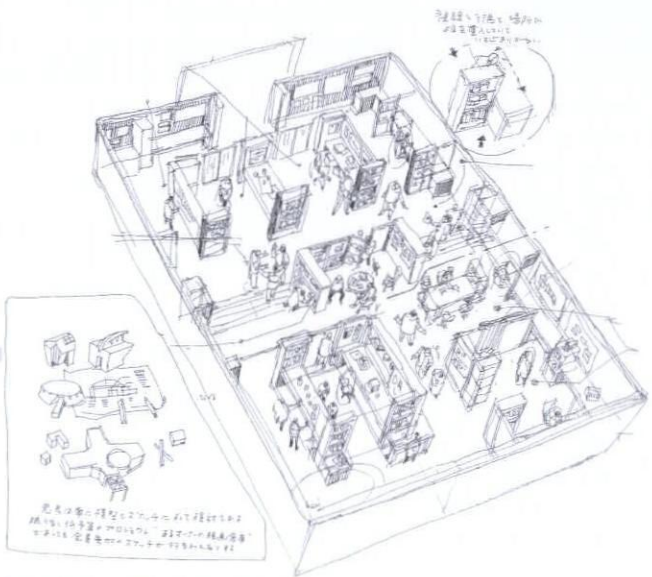
例えば3つの違ったプロジェクトルーム。それぞれ、使用目的によってRoom Ball-Cat、Room Skin-Mosquito、Room Cheese-Mouse、という名称がつけられている。 Room Ball-Catでは猫がボールと遊ぶように、自由に話し合える環境が、 Room Skin-Mosquitoは蚊が血を吸う時のようにひとつのことに集中できる環境が、そしてRoom Cheese-Mouseはねずみが皆でチーズを食べるようにひとつの目的に向かって共同で作業できる環境がそろっている（⑥プロジェクトルーム）。

各人が対等で仕事を進めるイーブンパートナーのチームオフィス。各パートナーのワークスペースは個室感覚のオープンスペースで、センターのミーティングスペースで、ひとつのテーマで議論が始まると興味のあるパートナーが自由に参加し、議論に拍車がかかる。常にお互いから学びあいながら仕事を進める環境がこのチームオフィスの空間の質である（⑦イーブンパートナーチームオフィス）。

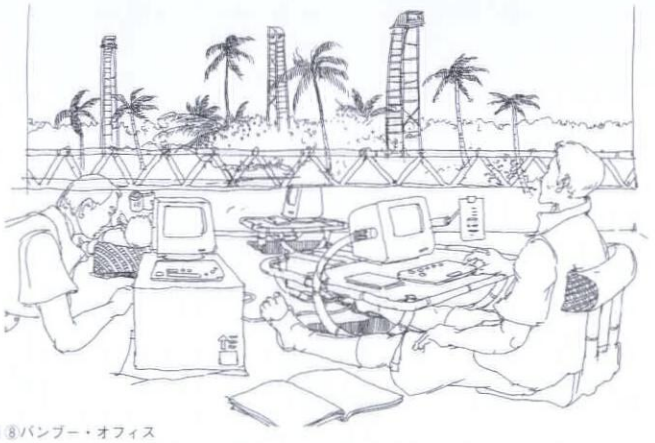
そして、未来のオフィスの最終目的は、企業の独創性の構築であり、自然環境や地域との共生とともに、独自の文化を発信するための、基地としてのオフィスが構築されるだろう。このようなオフィスはその地域の地域性や文化性を前面に出したオフィスにな



⑥プロジェクト・ルーム



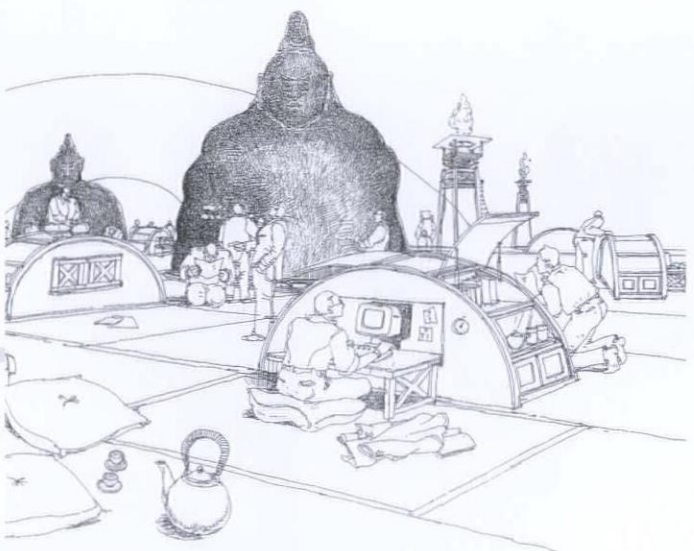
⑦イーブンパートナー・チーム・オフィス



⑧バンブー・オフィス



⑨Office-CASA



⑩七福神オフィス

るだろう。

例えば、竹の産地では竹を主材にした地域独特のバンブーオフィスが生まれる。地域産業の可能性をオフィスで創造し、地球環境にやさしいオフィスになる。オフィスづくりがそのまま地域産業に反映される（⑧バンブーオフィス）。

傘をモチーフにしたOffice-CASA。屋内と屋外の中間の空間を利用し、屋外でしか使用しない傘をブラインドとしてインテリアに利用した光あふれるオフィス。プランターが傘立てとなり、雨のしずくが木に水をやる循環の考え方が、そこで働くワーカーに地球環境に対する意識を植え付ける（⑨Office-CASA）。

そして、日本の神話をシンボルにした七福神オフィス。各部門の仕事の質と七福神の特性を組み合わせた、文化的オフィス。その地域に根をおろした文化は、それなりの必然性に基づいて生きて来た深い知恵である。畳敷きのオフィスで、一人二畳のワークスペースで、組み合わせも自由。折り畳みも自由。床下には十分な設備配線スペースがあり、和室は日本文化に根ざした未来オフィスになりうる可能性を持っている（⑩七福神オフィス）。

未来のオフィスは、地球、人間、文化、ハイテクが混在化した共生オフィスになるだろう。そして、人に残された最後の資源とも言うべき「知恵」を有効に使い、地球上のすべてにやさしい人間行動の基地として生かされることだろう。

オフィスを彩るモノ

益田文和

ローロデックスのロータリーカードファイル

オフィスのアイデア商品の筆頭がこれでしょう。この手のものを考えさせたらアメリカ人はピカイチです。ぐるっと曲げたパイプの脚はもともとクロームメッキでピカピカ光っていたのです。しかもこれを壁にひっかけて使えるのです。でもそうすると、ドラッグストアのようになって急にインテリジェンスを失うから気をつけなければなりません。これはやはりデスクの電話とタイプライターの間に置くのが正しい姿です。そう、コンピュータではなく、タイプライターなのです。それというのも、このおびただしい数のカードはすべてタイプアップされたものだからです。透明なスリーブに名刺を挟んでいく形のものは最近になって日本でヒットしたものですが、アメリカのビジネスマンは元来名刺など持つ習慣がなかったのですから、事務所に手紙が着くと、相手の名前と一緒にレターヘッドの住所と電話番号をタカタカタカとタイプするのが、セクレタリーの大切なお仕事だったのです。赤いネイルエナメルが似合うデザインです。

縞見ルーペ

アルミ製のルーペです。大変軽く、三つ折りに畳むと平べったく、小さくなって、持ち歩くのに大変便利です。正方形の脚の部分を見たいものの表面に付けると、ちょうどそこでピントが合うようになっているので、間違いなく、くっきりと拡大像を見ることが出来ます。一見華奢ですが、カメラマンやグラフィックデザイナー、印刷技術者などが、写真原稿や印刷の校正刷りなどをチェックするための道具ですから、プロ対応の性能を持っています。試しにこれでそこいらの印刷物を覗いてみると、「わっ、印刷って本当に色のツブツブでできているんだ」と驚くこと請け合いで、それからは秘密を知った人のように、何でもかんでも覗かずには居れなくなりますよ。お札の夏目漱石を覗いて、「ひゃあ髪の毛が一本一本書いてある」と感心して使いたくなくなったり、人から名刺をもらうとまずこれで覗いて、精度の悪い印刷の文字に人柄の良さがにじみ出てるような気がしたり、人生はまだまだ、いろいろな新しい体験と発見に満ちていることに感激するはずです。

NTカッター

セロハンテープとかコピー機など、一体世の中にこれがなかった頃はどうやっていたのだろう、と考えてしまうものが幾つかあります。カッターナイフもそのひとつではないでしょうか。もちろん木の鞘がついた切出し小刀や、折り畳み式の肥後守とか、やはりフォールディング式で透明なプラスチックのカバーがついたカミソリのような刃のボンナイフなど、その時代々々に合った軽便な刃物はあったわけですが、切れなくなったらパチンと刃を折る発想は、何と日本的で画期的ではありませんか。刃物というものは使っているうちに必ず切れなくなりますから、元禄時代からこっち、刃物は見て楽しむに限ると相場が決まっているわけです。ところが、このカッターナイフは鑑賞という感傷を刃物から取り去った、クールな切るための道具なわけです。板前さんが庖丁をふきんで拭いた刹那刃先をきらっと光らせて、刃こぼれがないことを確認する、あの眼差しとは無縁な乾いた機能がカッターナイフにはあります。

方眼三角定規

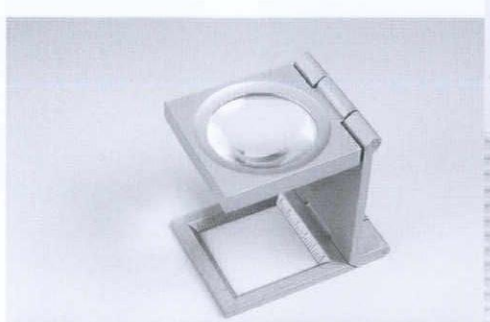
紙を直角に切ったり、写真を貼る位置を揃えたり、罫線やアンダーラインを引いたりというような作業に、これほど便利な定規はありません。例えばマーカーペンでまっすぐな線を引くときは、60°30°の長っ細い方の三角定規の60°の角を左手で持って、ちょっと手元を持ち上げて定規の面がぺったっと紙に付かないようにして、少しずつ動かしながら次々と線を引いていくようにします。こうすると紙も定規も汚れないで済みます。その時、紙の縦か横の縁や文字の並びの下端か上端に定規のグリッドを合わせてやれば、線が傾いたりずれたりしません。こういう使い方にはあまり厚くないものの方が適しています。ポートレートや商品の写真を、いらない周囲を切り取ってトリミングするようなときにも、この定規がなくてはどうにもなりません。線が印刷のものと、すじ彫りされた高級品があります。

シンナーディスペンサー

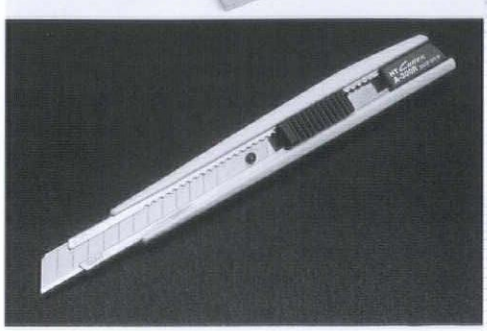
赤い円錐形に、真鍮の鶴の首のような指し口のついた、油差しのような道具です。一昔前のデザインスタジオにはこれが何個か必ず転がっていたものです。この容器の中にソルベントと呼ぶ溶剤を入れて使います。これはペーパーセメントというゴム糊を薄めたり、貼った糊を剥がしたりするのになくてはならないものなのです。もう昔話になってしまいましたが、かつて製菓メーカーの商品に青酸系の毒物を入れて脅迫する、という事件が起きた時、犯人はデザイン関係者ではないかという憶測が流れました。キャラメルのシールをきれいに剥がして、また、気付かれないようきれいに元通りにするためには、特殊な技術と材料が必要だということから、このソルベントとそのユーザーが注目されたわけです。疑われるだけあってその効果は絶大で、テープやシールをきれいに剥がしたり、定規についたインクの汚れをふき取ったり、いろいろな役に立ちます。何よりもこの形が懐かしくていいでしょう。これをペコペコ鳴らして使っていると何とも優しい気持ちになります。犯罪とは無縁なことは言うまでもありません。



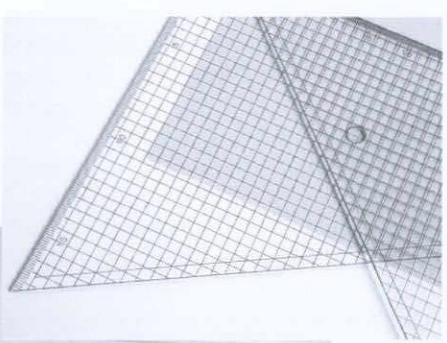
ロータリーカードファイル／ローロデックス



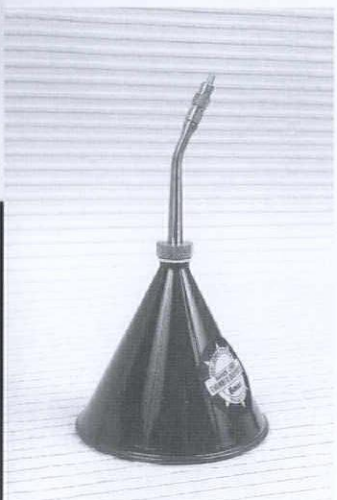
縞見ルーペ／ミゲール



NTカッター／NT



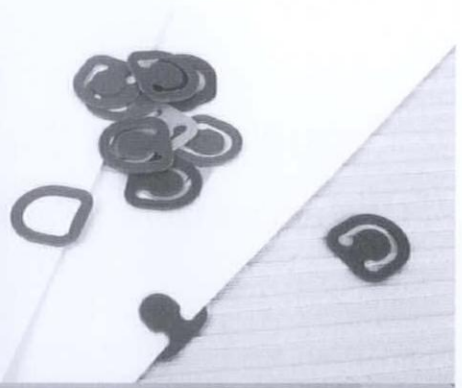
方眼三角定規／ムトウ精密

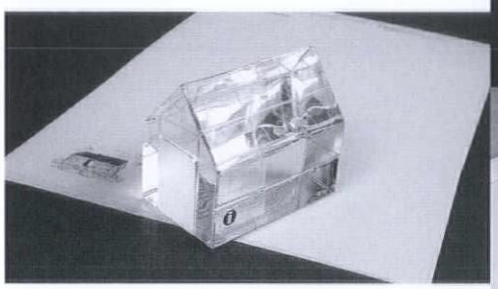


シンナーディスペンサー／バニーコーポレーション

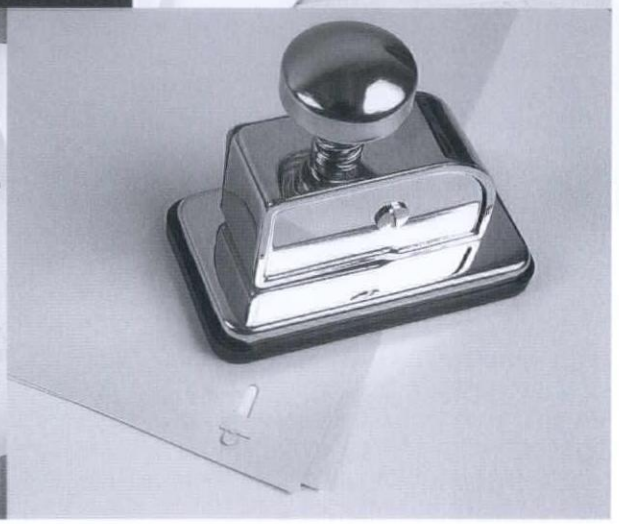












サインペン／ぺんてる
ハサミ／ゾリンゲン
ペーパークリップ／サンスター文具
ペーパーウェイト／イッタラ
ウインダーホルダー／エルコ
ステープレス／リヒト・ラブ

ぺんてるサインペン

ローロデックスがタイプライターの文化が生んだ傑作だとすれば、ぺんてるサインペンは手書き文化が生んだ筆記具最高傑作のひとつです。まだ日本が高度経済成長を始めたかどうかという頃に発売され、アッという間に世界中に広がった大ヒット商品なのです。多くの欧米人は手書きの文字が苦手だと言います。それでは、下手な字の欠点を隠すにはどうするか。それはもう、太い線で書くに限ります。特にアルファベットはグイグイ書いた方がよく見えるのです。ましてや、しっとりとしたペン先の触感、インクの黒グロとぬれたような色は、書き癖の七難を隠して大胆な筆跡に見せてくれます。サインペンの人気の秘密がこの辺にあるのではないでしょうか。我々も結婚式などで芳名帳の脇にこれを見つけると、地獄で仏に会ったような気持ちになるではありませんか。同じように見えてもプラスチックのペン先や水性ボールペンは全然違うものです。大変なロングセラーですが、「ああ、ぺんてるのサインペンが生産中止になったらどうしよう」、そう思うといつも5〜6本買ってしまうのです。

イッタラのペーパーウェイト

フィンランドのイッタラといったら、これはもうクリスタルグラスの老舗として世界的に知られているわけです。このクリスタルの塊、手にするとずっしりと重く、鉛をたっぷり含んだクリスタルガラス特有の重量感と触感が伝わってきます。私は勝手にペーパーウェイトだろうと思っていますが、別に何かの役に立たなくても、デスクの上に置いておくだけで幸せな気分になります。光を閉じ込めるような輝きは、朝の外光でも蛍光灯の下でも美しく、眺めていて飽きません。私の事務所は、カリフォルニアの砂漠の中に建っている小屋をマークに使っています。そんなことから家の形のものに敏感に反応してしまうのですが、これもいわゆる衝動買い。こういう装飾品は、機能とか理屈とか抜きに欲しいと思わせるかどうかがすべてです。

ゾリンゲンのハサミ

昔から刃物といえばゾリンゲンですが、Solingenというのはご存じのようにドイツ西部にあって、古くから優秀な刃物やハサミ、ナイフ、フォーク類の産地として知られる都市の名前で、それがそのままブランドになってしまったのです。なかでも双子マークのヘンケルなどは神話的なメーカーブランドですが、これは、同じゾリンゲンでもそれほど知られていないKRETZERのハサミです。切れ味はもちろんのこと、この小ささが気に入って大事にしています。カッターナイフの登場以来、紙を切る仕事の主役はそちらに譲った格好ですから、ハサミを使うのはちょっと切る場合がほとんどで、また、そのちょっと切るのにハサミはなくてはならないのです。そんな時、手の中に収まるこの大きさがいいのです。余談ですが、最近は床屋さんもずいぶん小振りのハサミを使っています。

ウインダーホルダー

クリアホルダーというプラスチック（PP）の薄い板をふたつ折りにし、底の一辺を留めたぺらぺらの紙挟みがあります。A4の書類何枚かを挟んで整理したり、そのまま人に渡したりするのに便利で、最近は透明不透明いろんな色があってきれいで、しかも安いので、どんどん使ってしまいます。あるとき、このプラスチックの消費量もすごいのだろうなあ、と考えてしまうと気になって仕方がなくなりました。それではと、古いのを使い回ししようとしましたが、あれは一度使うとブカブカになる上に擦り傷だらけで、いかにもみっともないのです。そんな時見つけたのがこのスイス製のペーパーホルダー。再生紙でできていて、のぞき窓がついているので中の書類が確認できます。プラスチックのもののようにスルスル滑ることもなく、しっとりと落ち着いていて、中身の書類もずっと価値があるように見えます。

ペーパークリップ

紙というものは木のパルプからできているという先入観がありますが、実際にはいろいろのものから作られるのです。ヨーロッパなどでは昔から古着などの切れを再生して、丈夫な紙を作っていました。このペーパークリップの素材は綿で作られたコットンペーパーです。コットンペーパーは軽くて腰があって堅牢なので、イギリスでは旅行用のスーツケースなどもこの素材で作られていたようです。1本の針金を曲げただけのゼムクリップ。革命的な発明品ですが、膨大な事務用紙のリサイクルにあたっては、異物として混入しがちで障害になります。このペーパークリップはゼムクリップに比べるとやや柔軟性に欠けるのであまり多くの枚数は止めにくいのですが、鮮やかな色彩とおおらかな形、そして何よりもその素材感に現代的な美しさがあります。しかつめらしい書類などを赤や黄色のペーパークリップで綴じて渡されると、誰でもほっとするはずです。

ステープレス M-5

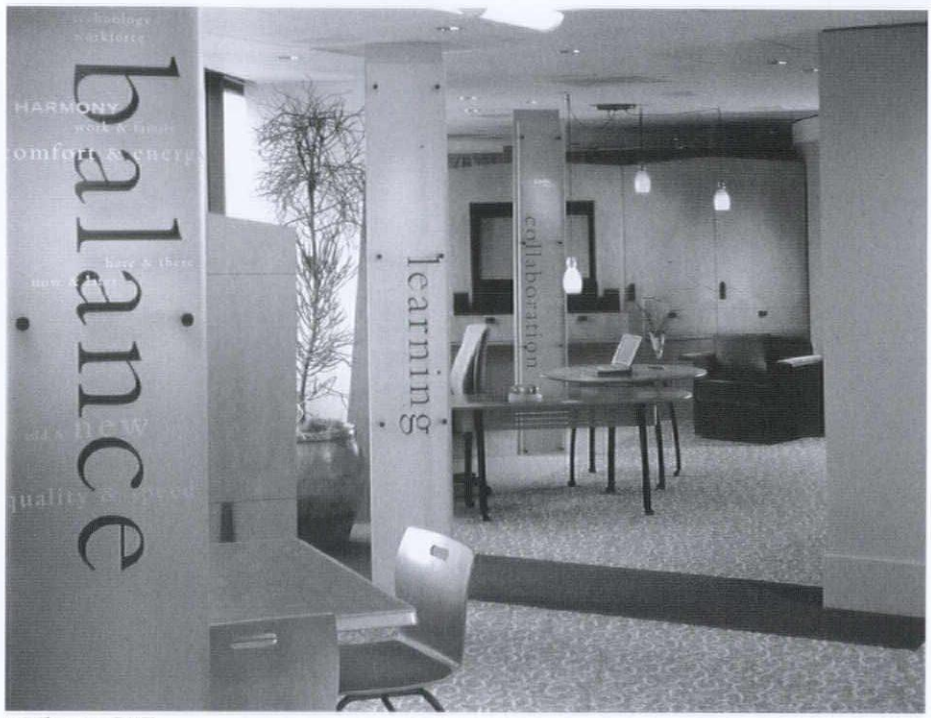
ステップラー（日本ではなぜかホッチキスと言います）は実に便利なもので、誰でも書類が2枚以上になると無意識にカチャッとやっています。ところが、不要になった書類の束をシュレッダにかけたり、リサイクルに回すために分別する段になって、あのガッチリと噛んだ針を外すのは大変です。最近は針外しの道具も出回っていますが、これはなんと、針も何も使わずに紙を止める魔法のような道具です。上に細い切り込みを入れて結ぶように留めるのですが、何度やってもまるでだまされているような不思議な感じがするばかりで、どうしてこんなことになるのか分かりません。同様な商品が何種類かありますが、それぞれ方式や孔の形が違います。このリヒトのものが一番トリッキーでしっかり留まります。あまり何枚も一度に綴じることはできませんが、3〜4枚なら大丈夫。同じガチャッでもこれは何とも後味がよいのです。プリミティブな形も悪くないでしょう。

●ますだ・ふみかず／デザイン・コンサルタント

2007年のオフィスはこうなる

Future@Work—The Exhibit at Seattle

1996年、通信技術関連企業AT&Tワイヤレス・サービス、インテル、建築設計事務所のキャリソン・アーキテクチュア、バークレー・ディーン・インテリア、オフィス家具メーカーのスチールケース、メトロ・ファニシング、スパーリング、シーファースト・バンクといった企業が中心となって非営利団体を設立し、未来のオフィスをテーマにした展示会を企画、1年間にわたりシアトルで実施した。テクノロジーや社会的、組織的な構造の変化に対応したワークプレイスは今後どのような進化をしていくべきかを検討し、統合的なワークプレイスを目に見える形で提示すること、これがこの展示会の目的である。



レセプション・エリア

働く環境は、この数年で劇的に変化している。『New York Times』によると、1984年から1996年にかけて、オフィス以外の場所で働く人々の数は5倍に達し、アメリカ企業の18%がテレコミューティングを、30%がフレックスタイムを導入している。ワーカーの働き方が変わっているのに、それを無視してオフィス・デザインを行うわけにはいかない。

これまでオフィス・デザインはそれだけで独立して考えられていたが、オフィスをビジネス・ツールのひとつと捕らえたとき、効果的なオフィスをデザインするには、オフィスにまつわる他のさまざまな要素を検証する必要がある。つまり、業務プロセス、情報技術、組織と人材それにワークプレイスが相互に与える影響を探り、それを統合的にデザインに落とし込んでいって、初めて効果的で戦略的なオフィスが可能になるのである。こうした考え方を提唱したスチールケース社と、オフィス・デザインの第一人者フランシス・ダフィは、共同でスペース・コンセプトをプランニング、実践している。今回のプロジェクトはこの4つの要素の専門家、つまりその分野の主要メーカーが選ばれ、今後各分野がどのように進化していくかを探っている。情報技術がどのように発展し、それらの変化に人の能力はどのような対応をしていくのか。メンバーの中には人材、組織心理学の権威者も加わり、ワークスタイルが変化することによって、企業の組織的習慣、価値観への影響なども検証された。

だが、それでは新しいオフィスの姿は具体的にどのようなものだろう。これが「Future@Work」のそもそものきっかけである。企画は次のようなコンセプトに基づいている。

1. 情報通信技術は人々の働き方を劇的に変化させている。そのワークスタイルをサポートするツールも同様で、それが遠く離れた人とのコラボレーションを可能にしている。
2. 企業は、業務過程を見直し、組織をピラミッド型から、よりフラットにする傾向にある。
3. 社内では、個人個人が全く独立して作業をするのではなく、部署や業種の垣根を越えたコラボレーションを勧めている。


入り口にはIBM会長の企業戦略に関する言葉が映されている

今回の展示で特筆すべきは、このスペースを実際にデザインするにあたり、架空の企業を想定して、この企業の現在、および10年後の戦略も設定したところである。この背景には、実際に企業のビジネス、今後の企業目標を知らずには、アクティビティ・ベースのオフィスプランニングを立案し、デザインできないという発想がある。具体的な提案をしなければ、机上の空論で片付けられてしまう。

展示会は1997年と2007年のセクションに分かれ、1997年のセクションではスペースの使い方としてもテクノロジーの点でも最先端のものを提示している。ここでは、従来のデザインコンセプトを発展させ、さらに多様で柔軟性のあるオフィス作りをするためのヒントを紹介する。テクノロジーは現在のもので、戦略的な企業にはすでに積極的に利用されているものである。一方2007年のセクションでは、オフィスデザイン、ワークプラクティス、テクノロジーについて、さらに進んだアプローチをしている。使用するテクノロジーは、現在すでに利用可能だが、まだそれを実行に移している企業は現時点では極めて少ない。

各スペースをデザインするにあたっては、架空のハードウェア企業「ハンボルト・ホーム・アンド・ハードウェア社を想定した。地方をベースにしたハイエンドユーザ向けのハードウェアメーカーで、10年以内にビジネスを全国規模さらには世界規模に拡げようという計画がある。こうして具体的な企業を想定することによって、新しいワークスタイルのイメージにもリアリティが生まれる。ここでは「個人ワークスペース」「プライベートオフィス」「会議室」といった場所はほとんど、従来のオフィスに比べ小さくなっている。だがオフィスデザインへ投資することが、将来の利益につながることを実証するべく、展示では、オフィススペースを減らしてもなお、快適で魅力的なオフィスをつくれることを示している。

1997年

1997年のセクションは、「ロビー」「1997年版会議室」「1997年版チームスペース」それに個人使用の「プライベートオフィス」といった4つのエリアに分かれている。

「ロビー」は、訪問客がリラックスしてゆったりと待てる、落ち着いた雰囲気にしている。待合いスペースは広く、照明は柔らかい。

「会議室」は、ちょっとした改装によって、従来の会議室がどれほどの柔軟性を持ち、対話を支援する環境を作り出せるかを示している。この会議室には次のような特徴がある。

1. 間接照明を用い、特有の味気なさを極力抑え、マルチメディアやテレビ会議システムの利用に対しては、より優れたサポートを提供する。
2. 可動式の3.7m会議テーブルは、3つに分割でき、小グループの作業も可能。
3. 大規模なマルチメディアキャビネットは、造付



2007年のエリアを象徴するビレッジ・グリーン



同様にビレッジ・グリーンの一画

けではあるが、空間の利用の仕方が変わった場合壊さずに移動することもできる。
4. 情報掲示のボードを設置する。
会議室は将来のテクノロジーの発達を見越した配線計画がなされている。予備の電源プラグも壁やテーブルの上に用意されている。

展示の最中、ハンボルト社の最高経営責任者と不動産部門のディレクターが、実際にIntel ProShareテレビ会議システムを使用し、販売店の現場のビデオを上映したり、配置図を見直したりといったデモンストレーションを行った。これは、現時点ですでに、遠隔地においてのコラボレーションが実現し、それが有効であることを示している。

1997年の「チームエリア」は、32.5m²と広くはないが、個人作業とグループワークを同時に支援する環境例を紹介している。可動性の高い家具を用いることで、それぞれのチームに適した、多様な構成をとることができるようになっている。つまり、
1. チーム内で共同で使用する、個人作業用の小スペースは、完全なプライバシーを保てる。
2. 仕切りの可動式パーティションとスクリーンは、掲示板またホワイトボードにもライティングスペースにもなる。
3. パソコン画面のグレアをなくすため、間接照明などを調節できるようになっている。
4. 防音性パーティションや吸音板を使用する。

個人のスペースをグループスペースとすることによって、個人の作業面積は3.7m²に抑えることができた（通常6m²以上）。また、広さを感じさせるため、グループ・エリアはペリメーターゾーンに配置し、共有スペースと個人のスペースにはパーティションを設置していない。

個室については、普段は何も置かないことにした。最近の調査では、個室の使用率は一日30%程度で、非常に無駄が多い。そこでまず、快適さを保ちつつ個室のスペースを8.8m²と狭くし、縦の空間をうまく利用することで収納や作業スペースを確保した。机も軽く、2台つなげれば会議用テーブルになる。

2007年

2007年のオフィスを設計するには、想定されるテクノロジーとビジネスの変化を考慮する必要がある。つまり、
1. 通信技術において、アプリケーションの種類や通信容量が増加する。
2. ワイヤレス通信によって、コンピュータ作業やコミュニケーションが場所の拘束を受けなくなる。
3. 対話型ディスプレイが大型化し、それぞれのオフィス内でのコラボレーションがサポートされる。
4. オフィス以外の場での個人作業またはコラボレーションワークの機会が増える。
5. 通勤日数が減り、オフィス以外での作業が増え、オフィスワーカーの数は減少する。
6. 「生活の質」がより一層問われるようになる、などが挙げられる。

こうした傾向はオフィスが果たしていた役割を変えていく。テクノロジーの発展に従い、主たる目的がコラボレーションやコミュニケーションの場となっているオフィスがすでに出てきている。実際、いまだにオフィス内で個人作業をすると言っても、それが最重要事項ではなくなっている。2007年には、オフィスにおいて個人に割り当てられるスペースは減少し、占有するというよりは、「借りる」という状態になっているだろう。こうしたワークプレイスがもたらす利点に目を向ければ、個人の占有スペースやステイタス・シンボルが減るといった変化に対する不安もなくなるはずである。

2007年のオフィスの設計とは、ワーカーにとっ

ては、言ってみれば標準的なワンルーム（シングル用の部屋）から、数人用の広い、デザインの優れた家に引っ越しするようなものである。この2007年のオフィスデザインは、旧来のオフィスの制約やコンセプトは全くと言っていいほど考えていない。多様な働き方をサポートする、実験的な空間をつくることが目標である。

Reception Area

常駐する「管理人」は、オフィスに帰ってきたワーカーに必要な情報や作業スペースを手配したり、企業が行う各種アクティビティや自社の情報などを随時提供したりする。

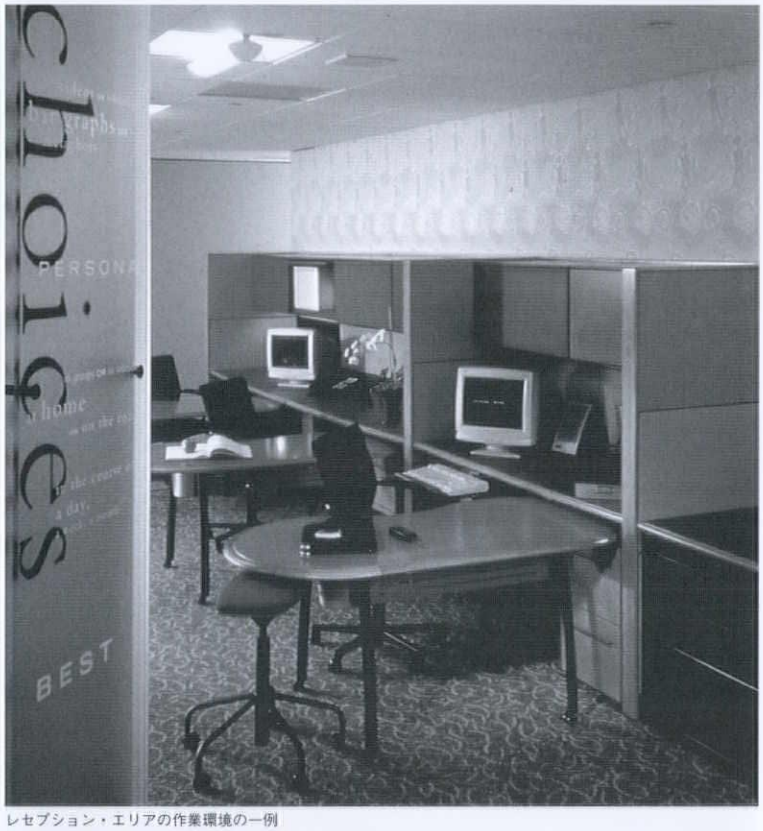
ワーカーは作業ファイルや私物を置くロッカーを与えられている。企業方針として何らかのステイタス・シンボルが必要な場合、一部の幹部がプライベート・オフィスを利用できるようにして、その他のワーカーには個人用ワークスペースを与える。

レセプションエリアには、42インチのプラズマスクリーン、高解像度のビデオモニタが壁に設置されている。訪問客は、Webサイトにアクセスして必要な企業情報にアクセスすることができる。

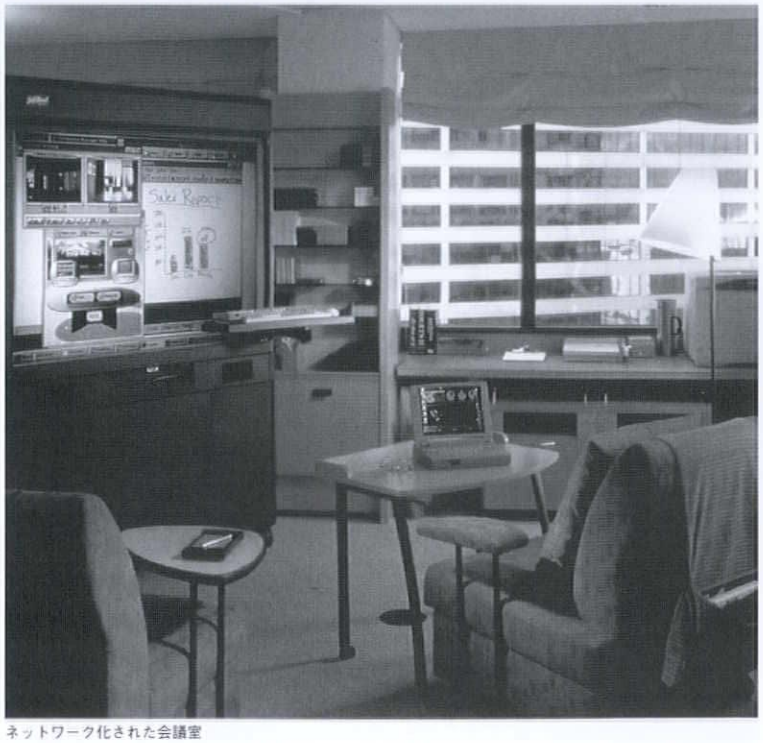
Village Green

ビレッジ・グリーンは、広いミーティングスペースである。感じとしては、快適なホテルのロビーか高級リゾートの共有スペースと思えばいい。人の足が向くように、そして活発でインフォーマルなコミュニケーションを促すような設計をしている。家具はすべて可動式で、照明も天井のレールに設置されているので移動することができる。

ビレッジ・グリーンでもワイヤレス通信など通信テクノロジーを提供している。ビレッジ・グリーンのどこからでもネットワークの情報にアクセスすることができ、壁に設置されたビデオモニタをリモートコントロールして、プリントアウトや情報送信もできる。



レセプション・エリアの作業環境の一例


ネットワーク化された会議室

Alternative Work Settings

ビレッジ・グリーンに隣接する「ワークセッティング」では、訪問者にオフィスをスペースとして考えるのではなく、環境ととらえてその選択肢の幅について考えることを提案している。ここにはプライベート・オフィスや個人用ワークスペース、リラックスルーム、ジュース・バー、多目的ルーム、そして書斎がある。

プライベート・オフィスは1997年セクションで展示していたオフィスとあまり変わらない。所有せず、借りるという形態になっているだけで、2007年にもいわゆるオフィスは存在しているだろうと思われる。

個人用ワークスペースにおいては、かなりの情報がデジタル化されているため、収納スペースは少なくて済む。壁に設置されたディスプレイがよりビジュアル化された情報を提供することで、収納スペースに取って替わる。

情報化時代は、つまり情報が氾濫しているとも言えるため、それらの情報を振り返って熟慮している時間がほとんどない。そこで、静かな場所でゆっくりと考える必要がある時や、ただリラックスしたい時に、リラックスルームを利用する。照明の柔らかい2.2 m²の小部屋には、情報通信機器は何も置かず、快適なラウンジ・チェアだけが置かれている。

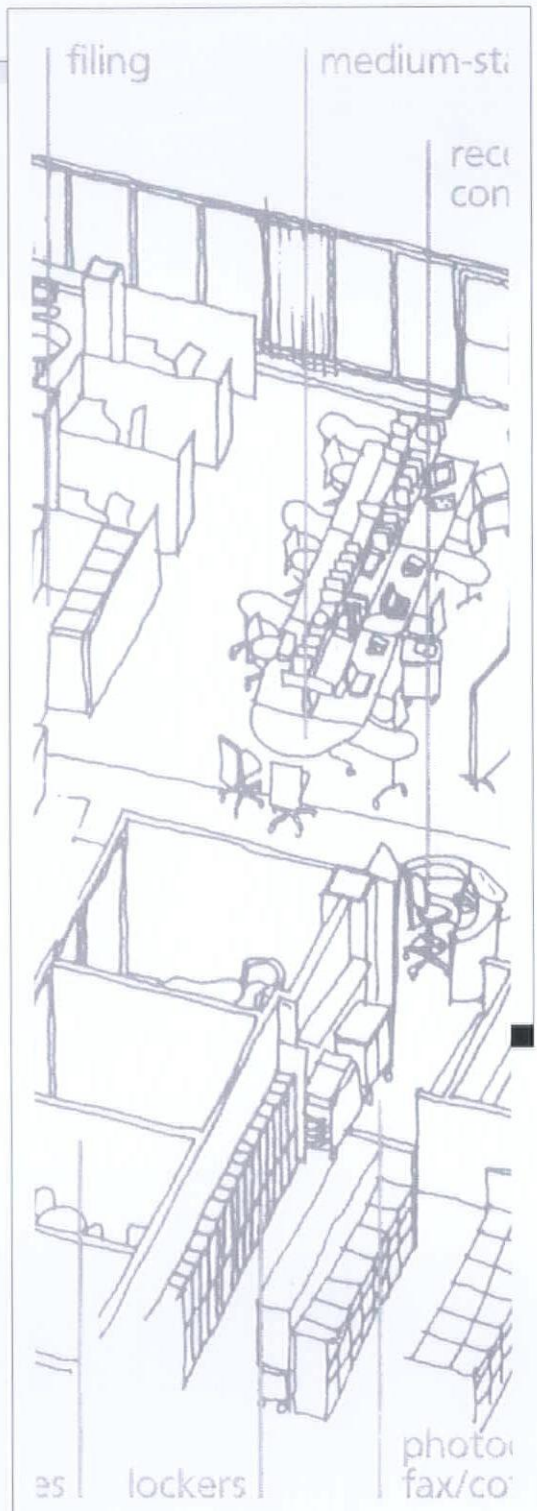
ジュース・バーは小さな居酒屋とでもいうところで、簡単な食事が提供されインフォーマルなコミュニケーションが積極的に支援される場である。訪問者は仕事を離れて、壁にかかった従業員の絵を見たりする。また電子掲示板があり、個人的なメッセージを張ったり、会社の行事を撮影したビデオを観たりする場を提供している。

多目的ルームは7m²しかないが、個人の作業にも、小規模の打ち合わせにも適した魅力的な場になる。この部屋のレイアウトはヨットのデザインを模して、置かれるものは極力小型のもので、あらゆる場を隈無く利用する。

書斎は1997年の会議室が進化したような場になっているものの、もっとリラックスできる自宅の居間のような場にしている。大きな会議用のテーブルは置かず、小さな可動式のテーブルだけを置いている。この部屋で重要なのは、1.1m²を占める対話型の大型マルチメディアディスプレイである。書斎の中の人々だけでなく、外部の人とのコラボレーションを十分に支援している。プレゼンテーションなどに必要な機器は、書斎にいる人すべてが使用できるようになっている。

展示には、月に1000人以上の人が訪れ、好評を博した。中には、従来のようなアプローチでオフィスデザインのプロジェクトを進めていた企業が、それを中断し展示会でのデモンストレーションに基づいて設計計画を考え直すことになった例もある。今回の展示に参加した企業の多くは、企業のワークプレイス戦略を見直す際、さまざまなレベルでのコンサルタント業務を行うようになっている。

欧米のオフィスは、日本の5年先を行くと言われている。
そこには、オフィスを箱としてではなく、
ビジネス・ツールのひとつとして捕らえ、
企業の戦略に取り入れ、生産性を上げようとする姿勢が見える。
そして建築家は、クライアントの望むワークスタイルを
実現するオフィスを提案するため、仕事の内容、作業の流れ、
その業界の特徴、経済状況など徹底してリサーチする。
時にはクライアントの要求以上の、進んだワークスタイル、
ワークプレイスを提示することもあるだろう。
ここでは、オフィス・デザインに特に優れたアメリカとイギリスの
3つの事務所の事例を紹介し、
日本のオフィス作りとの違いを見てみたい。



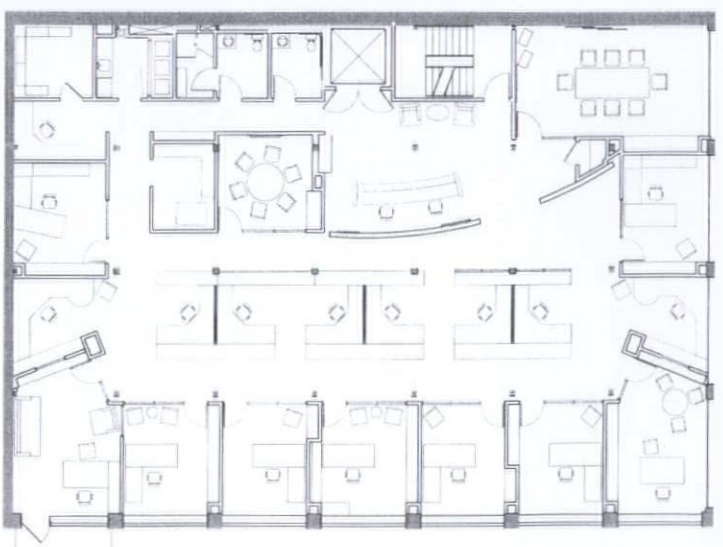
オフィス・デザイン：Holey Associates
所在地：2 South Park
San Francisco, USA
内装竣工：1997年6月
面積：557.4m²

頼れる支援者を意味するオフィス

Hummer Winblad Venture Partner



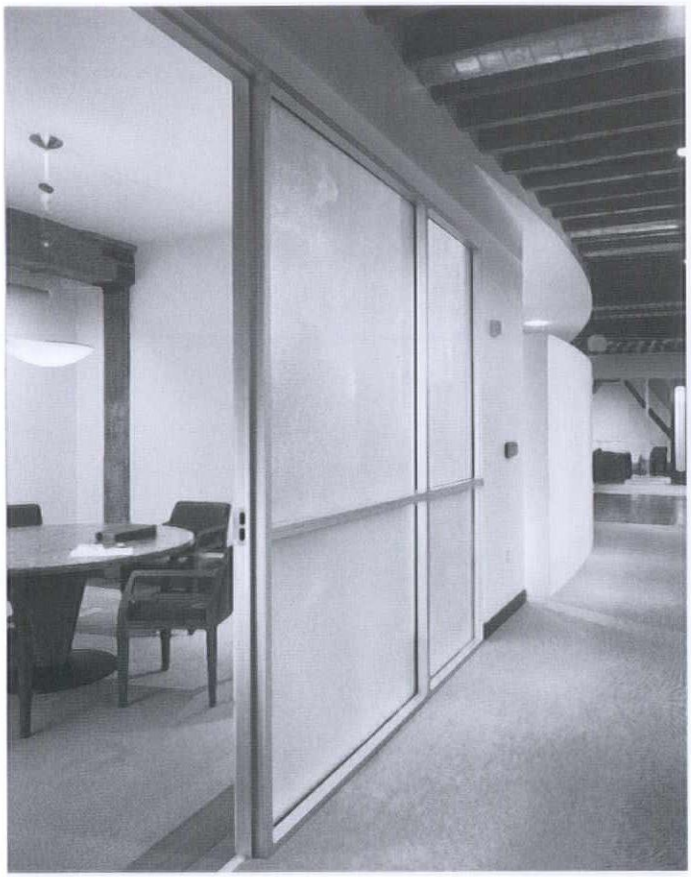
既存の建材をそのまま活かしつつ洗練されたデザインを取り込んだ空間



レイアウト図

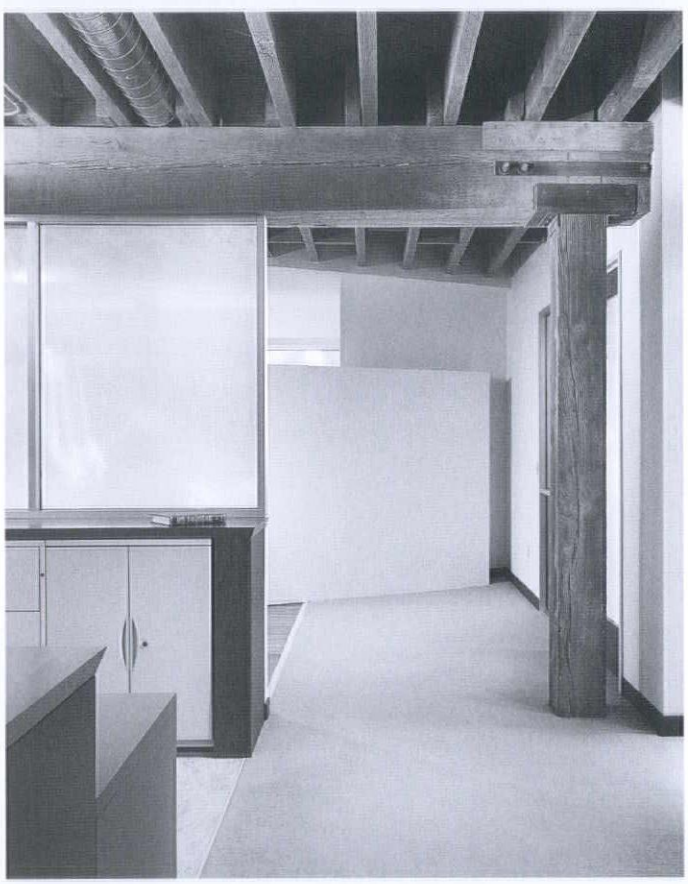
クライアントのHummer Winblad Venture Partner社は、ソフトウェアメーカーの創設、発展を支援していくベンチャーキャピタル企業である。サウス・パーク地区サウス・マーケットにの倉庫に入居しているクライアントの要望は、快適さを確保しつつ、ソフトウェアメーカーにとってはホームタウンであるこの地区独特の雰囲気を残して欲しいというものだった。設計の初期段階から、クライアントとは密に打ち合わせを行ったプロジェクトだった。

新オフィスには9つの個室（内ふたつは共同経営者用）と、経理、庶務など8つのオープン・スペース、ふたつの会議室（ひとつは来客、ひとつは社









内用）がある。

どのフロアも、倉庫という既存の建物の、一種プリミティブな雰囲気に、先端的なデザインコンセプトをうまく取り込んでいる。

入口からの導線となっている緩やかにカーブした壁が、レセプション部分などのよりパブリックな空間と、執務空間とを区分している。このレセプションの天井は非常に洗練された仕上げで、デスクなど家具もオーダーメイドで発注され、成功を収めたベンチャーキャピタル企業の風格を表している。一方、入居した倉庫に使用されていたムクに近い構造材は、そのまま残している。これは支援する若い企業を尊重する表現のひとつと言える。というのも、そうした企業が最初に入居するのが、こうした元は倉庫の場所だったりするからである。

その、既存の建物に使用されていた柱は、入口部分からすぐに見える。その向こうには執務空間がある。テクスチュアガラスで仕切られ、視覚的なプライバシーが確保されている。ペリメーターゾーンに沿って、個室があり、ガラスを通して外光が入るようになっている。管理部門は、人事部と経理に挟まれる格好で配置されている。

形態は機能と意味に従う

誕生間もない多くのソフトウェアハウスが集まる地区の中に位置し、そうした若い企業を支援し育てるベンチャーキャピタリストの小規模なオフィスである。入居した倉庫型建物が持つ雰囲気を残しながらも、都会的な快適さを実現することがクライアントの要望であったという。

事業への投資と経営支援を求めてここを訪れるソフトウェア開発者達に対して、仲間であると同時に頼れる支援者でもある、という印象を与えることを意図したデザインである。生まれたばかりのベンチャー企業が入居している場所と同様のロフト的外観を活かすことが、彼らのルーツに対する尊重を表し、対比するように取り込まれたハイグレードのモダンデザイン的要素が、ベンチャーキャピタリストとしての成功と信頼性を印象づける。こうした異なる要素をバランス良く組み合わせるという作業の成果を見る時、オフィスのイメージがビジネス戦略の重要なツールになり得るという事実が改めて思い起こされる。（岸本章弘）

オフィス・デザイン：Holey Associates
所在地：660 Third Street
San Francisco, USA
面積：6353.6m²

「住むためのオフィス」という概念

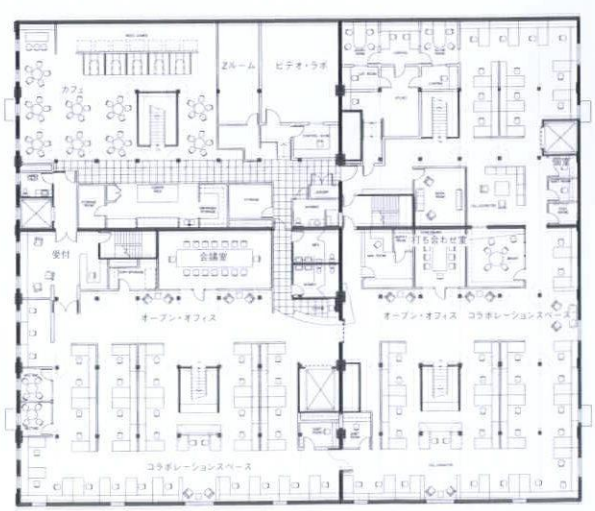
Wired Digital



視界を遮らないようスチールメッシュを使用



広々とした快適さとアットホームな雰囲気が同居



レイアウト図

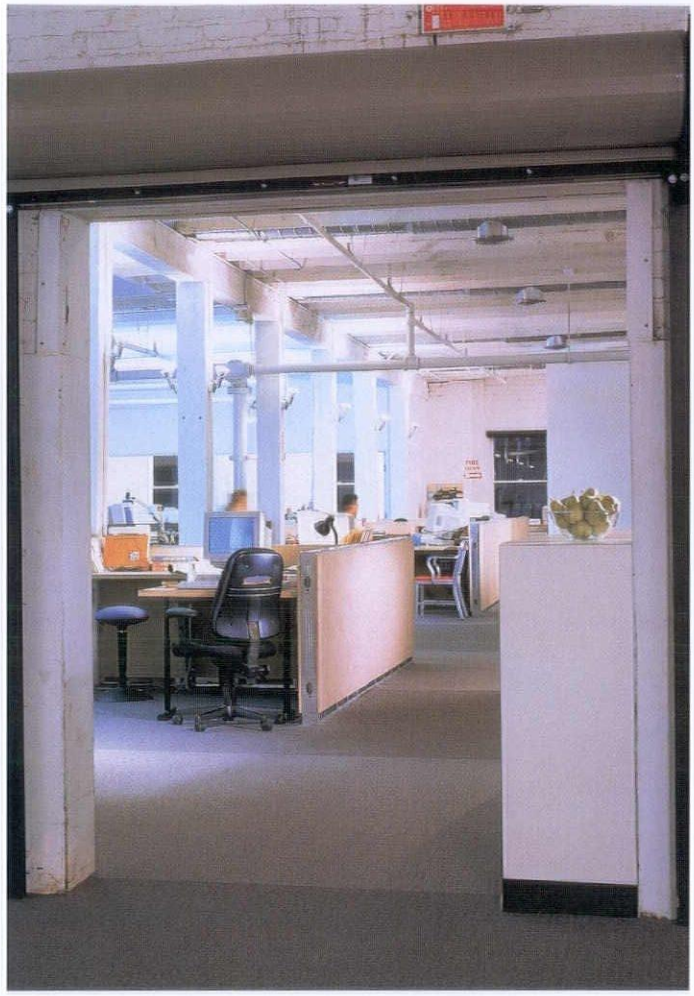
ビジネス、政治、旅行、アート、テクノロジー、健康、ポップ・カルチャーなど幅広い分野のデジタル・コンテンツ制作を手掛けるクライアントのオフィスは、「マルチ・メディア峡谷」と言われている、サンフランシスコのサウス・マーケット地区に位置し、4階建ての2階分を占める。

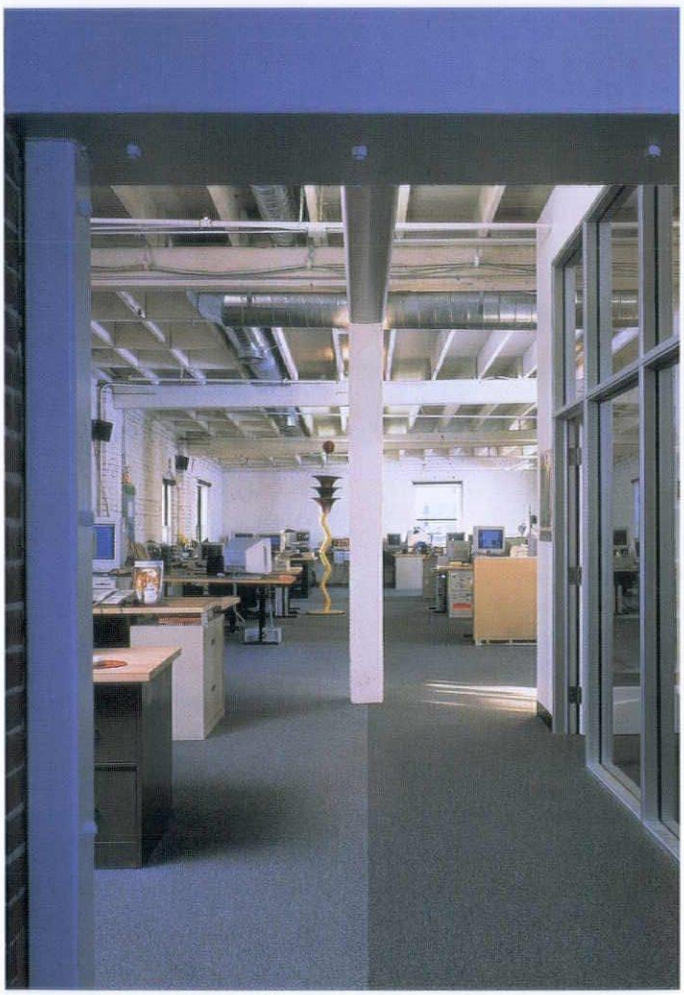
クライアントの要求は、仕事に応じて簡単に配置変更ができること、創業当時の「共同体」の精神を備えたデザインをすること、そして、コラボレーションワークが多いので、これを十分に支援し、かつクリエイティビティの高い作業をするスタッフが、時にひとりで、時に小グループで働く環境を整えることという3点だった。

まず、クライアントの業種の作業プロセスを徹底的に調査した。その結果、本部では特にコラボレーションワークが中心になっているため、個室をなくした。ワーカーを孤立させるパーティションも使わず、見通しの良い空間をつくった。代わりに、個人や小グループが邪魔されることなく作業できる多様な作業環境を提案している。

さらに重要なコンセプトとして、ホーム・オフィスならぬ「オフィス・ホーム」を提案した。精力的に仕事をこなす若いスタッフは、社内にいる時間も長い。会社に「住んで」いるようなものだ。そこで、自宅のようなリラックスできる雰囲気をつくることにした。このベンチャー企業の「ハイテク」







な性質に対して、雰囲気は「ローテクを目指している。

広い会議室は防音こそ完璧だが、ガラス張りで、周囲の様子がわかるオープンな仕立てである。情報の偏りを減らし、かつ互いの創造性も刺激されるオープンな空気を作ることに一役買っている。

インフォーマルなコミュニケーションを支援する場には、ソファを置き、ストレスの多い仕事から、一瞬だが解放される空間をつくっている。

スティール製の階段は、4ヶ所あり2階に分かれているオフィス間のアクセスを円滑に、かつ上下階の見通しも良くなる。

「Zルーム」は仮眠室。締め切りに追われるスタッフが仮眠を取ることができる。これも「オフィス・ホーム」のコンセプトから生まれている。

オフィスの中での日常生活

ニュースからエンターテインメントまで、ウェブ上にさまざまなオリジナルのデジタルコンテンツをつくり出すメンバー達のホームグラウンド。コラボレーション向きのオープンスペースから、集中を要する個人作業に適した個室、機器を駆使したデジタルワークのためのラボやメディアルームまで、多様な空間を備えたフレキシブルスペースである。

創業時代の若々しくエネルギーに溢れたコミュニティ感覚を維持するために、当時のスペースのイメージを残した「オフィスホーム」をつくり出すことが重要なコンセプトのひとつであったという。特に、広く取られたカフェテリアやZルームの存在が、昼も夜もまさに「住み着いて」仕事に没頭しているであろう様子を想像させる。ちなみに、ZルームのZとは「ZZZZZ……」、つまり睡眠の意味であり、仮眠室を指している。若々しいメンバー達が常に最先端のアウトプットを発信し続けるための活動拠点として見ると、その空間構成からインテリア・イメージまで、注意深くデザインされていることがうかがえる。（岸本）

オフィス・デザイン：HOK
所在地：Anaheim, California, USA
内装竣工：1996年4月
面積：2223m²

オフィス＝ビジネスツールを実証

LA Cellular, Customer Call Center



社員総数600人（3交代制、将来950人まで増員の予定）のお客様相談受付センターの開発、設計にあたっては、同社の高い文化と卓越した作業プロセスをさらに効果的に活かせる室内環境だけでなく、斬新で生き生きとしたイメージが求められた。

まず、作業のプロセスや書類の流れを検証する典型的な「プログラム」をまとめた。その結果この種の仕事には大きなストレスを伴うことが明らかになった。LA Cellular社内では、「オフィスをこうしたい」というリストが作成され、一方HOKはクライアント側ワーカーの担当者たちとのワーク・セッションを通じて作業プロセスをマップに落とし込んでいった。

新しいセンターには、メイン・データ・センターと人材派遣会社からのサポート・スタッフ室、さらにフィットネス・ルームとカフェテリアがあり、さまざまな色彩と素材、質感、そして光が渾然となって、ソフトで遊びごころがあり、活力に満ちた環境をつくり出している。絨毯のパターンや壁板のディテール、照明や色彩が相まって、親しみやすい雰囲気をつくっている。

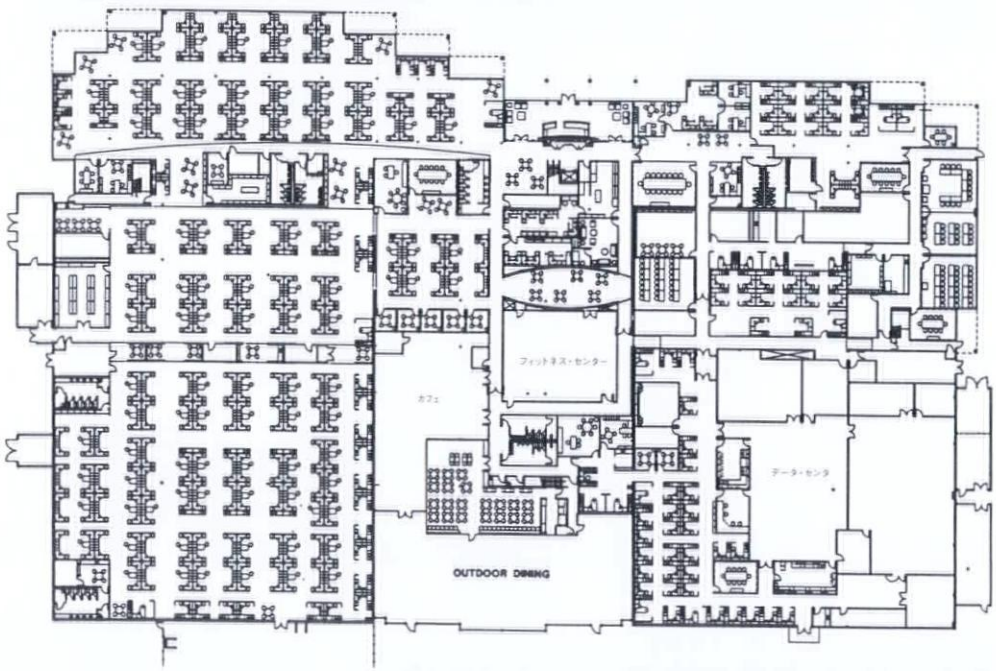
設備の内容は、広範にわたっている。ストレスを和らげる「クワイエット・ルーム」、簡単な集会のための「フットボール・ルーム」、屋内外両方のテーブルを用意したフル・サービスのカフェテリア、およびフィットネス・ルームなどがある。またノル社の家具規格改定の機会を利用して、標準家具の特注版も開発された。

計画から入居までわずか5ヵ月という強引なスケジュールだったが、なんとか完成した。実は工事中、クライアントは大口の取り引き先を失い、また創立メンバーのひとりが引退するという、困難な状況にあったが、このオフィス移転は、社に活気を取り戻す絶好の機会となったようで、LA Cellular社は1000万ドル単位の取引を3件も含む新しいクライアントを獲得した。これも顧客のニーズに応じサービスの提供ができる効率性がこの新しい環境でこそ可能だったからである。同社は収益25%増という目標決算額を達成し、さらに2年という指定期間内に、当初の改革コストを回収しつつある。



カーペットやポスターなど随所に「遊び」が見られる





レイアウト図



オフィスの各所に使われる大胆な色使い

見えない空間がネットの向こうに伝わる

例えば、ホームバンキングの普及と共に銀行店舗を訪れる機会が減るように、情報技術の進展は、あらゆるビジネス分野でグローバルな市場へのアクセスの可能性を高める一方で、顧客応対のスタイルを対面型から通信やネットワーク経由のヴァーチャル型に移行させていく可能性がある。そうなるとコールセンターと呼ばれる組織は最も顧客に近い部署になり、そこで働くワーカー達は単なるオペレーターでは済まない役割を担うことになる。

見えない顧客に満足を与えるサービス。それを提供することを仕事とする人々のための支援環境とはどのようなものだろうか。電話の向こうに伝わる事、伝わらない事、伝わってしまう事を考え、そうした状況下で顧客に応対するワーカーの行動や心理を想像してみよう。注意をそらさない会話、迅速さを要する情報検索、見えない笑顔を伝える声。そんな視点で眺めると、ここに提示された空間がいかに重要な役割を果たし得るかが理解できる。ワークステーション周辺の圧迫感のない空間的余裕や、リフレッシュできるラウンジのクオリティも決して贅沢な投資ではないのだろう。(岸本)

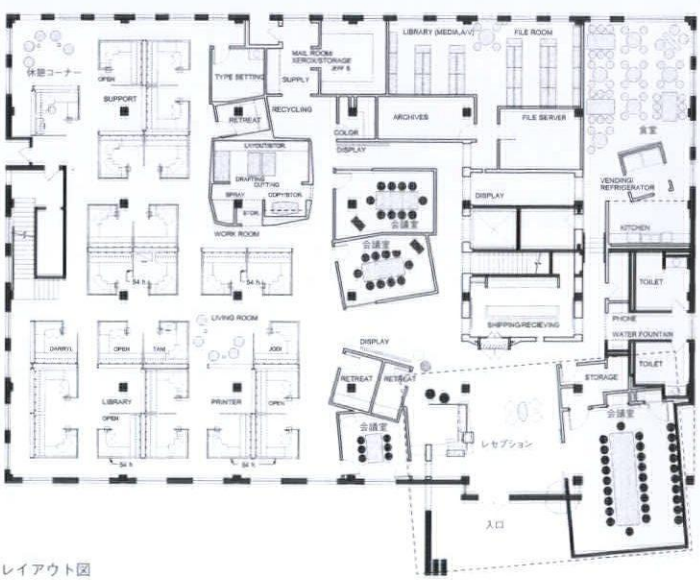
オフィス・デザイン：HOK
所在地：Wichita, Kansas, USA
面積：3300m²

戦略はオフィスで決まる

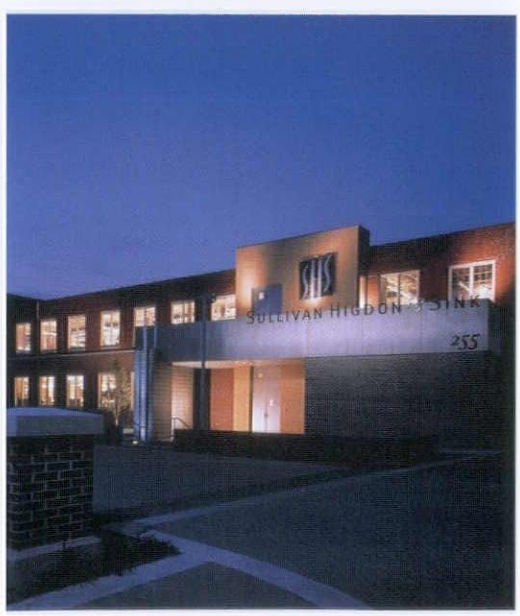
Sullivan Higdon & Sink



レセプション



レイアウト図

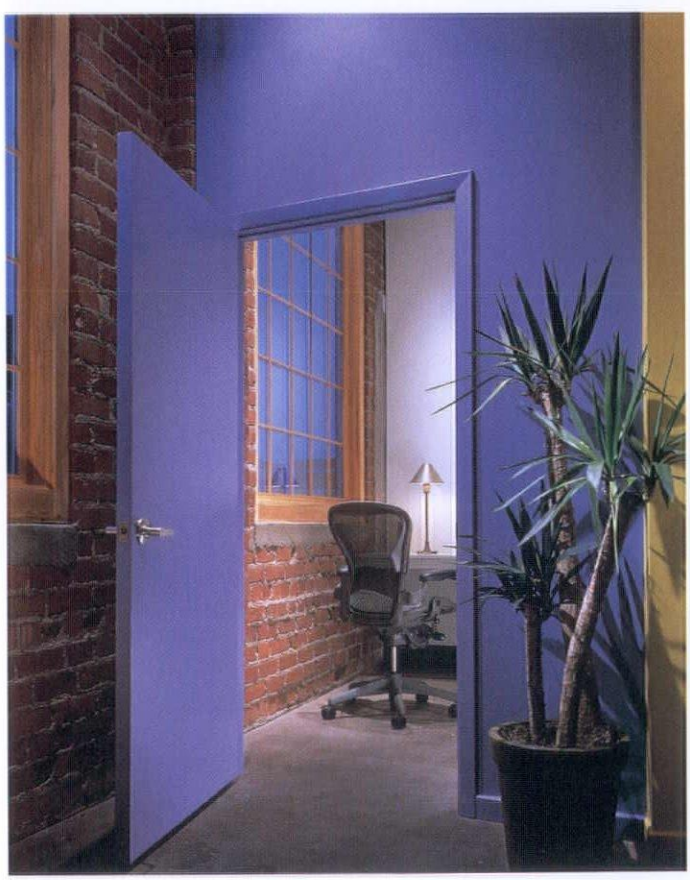




1994年末頃から、ワークスタイルを見直す企業が出てきたが、この広告代理店もそのひとつである。それまではこの代理店も、各部所が他とは関係なく仕事を進め、その結果経理主任やコピーライター、営業部長、制作および広告関係者たちが互いにコミュニケーションをとる機会はほとんどなかった。また、これまでの25年間に及ぶトップ・ダウン式から、部門の垣根を越えたコラボレーション主体のワークスタイルへと移行し、収益性を挙げる必要があった。ただし、それを実現するには、そのワークスタイルを支援する広く快適な作業環境が求められる。そこでクライアントは、オールド・タウン・マーケットのコールマン暖房用炉工場跡地に移転を決めた。3300m²と広く、移転当時68人の社員が88人まで増えても充分対応できる。立地も良く、クライアントの企業精神と呼応するような、職住近接の「古き良きレンガ街」を目指した開発が行われていた。ここには、公共市場やオフィス街、ロフト、各種専門店などと一緒に怪しげなレストランや夜遊びの場が混在している。

新しいオフィスで、ワーカーは6チームに分かれ、チームごとに短時間のミーティング用のソファと椅子を配した開放的な「居間」を用意した。集中を要する作業あるいは、ひとりでゆっくりとくつろぎたいときのためには、個室をつくっている。

オフィスの改修がもたらす収益は、2年間で移転の経費を回収できるほどだが、それでもランニングコストは極力抑える必要がある。そこでクライアントから担当者が派遣され、フルタイムで参加することになった。社員68人の会社にしては、異例のことである。さらに、全社員がEメールで建築家と直接コミュニケートすることができ、貴重な情報を得ることができた。



ビジネス戦略が決定したデザイン

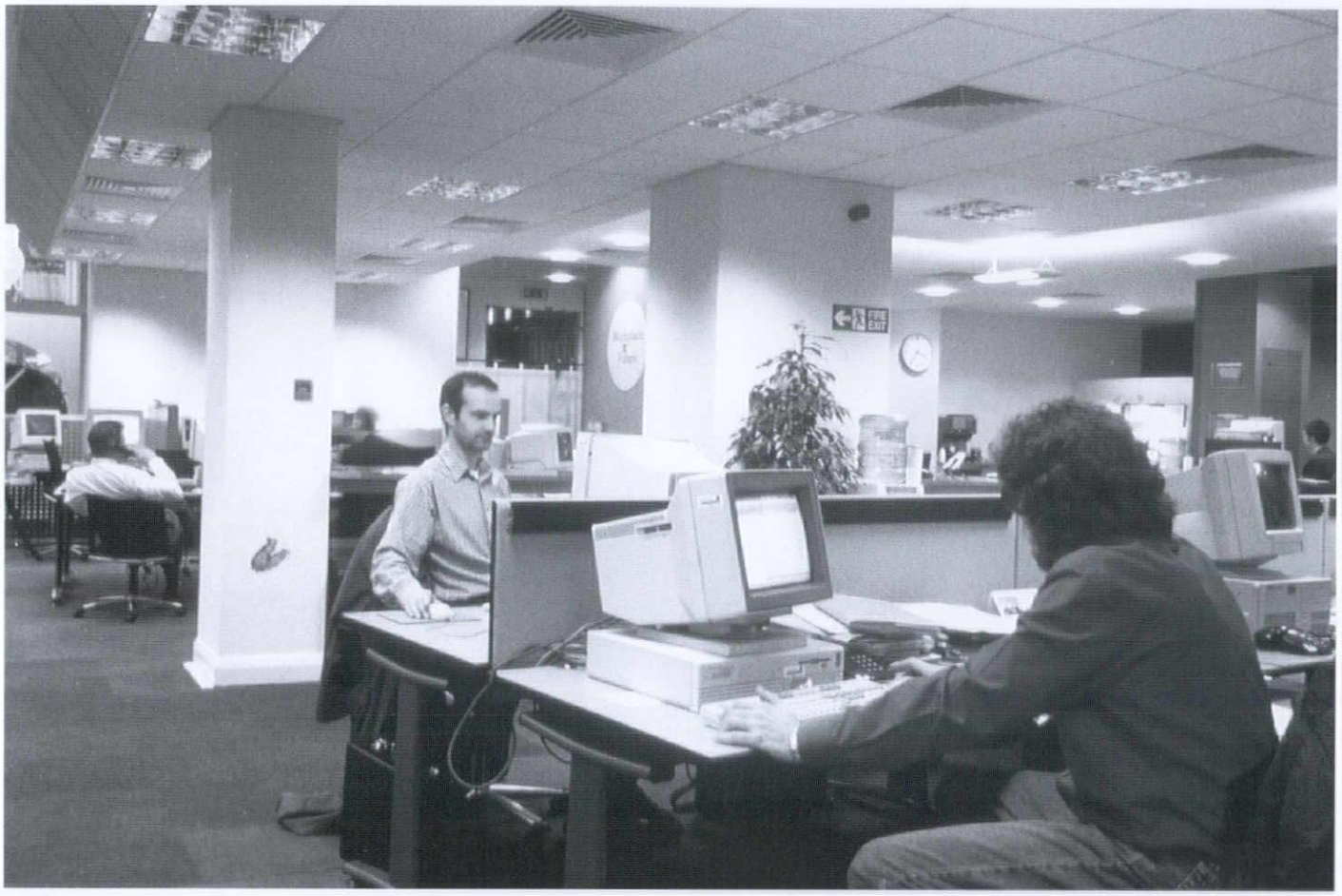
階層的で機能別に編成された固定的な組織構造から、平坦で機能横断型の混成メンバーによるプロジェクトチームを基本とする柔軟な組織構成への移行。さまざまなオフィス変革の動機の中でも、近年の事例に多く見られるもののひとつであろう。そして、この事例もそうした経営ビジネス上の判断から、まず組織の再編成に取り掛かり、既存の空間が新しいニーズにフィットしないという理由から新しいオフィスのプログラミング作業が続いた。結果として彼らの目指した新しい仕事のプロセスやスタイルを効果的に支援できるものとして成功したようである。

オフィス戦略や空間のデザインといったものは、それら自体は手段や道具であり中立なものである。それぞれの戦略やコンセプトにはスペース面、技術面、コスト面、運用面など様々な観点から記述できる「特質」があるだけである。それらが特定の組織（すなわち特定の目的、目標、戦略、条件、文化などを持つ）に適用されて初めて、その適性度合いによってプラスに働いたりマイナスに働いたりするのである。適正な解決策は正しいプロセスから生まれる、という当たり前の事実は常に再確認されるべきであろう。（岸本）

オフィス・デザイン：DEGW
所在地：Glasgow, U.K.
内装竣工：1996年
面積：540m²

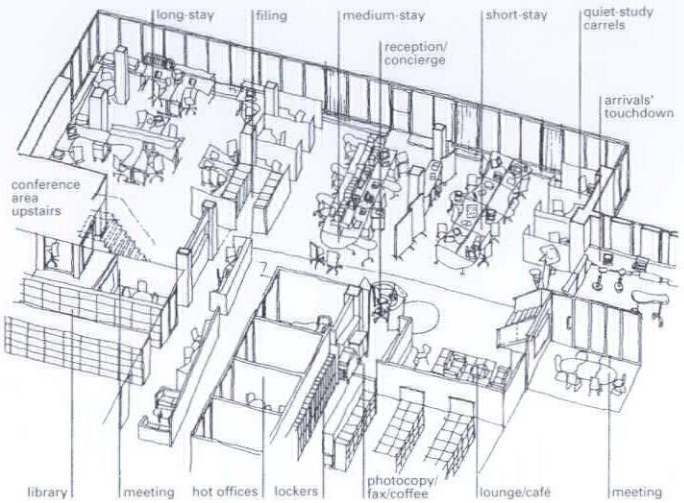
本格的改革に着手するための実験オフィス

Scottish Enterprize National









レイアウト図



この事例は、「The Workplace of Future」というプロジェクトを立ち上げたクライアントが、5年以内に着工する予定の新しいオフィスに先立ち、新しいワークスタイルのコンセプトを検証するための実験的オフィスである。

クライアントからは、サービスをさらに迅速に提供できるよう、作業効率を改善すること、作業に応じた設定とフリーアドレスのコンセプトを導入すること、オフィス環境の質を高め、世界中に散らばるクライアントや同業者にも誇れるワークプレイスにすること、将来建設予定の本社オフィスのベンチマーキングを行うこと、この4点が提示された。

このオフィスでは約70名のスタッフに、「タッチダウン（短時間の作業）」「クラブ（コミュニケーション）」「ホット・オフィス」「キャレル（個人作業）」「ロング／ショート・ターム（中長時間の占有）」といった、異なる作業環境が提供されている。スペースは540m²と決して広くないが、その有効利用の良い例と言える。スタッフは携帯電話とノート型パソコンを支給されている。電源プラグはすべての席に設置されている。固定席を持つワーカーはほとんどいない。

ワーカーによると、コラボレーションはやりやすくなり、コミュニケーションの機会も以前より増えたと言う。ただし、個人の業績がチームの成績として認められてしまうといった課題もみつかっている。

このプロジェクトは当初、5つの作業環境を設定していたが、検証を進めていく上で、変化していった。このオフィスでは、2年間、Scottish Enterprize社における作業環境をできるだけ多く検証するため、さらに改装を行うことも考えている。

実験ならば学んだ後で修正可能

長時間の占有、臨時の作業、集中作業、交流など、さまざまな活動のための多様なセッティングがオープンスペースの中に混在する実験オフィス。未来型ワークプレイスのアイデアを検証するための2年間のパイロット・プロジェクトとしてデザインされたというこの空間では、540m²のスペースの中に、職種の異なる約70名のスタッフが働くという。

作業に合わせて場所を選ぶノンテリトリアル型のオフィスは、場合によってはワーカーの空間に対するオーナーシップの欲求と対立して、「居場所が無い」感覚を引き起こすことがあり、そうしたことが積極的な空間内での移動や使い分けを妨げることがあるようだ。しかし、見渡せば十分に目の届く範囲内にすべてのものがあるであろうこの空間の広さは、「フロア全体が自分達のオフィス」と無理なく感じられる規模かもしれない。一人当たり面積に換算すると我が国の一般オフィスと比べても決して広くないこうした事例は、今後のオフィス作りに対して具体的なヒントを与えてくれそうである。（岸本）

オフィス・デザイン：DEGW
所在地：Kings Closs, London
内装竣工：1997年11月
面積：1300m²

オフィスのプロが作る自社事務所

DEGW Office

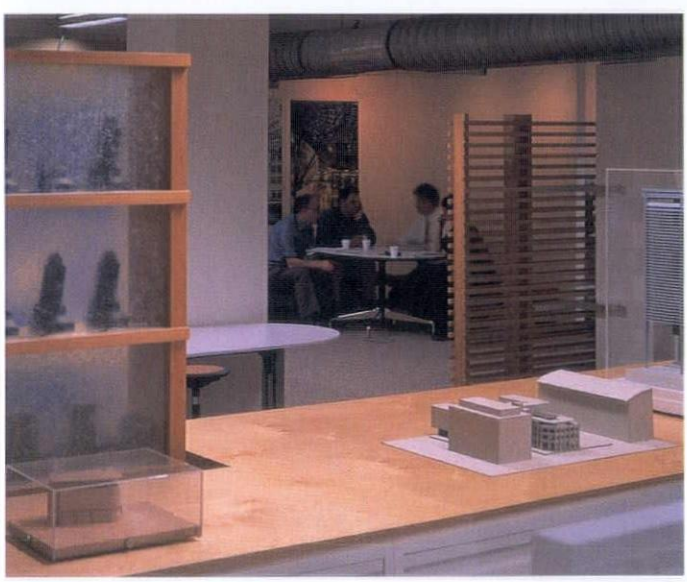




新しいオフィスは、単なる改装ではなく、オフィス内外のあらゆる場所で仕事をするワーカーを支援する環境を整える「改修」である。これはまた、ワーカー全員の協力を得た、ワークスタイルの改革でもあった。設計者としてまたコンサルタントとして、常にクライアントのFM改善の支援をしてきたが、クライアントの要求が高まるにつれ、自身の作業過程を見直すことが急務となってきた。

情報技術は、ワークスタイルにもオフィスデザインにも同様に大きな変化をもたらす、強力な触媒である。新オフィスは、床下に高性能ケーブルを収容し、テレコミュニケーションや通信が可能となっている。半数に上るモバ







イル・ワーカーは、ノート型とコードレス電話を使用し、すでに固定席がなくなっている。あるゾーンは共同作業のワークステーションであり、また別のゾーンは個人のスタディやミーティング用の個室となっている。経営スタッフには常設のワークステーションがあるが、収納やリサーチといった機能は書類センターおよび図書室に納められている。小包や郵便／ファクス等のための集配ポイントもある。プロジェクトや個人のファイルは一括管理され、またネットワーク化されたITプラットフォームがPCユーザーにもCADユーザーにも提供されている。

この結果、私達は必要な書類を持って移動し、仕事に応じた適切な作業環境を選べるようになった。各エリアは、打ち合わせ、集中作業、プレゼンテーションなどといった、特定の作業を志向した環境になっている。以前のオフィスに比べて、個人が占有する空間にではなく、こうしたファシリティに、より多くの面積が当てられている。

新しいオフィスはある意味で非常に流動的で先進的な企業が求めている環境になっている。新しいオフィスはクライアントと私達に課せられた義務に当てた私達の焦点を反映し、かつ後押しするものである。働くにはとても良い環境になった。コミュニケーションの機会も増え、プライバシーも尊重される。今後もっと面白い空間になるのではと期待している。

身を以て示すオフィス戦略の提案

オフィスデザインの分野に優れた実績を持つ建築設計事務所でありリサーチコンサルタントでもある彼ら自身の支援環境を再構築した先進的オフィス。新しいワークスタイルを支援する空間、テクノロジー、運営システムを適切に組合せることによって、マネジャーからプロジェクトチーム、サポートスタッフ、ビジターまで、多様なワークスタイルを効果的に支援する、フレキシブルでバラエティ豊かな空間に仕上がっている。

ビジターとしてこのオフィスを実際に訪れた際の印象は、多くのプロフェショナル達が程よい活気を醸し出す環境といったもの。作業用の図面や大型の模型やサンプルの扱いなど、空間の流動性を維持するための課題すべてが解決されているわけではないようだが、コミュニケーションとプライバシー、ハイテクとローテク、緊張感とリラックス感、先進イメージとアットホームな雰囲気など、時として対立する要素が適度にバランスされた、居心地のいい作業空間ではあった。（岸本）

オフィスの変化をデザインする

小倉善明

オフィスビルは20世紀につくられた

19世紀末、1890年代にシカゴで生まれたオフィスビルは、100年の歴史しか持たない建築であるが、100年の間に課せられた役割を果たすため、驚くべき変化を遂げた。スカイスクレーパーという名前は20世紀前半の建築を代表する言葉であるし、より高い建築をつくりたいとの思いは今でも人間のこころの片隅ににあり、この思いを叶えられる建築は、オフィスビルであるといってよかろう。

都市の経済活動が拡大しそれにつれて都市が大きくなると、オフィスビルは都市の中心的な建築として、都市の骨格を形作るようになる。結果として初期の都市形成で生まれた住宅を郊外に追いやり、都心部と郊外を生み、都市のさらなる集中と通勤ラッシュなどの交通問題を引き起こすに至った。オフィスビル自体も、社会のそれとともに変化を繰り返している。その変遷にはもちろん建築の寿命も関係するが、現在は情報システムの変化による影響がより強く認められ、多くのビルが、リノベーションを余儀なくされている。また時代と共にオフィスビルがより大規模な建築に生まれ変わっていることも、経済活動の拡大と都市の原理によるのであろう。

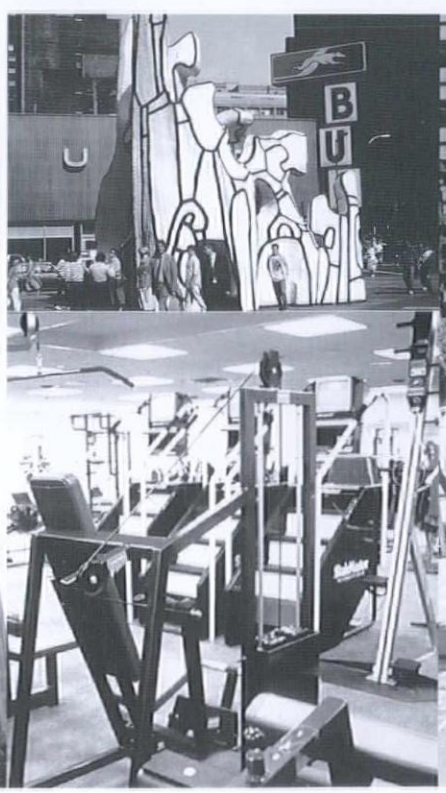
高層化は建築を大規模化する上に必要であったが、都市の顔でありシンボルである、超高層ビルは単なる建築機能ばかりでなく、建築が持つ本来の魅力を併せ持っているために、そうしたビルが立ち並ぶ都市もまた魅力に満ちたものとなる。都市で働く人びと、例えばオフィスワーカーにとって、都市生活を楽しむことは「都市で働く」魅力のひとつである。特に、現代の情報化社会のなかで、オフィスワークは精神的にも、肉体的にも過酷になっている。オフィスでのストレスを取り除くためにも、都市でしか味わえない、食事や、音楽やスポーツを楽しむ人達が増え、そのための場が生まれる。オフィスだけが並び立つ時代は終わって、ホテルや、レストランや、音楽ホールやスポーツクラブがオフィスの近くにあるような開発がされるようになるのである。いわば都市のオアシスとでも言える、生活を楽しむ場と背中合わせにあるオフィスが、都市における理想的な働く環境と言えるだろう。それがまた、都市におけるオフィスの存在意義でもある。

オフィスの今

建築技術の向上により超高層ビルが生まれオフィスの形状が変わり、情報化によってコンピューターが持ち込まれオフィスの空間の質の変化が起きた。オフィスの形状を変えたのは建築家であったが、情報化を進めたのは、オフィスのユーザーである。したがって情報化に対しては、建築はその対応を迫られたといって良い。情報化社会は、オフィスの業務にOA化という革命をもたらした。電話や、セントレックスは20年前までは、オフィスの情報機器であったし、複写機も最新のツールであった。今や各テーブルに1台のパソコンがあるのは当たり前になり、複写機の機能も飛躍的に増大した。コンピューターの優れた機能を考えると、オフィスの再定義をする必要に迫られる感がする。

情報化時代のオフィスの象徴的な空間は、ディーリングルームである。世界の金融情報を集めて瞬時に判断をするディーラーが日常を過ごすこの空間は、従来のオフィスでは想像できなかった新しいオフィス空間である。テーブルの上には複数の情報端末が置かれ、ディーラー達は食事をとる時間もなく働く。この光景は、現代社会の過酷な一面を見るような気がする。このような、多くのコンピューターの端末を用いたワークプレイスに対応















する環境づくりがオフィスの設計に求められている。長時間にわたって座り続ける椅子はエルゴノミクス（人間工学）に基づいたものが求められることは周知の事実となった。グレアのない照明、十分なコンセントの電気容量、床下の配線スペース、快適な空調無しには現在のオフィス空間は成立しない。柱のない奥行きのある大きなワンフロアのオフィスがより好まれ、固定間仕切りは、徐々に家具による可動間仕切りに変わってきている。

企業の組織の変革は、絶え間なくオフィスのレイアウト変更を要求し、これに対応可能な設備システムやレイアウトシステムが作られている。いわゆるインテリジェントビルはこのような背景で生まれている。変化に耐えることの出来る空間をつくることはオフィス設計の原点であり、その意味で「フレキシビリティ」はオフィス空間のキーワードである。

オフィスビルはよく企業の顔にたとえられる。金融機関は重厚さを求めたり、衣料メーカーがファション性を求めたりする。しかしまたインテリアも企業や組織を表現する。オフィスを内側から考えることあるいは、オフィスに内在するデザイン・クライテリアを考えることは、企業の頭脳を考えることに似ている。オフィスデザインには外観のデザインのように変わらないもののデザインと、内側の変わるもののデザインのふたつの部分があり、変わる部分のデザインが変わらぬ部分のデザインに増して重要になってきた。それは、絶え間なく変わる組織に対応して必要な空間を対応させていくことが、経営的な視点から見たオフィスの設計の重要な部分だからである。20世紀末を迎えて企業の経営戦略の変更や、組織の統合や分割、拡大や縮小は以前にも増して多くなりつつある。その変化に見合った空間と業務遂行のためのツールが直ちに用意されないと、企業の経営戦略は遂行できない状況に直面するだろう。このような、時間軸に対して継続的なデザインをしていくためには、いわゆる「インテリア・デザイン」ではフォローしきれなくなる。状況分析や将来予測、コンピュータや更には危機管理等多面にわたる要素を統合した上でのデザインが必要になる。いわば、デザインを支えるマネジメントが必要である。建築という空間、ワーカーという人、コンピュータや家具という物を組み合わせて考えるマネジメント技術が、オフィス環境づくりに必要である。環境重視型社会を迎え、建築自体もリノベートしていく必要があり、コミュニケーションの手段となるコンピュータは日進月歩し、企業の組織がめまぐるしく変わる今、オフィスの設計は、先端的である。

オフィスの今後

オフィスはなくなるとも言われ始めた。コンピュータさえあれば、避暑地であれ、自宅であれオフィスでやるべき仕事ができ、電子メールやファックスや電話で世界の何処にでもアクセスできるからである。確かにコンピュータを持っていればオフィスにいるようなものだとも言えるし、そのうちテレビ電話も普及すればさらにこの傾向は進もう。最近は、海外にいても通常のオフィス業務はこなせるし、人によっては時差を使って24時間働く人もいる。オフィスではなくて、「オフィシング」という表現はこのような状況を語る。

企業の形、雇用形態、個人のライフスタイルなどがオフィスの将来像を決めるだろう。企業が分社化を図ることや、人材をアウトソーシングしたりすると、必ずしもオフィスに働く人を全員集中させる必要はなくなる。事実、住宅の一室をオフィスに当てたり、女性であればキッチンの片隅に自分のホームオフィスを構える例は多くなった。空港の待合室でコンピュータを用いている例は珍しくない。フレックスタイム制が導入され、能力や成果が評価されるようになると、どうもオフィスで忠実に勤務する姿はイメージされにくい。

現在、オフィスで一番重要な機能は何かという問いに対して、会議機能であるという人は多い。人と会うことは仕事でも、生活でも人間の社会行動のなかで欠かせない部分であり、企業や組織が人で成り立っている以上人の会う場所は重要である。ディシジョンメーキングをするに必要な情報機器はこの場に不可欠であろうし、会議の合間をくつろぐスペースなどの配慮が必要である。会議室と世界ならずとも国内各地をテレビ電話で結ぶことは、近未来に於いて常識化するであろう。

一方我が国のオフィスで一番軽視されている場は、思考する環境である。勤務状況を管理する時代は終わったといって過言ではなかろう。思考するにふさわしいプライバシーのある環境をつくることは企業にとって大切である。環境制御も、より個人的に対応することが可能になった。明るさや、温湿度やプライバシーの程度が個人レベルで制御できて、個人の能力を発揮するにふさわしい場所を企業が用意する必要があろう。また、自分にふさわしい空間を用意し、複数の企業を相手にする人も増えるだろう、その人達が溜まり情報交換をする場も新しいオフィスの姿なのかもしれない。

これまでは、オフィスに行かなければ仕事が出来なかったが、コンピューターのおかげで何処でも仕事が出来るようになった。とすると、仕事をする上によりよい環境があるか、人と会うことができるかが、オフィスの存在理由であるように思えてならない。

●おぐら・よしあき／建築家・日建設計

先端オフィスのキーワード

月舘君枝／システム・オー

ヴァーチャル・オフィス

Virtual Office

仮想のオフィスという意味で、物理的な場所にかかわらず、情報通信技術を利用して、個人が作り出せる執務空間や、その集合体。例えば、ネットワークを使って海外の人々と共同作業をしたり、テレビ会議で現実には会っていない人と会議をしたりできる。人によって「ヴァーチャル・オフィス」という語の適用範囲は色々であり、イメージが先行している感がある。オフィス空間の具体的な運用に関しては、ノンテリトリアルオフィスなどの語が明確である。

オープン・オフィス／オープン・プラン・オフィス

Open Office/Open Plan Office

ドイツのオフィス・ランドスケープ（Office Landscape）が、1960年代に米国に渡って発展したオフィス空間のスタイル。コンサルタント会社のクイック・ボーナー・チームが開発したもので、100～300人ほどのワーカーがひとつの均質な大空間を共用し、組織や業務の改善や効率化を図ったものである。オープン・オフィスでは、視線や音をある程度遮る可動式のパネルやパーティションで囲まれたワークステーションが大量にひとつの大空間に配置される。全く囲われていない場合はオープンオフィスではなく、ブルペンオフィスと呼ばれる。オープンオフィスでは、窓までの距離に差があったり、音や空調の問題などもあるが、米国では、過半数のオフィスに採用されていると言われる。

オルタナティブ・オフィシング

Alternative Officing

Traditional（伝統的な形態の）Officing（働き方）に対向する概念だが、Alternativeという用語には、既存のものより好ましい、というニュアンスがある。「新たに選択できるようになった働き方」と訳せるだろう。働き方だけではなく、それを模索する活動も含む広い概念であり、伝統的な働き方における時間と場所の拘束を受けなくなった働き方のすべてを指す。具体的には、各種のノンテリトリアル・オフィス（モバイル・オフィスやホテリング、日本で言うフリー・アドレス／グループ・アドレスなど）や、テレコミューティング（ソーホーやサテライト・オフィス、従来の在宅勤務）、その他フレックスタイムなども含む。背景としては、高度な情報通信技術が一般化したことや、オフィススペースの賃貸料、都心部の住宅事情、通勤事情、より良い執務環境を求めるワーカーの意識、専門的頭脳労働の人件費を節約するため効率良く働かせたい企業の思惑などが複合的に絡んでいる。オルタナティブ・オフィシングを企業が導入する動機は、コストダウンと執務環境の向上だが、前者ばかりに重心が片寄らないようにすべきである。ワーカーに不満が生じ、士気や生産性が下がっては、企業生命に影響しかねない。オルタナティブ・オフィシング実施時には、事前に綿密なプログラミングを行うこと、ワーカーに対して実施の理由や運用方法の認知とトレーニング、実施後の手厚いケア、インセンティブ（例えば、個室を失ったワーカーの給料が上がる）などソフト面に充分投資する必要がある。

グループ・アドレス

Group Address

フリー・アドレスの項参照。

サテライト・オフィス

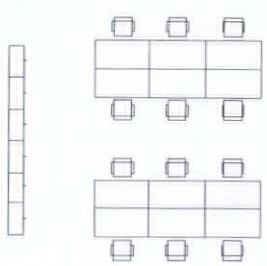
Satellite Office

星の廻りを回る衛星（サテライト）のように、都心のオフィスを中心に情報通信ネットワークで結ばれた、郊外の住宅地に立地する小規模な分散型オフィス。メリットとしては、サテライト・オフィスに通うワーカーは、自宅の近くであるため通勤の負担が少ないこと、業種によっては住宅地の顧客に対してより良いサービスを提供できることなどが挙げられる。ホームオフィス（ソーホーの項参照）と似た概念であるが、ホームオフィスが実施できないような住宅事情の場合、企業の出資でサテライトオフィスが設置される。

島型レイアウト／島型対向式レイアウト

Iland Shape Layout

壁や間仕切りに接する面のない、いくつかのワークステーションを組み合わせたレイアウト。図参照。日本では特に広く用いられてきた。グループ内コミュニケーション、共同作業の容易さ、省スペース、組織的管理性の面では優れているが、プライバシーや快適性の面で劣る。また、ワークサーフェス（机上面）の面積が充分にとれていないことが多い。



ソーホー

SOHO

Small Office と Home Officeの頭文字をとったもので、オルタナティブ・オフィスの一種である。スモール・オフィスは、ワーカーが組織から独立し、自宅や自宅近くのスペースを借り、小さなオフィスを構えることをいう。ホームオフィスは、組織に属しているワーカーが、都心のオフィスに通勤せずに（例えば週1回出社など）、自宅で仕事をすることを言う。情報通信技術の発達によって、こうした形態が可能になった。どちらも、職住接近、または職住合体によって、組織にとってはスペースや交通費の節約、ワーカーにとっては通勤の負担減少につながり、子供や病人、老人をケアしながら働くこともできる。効果を上げるためには、情報通信設備に対する投資が重要である。

テレコミューティング

Telecommuting

コミューティングは通勤という意味であるが、電話回線などを使った通信ネットワークによって、毎日の通勤をせずに、職住一体、職住近接を可能にしたシステム。肉体は通勤していないが、情報だけ通勤している状態とも言える。従来の在宅勤務などに加え、SOHOやサテライトオフィスのワーカーもテレコミューティング（情報通勤）しているわけである。

テレワーク

Telework

情報通信技術とネットワークを利用して、仕事をすること全般を言う。テレコミューティングなど、オルタナティブ・オフィシングの多くは、テレワークを前提としている。これからのオフィス作りに不可欠な概念である。

ノマド式オフィス／ノマド・オフィス

Nomad Office

遊牧民（ノマド）のようにオフィス内を自由に移動して自分の場所を構えることができる形式をいう。人によっては、ノマドオフィスを広い意味で使い、オルタナティブ・オフィスやノンテリトリアル・オフィス全般を指すこともある。狭い意味でのノマド・オフィスはスウェーデンのDEC社などが実現している。可動化した家具や情報機器は、普段は収納されており、必要に応じて最適な場所に最適なワークステーションを設置して仕事ができる。例えば、窓の外の景色を見ながら大きなデスクだけで仕事をしたい、コンピューターを何台も使って集中して情報処理したい、数人でにぎやかにしゃべりながら、などにそれぞれ対応できる。ノマド・オフィスの主たるメリットはスペースの効率化とワークステーションのフレキシビリティの向上などである。

ノンテリトリアル・オフィス

Non-territorial Office

オルタナティブ・オフィスの多くはノンテリトリアル・オフィスとして分類できる。テリトリーは領地、縄張りと言った意味で、伝統的なオフィスでは各ユーザーのテリトリーは個室なり、ワークステーションなりで明確に定義されてきた。しかし、スペースの有効利用という観点から、テリトリーをあいまいにしたり、時間帯によって同じワークステーションのユーザーが変わったり（テリトリーの共有＝シェアードオフィス）といったオフィス形態、すなわちテリトリーを定義しないノンテリトリアルオフィスが受け入れられるようになってきた。ノンテリトリアル・オフィスは、かなり広い概念であり、種々の応用例が提案されている。具体例として、フリーアドレス、グループアドレス、ホテリングなどがある。

もともと、オフィス賃貸料が高額であった日本で、トヨタ自動車のジャスト・イン・タイム・システム（必要な時のみ補充する在庫管理システム）をベースに開発されたオフィス形態であり、その後、欧米

でも実用化されている。組織として効果をあげるためには、スペースの有効利用だけでなくワーカーの満足度を低下させないことが必要である。そのためには、節約して浮いたスペースで福利厚生を充実したり、事前の綿密なプログラミング、実施にあたってワーカーの教育やケアなど、ソフト面の充実が欠かせない。

POE

POE/Post Occupancy Evaluation

入居後評価。オフィス環境の評価法は多種開発されているが、エキスパートベース（専門家が評価する客観的な評価）とユーザーベース（ユーザーが評価する主観的な評価）に大きく分けることができる。POEは、ユーザーベースの評価法のひとつで、新しいオフィス環境に入居後、ユーザーの満足度をアンケートで調査する。米国シンシナティ大学のプライサー教授が開発、指導しており、オフィスに限らず種々の施設のPOEを行い、そのデータを蓄積している。POEの結果は、設計者の意図とは必ずしも一致しないユーザーの反応を認識することができ、その後の改修、改築、移転、新築などの際、非常に重要な情報となる。また、データが蓄積されているため、同業種同規模の施設の比較が可能であり、新たな施設をプログラミングする際にも、有効な手がかりになり得る。POEの蓄積データはベンチマーク手法にも役立ち、ファシリティサイクルにおいて、欠くことのできない要素である。

ファシリティ・マネージメント

Facility Management

ファシリティ=施設、マネージメント=運営管理である。日本ではオフィスを対象とするイメージがあるが、本来はオフィスに限らず、総合病院や大学、複合商業施設など複雑な機能を持つ施設に対して有効な概念である。単なる維持管理ではなく、建築物、土地などの不動産や、IT（情報技術）などの設備、種々のエネルギー消費を長期的視野に立ち、統括的戦略的に運営管理することを言う。関係諸団体によって、正式な定義に多少の相違があるが、相反しがちな二大目標を追及することは共通している。すなわち、施設財産全体の経済的効率を向上させることと、施設のユーザーの居住性や快適性を向上させることである。日本でのファシリティマネージメントは、前者をより意識するものであったが、後者をも達成することによって、施設ユーザーの作業効率や生産性創造性が高まり、結果的に組織の利益につながるというロジックが基盤となる。過大な経費をかけずにユーザーの環境満足度をいかに向上させるかが、または逆にユーザーに不満を感じさせずにいかに経費削減を計るかが、ファシリティマネージャーの腕の見せどころであろう。例えば、個室空調ならぬ個人空調に切り替えることによって、冷暖房の効き過ぎと言った不満が減る上に、空調経費が大幅に削減できる。または、オフィス改装時、設計段階にユーザーを参加させ、意見を反映することによって、大きな追加経費をかけずに満足度を向上させることができる。なお、本場アメリカでは、Facilities Managementと施設を可算名詞として扱うと、日常的な運営維持管理と言った営繕部的なイメージがあり、Facility Managementと、施設を抽象名詞として扱うと、より統括的戦略的に運営管理しているイメージがある。さらにFacility Planning & Managementと言うと、組織のトップクラスの経営陣と共に組織全体の方針にかかわっていくイメージがある。

フリー・アドレス

Free Address

ノンテリトリアル・オフィスの一種で、各ワーカーにワークステーションを割り当てず、総人数より少ないワークステーションを共用で使用する形態。個人の持ち物は、ロッカーやカートにまとめておき、必要に応じて空いているワークステーションを利用する。1987年に清水建設技術研究所で採用され、今では欧米でも実用化されている。フリー・アドレス導入のメリットとしては、スペースの削減、家具情報機器の削減、レイアウト変更にかかわるコストの削減などによる経費削減効果が大きい。営業部など、外出が多く在室率の少ない場合に適している。フリー・アドレス導入が成功する目安は、最大在室率が50%以下、平均在室率が40%以下とされている。他のノンテリトリアル・オフィスと同様、情報通信設備の充分な構築と、ワーカーの不満を生まないよう、新方式採用にあたっての目的や運用方法の認知、実施後のフォローアップが重要である。フリー・アドレス方式の、「自分の場所」がないため落ち着かない、という点を改良したのが、グループアドレス方式である。グループアドレスでは、部署（グループ）単位で決まったスペースを確保し、各グループ内ではフリー・アドレス方式が行われる。各ワーカーは自分の部署に対する帰属意識を保つことができる。グループ・アドレスは、1989年に日本IBM箱崎事業所で採用された。なお、フリー・アドレス／グループ・アドレスという語は、日本以外ではあまり使われていない。ノンテリトリアルオフィスの1パターンとして説明したほうが理解されやすいであろう。

プログラミング

Programming

コンピュータのプログラミングとは異なるものである。イギリスでは、ブリーフィングとも呼ばれる。デザイン・プロセスに先行して、クライアントやユーザーの要求条件や、その他の周辺環境、業務環境、経済性、設備、技術など、デザインに当って考慮すべき多くの情報を統合、分析するプロセスを言う。対象となるのは、オフィスだけではなく、利用者群や機能が複雑な施設に特に有効である。「企画」と混同されやすいが、プログラミングは情報の収集、分析、解釈までを行うのに対し、企画は収集分析した情報をもとに提案を行う点が異なっている。

オフィスで言えば、近年、建物の情報通信、空調、安全その他の機能や設備が高度に技術化し、テナントの要求レベルも高くなってきており、ビルオーナーもデザイナーも、その情報や条件を正確に把握するために大変な時間と労力と知識を必要とする。その職務を担うプロフェッショナルがプログラマーである。欧米では、大規模なプロジェクトでは、プログラミングをデザインとは別契約で行うことも多い。この場合のメリットは、デザインの手戻りが少なくなる、設計ミスが少なくなる、クライアントやユーザーの要求が予算の範囲内で最大限に満たされる、などで、プログラミング料を支払っても、トータルではコストダウンにつながる。また、訴訟社会らしく、失敗があった場合の責任の所在が明確になることも歓迎されている。優れたプログラミングを行うためには、クライアントやユーザー、できればビルオーナーもテナント社のトップも末端社員も、プログラミングに参加させることが重要である。単に、アンケートを取る、インタヴュー／ヒアリングを行うといった受動的なものから、各ユーザー群の代表（例えば、秘書代表、係長級代表、営業部代表など）を集め、討論させる、一緒に理想的な空間のスケッチを描いたり、模型を作ったりといった能動的なものまである。最終的に与えられたのが同じ施設環境の場合でも、プログラミング参加者の方が満足度が高い。建物のサイクルである、プログラミング、設計／デザイン、建設、評価（POEなど）、使用、破壊、という流れの中で、プログラミングの重要性をもっと認識したい。

ベンチ・マーキング

Bench Marking

ベンチマークという用語は、もともと地盤の高低差を測量するための水準点を指していた。ベンチマーキングとは、ある生産物（施設以外の商品やサービス、プロセスなども含む）を評価する際に、その分野で最善のものを目標に設定し、ベストプラクティスを見習うことによって、自社のものを改良していく手法を言う。オフィス以外の施設にも適用できるし、FMの分野に限ったものでもないが、例えば一人当りのワークステーションのサイズを決めるに当って、同業種同規模のオフィスで最大のサイズを調査し、それが自社でも実現できるかを検討、努力する。単に平均値を求め、それを採用するよりも、業界全体が向上のベクトルを持つようになる。さらに、平均よりも良い性能を得ながら、適正範囲を逸脱することがない。ベンチ・マーキングの有効性は広く認識され始め、積極的に情報を開示する企業も増えつつある。さらに、異業種間でもベンチ・マーキングが行われはじめている。POEの蓄積データはベンチ・マーキングの設定に影響を与え、その設定値はプログラミングにおいても活用されるというように、それぞれの手法の相乗効果は大きい。

ホテリング

Hoteling

ノンテリトリアル・オフィスの一種。ホテルの部屋を予約するように、ワーカーがワークステーションを予約して使うことから、ホテリングと名付けられた。オフィス面積は変えずに、ワークステーション（時には個室も）を共用化し、数を減らすことによって、各ワークステーションの機能、面積、環境を向上させる。米国の会計事務所のアーンスト&ヤング社が命名し、一般化した。

モバイル・オフィス

Mobile Office

空間を移動しながら、軽量のブック型コンピューターや携帯電話など情報通信技術を利用して仕事をすること。ノンテリトリアル・オフィスの一種である。航空機、電車、自動車などの交通機関での移動時間を有効に使えるというメリットと、出張などでいつものオフィスに在席していなくても、業務がこなせるというメリットがある。この分野では携帯電話の目覚ましい普及があったように、これから次々と、より機能的な商品やシステムが開発され実用化されていくことが期待される。

ワークプレイス

Workplace

仕事をする場という意味で、従来の「オフィス」または「事務室」といった語では包括できなくなってきた広い応用範囲を持つ。デスクワークだけではなく、例えば製造業での工場も、病院の手術室もワークプレイスである。テレコミューターにとっては自宅もワークプレイスであり、ヴァーチャルオフィスでは、サイバーネットワークがワークプレイスである。生活し、仕事をする場として、広く捉えたい。



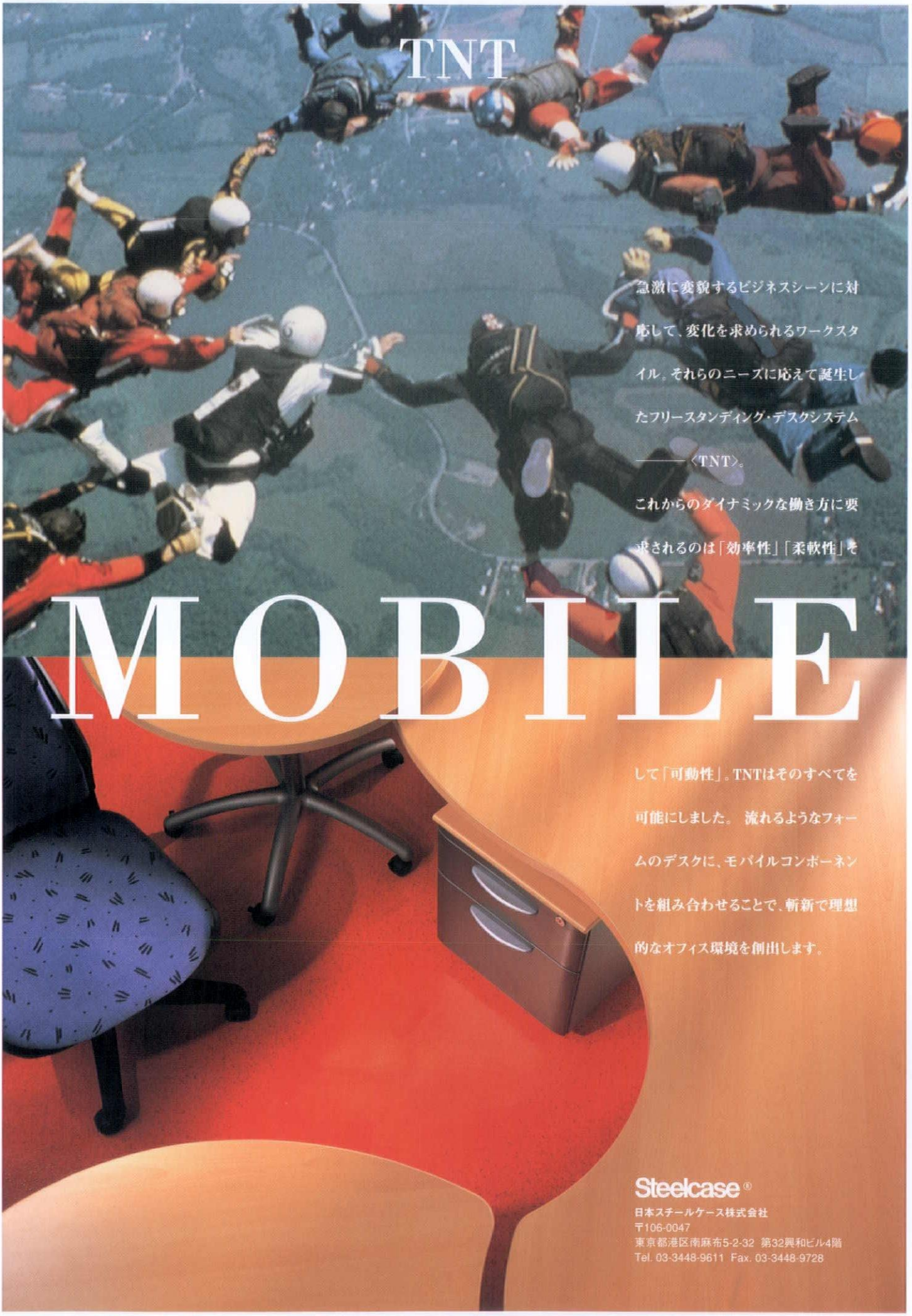
写真：
p.7　増田彰久（タンポポハウス）
pp.12-14、pp.36-37　鷹尾茂
p.20　坂口裕康
pp.34-35、pp.38-39　ナカサ&パートナーズ
p.44-45　益田文和（除くローロデクス）
p.50-51　Courtesy of Holey Associates and Paul Wacho Photography
p.52-54　Courtesy of Holey Associates and Chun Y Lai Photography
p.55-57　Nick Merrick
p.58-59　Steven Hall @ Hedrich Blessing
p.60-63　Dennis Gilbert

協力：
イトーキ、岡村制作所、コクヨ、日本スチールケース、プラス

デザイン：小湊好治

翻訳：尾崎澄子（p.55、p.58、p.62）

資料提供：
伊東屋、NEC、ハーマン・ミラー・ジャパン、ぺんてる


TNT
急激に変貌するビジネスシーンに対
応して、変化を求められるワークスタ
イル。それらのニーズに応えて誕生し
たフリースタンディング・デスクシステム
――〈TNT〉。
これからのダイナミックな働き方に要
求されるのは「効率性」「柔軟性」そ
MOBILE
して「可動性」。TNTはそのすべてを
可能にしました。 流れるようなフォー
ムのデスクに、モバイルコンポーネン
トを組み合わせることで、斬新で理想
的なオフィス環境を創出します。
Steelcase®
日本スチールケース株式会社
〒106-0047
東京都港区南麻布5-2-32 第32興和ビル4階
Tel. 03-3448-9611 Fax. 03-3448-9728



連載⑩森島紘史の起こし繪図

日本のかたち紙考

秋風

風が吹き抜ける構造をもつ日本古来の住宅は、寒い季節に応じるために風を遮る機能的に優れた間仕切り装置を生みだした。中でも簡単に移動が可能な屏風や衝立は、その機能と美しさにおいて日本を代表する家具調度である。

屏風は、中国から朝鮮半島を経て伝わったものであるが、仏教と共に伝来した製紙法が日本で広まるに従い、平安時代には、和紙を木製の組子に張り、紙製の蝶番で360°回転する軽量な構造形式が生まれている。

SD9810
70

okamura



オフィスに、木目の表情―フォレス



オカムラ イメージキャラクター
ヒロコ・グレース

機能中心のオフィス環境から、人間中心の快適なオフィス環境へ。

いま、時代はオフィス環境のアメニティに、優しさやぬくもりという価値を求めはじめています。そんな人間中心の発想を突き詰め、私達が到達したのが、ソフトウッドという木目の表情です。その天板は、自然の優しさを伝えながらも、デスクワークの高い作業効率と充分な硬度を確保。もちろん、トータルなオフィス空間を構築するための、多彩なバリエーションもラインナップしています。より個性的で人に優しい、新しいデスクシステム、それがフォレスです。

FORES フォレス デスクシステム Desk System

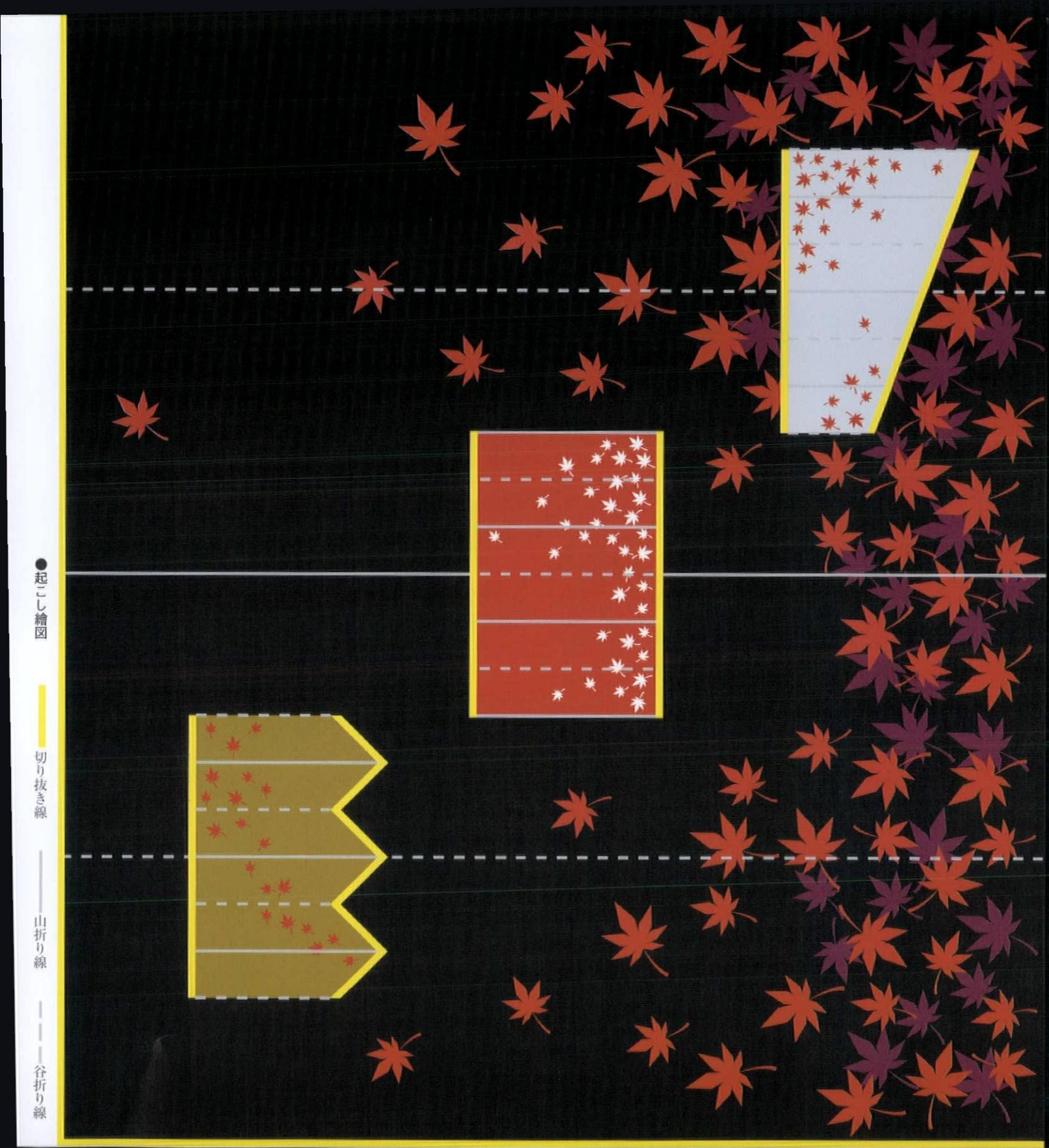
よい品は結局おトクです

オカムラ

株式会社 岡村製作所

お問い合わせ・ご相談は【お客様サービスセンター】へ… フリーダイヤル **0120-81-9060** 月曜～金曜（祝日を除く）9:00AM～6:00PM

●インターネットでオカムラの最新情報をご覧ください。［OKAMURA TODAY］ http://okamura.topica.ne.jp/



屏風は6面に折れ曲げることのできる「本間6曲（または6扇）屏風」が最も好まれ、古くは来客の際、汚れた襖の代わりに屏風を立てた用途から、高さが鴨居下の5尺8寸、巾は開くと柱から柱を示す2畳の大きさが多い。

平安以降、屏風には四季の山水、名所景物、人物、花鳥、走獣が描かれるようになり、屏風絵は上流階級の住居にはなくてはならない室礼（しつらい）調度となる。さらに時代が下がると左右1対で1具（または1雙）という形式になり、絵画も1曲ごとの縁取り画面から、6曲一括縁取りの広がりのある画面が展開されるようになった。姿の美しいのは「利休形屏風」、高さ5尺に対し巾は1割減の4尺5分の2曲形式である。茶の湯に用いられるのが「風炉先屏風」、2曲横長だが決まった寸法はなく、高さ9寸～2尺4寸、横幅は立てたとき畳の縁できっちり収まる巾に仕立てられる。「4曲屏風」は徳川時代、武士の切腹の場に用いられたために忌み嫌われたが、近代では扱い易さからその拘りもなくなっている。

●もりしま・ひろし／名古屋市立大学芸術工学部教授

木造密集市街地の将来像を考える
向島国際デザインワークショップ報告

木造密集市街地は、近代都市計画の矛盾を抱えた存在である。その複雑な都市構造と空間の多様性と両義性、住民のアンビレンツな思いに対して、どのような建築的提案や計画的介入をすればよいか、その今日的なあり方が問われている。

この難題に挑戦したワークショップが、7月19日から二週間、東京の下町・墨田区向島で開かれた。集まったのは、建築・都市計画・社会学等を専攻する国内外の学生・研究者・実務家など約150名。予め設定した9つのテーマごとに日本人と外国人の混成チームを編成し、チューターのリードとアドバイスにより、向島の文脈を解読して、まちづくりのプログラム案をまとめ、地元住民のリーダーたちと意見を交換した。

山本俊哉／マヌ都市建築研究所・川の手倶楽部事務局長


すみだ生涯学習センター　会場C


現代美術製作所　会場A


一寺言問集会所　会場B

上の地図は、各チームの選択地域を示す。すみだ生涯学習センター、現代美術製作所、一寺言問集会所は今回のワークショップのメイン会場となった。

ワークショップのすすめ

山本俊哉

テーマ：向島から世界の古い市街地の将来像を考える
期間：1998年7月19日（日）～8月2日（日）
会場：墨田区向島／すみだ生涯学習センター、一寺言問集会所、現代美術製作所ほか
主催：川の手倶楽部・向島国際デザインワークショップ実行委員会（委員長：山田勝巳）
後援：墨田区・向島地区町会自治会総連合会
協力：国際交流基金・INAX・現代美術製作所・マヌ都市建築研究所・POP-UP CAFE
参加者：学生<52名>、大学院生<55名>、大学教員<21名>、実務家<24名>　合計152名

プログラム

7月19日（日）オープニング（ガイダンス／チーム編成／ビデオ上映）　会場C

7月20日（月）～24日（金）：観察・聞き取り調査などによる地域の解読　会場A

7月20日（月）
講演会：陣内秀信（法政大学）「江戸・東京の都市づくりの歴史」
講演会：大野秀敏（東京大学）「東京の街並みの特徴」　会場B

7月21日（火）
講演会：川出純子（INAX空間デザイン研究所）「日本の街並みの素材と色彩」
フォーラム「都市更新の国際比較」
アイシェ・シェンチュレール（東地中海大学）
横堀 肇（住宅・都市整備公団住宅都市総合研究所）
倉田直道（アーバン・ハウス都市建築研究所）　会場B

7月23日（木）
講演会：長谷川逸子（建築家）「向島とすみだ生涯学習センター」　会場C

7月25日（土）　中間発表会　（コメント：チューター）　会場C

7月26日（日）　地元住民に対する中間報告会
フォーラム「向島に住む～中間報告を受けて」
佐原滋元（一寺言問の防災まちづくりを考える「わいわい会」）
高木新太郎（成蹊大学）／小場瀬令二（筑波大学）ほか　会場B

7月27日（月）～31日（金）：まちづくりの提案に関する作業
7月27日（月）　フォーラム「神戸の被災と復興から見た向島の将来像」　会場B
大津俊雄（神戸復興塾）／三谷 真（関西大学）
7月28日（火）
講演会：西島正樹（建築家）「向島と一寺言問集会所の設計」　会場B

8月1日（土）　最終発表会（コメント：招待講師・チューター）　会場C

8月2日（日）　公開発表・討論会
シンポジウム「下町はどこに向かって進むか」
阿部洋一（一言会）／山田勝巳（川の手倶楽部）／延藤安弘（千葉大学）／崔孝昇（清州大学）ほか　会場C

写真は全て、白鳥一信（川の手倶楽部）

ワークショップの初日

すみだ生涯学習センターのマスターホールは、若い連中でいっぱいになった。見渡すと半分が女性。3分の1が外国人だった。その中には年輩の地元住民も混じっていた。

オープニングは英語で始まった。ガイダンスの後、各チームのチューターが順にテーマとプログラムを紹介した。学生たちは事前にホームページに掲載した資料を見ながら、参加するチームを検討していた。

会場をエントランスホールに移し、各チームのパネルの前でチーム編成が進められた。定員をオーバーしたチームは抽選を行った。どうしてもこのチームに入りたいと泣きつく参加者もいた。

外に目を転ずると、特製テントのカフェでパーティが始まっていた。テントをスクリーンにしたオープンシアターでは、向島のまちづくりを描いた映画が上映され、8時すぎまでパーティは続いた。

開催のいきさつ

向島は、まちづくりの視察地として国際的に知られている。ひとつは、コミュニティ住宅等による老朽木造密集市街地の住環境整備で有名な京島地区。もうひとつは、雨水利用の路地尊などで知られる一寺言問地区の防災まちづくり。この8月にも雨水利用国際会議、9月には国際女性建築家会議のスタディツアーが行われて、多くの外国人が訪れている。

今回のチューターでもある友人のティートス・スプリー氏からデザインワークショップ開催の相談を受けたのは、ちょうど1年前のこと。私が川の手倶楽部で学生等を対象にスタディツアーを開催していた頃だ。それが今回のきっかけと言えるだろう。

川の手倶楽部は、地元の有志が10年前に設立した「まちづくりNPO」である。すみだ生涯学習センターの計画や施設運営に対する提言、平成の向島八景の選定や神戸市民の震災体験を聞く会の開催、向島のドキュメンタリー映画製作等、幅広い活動を展開してきた。スプリー氏とは、6年前から川の手倶楽部が続けているハンブルクの下町・オッテンゼンのNPOとの市民交流を通じて知り合った。

昨年の今頃は、墨田区の都市計画マスタープランの素案を検討していた。地元のメンバーは、将来像が見えにくいマスタープランにもどかしさを感じていた。私は、業務として関わった一寺言問地区や京島地区を通じて、空間的なモデルスタディを通じた将来像の検討と共有の必要性を痛感していた。こうしたいきさつからテーマが決まった。

川の手倶楽部では、今回の企画について住民も作業に参加したワークショップも検討した。しかし、言葉の壁や時間的制約等から難しいと判断した。学生や専門家等に将来像を提案してもらい、それをもとに検討することにした。地元の町会自治会総連合には、サマースクールという表現で、協力を求めた。

第1週目

2日目からはチームに分かれ、向島のまちに出た。五感で向島をとらえようと朝から晩まで歩き回って足が棒になってしまった人。共通のアンケート用紙を持ってヒアリングして回った外国人と日本人のペア。子供の学習塾を訪問したり、お宅にあがりこんで話を聞いたグループ。高齢者のダンスパーティや盆踊りに参加したチーム。様々だった。

夜はほぼ毎日、講演会やフォーラムが開催された。防災まちづくりの拠点として住民参


オープニングパーティ（協力＝POP-UP CAFE）


向島のまちをじっくりと観察した

向島住民・一般参加者　約50名（うち外国人参加者：44名）
国籍：ドイツ、トルコ、キプロス、韓国、シリア、フランス、イギリス、アメリカ、ニュージーランド、メキシコ、ブラジル（日本を含め12か国）
大学別：シュツットガルト工科大学（ドイツ）<20>、イスタンブール工科大学・西地中海大学（トルコ・キプロス）<11>、清州大学（韓国）<2>日本女子大学<13>、千葉大学<11>、早稲田大学<10>、東京大学<8>、筑波大学<7>、法政大学<7>、東京工業大学<5>、日本大学<5>、東京都立大学<4>、工学院大学<3>、関東学院大学<3>、昭和女子大学<2>、慶応義塾大学<2>、東京理科大<2>、東北芸術工科大学<2>、大妻女子大学<1>、関西大学<1>、京都工芸繊維大学<1>、京都精華大学<1>、国際基督教大学<1>、芝浦工業大学<1>、成蹊大学<1>、東京工芸大学<1>、東洋大学<1>、明海大学<1>、横浜国立大学<1>
計30校・128名

■収入
地元出資金：15万円（川の手倶楽部・向島町会自治会総連合会）
参加費：82万円
助成金：66万円（国際交流基金・墨田区・INAX）
寄付金：3万円
計166万円

■支出
会場費：17万円
海外参加者招へい費：43万円
講師謝礼・通訳費：33万円
パーティ費：16万円
ポスター等印刷費：23万円
記録費：4万円
郵送・通信費：3万円
材料費・コピー費：23万円
その他雑費：4万円
計166万円

加でつくった一寺言問集会所と、工場をギャラリーに再利用した現代美術製作所がその会場となり、各チームの作業場となった。

ワークショップの参加者は、毎日のように向島に通った。仕事を持つチューターも足繁く向島に通った。夜遅くまで近くの酒場で飲んでいた連中もいた。

トルコ・キプロスから来日した11名は、作業会場の近くの路地裏に一軒家を借りて、向島で寝泊まりしながら調査等を行った。火事や騒音、ゴミ出しに注意を払いながらの生活そのものがワークショップだった。

手弁当のワークショップ

昨年12月にプレ企画として開催したシンポジウム「世界の大都市の古い市街地の将来像を考える」に参加したメンバーが核となってチューターを募った。現地等で何度も会議を重ね、チームを編成し、それぞれのテーマとプログラムを検討した。

事務局はマヌ都市建築研究所に置き、川の手倶楽部のメンバーのほか、東大や早大の大学院生等の協力を得て準備をすすめた。

参加費は1万2千円とした。もっと安くしたかったが仕方がなかった。今から思うと、200万円にも満たない予算で、よくあれだけのワークショップが行えたと思う。文字通り手弁当のワークショップだった。会場費や材料費、印刷費等を切りつめ、多くのボランティアに支えられて当日を迎えた。

第2週目

「最初は、みんなエキサイティングしていたのが、次の段階に入ると、何故こんなまちになったのか、落胆や怒りに変わってきて、うまくコミュニケーションをとれないことにイライラしてきた」。チューターとして参加したナンシー・フィンレイ氏は、こんな風に参加者の心の変化を表現した。

将来像を導くには、場所性を解読し、場所性に適合したプランを検討する。これが今回のワークショップの基本的なアプローチである。向島のように空間的な文脈と社会的な文脈が複雑に入り組んだ場所の解読は魅力的だが、難解だ。十数年も向島のまちづくりに関わっている私でさえそうなのだから、初めて向島に足を踏み入れた学生たちにとってはもっと難しかったはずだ。

にもかかわらず、日曜日に地元住民のリーダーたちから寄せられた、期待や要請に対して何とか答えを導き出そうと、悶々とした後半戦が始まった。

月曜日の夜は、被災地・神戸で復興まちづくりの支援を続けている二人のゲストを招いた。火曜日の夜は、一寺言問のまちづくりに参加した建築家の話を聞いた。チューターの出番が増え、作業を都内の大学で行うチームも出てきた。

ほとんどのチームが徹夜で、土曜日の内部発表会に備えた。発表会場には、大きなパネルや図面、模型が並べられた。参加者のほぼ全員が英語でスピーチをし、コメンテイターの厳しい質問を浴びた。朝から始まり、夜の7時すぎにようやく終了した。

フィナーレから次のステップへ

「下町は、決して破壊するものではなく、改善するもの。肯定して欲しいし、否定もして欲しい。3年後にワークショップを開いて欲しい。10年後、20年後の向島の変化を見て欲しい」。公開発表会の後に行ったシンポジウムは、地元のまちづくり組織・一言会の阿部洋一氏のコメントから始まった。

「住環境改善の要請に対してまちづくりに関わる者はもっと自分の価値観を表に出す必要がある」。「建築家や都市計画家は決しておごってはならない。住民の主体的な取り組みをどのようにサポートできるかが課題だ」。といったチューターの発言。

「職があってまちが形成されている事実を忘れてはならない」。
「地元住民から見ると、路地はすでに形骸化している。新しいコミュニティのあり方が問われている」。といった地元住民等の発言。

残念ながら、白熱しかけてきたところでフィナーレを迎えた。しかし、第一段階が終わったまでだ。現在、インターネット上でワークショップの展示会が行われている。年末に、最終日のシンポジウムの延長戦を向島で開催する。来年は、これを更に一歩進めてデザインの展示会を行うことも計画している。向島の連続的なワークショップは、まだ続く。

●やまもと・としや／マヌ都市建築研究所取締役、川の手倶楽部事務局長

ワークショップの様子をホームページで紹介しています。http://kingo.t.u-tokyo.ac.jp


学生たちの成果を解説するチューター


居酒屋でもインタビュー


地元住民への中間報告


内部の最終発表会は7時すぎまで行われた

ワークショップ・チーム紹介

●Team Nariwai
「新しい生業のまちの将来像に向けて」

佐藤賢一（都市環境計画研究所）
宮田裕介（IRP地域環境プランニング）
佐久間康富（早稲田大学）
ニット産業の集積に着目し、住み働く生活様式の保全、まち活性化の方策を、整備計画・寸劇により、一日で服ができるファクトリーツーリズムとガラスの箱を町工場にはめ込み、生産過程が見える街並みとして表現した。

●Team Intermediate Space
「隙間のコンテクストを読む」

有馬立郎（計画意匠研究所）
北原理雄（千葉大学）
加藤浩司（千葉大学）
遠藤 新（東京大学）
建物間の隙間に着目し、路地や裏庭等の様々な隙間を探し歩いた。街区から宅地までスケール等の連係や都市化過程での変遷を理解した上で、建替時の壁面後退を想定した今後の隙間像を、隙間タイプ別に提案した。

●Team Fac(ad)es
「柔らかい障壁：Making Fac(ad)es」

Astirid Klein（クライン・ダイサム・アーキテクツ）
Mark Dytham（クライン・ダイサム・アーキテクツ）
Fadi Jabri（東京大学）
Andrew Barrie（東京大学）
木造密集市街地におけるプライベートとコミュニティの物理的な障壁のあり方に着目し、多様なマテリアルと重層的な構造により柔らかくて賑わいのある商店街の「Fac(ad)es」を縮尺20分の1の模型で表現した。

●Team Complex
「複雑性を再生する居住」

大崎 元（建築工房匠屋）
長谷川栄子（ユニット・アオ）
鄭 鎮周（清州大学）
西島正樹（プライム）
松本暢子（大妻女子大学）
崔孝 昇（清州大学）
街の豊かな複雑性はプロセスが生み出すと考えて、個々の更新プログラムと建築が連鎖反応的に展開するプロセスを具体的な街区で構想した。そこでは「住むこと」を起点にして地域の仕事や教育、公共が共振し始めた。

●Team Urban Change
「都市変化の再考とリモデル」

Ismail C Istek（東京大学）
Manuel Tardits （みかんぐみ）
Ayse Senturer（東地中海大学）
Jutta Keher（シュツットガルト工科大学）
弾力性のある都市変化の実態に対する計画的な介入の可能性に疑問を持ち、都市構造の変化と住民意識の解読を試み、漸進的かつ構築的な街区更新プランや建替えダイスゲーム、路地を繋ぐリボンプラン等を提案した。

●Team Urban Unit
「アーバンユニット」

Nancy Finley（ファクター・エヌ・アソシエーツ）
千葉 学（ファクター・エヌ・アソシエーツ・東京大学）
Titus Spree（東京大学）
ミクロなスケールでの都市空間への介入とそこでのプログラムの提案。それは空地を利用した野菜畑、空家での傘の貸出センター、単位空間の増殖で作る学生寮等、住民を巻き込んだ持続的で加算的な変化を促す仕掛けである。

●Team Layer
「<みち>から<まち>へ、あるいは活動密度について」

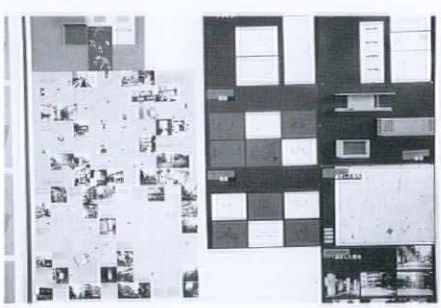
藤野雅統（ファブリカ・アルティス）
新井清一（京都精華大学）
Thomas Geissle（シュツットガルト工科大学）
越野和香（芝浦工業大学）
生活のアクティビティを代弁する玄関や植栽等16の要素の分布を調べて街路の性格付けを行い、街路の保存・統廃合による街区整備、新住民に対応する新街路の重ね合わせ、既存街路の活用方法等の可能性を探った。

●Team Mosaic
「アーバンビレッジ向島：
コミュニティモザイクの調和と創造」

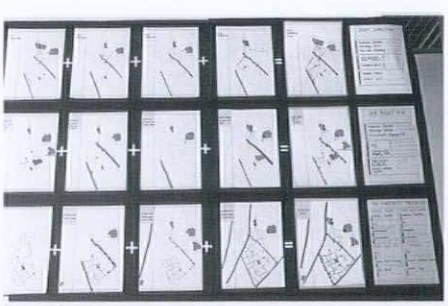
Dorothee Cibla-Pucelle（都立大学）
門脇美子（千葉大学）
村林正次（住信基礎研究所）
山口まみ（住信基礎研究所）
松本暢子（大妻女子大学）
多様なコミュニティのモザイクのあり方に問題意識を持ち、価値観や生活スタイルの異なる人物になってまちを歩き発見した課題をもとに、コミュニティ形成や商店街再生等に関するソフトプログラムを提案した。

●Team Free Time
「『まち遊び』に生きる――遊びネットワーク調査と提案」

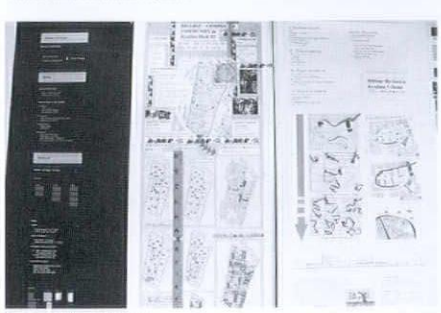
矢部恒彦（法政大学）
大橋 渉（横浜国立大学）
北原理雄（千葉大学）
人的ネットワークの重層性こそが向島の生活を豊かにしている。そこで、地域での多様な遊びからネットワークを参与観察し、記録のビデオや写真等を利用して「対戦型なごみゲームカード」と「なごみ空間」を制作した。


Team Urban Unit


Team Intermediate Space


Team Mosaic


Team Fac(ad)es


Team Urban Change


Team Free Time

チーム・チューターより

Making FAC(ad)ES

クライン ダイサム アーキテクツ

小さく高密度にひしめきあっている向島の建物のファサードに露出しているものを手ががりに目に見える姿や空間や機能、そして社会のいろいろな可能性を模索しようということからスタートした。

向島の町の向かい合ったファサードは、空間的にも社会的にもインテリアと路地との間に何か洗練された関係を持ち、個人的な営みとコミュニティライフをつなぐバッファーゾーンをつくっている。壁の開口やバルコニー、植物、看板、洗濯物、ゴミ箱、日常生活の中で個人を表現する様々な要素が、配置や色、光や素材を伴って薄っぺらなはずの建物の表面に浮かび上がる。そこには控えめで曖昧さをもった調和がある。

古い木造の建物はいつか建て替えのときがくる。そのときのために現代的な材料や方法を使った既存の建物、新しい建物を巻き込んだ新しいバッファーゾーン、ファサードを提案する作業を始めた。

まずPhase1。ファサードの調査、私達も含めた約20名は歩きながら面白いと思ったものをピックアップ。特に気になったものは個人的に調べることにして、それぞれのファサード像を持ってもらうことにした。

Phase2は各自の選んだ場所でのスタディー。立面と1～1.5mの奥行きを持つ断面をスケールを守った図面やスケッチで発表し合った。当然、提案は人それぞれでバラエティーに富んだものになったのだけれど、ずらっと路地のように並べてみると似た部分が見つかったり、提案の考え方が実は共通していたり、曖昧ながらも作品や参加者の中に何かの関係が生まれてきているようだった。この話し合いの中でポイントをピックアップしているうち自然にグループが出来てきていたようなので、それを活かしてPhase3に移ることになった。

Phase3は狭い商店街の交差点を設定して、グループごとに連続するファサード模型を製作した。グループの中では隣どうし意識しながら自分なりに作ってみる。この場所は商店、住宅などいろいろあるため、違うグループが向かい合ったときの表情がどうなるかとても期待していた。実際出来上がった町並みには大きくわけてふたつのタイプがみられた。ひとつは棚のようなフレームに何かプラグインしてみたり出来るもの。もうひとつは折り畳んだり開閉したりして道路に張り出す、隣とくっつく、という仕組みになったもの。どちらの仕掛けもそれぞれに違った表情を持っていて交差点状に並べてみるとライブリーな雰囲気が感じられた。

ファサードには住人それぞれの事情があらわれるため柔らかいシステムづくりがポイント。今回、参加者の楽しみながら自然に関係がうまれてくる状態を見ているうちに、このプロセスそのものを大切にしてすすめることが必要だと考えるようになった。ルール作りに力を使い果たすのではなく、それぞれの提案との微妙な関係から曖昧さをもった仕組みが編み出されるプロセスを全員で体験するほうがリアリティのある作業になると思った。

現実的な提案にはまだ届いていないかもしれないけれど、模型を前にしてプロセスを思い起こしていると次のフィルターも見つかる気がしてくる。●Klein Dytham Architecture



チーム・チューターより

継続されるべき「模索中」

藤野雅統

このワークショップは、一般的な表現からすると「まちづくり」のために行われたのであったが、しかし、向島という「まち」は、つくられなければならない何を求めているのだろうか。何が欠落しているのだろうか。

人が集まり、住居が集まっただけで、つまり一定の「量」が備わっただけで「まち」が出来上がるわけではない。「まち」にするという確固たる意志が共有され、結果として「質」的な変化を経てはじめて「まち」になるのである。そういったことが、日常の生活の中でしごく当たり前に行なわれているのが向島であるように思われた。

現状には様々な不都合があるだろうことは相違ないが、そのひとつひとつに時間的な、あるいは人間的な様々な経緯があり、それらの積み重ねの上に「まち」が維持されているということに、居住者たちは充分に意識的である。相互に少しずつの譲歩や妥協、矛盾、犠牲を抱え込みながら「まち」を維持してゆくという態度は、きわめて素朴な、しかし成熟した公共意識に根ざしている。そう、彼らにとって「まち」はつくられるのではなく、過不足なく維持されるべき公共財産なのだ。

向島の界隈を歩きながら、どこかをいじればどこかが壊れてしまう、そんなきわどいバランスの上にこの木造高密度市街地が成立していることは明らかと思われた。

そういった総体を、ひと掴みにして理解しようとすることよりは、提案をする→その結果どこかでバランスを崩す→その評価をする、そういう繰り返しによって物事の軽重を推し量ってゆくといったプロセスが必要なのではないか。様々な不都合を承知の上でありうべき、または可能な姿を示すといった、ある意味で逆説的な提案こそ、国外からの参加者や建築系／都市計画系／社会学系の学生たちの混成となる各チームには相応しいのではないか。提案内容の有効性の判断は、提案する側と住民との相互のコラボレーションとシミュレーションの継続によってのみ可能となるのではないのか、その前段の投げかけるという役割をこのワークショップが担うのではないか。そう思われたのである。

どこまでも路地に入り込み、住居に上がり込んで延々と話し込み、昼には子供たちの後を追っかけ夜にはカラオケや焼き鳥屋について回り、メモをとりスケッチをとり、写真やビデオを写し、そうやって各自の思い描く向島の姿を残していった参加者たちは、すでに百余の個人に戻って別れていった。その時点で今回の目標の半分は達成されたといえる。それは優れたサマーセミナーであった。しかし残りの半分は未だ「模索中」である。

おそらく向島を舞台としたこのワークショップは、かたちをかえて数年のうちに再度催されることになるだろうし、また、小さな、しかし可能性に満ちた提案は漸次なされ続けることだろう。これからも続く長い時間の中で、9チーム計20を越える提案の引き起こす軋轢や歪みといった負の部分こそを貴重な成果として、議論は継続されたい。

成果を求めて慌てることではない。ただただ持久力を持った「模索中」であり続けることが、「まち」を維持してゆくにはもっとも相応しいのではないか、と考えるからである。●ふじの・まさと／FABRICA ARTIS



チーム・チューターより

活気のある文脈の継承法

ティートス・スプリー

今回のワークショップでは、次の2点が強く印象に残っている。ひとつは、参加者の知ることへの努力であり、もうひとつは、我々の未熟さを鏡のように映し出す向島の持つ場所の力である。

ワークショップの開催は、何よりもある場所に交流の機会を設けることを意味する。具体的な成果を求めたくなるが、向島のような場所を相手に、わずか2週間で得られるものではない。ワークショップで得られる成果以上に重要なのは、そのプロセスであり、何よりも問題に打ち込む集中力である。今回はその集中力が印象的であった。

このワークショップの意義は、まちに取り組む視点や概念を出し合える「初めの一歩」となることであり、成果はおそらくもっと後で形として表れるものである。この2週間、参加者は全力で向島を知ろうとし、将来像を提案しようとした。この努力は恐らく小さなステップでしかないが、将来にさまざまな結果を生み出す可能性を持つ。大きな成果はむしろ参加者自身が得られたのではないだろうか。問題に打ち込み、何かを探し出す努力による発見である。さまざまな言葉の障害や文化の違いを越え、すべての参加者が何かを探し出そうと集中した。向島は、海外の参加者同様、時に日本の参加者にとっても未知の世界であり、場所の観察にはほとんど言葉を必要としなかった。

都市と真剣に取り組む上で、向島はワークショップの対象地として理想的である。建物などの既存の物理的環境とひとびとの生活環境が不可分の関係にあるからである。向島では、欧米や日本の他の都市とは違い、生活空間が閉じた個人空間に引きこもっていない。向島ではひとびとの生活がまちに表出しており、まちの重要な要素となっている。向島はさまざまな課題を抱える一方で、我々にそれ以上に強烈な存在感を示す場所でもある。我々にものを「映し返す」力を持つ存在である。

計画者として、我々は物事を「上から」見下ろす癖がある。仕事では重要だが、向島のような場所ではほとんど意味をなさない。都市の活力ある人間的な部分、計画者としては捉えにくいために距離をおき、多少抽象化しがちな部分が、ここでは目の前に現実として映し出される。我々がしばしば利用してしまう用意された小手先の「手品芸」は、ここではまったく出る幕がない。

向島での取り組みを通して参加者が得られたものは、比較的理解しやすい。難しいのは向島に対して我々がどのような将来像を描けるかである。向島が活力に溢れ、社会的な文脈を持つこと、そしてその文脈を計画に反映させなければ、将来像を描けないことを我々は知った。公表された多くの提案で、文脈に関わる議論の跡を追うことができる。形の「提案」よりは、むしろまちのプロセスを理解し、それに対する考え方や姿勢を提示しているものが多かった。向島の将来への展開はプロセスとしてのみ理解できる。我々はこの複雑なプロセスに第一歩を踏み出したばかりであり、もちろん解決方法は用意されていない。ワークショップでは、「種まき計画」とも呼べるコンセプトが多く提案された。複雑な都市の現実と取り組む上で、これは最も目的にかなった進め方である。ある形態を現状に「覆い被せ」るのではなく、問題のある空間とポテンシャルを探し出し、そこに植物のように根をおろしていく進め方である。こうして初めて、向島のような場所の将来に影響を与えることができる。それは変化を引き起こすだけでなく、その場所のプロセスに順応できなければならない。

● Titus Spree／東京大学大学院修士
(訳＝亀山恒夫)



参加した学生から

「国際」という言葉についついひかれて、このワークショップに参加しました。国内外を問わず、他大の学生と知り合えるし、英語の勉強にもなるのもいいと思いました。

向島のことはほとんど知らなかったのですが、私の原風景と似たまちなみや人の様子を向島では何度も発見することができました。一番驚いたことは、地元の方々が、私たちに関心を持ってくれたことです。まち歩きやグループ作業中、多くの方が声をかけてくれました。

英語が公用語だったので、発言に関しては多少個人差があったと思います。しかし、多くの学生と細かい所まで踏み込んで議論し、徹夜で作業したことは、私にとっては非常に楽しい経験でした。

●姫野裕子／東京工業大学大学院　理工学研究科　坂本研究室　修士1年

大学やその専攻、職業、さらには生まれ育った文化など、自分とは違うバックグラウンドを持つ人たちが、建築やまちに対してどんな視点を持っているのか興味があり、今回のワークショップに参加しました。

この2週間は、実際に住んでいる方々に直に話を伺いながらまちや建築の提案を考える、初めての機会となりました。たくさんの人たちと話をするうちに、それまでは「頭で」理解していた、向島のコミュニティの「親密さ」を身をもって学ぶことが出来ました。これが当初の考え方に影響を与え、変えていくというよりは、弱いところを補強し、どうすれば良いところを伸ばせるか、そんな「全体のバランスを図る」という提案のスタンスに引き継がれて行きました。向島を歩き回るうちに、まちに対するひとつのスタンスが出来たように思います。

例えば、「向島に住む13歳のサッカー少年」のような役づくりをして、まち歩きをした時、見えたまちの姿は普段気付かないものばかり、とても面白い体験でした。子供たちにヨーヨーを教わったり、屋上で花火大会を見せてもらったり、2週間本当にたくさんの人に出会い、色々な話が出来たことがとても楽しかったです。

●水沼 健／京都工芸繊維大学大学院　工芸科学研究科　森田研究室修士1年

ある日、研究室にワークショップの手伝いの依頼がきて、その後の忙しさも知らず引き受けてしまったのがきっかけといえばきっかけである。

私を含めて4人がそのパンフレット作成にあたった。それまでは向島のまちを知らかったわけで、地図上の網の目に張りめぐらされた道の構成になんともいえない迫力を感じた。そしてその正体は「路地空間」として現れた。本来「道」は公のものであるが、私的な要素の表出によってその空間にはある磁場が発生しているのではないか。そして、そこから発せられる向島のエネルギーをこの町が変化していく中で、失ってしまわないような、また新しいエネルギーとして変換していけるための装置を提案するのが今回のワークショップの論点だったと思う。

いつの時代も新旧の問題は堂々めぐりだけれど、なによりこのワークショップで向島の町に知り合えたこと、考えることができたのは本当に幸せなことだったと思う。

●古田五波／早稲田大学大学院　理工学研究科　後藤研究室　修士1年

文化的背景の異なる海外の学生達が、日本の風土や街並みをどう捉えるかということを知りたいと思って参加した。

建築を志す人間と都市計画を志す人間では、一つのゴールに向かう上で、その思考方法の違いが、デザインや計画のプロセスに自ずと現れるということを改めて実感した。また学生にとって、まちづくりに対する感性、思考力を養うという点では、最高の舞台であったが、住民と一緒に作業したわけではなく、実現を目論んだものではなかったため、ある意味研究としての要素が強かったように思われた。

非常に短い期間の作業だったが、国籍を問わず、様々な思考方法を持つ人びとと熱く語り合えたことは、私にとって刺激的であり、また得難い思い出となった。

そして最後に、酒を酌み交しながら、同年代の男同志で盛り上がる話の内容に、国境はないと認識できた事は、ワークショップから得た大きな収穫のひとつであった。

●荒賀俊介／筑波大学大学院　環境科学研究科　小場瀬研究室　修士1年

PLUS

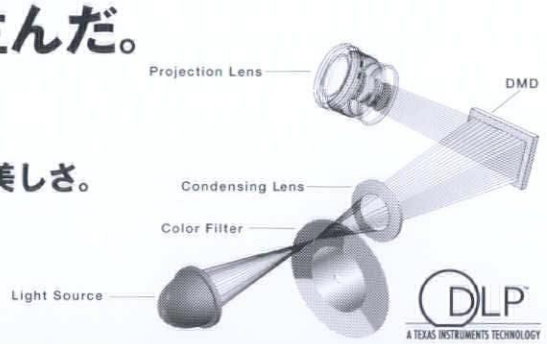
さよなら、液晶。



モバイル時代のプロジェクタは、
この方式、このサイズ、この明るさ。A4 Size 600 ANSI Lumens

液晶とは根本的に違うDLP™方式が、プロジェクタの新たな可能性を生んだ。

①A4サイズ、4.5kgで、600ANSIルーメンの高輝度。
②鮮明で、クリアな画像。
③DVDなど高画質の情報ソースを再現すると際立つ、美しさ。
④目線の高さに投影するとき、画面が台形に歪まない。
⑤S-VGAフル対応、XGA圧縮表示。



デジタルプロジェクタ

UP-800

＊DLP™(Digital Light Processing™)、DMD™(Digital Micromirror Device™)は米国テキサスインスツルメンツ社の登録商標です。

メーカー希望小売価格 ¥898,000(税別)

プラス株式会社 P&C事業本部 〒261-8501千葉県千葉市美浜区中瀬1-3-B22 Tel.043-296-3706 Fax.043-296-3073 http://www.plus.co.jp/

◎ XGAフル表示、A4モバイルサイズ、1000ANSIルーメン「UP-1100」展示会開催 9月30日(水)10月1日(木)2日(金)

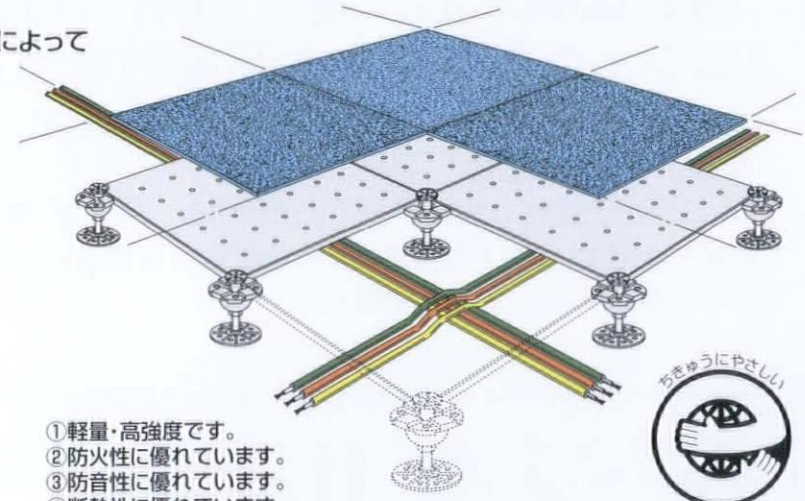
◎午前10:00～午後5:00 ◎会場：青山TEPIA ABホール(入場無料) ◎お問い合わせは 0120-331-059

KOKUYO

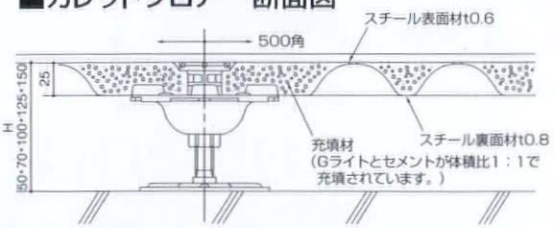


ガラス廃材を生かした
地球にやさしいOAフロアー

私たちの美しい地球のために――。
コクヨカレットフロアーは、ガラスビンリサイクルによって
生みだされた超軽量素材「Gライト」を充填した
エコロジー製品。
先進のインテリジェントオフィスを支える
コクヨの技術と、画期的なマテリアルが出会った
ハイクオリティなOAフロアーの導入により、
地球の環境保全に貢献できます。



■カレットフロアー断面図



①軽量・高強度です。
②防火性に優れています。
③防音性に優れています。
④断熱性に優れています。
⑤経済性に優れています。

ちきゅうにやさしい
リサイクル
エコマーク認定品

カレットフロアー4枚分(1㎡)で、たとえば、500mlビン3本分に相当。
分別回収でカレットの在庫が過剰気味な自治体を積極的にサポートします。

Cullet Floor
コクヨ カレットフロアー

コクヨ株式会社 建材事業部 〒100-0013 東京都千代田区霞が関3-3-2 新霞が関ビル ☎(03)5510-4161
お問い合わせ、ご相談はフリーダイヤル(全国共通)
お客様相談室 0120-201594

失われた時と空間を求めて

長尾重武

建築のストックをどの様に維持し使い続けるか。スクラップ・アンド・ビルドからサスティナブルへ、考え方を大きく転回させなければならない。都市も記憶に満ちみちた場所に変えていくべきだろう。たとえばイタリアのチェントロ・ストリコ（歴史的都心）のように。そのような考えを実践している仲間に出会って感動した。「京町家再生研究会」の皆さんである。この文章は彼らの仕事とそれらをめぐる豊かなネットワークに、そして「京都」に捧げたい。

「京町家再生研究会」との出会い

1996年春、イタリアを訪れていた私は、宗田好史氏とローマで会った。その時の彼の同行者が小島冨佐江、東樋口護、西巻優の各氏、京町家再生研究会の有力メンバーの一行だった。食卓を囲んで、ボローニャの最近の都心再生の動きなどを巡って話がはずみ、京都で進行中の新しい活動に耳を傾けた。4月末、愛知県立美術館で講演する機会に、京都を訪れ、小島邸の座敷に集まり、話し合った。翌年、雑誌『Re』でまた共に仕事をした[*1]。

1998年4月末、再生されたばかりの御茶屋〈望月〉の2階座敷で再生研の仲間に久しぶりに会った。その立地の良さ、再生の物語の面白さにすっかり惹きつけられた私は、すでに発表したものも含めてこれまでの活動をまとめるよう奨めた[*2]。

再生された京町家

ここに報告されている町家再生の例は、新旧のせめぎ合いや融合を示していてじつに興味深い。巻頭の〈望月〉は祇園白川の御茶屋街の一角に位置し、白川の思いがけない豊かな眺めが魅力的である。この建物の修復を担当した建築家・野間光輪子さんがそこの女将となった稀な例である。〈ミホ・プロジェクト〉も同じ建築家の手になるものだが、座談会に目を通せば、この仕事が多くの人びとの豊かなネットワークの賜物だということが分かるだろう。

〈橋弁慶山町会所〉は祇園祭の「橋弁慶山」を出す町の「町会所」をかなり厳密に修復した例で、大谷孝彦氏の丁寧な仕事であり、普段は「和座百種」という工芸品の店舗として使われている。

〈セカンド・ハウス〉はかつての主要通りである東洞院通りに面した呉服屋をパスタとケーキの店に再生させたもので、やはり野間さんの仕事である。〈アルトレタント〉もまた店舗として蘇った町家として注目される。つくり酒屋の店がイタリアン・レストランに再生された大胆な例と言えるだろう。担当は木下龍一氏である。

「京町家再生研究会」と「京都都心町家調査」

以上の様な再生の仕事の背景には、望月秀祐氏の論文にあるような6年におよぶ活動がある。それは景観行政主導から市民による町家再生への道筋を示している。そうした活動の延長線上にある、最近の町家調査が新しい傾向を示すようになった。

「京都都心町家調査」と名づけられた調査研究は、1.「建物悉皆調査」、2.「京都都心町家暮らしアンケート調査」、3.「町家住人訪問アンケート調査」、から成り立っている。その詳細は宗田氏の論文参照。



小島邸　座敷

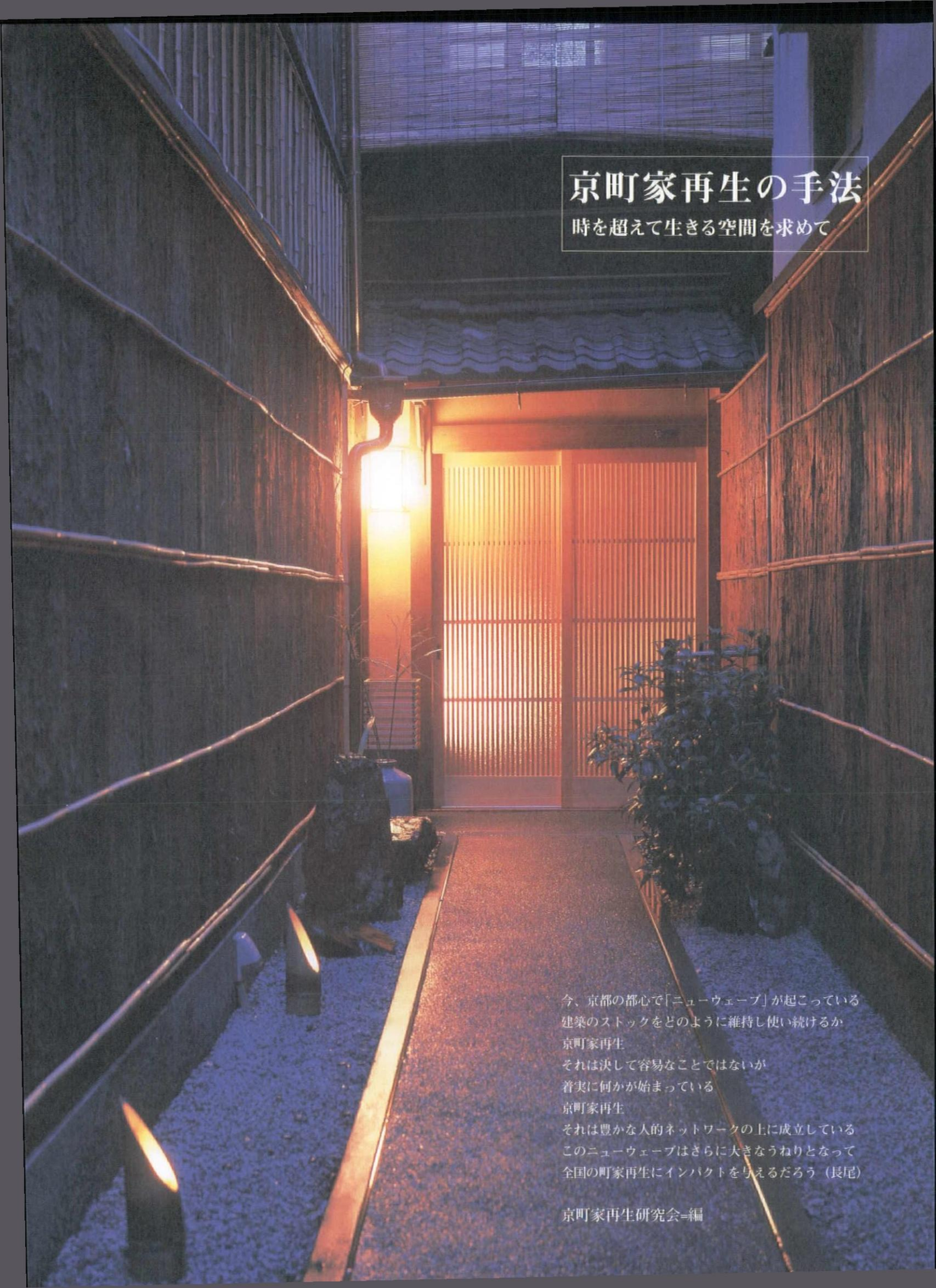


小島邸　座敷　夏の建具

その背景にはイタリア流の「レスタウロ（修復）」の思想があり、建築類型学的な都市と建築の調査方法がある[*3]。

京都の社寺には膨大な文化財が保護されていることは周知の通りである。京都の古い町並みが「伝統的建物群保存地区」指定にもとづき、群として保護されてきた。東山の清水の産寧坂地区、嵯峨の鳥居本地区、洛北の上賀茂社家街地区といった社寺門前町が3つと、祇園白川の御茶屋街である。しかし、これらはかなり特殊なものだ。

これに対して京都の都心は、手つかずであった。町家はつぎつぎとビルに建て替えられ、かつての秩序だった町並みはすっかり変貌した。この調査研究はその都心に着目したのである。それは大きな意識の転換であった。「京都都心町家調査」は伝統的な町家のみならず、かなり改悪されてしまった旧町家から戦後のものまで含めて、木造住宅のすべてを視野に入れている。また、それを支える技術者、職人に関する調査を忘れていない。いずれにしても現状の町家ストックを明確に描き出し、情報を公開し、行政側の支援も含めて、広範な活動に転化していく大きな可能性を秘めている。

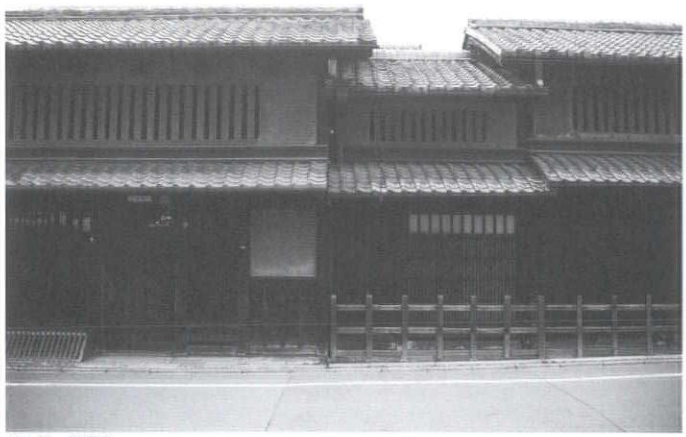


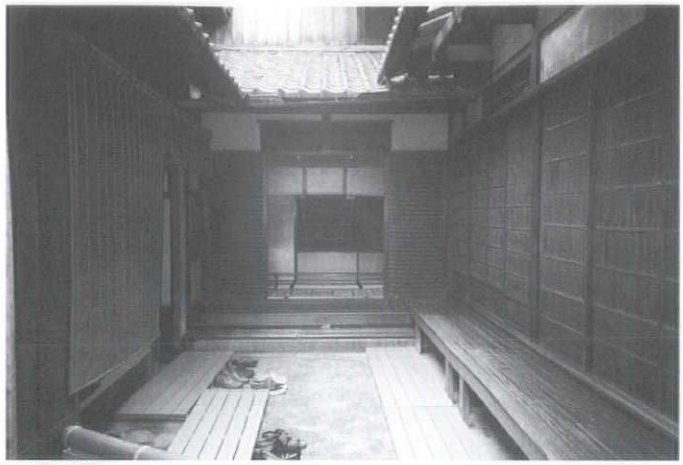
京町家再生の手法

時を超えて生きる空間を求めて

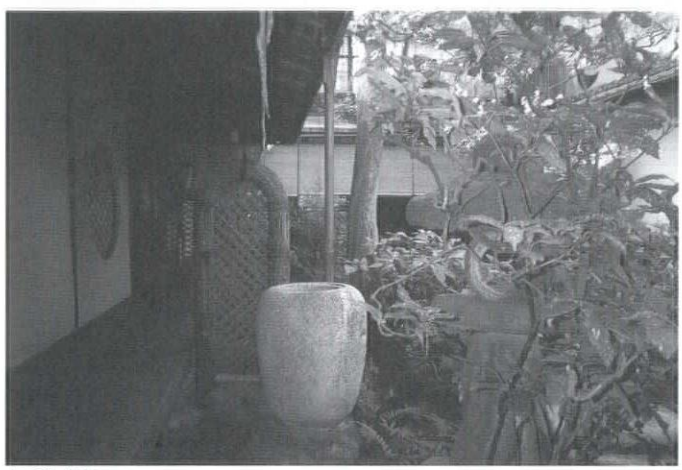
今、京都の都心で「ニューウェーブ」が起こっている
建築のストックをどのように維持し使い続けるか
京町家再生
それは決して容易なことではないが
着実に何かが始まっている
京町家再生
それは豊かな人的ネットワークの上に成立している
このニューウェーブはさらに大きなうねりとなって
全国の町家再生にインパクトを与えるだろう（長尾）

京町家再生研究会=編


杉本邸　表構え


杉本邸　玄関


吉田邸　庭


吉田邸　坪庭

祇園祭――京町家の魅力

今年の祇園祭にゼミの学生とともに訪れた。八坂神社にお参りし、祇園白川の御茶屋街を訪ね、〈望月〉に上げてもらった。すっかり夏建具に一変した室内の雰囲気は屏風や飾られた大きな生花など清々しかった。白川はキラキラと陽の光を反射しながら彼方に流れていた。

新町通り南観音山の町に、小島邸が祭りの華いだ雰囲気の中にあった。夏建具が見事に涼味を添え、明るい青を基調とした1畳単位の木綿の敷物に感銘し、飾られた六曲二双の大屏風の平家物語に眺め入った。

学生たちと別れ、私は宗田氏とともに杉本秀太郎邸に向かった。宵々山の雑沓がはじまっていた。徒歩で5、6分ほどのところにある豪勢な町家、杉本邸の規模と洗練された意匠に圧倒され、その保存には並々ならぬものがあると感じた*4。

宵山、雨模様の午後、吉田幸考次郎邸を訪れた。夫人の説明ののち邸内をひとめぐりして、座敷に戻ると冷たい御茶が並んでいた。吉田氏がこの町家を修復した当時の話をしてくれた。坪庭と奥庭に静かに降り続ける雨音が心地好かった。屋内の仄暗さの中にいてふと風が抜けていく。店の外を人々が行き交い、飾りつけをのぞき込む。店、坪庭、次の間をへて私たちは座敷にいる。そこから縁側のむこうにやはり閉ざされた庭があり、奥に蔵がある。なんという見事な階調のある変化なのだろう。私たちは吉田邸の御当主を囲んで話をしている。氏が帰宅した時、最初にしたのは飾りを直し、外に出てそれを見て、もう一度直したことだった。この町家は彼と夫人のもとで生かされている、そう思った。

晴天に恵まれた山鉾巡行の日の暮れ方、〈望月〉の2階から白川沿いの道に神輿がつぎつぎとやってくるのを眺めた。なんという贅沢だろう。望月、小島邸、杉本邸、吉田邸を訪ねて、京町家はそこに生活している人々とともに生きている、とつくづく思う。

京町家再生、それは決して容易なことではないが、新しい運動のたくましい息吹きに触れて私は大きな刺激を受けた。それは、まさしく「ニューウェーブ」と呼ぶにふさわしい。それが着実に京都の都心で行われていることの意味は大きい。京町家再生はとても豊かな人的ネットワークと京都という場所の文化的、人間的資源の上に成立していると改めて思った。京都のこの「ニューウェーブ」はさらに大きなうねりとなって、全国の町家再生に少なからぬインパクトを与えるに違いない。

●ながお・しげたけ／武蔵野美術大学教授

註

＊1.「Re　No. 110」　特集レスタウロ・イタリア編（財）建築保全センター、1997年11月

＊2.「京町家通信」B4変形版　10頁あまりから、30頁近いものまで。（創刊号・1995年2月、2号・1995年2月、3号・1996年9月、4号・1997年9月）「京町家再生研究会」から発行されている。

＊3. 報告書「「木の文化都市」京都の伝統的都市居住の作法と様式に関する研究」　A4版190頁、1997年10月

＊4.「京の町家」写真＝西川孟、文＝杉本秀太郎、淡光社、1998年
また京都の町家のガイドとして、「京町家」（写真＝神崎順一、文＝新谷昭夫　光村推古書院、1992年）が簡潔で写真が美しい。

祇園望月　1998年

所在地：京都市東山区新橋通花見小路西入橋本町
用途：貸席飲食業（元御茶屋）
設計・管理：野間建築設計事務所　野間美輪子

建築規模：木造2階建て
敷地面積：117m²
延床面積：122m²（1階63m²、2階59m²）



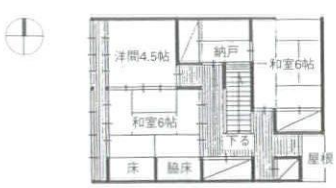
2階和室

祇園望月は1998年春に新装オープンしたばかりの御茶屋さんである。白川が祇園新橋をくぐってすぐ流れを急に曲げるそのたもとに建っている。戸口を入ると間口2間足らずの露地が伸び、玄関を入って、1階の座敷からは白川を望むことはできない。それは垣根の向こうに音を立てて流れている。その手前の小さな弁天様の祠が愛らしい。2階に上ると、樹木の下を遠くへ流れて行く白川の眺めが実にみごとであり、京都にいることさえ忘れさせる。

望月はもうずいぶん長い間そこで御茶屋さんを営んでいるかのようにそこにある。確かにこの建物はもともと「石里」という御茶屋さんであったが、かなり以前から営業を止め、住居として使われ、そのため洋間他が増築されるなど改造が著しかった。

そして売りに出ていたこの建物を見た、野間光輪子、小島冨佐江さんのふたりが再生に取り組むことになった。しかも今や、野間さんは望月の女将となっている。

●長尾重武



2階平面図（改装前）



2階平面図（現在）



1階平面図（改装前）



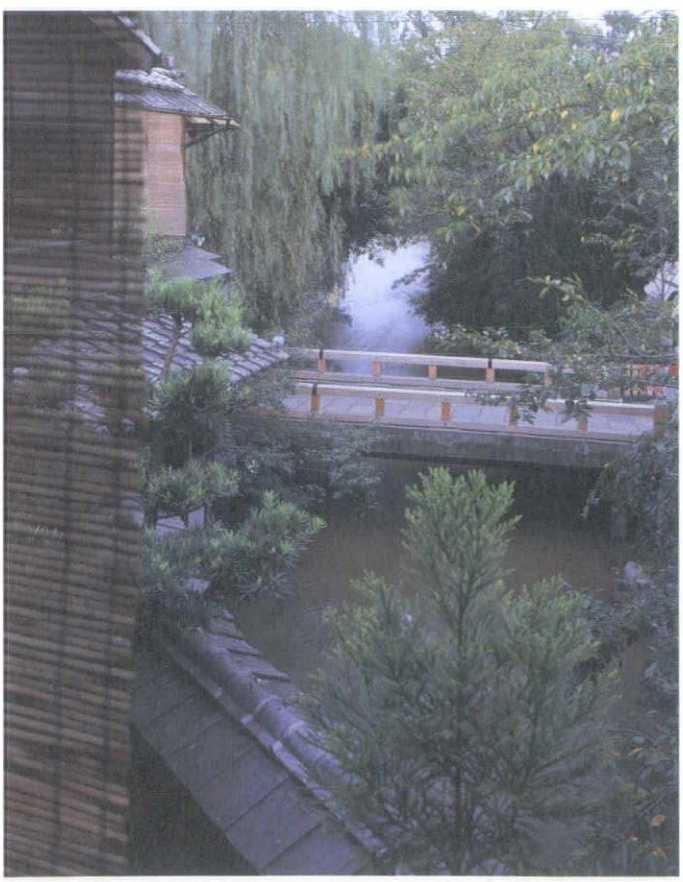
1階平面図（現在）



弁財天のある庭



1階玄関



2階より白川を見る

対談

引き寄せられた人たちの町家再生——望月完成までのいきさつ

野間光輪子×小島冨佐江　聞き手=大谷孝彦

野間　去年の2月に、たまたま設計事務所の関係でおつきあいしている不動産屋さんから、2週間で売りたい家があるんだけど協力してくれないかっていう話があったんです。

それで見に来た時、すごかったの。ほんとにもう、生活のにおいがいっぱいっていう感じで。洋間に変えてるし、80歳のおばあちゃんが住み易いように、庭の方にお風呂は出してるし、洗面所はあるし。弁天さんを囲んで、ほんとに庭がちょっとだったんです。ずっと洋間も出てて。2階も4畳半は洋間になってましたし。もちろん全部サッシだし、北側の和室なんかは中が見えないくらいお洋服が。

小島　クローゼットみたいな状態でしたね。

野間　入ることもできなかった。だけどね、なんか、ほら、玄関の路地からね、造りがっていうか、もともとあったものがものすごく空間的に豊富だったんだろうなっていう感じはしたんです。

小島　そうですね、なんかこう包んでくれるものがふわっと廻りにありますね。

野間　なんかものすごく自分の体の中で、元通りにしたいっていう気持ちがあったんですね。元々お茶屋さんとして建てられた建物だから、非常に小粋な感じがして、小さいんだけども、とても凝縮された良い空間だなあと思った。密度が高かったんですね。それで2階へあがったの。そしたら2階から見た川の景色っていうのが、ええーって思うような景色だったんですよ。京都っていうんじゃなくて、なんかこう大きな川、鬱蒼とした熱帯雨林の大きな川をぎゅっと凝縮したような、そんな感じがして、すごくなつかしいなとか、じっとここで見ていたいとかね、そういう思いがして、これはなんだろうっていうような気がしたんです。ただ誰かに紹介するんではなくってこれはなんとかしなきゃならないなって、小島さんに連絡を。

小島　それで、私とこにお電話頂いて。ほな見に行きます言うて、ここへ来て。やっぱりすごくあの最初に入るとこの印象が強かったですね。ここに本当にこのままあったような気がするぐらい違和感が無いし、生活のためにつこたはったっていう方が、この家にしては特別なことやったんかなあっていう気が。

野間　あとから聞いたんだけど、ここにお住まいの方たちは住み続けたかったんだけども、相続の関係でどうしても出なきゃならなくなったので、ずっとこの弁天さんにこの家をきちんと守ってくれる人にご縁をつけて下さいって、拝み続けてたって。

小島　家帰って母に、お金があったらあの家欲しいって言いましたもん。

野間　それから何度もやっぱり来たわけですよね。おばあちゃんや娘さんとも仲良くなって。いろんな話をしていくうちに、この家は個人が持って住むんじゃなくて、もっと多くの人たちにここで楽しんで欲しいっていうことを要求しているんじゃないかなって、勝手に私が思ったわけなんですね。まあもともとお茶屋さんとして出来たから多くの人たちが楽しんだお家でしょ。だから家が大勢の人たちに愛されたいのかとね。

小島　なんかあの時はばたばたとあの人どうやろ、この人どうやろって言うてましたねえ。でも今考えたら、結構とんとん拍子に話がすうっといきましたねえ。

野間　というのも、持ち主が私たちの話を聞いて、私たちに委ねたいっていう気持ちになってくれたんですよ。それで、待って下さったんです。だから契約したのは5月ぐらいだったかなあ。最初は1週間で、なんて言っていたけれど……。

家の魅力に惹き付けられた人たち

野間　ここの露地の距離がね、すごくいいなあと思ったんです。家へ入る期待感を高めるのにちょうど良い距離だし、それで入ってきたらこういうお座敷があって、庭があって、その先が川でというように開けている。理想的な形ですよね。2階へ上がったらあれだけひきがあって、川が見通せてっていうのは、なかなか無いと思いますわ。

設計は、元住んでいらっしゃった方に、ここはどうでしたか、この部屋はどうでしたかって、お伺いしながらやりました。ここにかかわった工務店さんも、この家にのめり込んでしまって。「仕事に惚れたらあかんのやけど、仕事に惚れたらあかんのやけど」って言いながら。これも家が呼んだんですわ、きっと。今の社長さんが70歳。その方で三代目。ずいぶん古くからなさっているんです。倉庫にね、明治、大正時代に解体した色々なものがいっぱい入っているんです。それをね、「これも出そう、これも出そう」って言って、ここで使う方が、ずっと皆さんに見て頂いてこの木が生きる、この材が生きるって言って、全部ここに合うものを出して下さったんです。この屏風も、ここのファンの72歳の方がいらして、ここで皆さんに見ていただいて下さいって、貸して下さったんです。その方がお嫁にこられてから1回も出したことがなかったそうなんですけど……。そんなことがあると私たちだけが楽しむのではなくって、その方のご先祖さんも一緒に楽しんでいるような気がするんですよ。建具にしたって、工務店の社長のおじいちゃん、ひいおじいちゃんもここで楽しんでくれているような。

小島　とにかく人を惹きつける家っていうのは、こんなんかなあっていう気はしますね。本当にひっそりと建ってた家やのに、中へ入った瞬間にね、ふわっとくる家っていうか、ああこれが京都の祇園なんかなっていうのかな。お茶屋さんでも間口広うしてやったはるとこはそれなりに構えて入らんとあかんとこですよ。そやけど1本違う道を入ってやったはるお茶屋さんていうのは、そんなんではなかったやろなあって。居心地よく安心して、なんの抵抗もなく、がんばっている部分をすうっと全部脱ぎ捨てて、のんびりしゃはる。人をすうっと入れてくれて、ふわっとそこの雰囲気で包んでくれるっていうのがね。その雰囲気にびっくりしましたね。全然私たちのところと違うし。知らん人に入ってもらって、私らが一歩も出入りできひんようになるのは嫌やった。すごい勝手なんやけど。自分たちがある程度思いを持って出入りができるようなことができたら、本当にうれしい場所やなあって。みんなの思いとか欲求とかが、ここへわあーっと集中した感じはしますね。

野間　ここを経営していくことになって、いろいろ考えたんですけれど、やっぱりここは寓居なんですよ。セカンドハウス。生きていくのってしんどいじゃないですか。みんなそれぞれ50歳近くなると、いろんなものを背負ってしんどいから、ここに来たときに本当にほっとして、「ああ、もう1回がんばろうか」とか、そういう風なことを思って頂けるような空間にしたいなと思って。そうしたらね、作るときよりも、オープンしてからこっちの方が、いろんな人がかかわってきて……いろんな人がここにかかわりたいんですね。ある人は「この家は魔性の家だ」って言うの。「ものすごい魔性の魅力を持った家だ」って。私は持っていませんて言うと、「いや、野間さんやない。この家なんや」って言ってるの。それでね、おかしいんですよ。従業員にしたってね、業者さんにしたって、お客さんにしたって、この家にとって良い影響をおよぼさない人はみんな出してしまうの。自分からや

めていったり、自然と出ていくの。どんどん良い影響をおよぼす人たちが入ってきて、どんどん輪が拡がっていって、4ヶ月でこんな風になるかしらと思うぐらいね。

大谷　文化的なサロンという感じですか

小島　文化的なサロンというと、すごい肩肘張ってるいうか、がんばってるみたいな気がするんですけど、案外ここはそれをさらりとやってのけられるような、やっぱり家の質なんかなあって思いますね。みんなが色々なことを思っていて、それぞれ同じことでは全然無いような気がするんやけれども、この家がかなめになっていて、家の雰囲気でそれらがみんな解け合って、混ざり合っていって、ひとつのものがこの家からまた出ていくみたいな。特にこういうみんなが集まる家っていうのは、そうするのが、家の使命というか、もともとそういうのやったんやと思うところもあるんです。それが今はみんなの我がでてしまったりとかで、家がそれだけの力を持てなくなってしまっているのかもしれないですけど。ここは家が生き返ってきたっていうのか、全然違うかたちになっていた家をもう一回元に返したから、今は家の力がすごくある時期やと思うんです。

野間　家の生命力というのは、持ち主の経済力とかに一切関係なく、ありますわね。「残る家」っていうのはものすごい生命力を持っているような気がします。たとえば、セカンドハウスやここみたいに、いったん炎が消えかけて、また燃えてくる家っていうのは、そういう力があるのかなっていうような気がするんだけど。そういうことを私たちが感じて、引っ張っていかないと、その家がもったいないっていうか、かわいそうっていうか、家が訴えているような気がするんです。

この家を復元するにあたって、一番気を使ったのは、まがいものを使わないっていうこと。テーブルにしたって、こういう木だけのテーブルで。これも工務店さんの倉庫で何十年間も眠っていた木を使ったものだし、こちらは小島さんの家の蔵の棚板を使ってるし。たとえば壁もそうですし、建具も杉を1本買ってもらって、そこからとってもらったんですけどね。全体として落ち着くていうのが、素材が本物でないとちょっとこの家には合わないと思って、質の良い悪いに関わらず、まあ予算もありますからねえ、とにかく本物でまとめようと思って苦労したんですけど。

京都の魅力、自然と人工の魅力

大谷　桜のときはいかがですか

小島　きれいですね。桜の時は夢のような世界です。新橋界隈が持つ独特の雰囲気がすごいですね。「魅せられた」そういう感じを持つとこですね。野間さんもよくお話しになる地域のスターとかその土地のスターというスター性をこの界隈はものすごく持っていますよね。どんな形をしていても、どんな表情をしていても、カメラアングルにぴたっと収まるところですよ。雨が降っていても、桜が咲いていても、落ち葉が落ちていても、年中きれいな場所やと思う。本当にスターの地域。

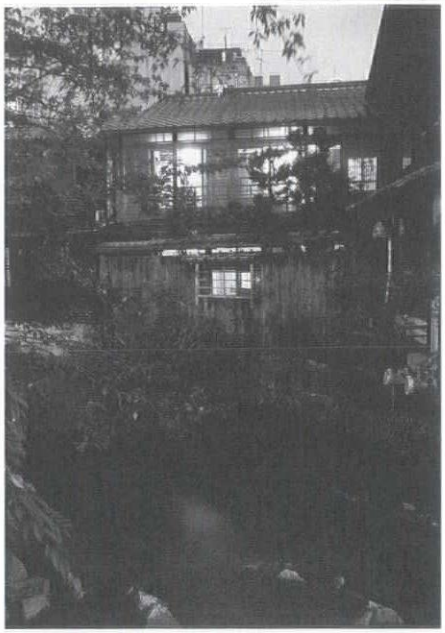
大谷　それは自然には出来ていないですね。やっぱり人が創り上げた環境だと思いますね。京都ならではの、京都のセンス。

小島　人工的な部分がある。人工的というのか、お茶でもそうですが、最初に矯正されてそういうことをずっと、それがだんだん体の中にしみこんでいく、そういう繰り返しが京都の教育っていうか、全体の流れの中にあるところやと思うんです。繰り返しが延々続いていって、それが二代、三代となっていったらそれは自然になる。きっとこの土地、この家も人工から始まったんやろけれども、それが自然な形になって常にぴっと緊張しているのが似合う場所やと思う。緊張していることによって、晴れやかさが出てくる、緊張が苦にならない緊張。舞台に出てきたときに、みんなの目が集中してすうーっときれいにならはる人っていはりますよね。そういう雰囲気がここにあるのかなあっていう気がします。

野間　ここに住んでいると、日本の家屋っていうのはやっぱり自然と一体なんだなあていう気がしますね。自然と一体でいるからこそ、たとえば庭に出ても、芽が出てきたのを見て、「ああ、がんばってる?」って木に話したりして。私今までお花見といってもぱっと咲いているのを見ただけだったんですけど、今年始めてプロセスで見たんです。つぼみから散っていくまで。そうすると1年間の力を貯めて貯めて、その2週間ぐらいの時にぱっと出し切るんですね。こういう家と外との対話、これが無いと日本人の感性は萎えているのかなあという感じがしました。だから小島さんとこみたいなお家にずっと育ったお嬢ちゃん達は幸せだなあと思う。私たちはたとえばコンクリートの家をつくるとしても、そういう部分はずっとつないでいかなきゃならないなあという気が特にしますね。

いろんな木に声をかけるし、たとえば2階の床の間の床柱。床柱にもたれたりするのはとてもお行儀の悪いことなんですけど、体をくっつけてるとすごく落ち着くの。インディアンみたいにね、いつも家と会話してる。

小島　よく壁にもたれたりするのはお行儀悪いって言わはるんやけど、どうも自然とそうなるような安心感、やすらぎでみんながすうーっといってしまうんやなあて。すごく安心するんですね。



白川から望月を見る



小島氏（左）と野間氏（右）

野間　やっぱりものを見る、たとえば花を見るというのは瞬間ではなく、ある数日間を見ていることやと思う。祇園祭でも数日間をすべて見ることによってわかってくる。だからここに住み込んでいるということが非常にこの家との関わりができている。

野間　家がこんなに人を変えるのかと思うぐらい。農耕民族というのか、もともとのプロセス思考というのがそんなことから来たのかなあっていう気がするんですけど。やっぱりプロセスでそういうものを見ていくというのは根本なんだなあと。そういうのもこういう家が教えてくれるんです。

（1998年7月22日　祇園望月にて）

●のま・みわこ／建築家、望月主宰者
●こじま・ふさえ／京町家再生会事務局長
●おおたに・たかひこ／京町家再生会代表幹事

橋弁慶山町会所　1994年

所在地：京都市中京区鏡薬師通烏丸通西入ル
用途：町会所およびギャラリー
設計・管理：京町家再生研究会
建築規模：木造2階建　3棟

敷地面積：225.87m²
建築面積：122.75m²
延床面積：236.32m²
総工費：5,800万円





新しい活用と歴史の継承

この建物は祇園祭町内の町会所である。町会所は町内または各山鉾保存会が所有する集会施設であり、祭りのお飾り場である。京都の町会所の歴史は桃山時代にまで遡るようである。現町会所は棟札から明治28年（1895年）の創建と分かる。

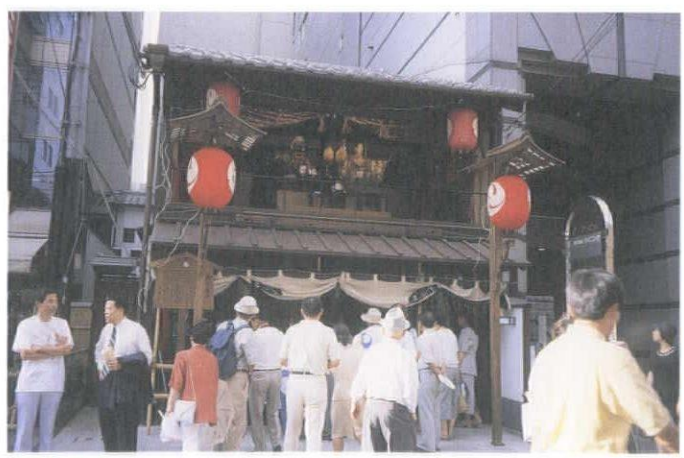
この町会所を改修し、京都の工芸品を展示、販売するギャラリーとして再生することとなった。表家型と呼ばれるこの町会所は通りに面する表に2階建ての会所があり、奥の蔵に祭の資材一式が納められている。ギャラリーのために必要な中庭の増築が祭の際の資材の搬出入を妨げることとなり、一時はこの計画そのものが打ち切りになる話にまで至った。町内とギャラリー、双方の妥協によってやっと解決の道が開けたが、長年の慣習の変更は町内にとってはちょっとした歴史的改変であり、それなりの決意が必要であった。

そのような経過を経て、やっと再生の工事にとりかかることとなった。2階の表の間は町会所としても最も格式のある部屋であり、弁慶、牛若が御神体としておかれる。軒高が低いために棹縁の天井が表に向かって丸味を持って下っており、お飾り場として趣のある空間の様相を呈している。この表間を現状のままに残し、奥の間二間は和室の床を板敷にし、空間の高さを得るために天井板を取り払った。そこに表れた小屋組はあまりに華奢なものであり、継ぎたした柱の状況に以前の屋根高の変更等の痕跡がみられる。部材も寄せ集め、他からの転用のものもある。町内共有の施設であり、最も重要な行事である祇園祭の建物としては質素な造りであるが、これがこの町会所の歴史であろう。

このままでは今後に構造上の問題を残すことにもなりかねないが、しかし、目の前の小屋組みの表情はこの建物の霊の如く歴史を語りかけてくる。また、その繊細な姿形が京都的なものを感じさせる。どうすべきか思い悩み、しばしの間この建物と対峙することとなったが、その結果新しい強い骨組をつくり、その下に元の小屋組をそのままの形で残すことを決心した。これは建物との語らいであった。上部に新しい棟梁、登り梁を架け、両側面の柱も新しい材料に全面取り替えとなった。一部には金物、鉄骨の耐震補強も行い、建物は随分丈夫な骨組に作り替えられた。元の小屋組は今や骨組としての役割を終え、優しくギャラリーの空間に浮かんでいるようである。時には、展示品である絹製品が天女の衣のごとく投げ掛けられる。継ぎはぎの元の柱は両側面の新しい柱の各々1本ずつの表面に薄くスライスして張り付け、昔の屋根高の変更の様子を歴史的な資料として残した。弁慶、牛若の背景となる襖には京唐紙の老舗の唐長の晴れやかな青海波の唐紙を用いている。

化粧小屋組みの見える吹抜空間には動的な感動があり、畳間には静的な落ちつきが漂う。スポットライトによる現代的なあかりが屋根裏の暗さの中に化粧小屋組みを浮かび上がらせる。このようにしつらえられたお飾り場、そしてギャラリーの空間が歴史の確かな面影を継承しながらもまた、若く、新しい感性にも受け入れられる雰囲気の場を提供する。歴史の継承と新しい感性は決して相反するものではない。歴史あるいは伝統は新しいものを受け入れるだけの奥行、度量を持ち合わせているとも言えるのである。

京都は歴史、伝統ある都市である。都市の老舗と言える。京の老舗の菓子は、押さえられた甘さの中



祇園祭の時の様子

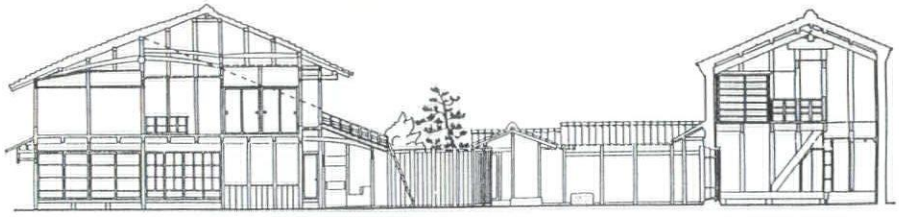
に味わい深い美味がある。それは一種のけじめをもった美味であり、素朴さよりはしたたかな意図による自然さであり、そこには都会的なセンスがある。また、京都の美意識はそのように洗練された繊細なものである。ある種の抑制のきいた、そして高度な感性を持っている。これは都である京都のさまざまな、歴史の中で培われてきたものであり、眼に見える色、形の以前に京都の精神風土にも定着していると思われる。町家の主である町衆はこのような心を基にして暮らしと商いを成立させ、伝統技術職人は、そのすぐれた技の中に常にその心を保ってきた。

町家は木造の建物であり、その中で長年に渡り暮らしが行われてきた。暮らしと建物はお互いに緊密に結びつき、一心一体の形で成長してきた。自然の素材を生かした建物は、京菓子のように、けじめをもって美しい。京町家の持味は決してはれやかなものではない。京町家を代表する表の千本格子は、日常の京都らしさを象徴するものである。木組みによって割り付けられたファサードには基本的な節度があり、その中で、木の間返しの厳しい寸法取、二種類の幅の竪格子の組合せによる親子格子、子格子の上部を少し切りつめる切子格子等は節度の中で精一杯の、そして突きつめられたデザインであり、洗練された繊細な美しさの極地である。

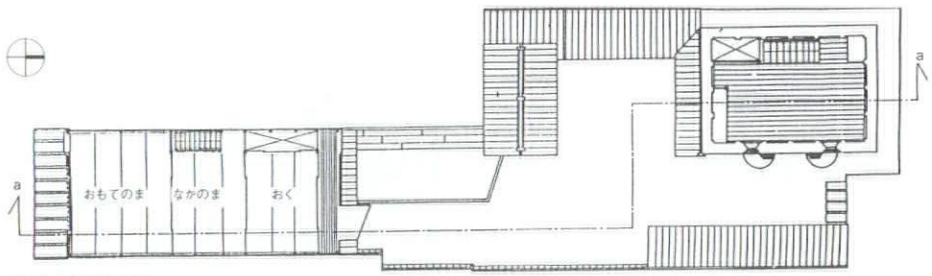
燃え易く、朽ち易い木造の文化は物よりもそこにある型と心を伝えてきたと言われる。物的な時間の積み重ねではなく、精神性、文化性の色濃い歴史の積み重ねが京都らしさをつくりあげてきた。また、京都人の進取の気性は単なる新しさを追い求めるような表面的なものではなく、相当にしたたかなものであり、伝統の上に新しい感性を受け入れながら、京都らしさの質と密度を高めてきた。

祇園祭は京都において最大のはれの場である。山鉾やお飾りは晴れやかさの象徴である。しかし、祭の重要な役割をもつ町会所は実は祭の裏方であり、背景であった。その建物は、橋弁慶山町会所においてはその小屋組みにみられるように、まことに質素なものであった。非日常のはれの場である祭を支える日常性の役割を感じる。今回の再生では本来屋根裏に隠されている小屋組みをギャラリーという幾分晴れやかな空間の演出に活用している。この小屋組みはもともとそのように意図され、デザインされたものでもない。しかし、この建物の歴史を宿し、そして、なにかつつましやかで繊細な表情をたたえるこの小屋組のこのような再生の経過の中に、また、京都らしさの一断面が見えてくるのではないかと思われる。

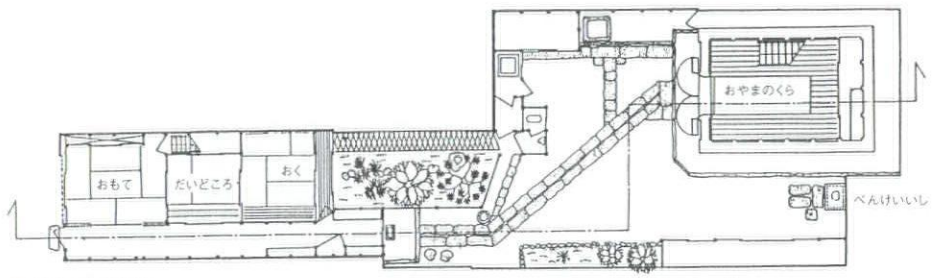
●大谷孝彦／京町家再生研究会代表幹事



a-a断面図（改装前）



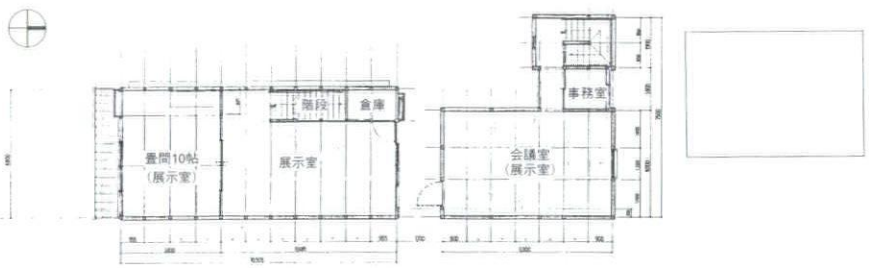
2階平面図（増改築前）



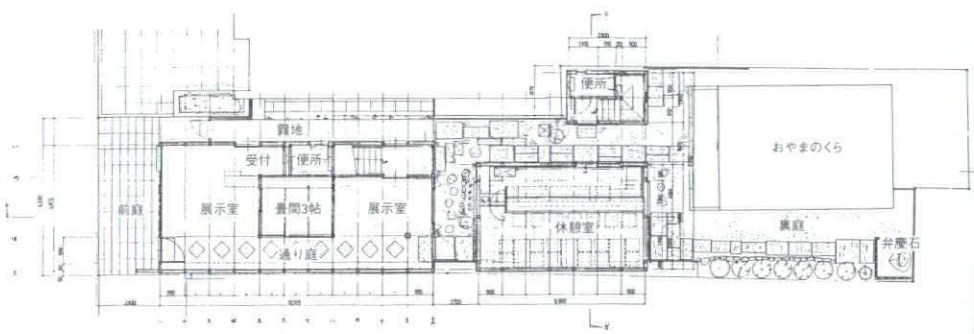
1階平面図（増改築前）



断面図（現在）



2階平面図（現在）



1階平面図（現在）

アルトレタント　1998年

所在地：京都市中京区堺町通三条上ル
用途：飲食店
設計・管理：一級建築士事務所　アトリエRYO
木下龍一

建築規模：木造2階建て
敷地面積：189m²
建築面積：122m²
延床面積：179m²



アルトレタントの町家再生は、堺町通りをはさんで、敷地向かいのイタリア料理店タントタントのオーナーシェフ河上昌実さんと、大家さんであるキンシ正宗株式会社の堀野欣弥社長との出会いに始まる。現在は伏見に移って醸造業を営まれている堀野さんは堺町通二条上ル亀屋町に生家があり、昨年、天明の大火のあとに建てられた酒蔵等を改装し、町家全体を堀野記念館として公開している。この三条店は、江戸時代に呉服屋としての町家を買い取り、大正の全盛期に拡張改装し、また、戦後のモータリゼイションの進展にあわせて、主家を解体して、モータープールを経営してきたのだが、立派な店舗棟は、事務所や従業員宿舎として使い続けて、ビル化するのを拒んでこられた。今では、古いものを残すことと、地ビール生産のような新企画を起こすことを、「オールドニューの思想」として確信され、「京まちおこし」に力を入れておられる。

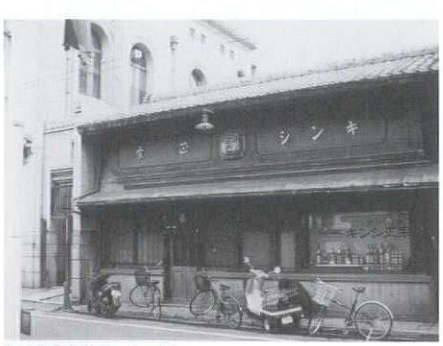
河上シェフは京都イタリア料理研究会の会長として、ヨーロッパの本物の味にこだわり、若手の料理人の育成に力をいれている。土蔵をワインセラーにしたり、レストランの床を「タタキ」にすることを自ら発案して、変容する町場の味わいにもこだわり続けている。

ある日、友人の紹介で、私がタントタントを訪れた時、間口2間半、奥行15間程の典型的な町家の奥に主屋の厨房とワインをしまった土蔵の間に、昔あった前栽の一部を復元することを提案したことがあった。河上さんは早速これを採用し、蔵前に風と光を導入する小庭が完成。また、店の中にも天窓を生かした、半戸外のバー・カウンターが設けられた。それが意外と客に喜ばれ、町家レストランとして、新聞に報道されることがあって、記憶としての町家にこだわる双方の気持ちに納得がいったものである。以上のようなわけで、大家と店子、おふたりが握手して、町家店舗再生の機会が私のところに廻ってきたのである。

建物の現況実測調査をもとに、明治大正期の復元プランを想像すると、シェフの日常感覚に沿ったリクエストが、新しい改装平面として易しく描かれていった。「みせ」「とおりにわ」「玄関」「坪庭」という表屋づくり様式の保存された部分が「カフェバー」「ピザ釜―キッチン」「ダイニングルーム」そして「中庭」に置き換えられた。「みせ」2階の厨子部屋は、従業員控室とアートギャラリーとしてできる限り伝統的「見世小屋」の機能を継承し、よりパブリックに利用して貰えるよう、工夫された運営がなされている。ファサードに残された時代がかった「キンシ正宗」の看板文字や「菰樽」のサインも、建築や地域の歴史を物語る象徴として、両者共同で保存されることになったものである。

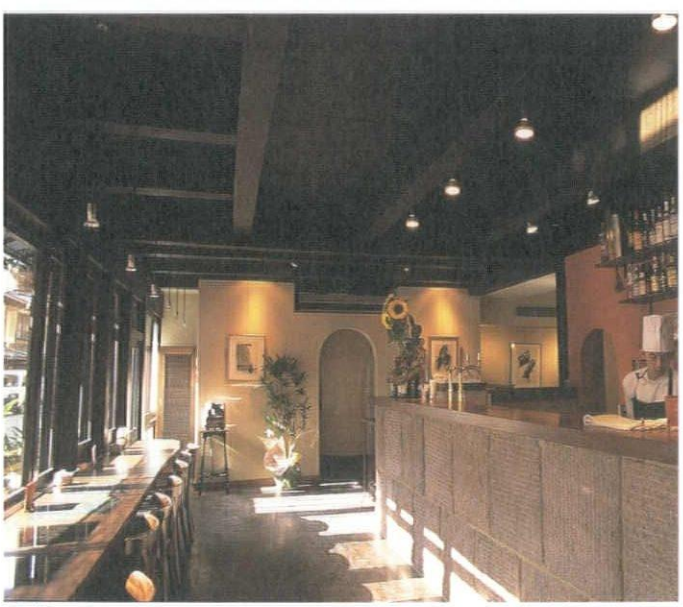
三条堺町界隈には、まだまだ京都らしい雰囲気が漂っており、イノダコーヒー、居戸さん、分銅屋足袋、里見有清堂、堺町画廊等数件の町家が残っているだけでなく、町の人びとが歩いて楽しめるお店や、都市の生きた生活感が味わえる道筋となっている。週末の車の通行を制限したり、道路の舗装や使い方等を工夫すれば、空洞化しつつある都心部の低落潮流とは逆に、ますます活気あふれる都市生活が町内に甦ってくるだろう。

●木下龍一／京町家再生研究会幹事

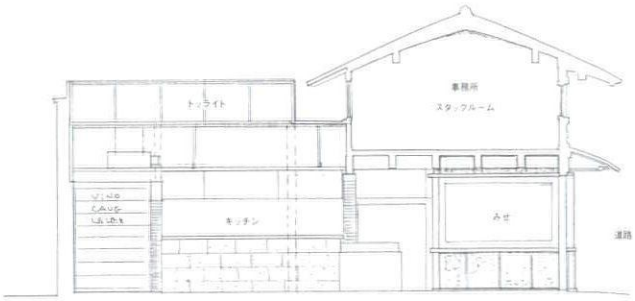


改装前の正面ファサード

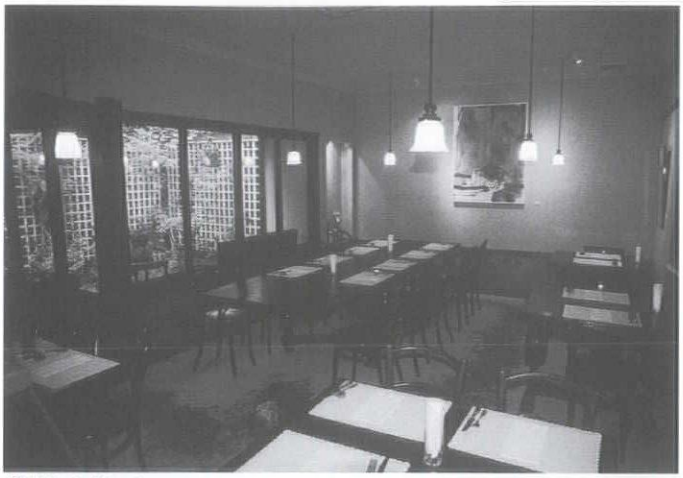



1階客間

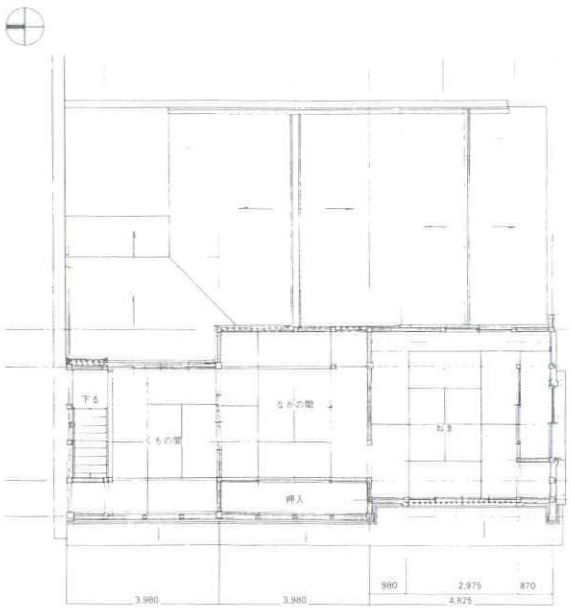

2階客間



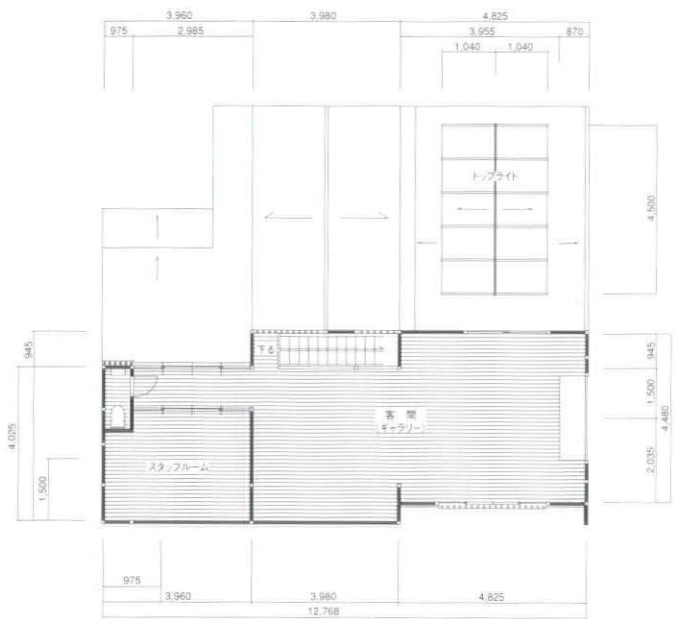
東西断面図（現在）



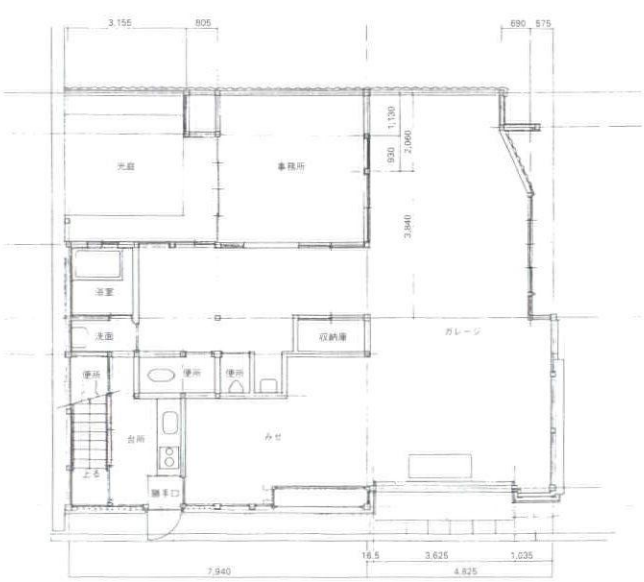
1階ダイニングルーム



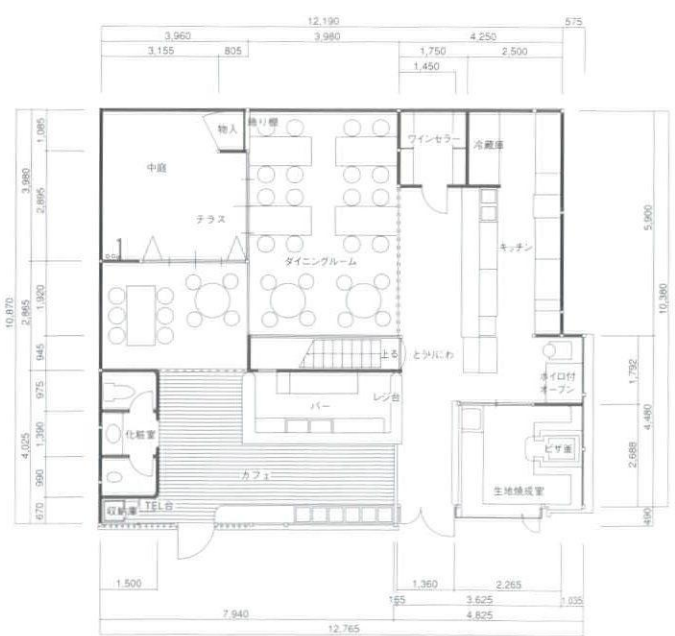
2階平面図（改装前）



2階平面図（現在）



1階平面図（改装前）

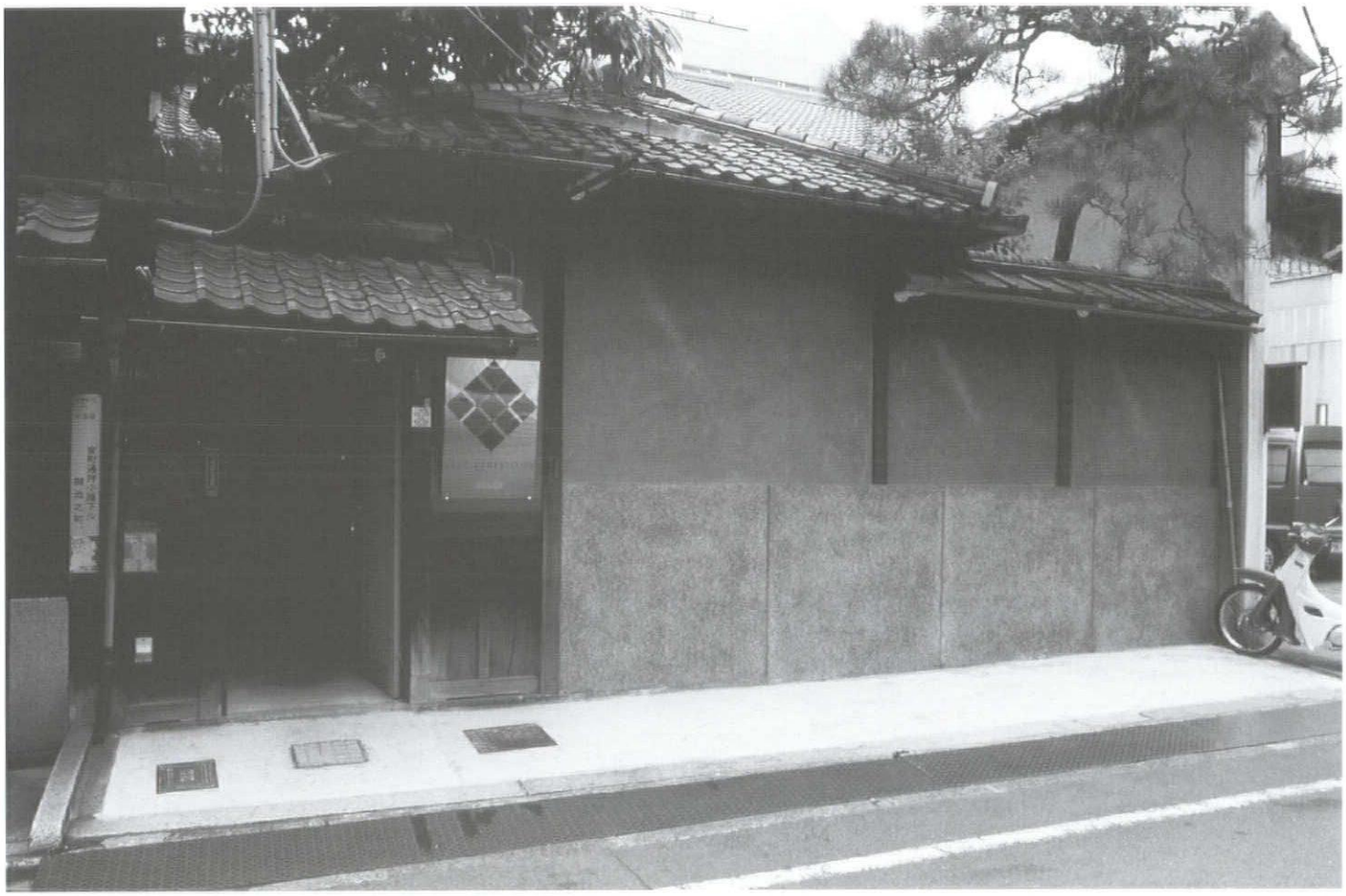


1階平面図（現在）

ミホプロジェクト　1994年

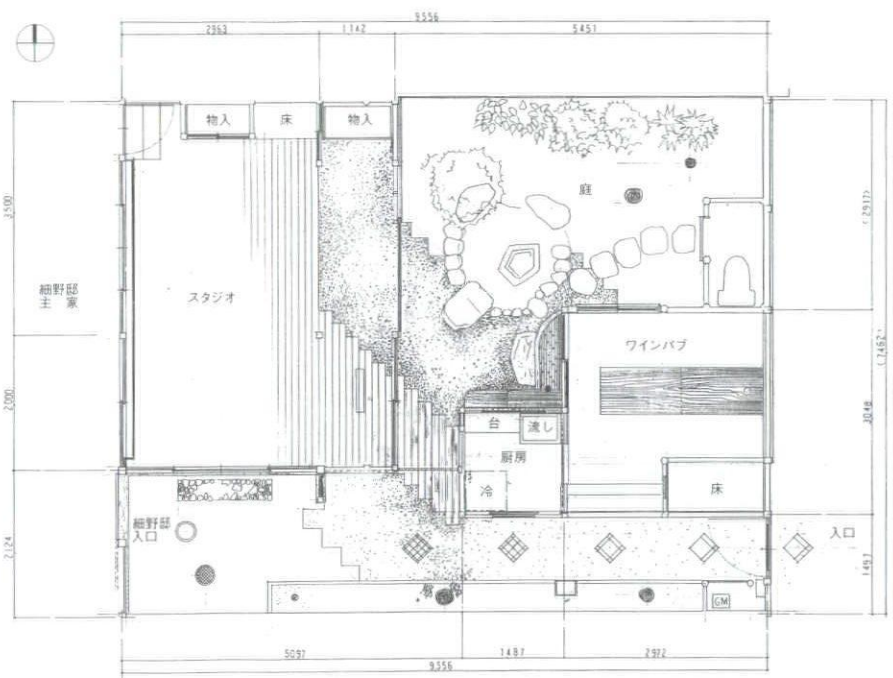
所在地：京都市中京区室町通御池上ル御池之町
用途：スタジオおよびワインバブ
設計・管理：京町家再生研究会（担当=野間光輪子）

建築規模：木造平屋建て、一部改装
敷地面積：71.3m²
建築面積：35.29m²（改装部分）
総工費：800万円



ミホ・プロジェクトは武智美保さんが経営するアーティストを支援し、イベントをプロデュースするオフィスであり、細野邸の一部を改修したものである。細野邸は通りに高塀を建て、主屋を後退させた近代の新しい町家形式で店を構えていない。けれども、この家でつい先頃まで、玄関の3畳と次の間6畳を西陣帯の仲買オフィスとして使用してきた。今回の再生プログラムは、このオフィスと門脇の茶室を改修して、新しい型のオフィスをつくることであった。ふたつの和室を土間にしてスタジオとし、茶室はその意匠を保ちつつ、ワイン・バーに変更された。茶室と庭とスタジオのコンビネーションがみごとである。いかにも京都らしい完成へと至る物語が興味深い。

●長尾重武

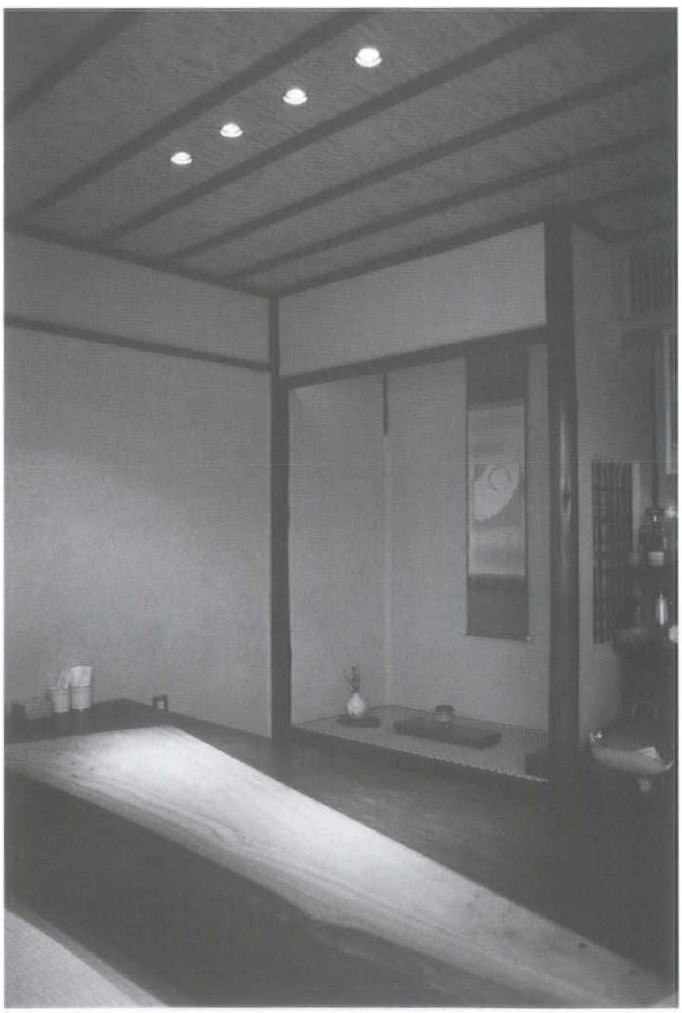


1階平面図（現在）





ワインバブからスタジオを見る



ワインバブ

座談会

棲み分けされた京町家——ミホプロジェクト完成までのいきさつ

細野輝代×武智美保×小島冨佐江　聞き手=磯野英生

磯野　武智さんが細野さんのお宅をお借りすることにいたる経緯を知りたいのですが。

細野　私の父が他の人達と合同で西陣帯の仲買を経営してまして、父が亡くなってからもずっとやってましたんです。昭和23年から平成3年の暮れまで。しかし、平成3年の暮れに会社を清算して廃業しました。それで事務所に使ってました3畳の玄関と6畳の次の間が空きましたので、もし適当な方がいやはったらと、小島さんに頼んどいたんです。小島さんと私とはもう長いことのお付き合いです。ある時、「家そのままで中だけ少し変えてお貸しするということができますよ。実はこういう方がいやはるのやけど」と小島さんが言うてきはって、それで初めて美保さんと山口さんとに、お目にかかったんです。

ほんで、美保さんがこの3畳と6畳を土間にしてスタジオにし、あちらの茶室を客間にしたいとおっしゃって。この茶室は実は昔、床下を掘って防空壕を作ってたのですが、戦後埋め立てて物置としてましたんです。その後ちゃんと直して部屋として使おうということで、ついこの間、床も全部張り直したとこやったんです。ここを綺麗にして使ってくれはんのやったら結構ですと申し上げたんです。

うちとしては昼間は無人なもんですし、人がいていただけることが何かと有り難いことなので。先ずはそんなことでお話が成りました。それからもうひとつの大事な事は、美保さんのお家が室町の三条上がったとこいうことです。

武智　西陣織産です。

細野　そこは私等の学区内ですしね。そういうとこのお家のお方やったら安心して、どうぞということです。

磯野　小島さんと武智さんとはどのようなご関係ですか。

小島　中学、高校、大学と一緒です。最初、木下さん（再生研究会幹事）からお話をうかがって。美保さんと木下さんもまた違うところでつながりがあって、それで木下さんから「美保ちゃんがまた何か探してるらしい」とお聞きしまして。私も京町家再生研究会で何回か細野さんのお宅の話をしてたことがあったので、木下さんが「あそこはどうかなあ、いっぺん美保ちゃんに見せたげたら」と。それで話が急にバタバタと。

記憶と「外部の眼」で町家を観る

磯野　武智さんはここへ見にこられて、最初の印象としてはどうでしたか？

武智　私はこの辺りで生まれているんです。昔はこういうお宅ばっかりでしたからね。懐かしいなとまず思いました。大学を出てから外国へ行きまして、4年ぐらいまったく日本へ帰ってなかったんです。その後、イタリアと日本と半分ぐらいという生活をしてました。それで去年ぐらいから独立を考えまして、自分のアトリエ的、スタジオ的な場所が欲しいなあと。それなら、昔遊んでた町家がいいなあと思ったんです。それで、いくつか本当に見せていただいたんですけれども、なかなかイメージに合わなかったり、広すぎたり、条件が合わなかったり、ということがありまして。そうこうしている内に、細野さんをご紹介いただきました。お邪魔しまして、私が昔遊び場にしてたようなお宅にものすごく似てましたので、本当に懐かしいと思いました。呉服屋さんであいう形でやってはるところによく遊びに行ってましたから。

細野　だいたいがここらへん「しもた屋」[*1]ですからね。こういう「居宅建ち」[*2]と「店建ち」[*3]とふたつあるんです。「店建ち」は前に格子がはまってて、それからお店があって、奥が住居になっていた。上隣の家がそうなんですけど。ここはあくまでも「居宅建ち」なんですけど、戦後居宅でもいいからいうて、2階の奥の5畳と10畳で商売をしてはったんです。

最初は美保さんがワインバーをすると言われたんで、どないなるんやろう思いましてけど。それはまあそれでええし、私も自分で決断すればいいだけですから、「よろしいわ。やって下さい」言うて。ほんで契約。そしたら、えらい凝ってして下さいましたしね。前はアルミサッシの戸やったんです。そやけど、ああやって格子戸になりましたからね。庭も全部黒い土のままやったんですけど、ここは大方何も直してはらへんのです。あの燈篭は美保さんのおじいさんが持ってきてくれはってね。白川砂やらをいっぱい入れて、きれいにしてくれはりました。お互いに持ちつ持たれつの結構なことやと思ってます。

近所の人がみな言わはるのに、この頃やったら変えるとなったら表からここだけを潰してしもて鉄筋にするとか、そういうふうにしはるんやけれども、お宅みたいにそのまま使ってくれはったらよろしおすな、と。

磯野　やっぱり古い家を残したいという気持ちは皆さんおありなんですね。

ここをワインバーにして、むこうを事務所兼店舗みたいに使い分けようというのは、この家を見て考えられたのですか。

武智　いえ、初めからそういうふうに思ってましたね。というのも、そもそも私のやってることがアーティストのプロデュースでして、時間帯があってないようなもんですし、そういう人たちの資料を見るのに、今までしたらビデオをダビングして送ったり、自分が持って行ったりしましてね。こういう空間だったら、来ていただいて、資料を見ていただけますし。私、イタリアのワインが好きですから、仕事の後、ここでゆっくりサロン的な感じの場所が持てたらいいなあと常々思ってました。私はお茶室のような空間が非常に好きですから、しつらえを整え、私なりのおもてなしができれば、いいなあと。空間プロデュース的なことをここで何か提案ができるかしらと思いまして。

磯野　こうした事務所と接客スペースの組み合わせというイメージは、外国生活の中から出てきたのでしょうか？

武智　そうでしょうね。海外でしたら、やっぱり夕方から遊びに行くと、「アペリティフでも飲んでいくか」みたいな感じで、小さなカウンターでワイン出してくれはったり、お食事前にちょっと飲んで簡単なスナック食べて、そういう中で話が膨らむことってよくありましたから。日本でもできればいいなというふうには思いましたね。

京町家と生活習慣の彩り

磯野　そういったおもてなしの習慣はどうなんですか。京都というのはもともとそういう接客のためのお座敷があるわけでしょう。

武智　あります。

細野　そらお祭りとかお節句とか何かいうたら、お座敷をそれなりに綺麗にしてあったんです。夏と冬とちゃんと建て替えもしましてね。あれが嫌で嫌でかなんかったんですけど。籐むしろは敷かんならんし、簾かけて、襖や障子は蔵へ全部しまってね。

うちの家はここから奥の庭まで通しですね



左から小島氏、細野氏、武智氏

ん。全部ここパーッと開けますでしょう。ほんで、簾しかかけませんわね。そうしたら涼しいんですよね。風入るんです。道からこんだけ入ってるだけで随分暑気が違うんですよ。その代わり、冬は寒おっせ。ほんまに寒いとこ。そやからこういう風に古い町家を現代的に利用して使おうって言わはることは、京都の町としては非常にいいのんと違うんですか。よう考えてくれてはると思います。

細野邸を事務所に改造する

磯野　ちょっと話が変わりますが、武智さんは設計者の野間さんに対して何か要望みたいなものはあったんですか。

武智　できるだけシンプルにしてほしいという事と、もうひとつは、格子というのが私のテーマだったんで、その格子ということはお願いしました。ちょっとご苦労いただいたと思います。あとは茶室の方を堀ごたつ形式ですか、こういう形にしたいということ。それともうひとつは、こちらと向こうがひとつに見えるような空間ということですか。庭を間に挟んでコミュニケーションができますよね。できるだけ広く光が入るように、見えるようにしてほしいなあと。丸見えやけど。

磯野　庭があるというのは、オフィスのスペースとしては最高の贅沢ですね。気持ちいいですよね。

細野　彼女のおじいさん、初めはあんまり乗り気やなかったらしいんですけどね。ここの庭見はって、「これはあかん」と思わはった。この庭一生懸命いじらはって、全部おじいさんが造ってくれはったんです。庭師さん連れてきてね。

武智　プレゼントしてもらったんです。予算も限られてるし、皆さんにご迷惑かけてるしって、それで……と思ってたら。皆さんに助けていただいてね。有り難いことです。

磯野　今まで、ここでワインを飲みながら、催しや、会合を何回かやっているんですか。

武智　この間、イタリアから私がプロデュースしてるアーティストが来まして、それでシンポジウムというか、アートフォーラムをやりました。夜は40人ぐらい入らはった。

磯野　それにしてもこうやって見渡すと、やっぱり女性がすごい元気ですね。京都は女性でもっていた町かなという気もちょっとしてくるんですけどね。

武智　「町家を守ってはるの、女の人ばっかりや」言うたはりましたよね。

小島　男の人もそれなりにあるのやろけど。結局、中で女の人がしっかり守らはったから、男の人が外でパーッとしてはったんかなあ、なんてねえ。

細野　うちが店やってたとき、昭和40年の初めかな、帯でも呉服でも隆々としてたからね。そのときでも、ここをつぶしてビルにしよう言わはったんや。もう父が亡くなってしもてからのことやね。そやけど私「いやや」言うて。「ここはこのまま残してくれ」いうて言うたさかいに、美保さんに借りていただくことになったわけ。

武智　ありがとうございます。

細野　皆、ずっとビルにしていかはったでしょう。あれがものすごいややったんや。

武智　私の家もそうです。結構大きかったんですけれども、私たちは「もうビルにする」って言わはったときは、子供心に悲しかったですね。それで、お座敷を移築しました。龍光院さんとこの子院にね、正法庵に寄付して、そのままお座敷置いてるんですけどね。でも悲しかったですね。もう、あっという間に全部つぶれてしまうでしょう。

細野　いや実際、あっという間……。そこがお座敷やったでしょう。朝出かけるとき、行きしなに大工さん来たはったん。「ここほなもうつぶします。土間おろしまっせ」言わはったんです。「はあ、どうぞどうぞ」って言うたんですよね。それで帰ってきたら全然あらへんねや。何かものすご気持ち悪かった。

武智　ずいぶんショックでしょう。

細野　「こないなってしもたわ」という風に思いました。

武智　そら、そうですよね。

細野　そやけど、まあ、こういう風にきれいにしてくれはって、ええお部屋になったから、結構です。本当に。

武智　あとライトがね。これもものすごくラッキーだったんですけどもね。友達でライティング屋さんの内原さんという人がふっと横切らはったんです。「ちょっと待って」って言って呼び込んでしまいました。

　内原さんは銀閣寺とか平等院とかライトアップしはった人で、東京と京都と行ったり来たりしたはって、たまたま京都にいたはったんです。野間先生には申し訳なかったんですけれど、「こういう人入れていい？」みたいなことを聞いたら、「いいよ」って気持ちよく言って下さって。

細野　塀の照明、普通だったら真下にいきますわね。それを斜めに3本入っているんです。それがものすご感じがいいのよね。トイレの照明だって、凝ったはるんです。

武智　それもこれも、自分でわざわざ竹屋さんへ行って、やってくれはったし。竹のこういう照明も全部そうしてくれはりましたね。

細野　いや私、惜しいことやなと思うのは、実はうちの母の里が竹屋なんです。それで私


スタジオ

と同い年の従兄弟がいて、割にお茶やらお花やらにうるさいので、奥のお花、皆、直してくれてたんですけども、去年亡くなってしもて。その人がいたらもうちょっと何かできたやろな、と思う。残念やなと、喜んでくれたやろなと思てるんやけど。

小島　皆それぞれに、こういう家に思い出があるでしょう。それなりにいろんな人が。そやから自分の楽しみも兼ねられるいうとこがあるのんと違うやろか。仕事なんやけど。でも、こんなんしてみたいと思うと、その仕事の枠越えてでもやってくれはるみたいな、人を呼び込むとこが出てくる。

武智　人に恵まれてました。

（京町家通信vol.2、1996年刊より転載）

●ほその・てるよ／細野邸家主
●たけち・みほ／ミホプロジェクトプロデューサー、アートプロデューサー
●こじま・ふさえ／京町家再生会事務局長
●いその・ひでよ／京町家再生会幹事

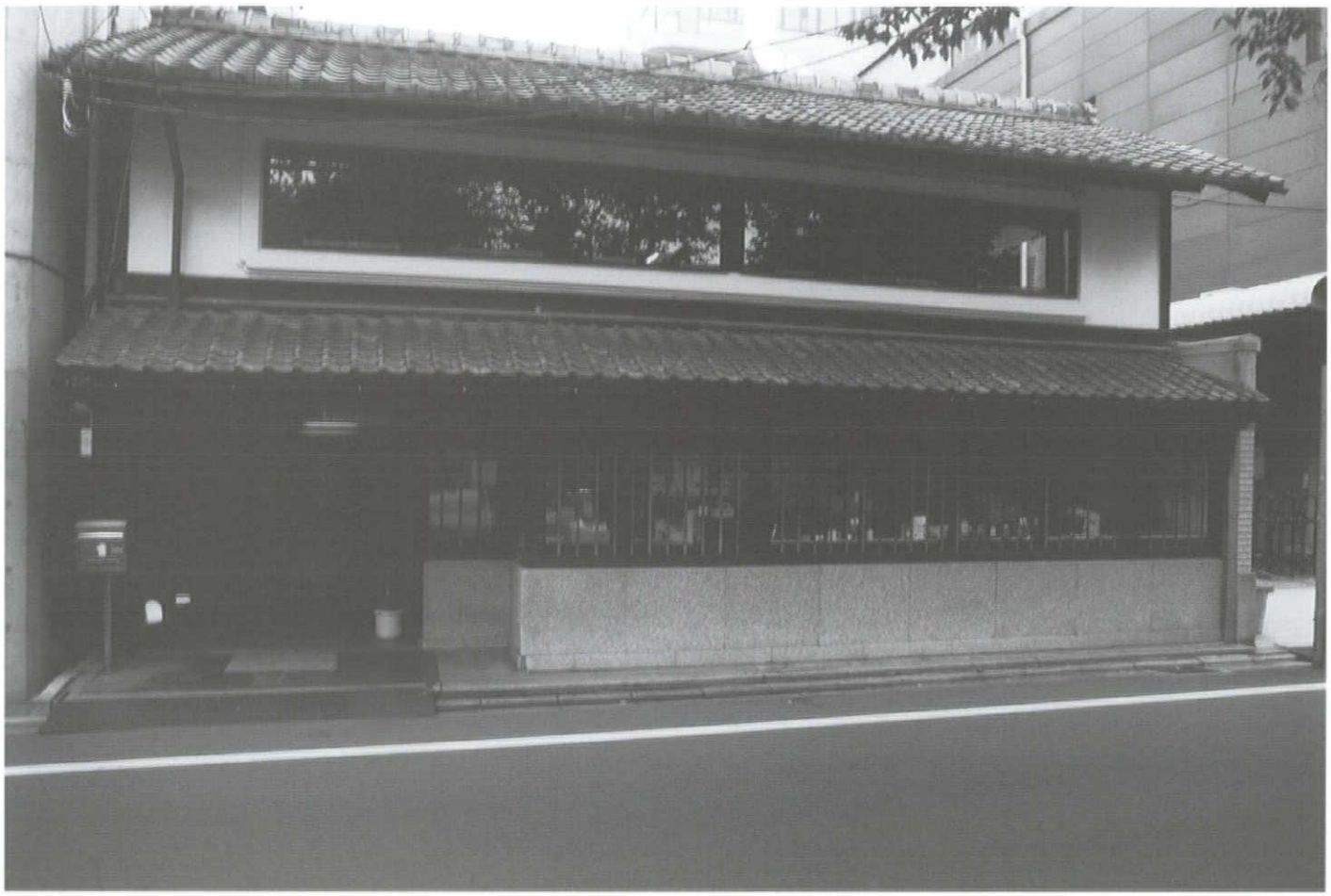
註
＊1しもた屋
仕舞屋。もと商家であったのが、商売を止めた家。商店でない居住専用の町家
＊2居宅建ち
居住専用の町家。一般的に外堀の内側に庭があり、一部外堀に接した居室の外堀に庇、細格子付きの出窓がつく例が多い
＊3店建ち
商売を営む町家。奥に居住部があり、表は店の間である。表通りに面して格子を建込む建物様式



セカンドハウス（河合邸）　1996年

所在地：京都市中京区東洞院六角下ル御射山町
用途：飲食店
設計・管理：京町家再生研究会（担当＝野間光輪子）

建築規模：木造2階建て
延床面積：232.81m²
（1階119.77m²、2階113.04m²）



街並みのこと

東洞院通りに面し、錦小路通りを上がったところに位置する河合邸は、周辺の著しい変貌にもかかわらず店建ての構えをもつ京町家として存在していた。河合邸の調査の結果、この町家は明治38年に建てられ、昭和初期にファサード部分が改装されていることが判明した。店部分を活用するために、当初テナントとして、和風料亭、事務所、医院などの話がもちあがったが、町の活性化の波に合わせ、より活気のあるテナントを探す努力を続けていくなかで、若者や女性に人気のあるパスタとケーキの店「セカンドハウス」の足立社長と出会う機会に恵まれた。設計にあたって、この町家の再生が街並みに明るさ、お洒落な雰囲気や活気が生まれ、町を歩くことが楽しくなるような店づくりをと強く意識した。今回の河合邸の店部分の再生は、外観・骨組みだけを残し、内部は全面的に改装し新しい用途とした。京町家の保存ということでは内外部とも現状のまま将来に引き継いでゆくのが最も望ましいかたちであるのはもちろんのことであるが、現代の用途に合わせながら改装を行い、新たな活用を考えてみることも必要なことではないだろうか。河合邸の再生が、街並みに潤いを与え、生気を取り戻させることになればと願っている。

空間活用のこと

母屋の玄関が面し、座敷からの眺めの庭として使用されていた中庭を店側に取り込むため、店と母屋の互いの視線を考慮し、玄関部分に目隠しをしつらえた。既存の濡れ縁は景色のつながりを持たせるためそのまま残すこととした。

この中庭は今までは河合邸を訪れる人びとだけにその表情を見せていたが、今回の改装で建物に透過性を持たせ道路側からも店舗内の人びとの動きの奥にその表情が垣間みられるようにした。

店の前面にケーキ工房をもってきたことで、この建物に動きをもたらし道ゆく人びとにも意外性をもたれ、奥の中庭の緑と相まって町家に活力を与えることとなった。

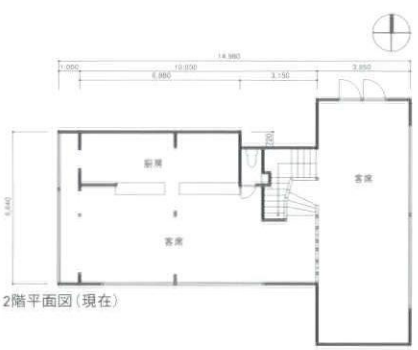
通りの向かいにある公園の景色を取り込むことも考えた。2階部分のテーブルの配置に工夫をこらすとともに、窓の格子を取り外し、1枚のガラスのスクリーンとした。

北側壁面にも開口部を設け開放感を演出し、同時に非常口の進入口の機能も持たせた。その結果、春には満開の桜を楽しむことができる。

構造補強のこと

明治38年の竣工当時より帯の問屋として長年使用したと聞いており、荷重には十分対応できると考えていたが、解体調査を進めるなかで予想に反した結果が判明したため、構造研究会の協力をあおぎ、耐震補強について検討した。

●野間光輪子／京町家再生会幹事

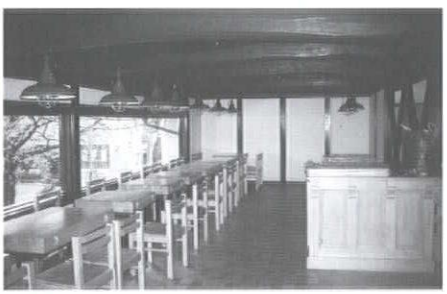


2階平面図（現在）

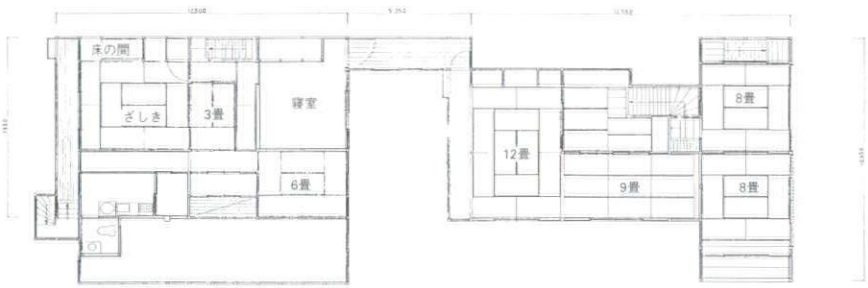


1階平面図（現在）

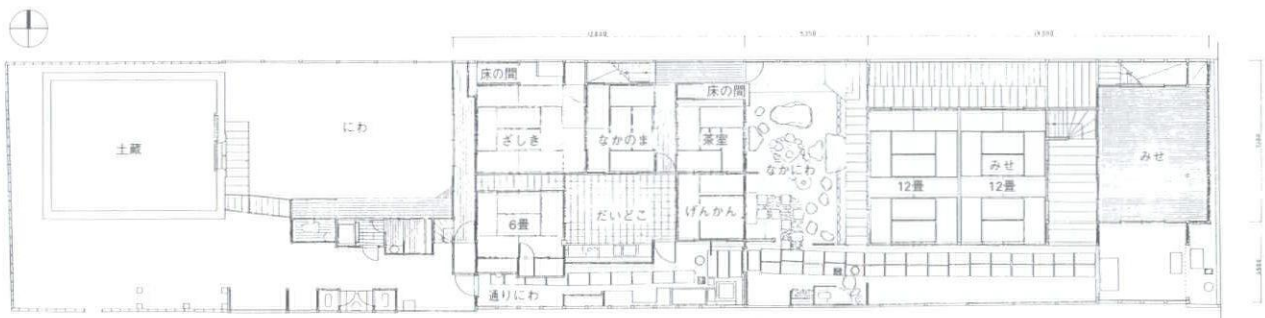
河合部玄関



2階客席



2階平面図（改装前）



1階平面図（改装前）　改装は中庭より東側の部分

景観保全から京町家再生へ

望月秀祐

京都市の市街地景観対策は、1970年代に行政主導型で始まった。その経過を次の年表で示す。

1964年（昭和39年）京都タワー建設（地上131m）
1967年（昭和42年）歴史的風土特別保存地区指定
1969年（昭和44年）京都市まちづくり構想――20年後の京都――発表
1971年（昭和46年）京都市風致審議会が市街地景観の保全整備に関し答申
1972年（昭和47年）京都市市街地景観条例制定、美観地区指定、特別保全修景地区指定（清水産寧坂地区）
1973年（昭和48年）新用途地域・高度地区指定（商業地域内にも45mを最高限とする高度地区を指定）
1974年（昭和49年）特別保全修景地区追加指定（祇園新橋地区）
1976年（昭和51年）伝統的建造物群保存地区指定（清水産寧坂・祇園新橋地区、京都市が全国にさきがけて運動し、文化財保護法に伝統的建造物群保存地区の制度を導入）
1979年（昭和54年）昭和53年度日本建築学会業績表彰作品に「京都市町並み保全修景事業」が選ばれる。伝統的建造物群保存地区追加指定（嵯峨鳥居本地区）
1983年（昭和58年）京都市（長期まちづくり）基本構想（2000年目標）策定
1985年（昭和60年）三条通歴史的界わい景観地区指定
1987年（昭和62年）世界歴史都市会議（38カ国）開催、伝統的建造物群保存地区追加指定（上賀茂地区）
1988年（昭和63年）（京都市総合設計制度施行（高度地区の特例緩和を、公開空地確保を条件に最高限を60mに押える）

このように昭和末期（1980年代）までは京都市の市街地景観対策は着実にその成果を挙げてきたが、平成期に入るや突如出現した経済バブルの高波にさらわれるかのように、みるみるうちに京都の古き良き町並みは潰滅の危機に瀕するに至った。

平成の初めを明治維新にならって、平成景観維新と称して、私は景観危機を訴えてきたが、切迫した当時の経過を次に挙げる。

1991年（平成3年）
1月　新しいまちづくり試案を市長発表
2月　京都ホテル改築（高さ60m）許可
3月　京都仏教会、京都ホテル高層化改革に反対声明
5月　京都駅ビル設計コンペ、高さ59.8m案当選
6月　京都市まちづくり審議会発足
7月　京都ホテル改築の建築確認
12月　京都ホテル改築着工。京都仏教会、地裁へ工事停止の仮処分申請

1992年（平成4年）
4月　京都市まちづくり審議会答申
7月　京町家再生研究会発足

1994年（平成6年）京都ホテル（改築）オープン
1996年（平成8年）改正用途地域・改正景観地区等指定
1997年（平成9年）伏見南浜界わい景観整備地区指定

このような平成景観維新を、行政主導型だけで乗り切るには不十分だと考えた私たちは、京町家再生研究会を設立し、市と市民の間に立ち、研究活動に加えて実践活動も行うことにした。会員の構成は学識者・建築士・市民より成り、会員総数は120名におよんでいる。今後とも研究・実践の活動成果をふまえて、先進的なまちづくりの提言を行なっていきたい。

1989年（平成7年）1月17日に起った阪神・淡路大震災は京都にも大



伝統的京町家のひとつ奏部。祇園祭のお飾り



伏見の町家。正面（写真1）



伏見の町家。本家と離れ家（写真2）

きな衝撃を与えた。すなわち、戦前の古い建物の被害が大きかったこと、このことは京都の古い町家に対しても予測されることで、景観と耐震の狭間に私たちは苦慮したが、今では二者が両立できる見通しを立てている。

1989年（平成7年）の大震災の直後、私の主宰する「まちづくり研究会」のメンバーの紹介で、京町家を耐震補強するよう依頼を受けた。

この京町家は伏見区内にある酒造会社の社長宅（写真1および2）で、本家は明治中期、離れ家は大正末期の建築とされ、1997年（平成9年）に伏見南浜界わい景観整備地区に指定された地区内の代表的町家で、外観補修と建物内外の耐震補強工事に対し、市から補助金が出たことは幸いであった。

当初、建築主から聞いた話では、あの大震災の際の家屋の揺れは大変ひどく、そのため座敷の床の間の壁や外部の壁に相当の亀裂が入ったとのことであった。当時の記録によると、神戸市内の地震による最大加速度は800ガルで、これに対し伏見区内は206ガルと、4分の1の程度であった。それでも揺れが強く感じられたということは少々意外であった。そこで、この建物を詳しく調査したところ、一番耐震構造でない点は、本家および離れ家の座敷が広い庭に面しているため、2面とも隅の柱以外に壁量が皆無であったことであった。それ以外に耐震構造でない点は京町家の標準どおりで、壁量が少ない、火打梁がない、構造用緊結金物がない、基礎が玉石地業であることであった。

この耐震補強設計は施主の注文を聞いて万全の補強策を提案したが、予算の関係もあって止むなく大地震時に倒壊するおそれのない程度にとどまった。それでもすぐれた京町家が存続できる条件が整ったことは良しとしなければならない。一般的な耐震補強工事を除いて、今回重点をおいた工事内容のみ紹介する。

第一に部分的に補強した壁や柱の下部はコンクリート基礎に据えたが緊結しなかったことである。全体の基礎が非緊結であるのに、部分的に緊結すれば逆に緊結部に応力が集中する危険を排した。

第二に本家の座敷の隅柱を添柱で緊結した。（図1および写真3）本家のその部分は平屋建であったのでこの程度の補強にとどめた。

第三に離れ家は総2階建で建築時は本家より後であるのに構造は本家より貧弱であった。そのため無壁の座敷の隅柱に二方直角型の壁を新設して、この部分での致合的な構造座屈を防止した（図2および写真4）。その他外壁と、うだつ（写真5）も補修して伝統的な外観を残すことができた。

私たちの研究会が過去6年間実践活動を通して学んだことは、税制の不備、行政の財政支援の積極性の欠如（町家の借り上げ、買い上げの無策）に残念な思いをしていることであるが、これは今後解決されていく期待はある。

問題は京町家の住人の意思への対応策の難しさである。特に、大地震を教訓として京町家を耐震補強をして残していこうという意思を持っている住人が意外に少ないことである。京都にも大地震は必ず来る。そのとき町家が壊れたら人命にかかわる。このことからでも、私たちの実践活動は必要であり、安易に止めることのできないものと決意している。

●もちづき・ひですけ／京町家再生研究会会長

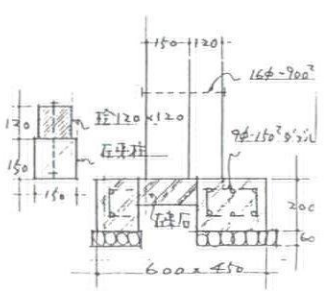


図1

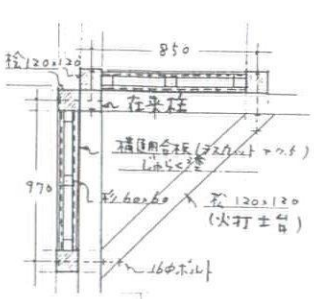


図2


本家隅柱の補強（写真3）


離れ隅柱の補強（写真4）


外壁・うだつの補修（写真5）

再生する町家——京都都心部の将来と町家再生の展開

宗田好史

町家住人との出会い

京都の町家が失われつつあるという。祇園祭に見られる京の町衆文化が凝縮された町家が数年の内には消えていくと言われる。市民団体やマスコミは、この危機を訴え続けてきた。この町家消失の複合的な原因について、ここでは述べないが、これらの原因に対し、多様な取り組みと努力がある。主な原因に、町家を取り巻く住人・職人、そして建築家や企業、行政、研究者の努力が分断されていることがある。これを乗り越え、つなぐことが、京町家再生研究会（以後、再生研）の取り組みである。再生研は、町家住人により提起された組織で、住人が関係者を訪ねまわり、その出会いを生んだところから始まっている。住人と職人、建築家、研究者の出会いに、やがて行政も加わり、町家を取り巻くさまざまな活動が展開されている。

町家の住人は多大な負担を背負い、町家を住み継ぐ努力を重ねている。当事者として住人にはさまざまな日々の迷い、将来に対する意識の模索がある。しかし、その努力は必ずしも報われず、知られてもいない。一方、職人たちにも伝統的木造技術が失われる危機感、焦燥感がある。機会を捉え、経験と技術に裏打ちれた職人技術を熱心に訴えている。しかし、その気持ちを仕事に発揮することはほとんどできない。

また、数多くの研究者も京町家に取り組んできた。京都には、京町家に関する数多くの研究が蓄積され、建築文化上の位置付け、都市型住宅として高度に完成された様式について、研究しつくされていると言って良い。学術的価値から研究から高く評価される代表的な町家は、文化財として保存されている。そうした文化財町家は、確かに高度に洗練された日本の住文化が凝縮された姿をよく留めている。しかし、これらの研究は、現代都市京都の膨大な数の町家をどう取り扱うか、住人はどう暮らすべきかという問いに応えていない。一部ではあるが、京都の建築家は、新町家のデザイン、あるいは町家のレストウロ（修復）に取り組んできた。この努力は常に注目を浴びながらも、しかし京都の町並みをつくる効果は持っていない。

研究者と建築家の仕事は、別個に展開され、それを行政や、企業が外側から見ているだけであった。職人も関心を持ちながらも、直接関与することがなかった。町家の住人は、たびたび調査対象にされながらも、そういった調査、研究は、それら研究は、自らの暮らしを変えることのない、学問であり作家活動であると考えていた。この分断された京都の状況を、大勢の人びとが京都の外から見て、失われゆく町家文化を嘆きながらも、さらに分断され、外側に留まることを余儀なくされていた。

この分断の背景には、町家に対するそれぞれの異なった視点がある。まず、京都の日本文化についての多様な解釈があり、さらに町家を通じて「京文化」を憧憬する視点、あるいは高度な木造技術を崇拝する視点、そして文化財や歴史的景観を保存しようとする視点があった。しかし、そのどれひとつとして、今も町家に暮らし、町家を維持、改善している町家住人を捉えた視点、彼らの悩みに応える視点はない。この分断をつなぐためには、まずひとつ残らず町家を見ること、そして一人ひとりの住民を知ることから始めなければならない。住人との出会いから、職人、建築家、研究者それぞれが、その役割を考え直す必要がある。住人との出会いに始まった町家再生研の活動は、最初に京都都心の町家と町家住人を訪ねることを大切にする必要があった。

京都都心の町家と住民

再生研仲間が1996年から始めた「京都都心町家調査」は、この出会いを求めた調査である。町家全体の調査は今まで行われたことがなかった。そのため、まず都心の全町家を知るために「建物悉皆調査」が必要であった。都心（丸太町、五条、大宮、河原町の各通りの内側）には8,021軒の木造建造物があり、その9割以上が何らかの伝統的様式を備えている。地区、通りごとに全戸数も分類毎にも分布が違い、保存され具合や建物自体の状態が異なる。つぎに「町家暮らしアンケート」により、全木造建物の住民・事業者25%の解答からさまざまな意識を探り、さらに「訪問ヒアリング」により個別に意識を探った。成果は2冊の報告書にまとめられた。その一方で、調査に応じた町家住人が、再生研の仲間にさまざまな問題点を語り、増改築や新しい住人を探すためのお手伝いが始まっている。都心の8千軒から無数の出会いが生まれ、町家とその住人の声が聞こえてきた。

調査では「京町家」を定義しなかった。8千軒の木造建物を外側から観察し、ファサードを分類し、9割を伝統的様式をもつものとした。類型は総二階町家27%、中二階町家22%、三階町家1%未満、仕舞屋2%、前庭付き住宅4%、長屋19%の他、看板建築（内部に伝統的様式を残すものが多い）20%である。しかしこの20%が今すぐ、また30%が近い将来修理を必要とするほど老朽化し、65%が伝統的意匠をサッシュやシャッターに替え、良い保存状態とは言えない。開発が町家を撤去するのでなく、町家そのものが傷み、消えようとしている。建築年代は、明治後期（明治26年～45年）が19%、大正時代が21%、昭和終戦前が27%で、現在では築後50～100年を経た建物が多く、明治25年以前に建てられた、築後100年以上の建物は16%以下で古いものは減っている。しかし、長い間にさまざまな改造を経ており、現在も核家族化、商売替えなどで改修を必要としているものが多い。

住民の職業は自営業主が過半数を占め、高齢者も多く年金生活者が19%。職住一致で零細商工業者が多い。住民は住み続けていくための三大問題点を「隣近所がビル・マンションになって住みづらい」、「建物の修繕・改善にお金がかかる」、「相続・固定資産税のことを心配している」としながらも、60%以上がこのまま住み続けたいと考えている。そして50%以上が「改装・改築したい」、40%弱が「今のままが良い」と答え、「移転したい」は1割弱でしかない。改装・改築についても、外観は「伝統的スタイルを継承しつつ、現代的な用途に合わせて改装したい」が57%、「伝統的スタイルをできるだけ継承」も25%で、「現代的なデザインのものに全面改造したい」は16%でしかない。また建物全体についても、「今の建物を修理しながら継承したい」39%、「外観は伝統的スタイルを保ち建て替えたい」23%、「木造のよさを生かした建物として建て替えたい」19%に対し、「伝統にこだわらず現代感覚の建築で質の高いものに建て替えたい」は19%である。上記のデータからもわか

るように、多くの人が何らかの形で伝統的なスタイルを継承していきたいと考えていることが解る。

つまり京都都心には8千軒以上の木造建物があり、その9割は伝統的様式をもち、建物の状態はよくないが、6割以上の住民が住み続けたいと思い、7割以上が伝統を意識しながら改造したいと考えているのである。まさに、町家再生の機は熟していると言わざるを得ない。

住人の求める町家再生

都心には文化財に指定された町家は、市登録を入れても十数件しかない。しかし、この立派な文化財町家が保存されているために、一般の町家は見過ごされる傾向にある。住民は自らの住まいを「伝統的町家」と捉える人が13%、「町家風建築」が28%、合わせても4割でしかない。ほとんどの住民が「ただの木造住宅」と答え、それも老朽化しているという。この謙虚な住民の意識に「町家再生」という少し大げさな言葉は、相応しくないかもしれない。しかし住民は、住まいと仕事場、そして都心に深い愛着を持っている。さまざまな思いが、訪問ヒアリングを通じて、にじみでてきた。彼らの町家への思いを聞き、その豊かな感性に心動かし、ともにその町家をみていく過程が、町家を通じた住人と再生研の出会いであった。

文化財とは言わないが、8千軒の「木の住まい」に対する住人の愛着を支え、その誇りを励まし、町家を再生する試みを始める必要がある。お金はないが、伝統的スタイルを保ち、現代的な住まいや仕事場を持ちたい数千の家族が、町家に暮らしている。そんな住人の多くが、再生研の調査を待ちわびていた。保存されるべき町家の住民としてだけでなく、できればお洒落な町家活用の施主になりたくて、建築家を待ちわびていたのである。もちろん、隙あらば町家住人になりたい人びともいる。すでに、安く借り受けて自分でお洒落に改造した住人も出ているのである。

商店で町家を改造した事例は、すでに京都各所で147軒になった。都心地区でも、70店舗以上がパブやイタリア料理店、小物屋として人気を博し、ガイドブックまで出版されている。市民は、町家を楽しみ、遊ぶ場所として捉え始めた。そして、住人の多くが家族の記憶に満ちた住まい、自らの町家の、庭や座敷、建物のさまざまな部分を大切にする感性を持ち、「お洒落な町家暮らし」を始めようとしている。町家再生はビジネスとしても、住まいづくりとしても、その幅を広げようとしている。

それはもう、研究者が捉えた京文化を代表する文化財町家ではない。そして建築家の新町家でもない。関係者の分断の中で忘れられていた町家住人は、所有者として、また改造工事の小さな施主として、町家に注目している。これには保存よりも改装、由緒ある伝統よりもお洒落な感覚が求められている。現代都市に生きる新しい感性を持った住人たちが、伝統の住まいの魅力を再発見しながら、現代に生活に伝統の魅力を活用するデザインを求めている。

町家が変わる京都都心が変わる

京都の都心は商業地域に指定され、防火および準防火地域での容積率は400%と700%となり、数多くのオフィスビルやマンションが建っている。今も各地で町家は取り壊され、マンション建設反対の住民運動が起きている。しかし、バブルの崩壊で地価は急速に下がり、相続税問題はほとんど解消した。人口増加は急速に反転しつつあり、都心は不要な高度化を進めることなく、「再生地区」として見直されている。「町家を重要な要素とし、歴史が凝縮された京都らしい町並みをできる限り保全・再生しつつ、新たな建築活動との共存を図り、住み続けることによって新しい価値が生まれていく地域」と市長が言う都心の『職住共存地区ガイドプラン』が今年発表されている。

プランでは、車を締め出した街路に、町家と町家改造店舗、町家型共同住宅や袋地再生集合住宅が建ち並ぶ様子が描かれている。未容積率も高度規制も変更されてはいないが、市のアンケートで60%以上の市民が守りたいと答えた都心の町並みは、どうやら保存・再生させる方向で動きつつある。京都の都心は変わりつつある。この中で無数の京町家が、そこに生きる住人とともに、時代を超えて活きている。

洗練された伝統文化ばかりを求めないでほしい。生き続ける町家では、新しい試みも続けられている。住人が求める町家再生とは、伝統を側に置きながらも、新しいエネルギーによって町家の価値を再発見することである。時代が変われば、住人も町家も変わる。伝統を乗り越えて住み続ける町家の存在が、京都の都心部を変えている。

再生研では、建築家・職人・研究者が一体となって、変わりゆく町家住人の暮らしを追い続けている。ここから求められる仕事を探し、住人と一緒に、知恵と技で新しい生を町家に注ぐ仕事を目指している。

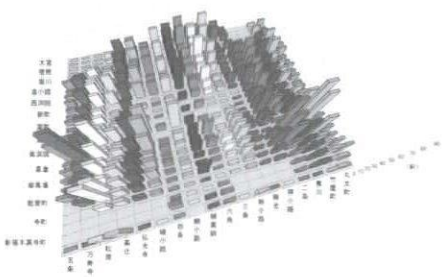
●むねた・よしふみ／京町家再生研究会会長、京都府立大学教授



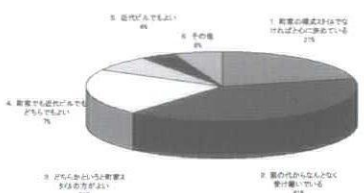
町家改造店舗として若者に親しまれている〈入れもん屋〉



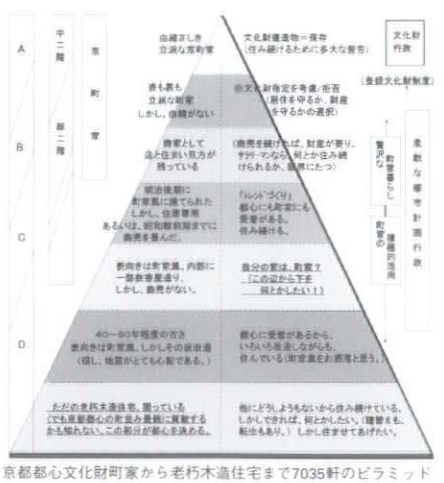
京都都心町家・町づくり調査。京町家再生研究会では、大学、京都市、市民ボランティアと現在も町家の皆悉調査を続けている



京町家分布図。京都都心には、今も8,000軒の町家が残されている。その分布には、顕著な偏りが見られる。御池以北は住宅地として、仏光寺以南は職人街として、町家がいきつづけている



町家であることの意識



京都都心文化財町家から老朽木造住宅まで7035軒のピラミッド

京町家再生研究会活動報告

1996年（平成8年）

河合邸改装工事　設計監理契約（3月）

日本建築学会研究協議会 参加（9月15日）
「文化財建造物の保存・再生の新しい考え方」
於：滋賀県立大学

第44回例会（9月21日）
「例会についての話合い、懇親会」
「第5回定時総会」
於：本部

河合邸改装部分解体・調査（9月）

緋扇の会（10月）
町家体験――蔵を利用したお茶会
於：小島家

第45回例会（10月12日）
「町家調査について」
講師＝宗田好史氏
於：本部

第46回例会（11月9日）
「重森家、河合家見学」
於：重森家、河合家

市民セミナー（11月15日）
ミュンヘンの市民参加活動に学ぶ
「ミュンヘナーフォーラムを聞く会」参加
於：新島会館

成安造形短期大学公開講座（11月30日）
公演／パネルディスカッション
「環境と芸術――京の町家を考える」
於：成安造形短期大学

セカンドハウス東洞院店開店（11月30日）

「観光と都市」シンポジウム（11月30日～12月1日）
於：京都ドイツ文化センター

第47回例会（12月14日）
「町家の不動産的価値について」
講師＝金城一守氏（株式会社ゼロコーポレーション 社長）
於：本部

懇親会（忘年会）
於：セカンドハウス

1997年（平成9年）

第48回例会（1月11日）
「京町家の庭」
講師＝山田昌次氏（花豊造園株式会社 社長）
於：本部

第49回例会（2月8日）
「西陣の見学」
小川美織物（つづれ工房）、巽織物、雨宝院、岡本邸（染色工房）、藤田アート、西陣小学校
於：西陣

京町家の再生活用事例アンケート調査実施（2月）

京都のまちづくりを考える会参加（2月）
市民団体の交流

第50回例会（3月8日）
「町家の補強と構造について」
講師＝荒木正亘氏（株式会社アラキ工務店代表取締役）、立石一氏（株式会社立石構造設計代表取締役）
於：本部

京都市教育委員会生涯学習推進課「情報網洛中洛外」生涯学習ネットワークシステム・サークル情報へ登録（3月）

大阪ガス町家型ショウルーム見学会（3月19日）

建設省都市局都市政策課「まちづくりNPOアンケート調査」へ回答送付（3月）

第51回例会（4月12日）
「伏見南地区「重要界隈景観整備地域」見学」
講師＝吉田秀雄氏（京都市都市景観課課長補佐）
於：伏見南地区

緋扇の会（4月19日）
町家生活体験――町家でお茶とお花を楽しむ
於：小島邸

第52回例会（5月10日）
「京都市の都市づくりに対する取り組み」
講師＝寺田敏紀氏（京都市都市づくり推進課課長）
於：本部

記事掲載
「建築と社会」特集：木造建築物の伝統技術とその将来
・「京町家の流転」望月秀祐
・「現代に生きる町家」大谷孝彦

記事掲載
サンケイリビング新聞社
・「京の町家ショップ巡り」

記事掲載
「建築ジャーナル」
・「建築団体の問題意識アンケート」
・会設立のきっかけとなった現状への批判・意図・目的

第53回例会（6月4日）
「一休庵見学」
講師＝木下孝一氏
於：一休庵

日本建築学会学術研究会参加（6月23、24日）
町家見学／シンポジウム

緋扇の会（6月29日）
町家生活体験―建具替え体験
於：小島邸

第54回例会（7月13日）
「祇園祭　南観音山町内の散策」
於：本部、南観音山町

第55回例会（9月13日）
第6回総会
於：本部

京都のまちづくりを考える会（9月4日）
グランドヴィジョンヒアリング
於：西陣おりなす館

トヨタ財団調査報告会（9月12日）
於：元龍池小学校

シンポジウム「建築基準法を考える」（9月26日）
於：グランヴィア京都

建築士会女性部会　町家見学会（9月27日）

京都教育大学付属京都小学校　共生学習 協力
（10月1日～22日）

第56回例会（10月11日）
「袋路再生について」
講師＝上林氏
於：本部

京都のまちづくりを考える会（10月19日）
西陣まちあるき

第57回例会（11月13日）
「長浜黒壁　他の視察」
於：滋賀県、長浜

第58回例会（12月13日）
「町家の再生について」
講師＝吉村篤一氏
於：本部

懇親会（忘年会）　於：真砂

第1回景観まちづくりシンポジウム（12月17日）
「京町家の保全・再生を考える」
於：京都山一ホール

1998年（平成10年）

第59回例会（1月10日）
「袋屋建物見学」
「京都のまちについて、グランドヴィジョンコンペの様子」
講師＝布野修司氏（京都大学助教授）
於：袋屋（町家）

第60回例会（2月14日）
「武田薬品工業（株）貸資料館（震災後神戸より移築）の移築再生について」
講師＝中川 理氏（京都工芸繊維大学助教授）、古賀芳智氏（株式会社 KOGA建築設計室）、中島節子氏（大阪市立大学教授）
於：武田薬品工業株式会社貸資料館

京町家まちづくり調査
（財）京都市景観・町づくりセンター主催
第2回リーダー会議（2月10日）
・サブリーダー会議（2月16日）
・全体説明会（3月6日）
　於：まちづくりセンター
・サブリーダー調査の実施――銅駝学区
　（3月7日）
・町家再生研チーム・ミーティング（3月14　日）
　於：学芸出版社ホール
・町家再生研チーム調査実施（4月11・12、18日）
・リーダー会議（5月12日）
　於：まちづくりセンター

第61回例会（3月14日）
「京の町家について」
講師＝新谷昭夫氏（大阪市住宅供給公社住まい情報センター設立準備室主査）
於：学芸出版社ホール

祇園望月　オープン（3月26日）

第62回例会（4月11・12日）
町家まちづくり調査の実施

第63回例会（5月9日）
「町家まちづくり調査パネルディスカッション」
於：学芸出版社ホール

アルトレタント　オープン（5月16日）

第64回例会（6月13日）
「寿山荘見学」
講師＝山本良介氏
於：寿山荘

KBSラジオ「京都大好き」出演
京町家再生研究会シリーズ
司会＝茂山あきら
出演＝野間光輪子（6月4日、11日）、望月秀祐（6月18日、7月9日）、宗田好史（6月25日、7月2日）、増井正哉（7月16日）、大谷孝彦（7月23日）、大倉直美（8月6日）

緋扇の会（6月28日）
町家生活体験――建具替え
於：小島邸

第65回例会（7月11日）
「京都の町と住まいの歴史」
祇園祭の準備風景体験
講師＝高橋康夫氏（京都大学教授）
於：本部

台南市（台湾）との交流（7月16日）
祇園望月見学および研究会の活動報告
意見交換会

会の発足は、1992年（平成4年）7月17日。
今回の活動報告には、ここ3年程の記録を掲載いたしました。

「京町家再生」を、どのように受けとめられただろうか。

こうしたことは、イタリアの都市でごく普通に行われてきた。歴史的都心（チェントロ・ストリコ）の建物は厳しく外観が保存される一方で、内部の変更はかなり自由にできる。古い建物と最新のインテリアがスリリングに同居するイタリア流「レスタウロ」（修復）、それが、イタリアの都市を再生させることになった。

京都でこれと類似する試みが行われてきた事実に、私は大きな感動を覚えた。こうした試みが、さらに豊かに展開されることを強く望んでいる。それが、今回このような企画に取り組んだ私の主旨である。

読者諸氏はどのように考えられたであろうか。

どうか意見を寄せて欲しい。全国で展開されている類似の試みについても、ぜひ情報交換をしたいと思う。

京都のニューウェーブをさらに高めていく必要も感じている。このような意味から率直なご意見、情報、その他を右記へ寄せてほしい。（長尾重武）

連絡先
■SD編集部（目次参照）

■京町家再生研究会本部
〒604-8214
京都市中京区新町通錦小路上ル百足屋町384

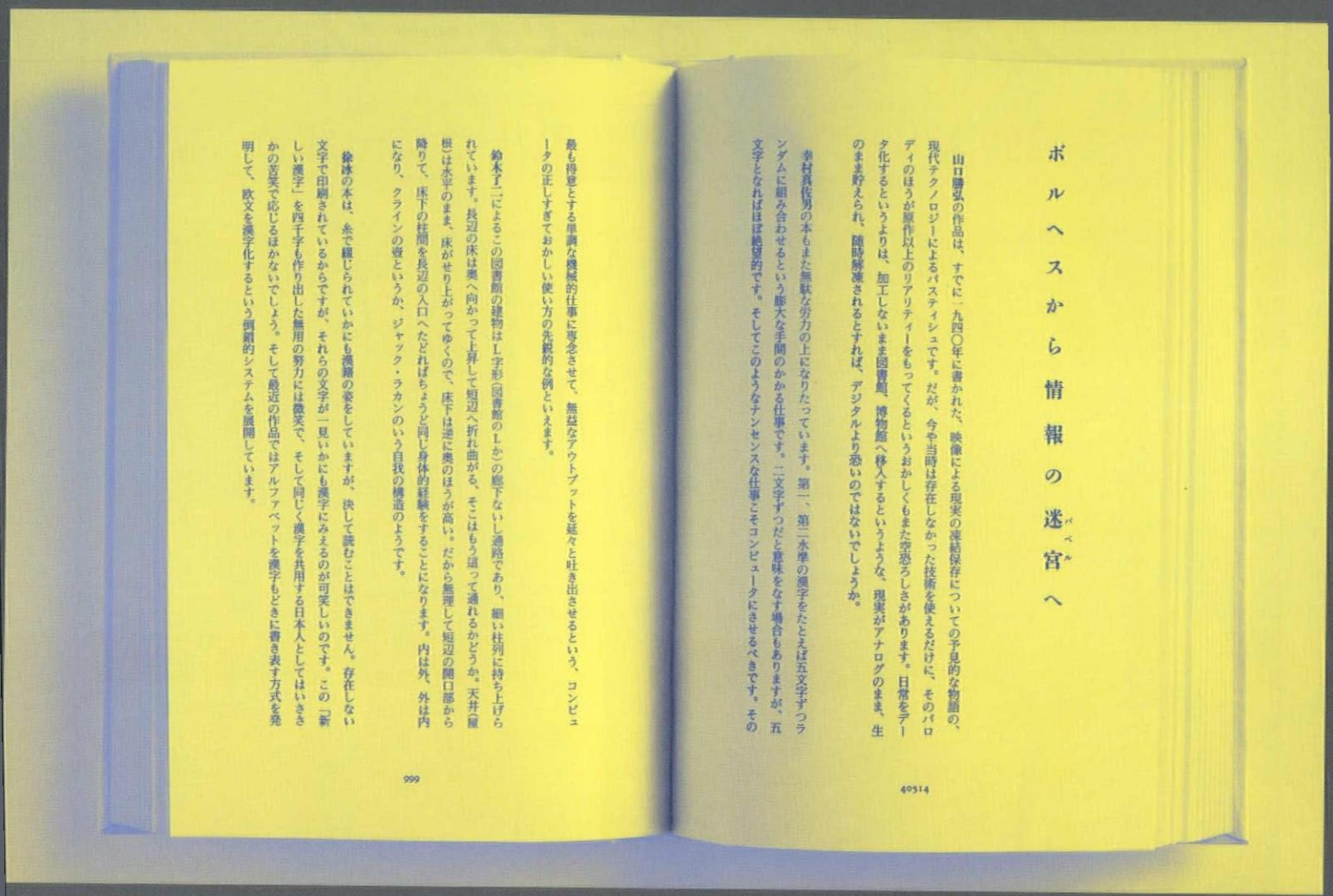
■長尾重武
〒187-8505
東京都小平市小川町1-736　武蔵野美術大学
E-Mail: nagao@musabi.ac.jp

編集協力＝
長尾重武
京町家再生研究会

写真＝
二村春臣（P. 81、84、85）
山崎兼滋写真事務所（P.92上、右下）
上記以外はすべて、京町家再生研究会

京町家再生研究会では、今年の11月に京都市主催によるイベントの企画・運営を行います。京都の町歩き、見学会、職人作業体験、シンポジウムなどがあります。詳しいお問い合わせは、京都市都市住宅局管理部企画管理課までお願いいたします。
京都市都市住宅局管理部企画管理課　電話：8075－222－3610

"The Library of Babel"
Characters / Books / Media



文字／書物／メディア

バベルの図書館」

山口勝弘＋幸村真佐男＋鈴木了二＋徐冰
YAMAGUCHI Katsuhiro＋KOHMURA Masao＋SUZUKI Ryoji＋XU Bing

998.9.18 FRI.—10.25 SUN.
NTTインターコミュニケーション・センター［ICC］
東京オペラシティタワー4階

163-1404 東京都新宿区西新宿3-20-2 京王新線初台駅東口から徒歩2分
館時間: 午前10時—午後6時（金曜日のみ午後9時まで）
館は閉館の30分前まで　休館日: 月曜日
場料（税込み）: 一般800円/大・高生600円/中・小生400円
催: NTTインターコミュニケーション・センター［ICC］
力: ダイキン工業株式会社 / 東京画廊
問い合わせ: フリーダイヤル 0120-144199
mail: query@ntticc.or.jp　URL: http://www.ntticc.or.jp/

ICC
INTERCOMMUNICATION CENTER

関連イベント
出品作家によるレクチャー
9月25日（金）　6:00pm- 山口勝弘
10月2日（金）　6:00pm- 幸村真佐男
10月10日（土）2:00pm- 鈴木了二
定員: 先着100名
会場: 5Fロビー
フィルム上映
鈴木了二「物質試行35 空地 空洞 空隙」
1992年（16mm/15分）
毎週金曜日 4:00-8:00pm（1日8回上映）
定員: 先着37名
会場: シアター
★レクチャー及びシアターの入場料は無料

NTT

いいものだけを世界から

いま開幕、
スポーツ ニューステージ。

多目的スペースがスポーツアリーナに一変！



ロビンス・オールスターは、シカゴブルズなどのNBA公式戦やアトランタオリンピックのメイン会場など、世界中で広く使われている本格的なフローリングによるポータブル・スポーツ・フロアシステムです。

●プレーヤーへの衝撃を吸収する弾力性に加え、永年の使用にも反りや狂いを起こさない高品質設計。

●独特のジョイント・ロッキング方式により、短時間での組立て・取外しが可能で、しかも優れた収納性。

コンベンション施設、インドアスタジアムを短時間でバスケットボールやバレーボール、バトミントンなどに最適なスポーツアリーナに変身させることができるフローリングシステムです。

ロビンス　FIBA・JBA・NBA公認コート

オールスター

ポータブル スポーツフロア システム

本社 03(3452)4311 ■ 大阪支店 06(488)9801 ■ 名古屋支店 052(241)2531 ■ 福岡支店 092(522)1331 ■ 札幌支店 011(231)2313 ■ ヤナセ東北 022(221)4171 ■ ヤナセ静岡 054(261)4105

資料請求券 SD　詳しい資料を差しあげます。ハガキに資料請求券を貼付のうえ、ヤナセ 商事事業部までお送りください。

good new days 人間らしい美しい未来を

ヤナセ

総輸入元 株式会社 ヤナセ
商事事業部
東京都港区芝浦一丁目6-38 〒105-0023
TEL.(03)3452-4311

展覧会レポート

自然の中に展開された「夢」
IL SOGNO DI AZUMA 1998
吾妻兼治郎作品展より

村井久美

IL SOGNO DI AZUMA
会期：25 June-9 August, 1998
会場：Villa La Marrana, Montemarcello, Ameglia (La Spezia)

イタリアの真夏の太陽が西に傾きはじめた頃、高速道路の左前方にカラーラの白い山肌が淡い光彩を描きはじめ、私たちの旅の目的地が近いことを知る。ミラノとフィレンツェのほぼ中央に位置し、美しいリグリア海岸に面したモンテマルチェッロというこの小さな村は、丁度ヴァカンスの賑いを迎えていた。教会を中心に構成された古い街並から山道を抜けると程なく会場である庭園に辿りついた。今夏の吾妻兼治郎作品展は、村の頂部に建つボロンガーロ夫妻の別荘を舞台に展開する。

車を降りるとむせるような緑が匂い立ち、木々の足元には、黄色く着彩された山型三角形の鉄板が展覧会タイトルを刻んでいる。"IL SOGNO DI AZUMA" 伊語sognoは「夢」を意味する。氏の冠したタイトルを前に心が逸る。ゲートを抜けると、幔幕のストライプが木漏れ日に映え、その内部の湿った大地は、氏の作品特有の孔が神秘な虚無を画していた。大教会に足を踏み入れた瞬間と感覚を重ね合せたと、氏が語るところの異化の導入である。展覧会は、この作品をはじめ、インスタレーションとしてのサイトスペスィフィックな作品と、ブロンズ作品が点在する野道を散策するように構成されている。いずれの作品も自然空間に永遠のリズムを刻んでいるかのように設置され、会場全体を作品化したスケールの大きなものである。環境との関係を探究する作家の普遍的なまなざしに、創造の原点を見る思いがした。

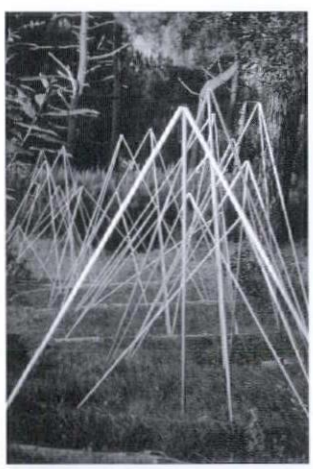
イタリアへ渡って42年、無と有の精神性を追及したブロンズ作品を中心に国際的評価の高い吾妻氏が、この展覧会を通して初めて試みたというインスタレーション作品群にみる制作意欲と情熱的な姿勢は、氏の見果てぬ夢の可能性を示唆するものであったといえよう。この展覧会の企画構成に参画された、子息で建築家の安里氏との父子共作の一端も、心地よい印象を残すものであった。

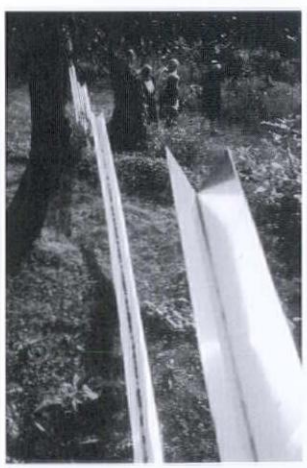
眼下にのぞむ家々に灯りがともりはじめ、茜に暮れゆく遥かな山並を背に、作品"Sogno"の錆色が、ひときわ鮮やかに輝きを浮かべている。わずかに穿った孔にイタリアの乾いた風がいつまでも戯れていた。

遅い日没を待って、庭に用意された清逸な食卓につくと、濃密に降りてきた闇の中に悠然と横たわる作品も大地にまどろんでゆく。美術展に関して経験がなかったというボロンガーロ夫妻の企画は5回目を迎え、一連の吾妻作品との出会いは、夫妻の夢に近づく大きな礎になったという。夫妻は、いずれこの村一帯を自然とアートが共存する彫刻公園にしたいと静かに語った。

長いイタリアの夏の夜、それぞれのロマンに満ちた豊潤な夢が熟成の時を刻んでいた。

●むらい・くみ／アート・プロデューサー（TAKENAKA DESIGN）

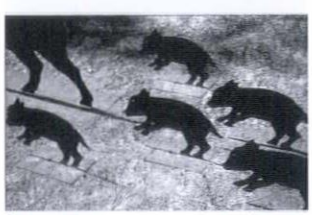

1


2


3


4


5


6

1.Natural time
1998 / iron
180x130x1200cm

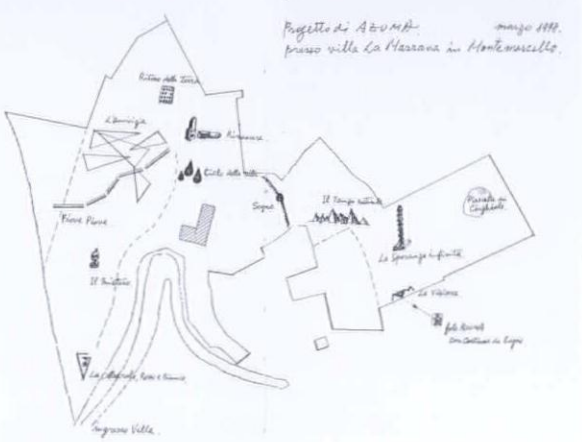
2.Raining, raining
1998 / aluminium and iron
12x4800x10cm

3.Earth's rhythm, MU-1
1961 / bronze
134x108.5x4cm

4.Infinite hope, MU-749
1974 / bronze
190x46x46cm

5.Mystery, MU-767
1976 / bronze
61x30.5x32.5cm

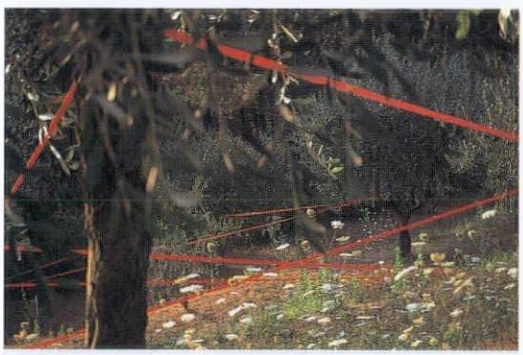
6.Boar Square(detail)
1998 / iron



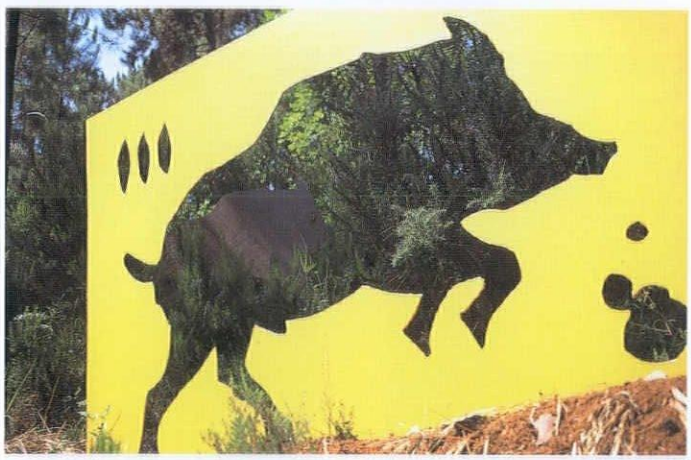


7

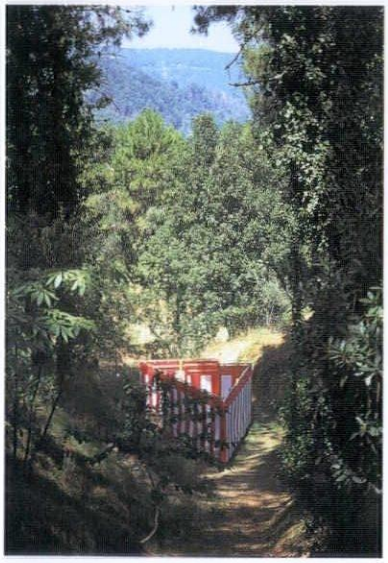
photos: Osamu Murai



8



10



9

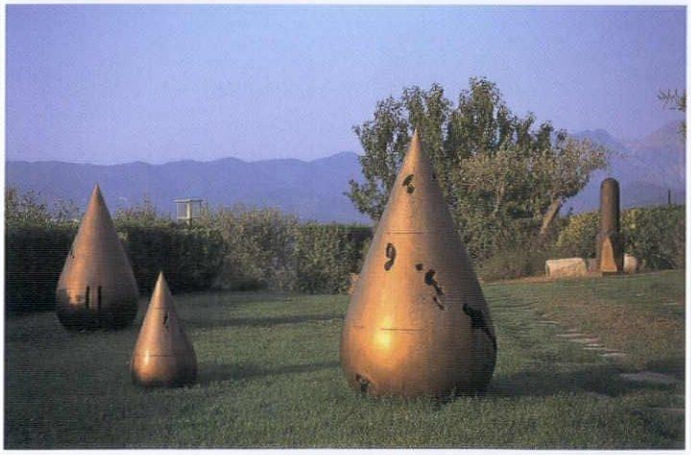
7.Dream
1998 / iron
150x2680x15cm

8.Friendship
1998 / nylon tape
800x1400x1000cm

9.The cathedral, red and white
1998 / wood and cotton
180x500x650cm

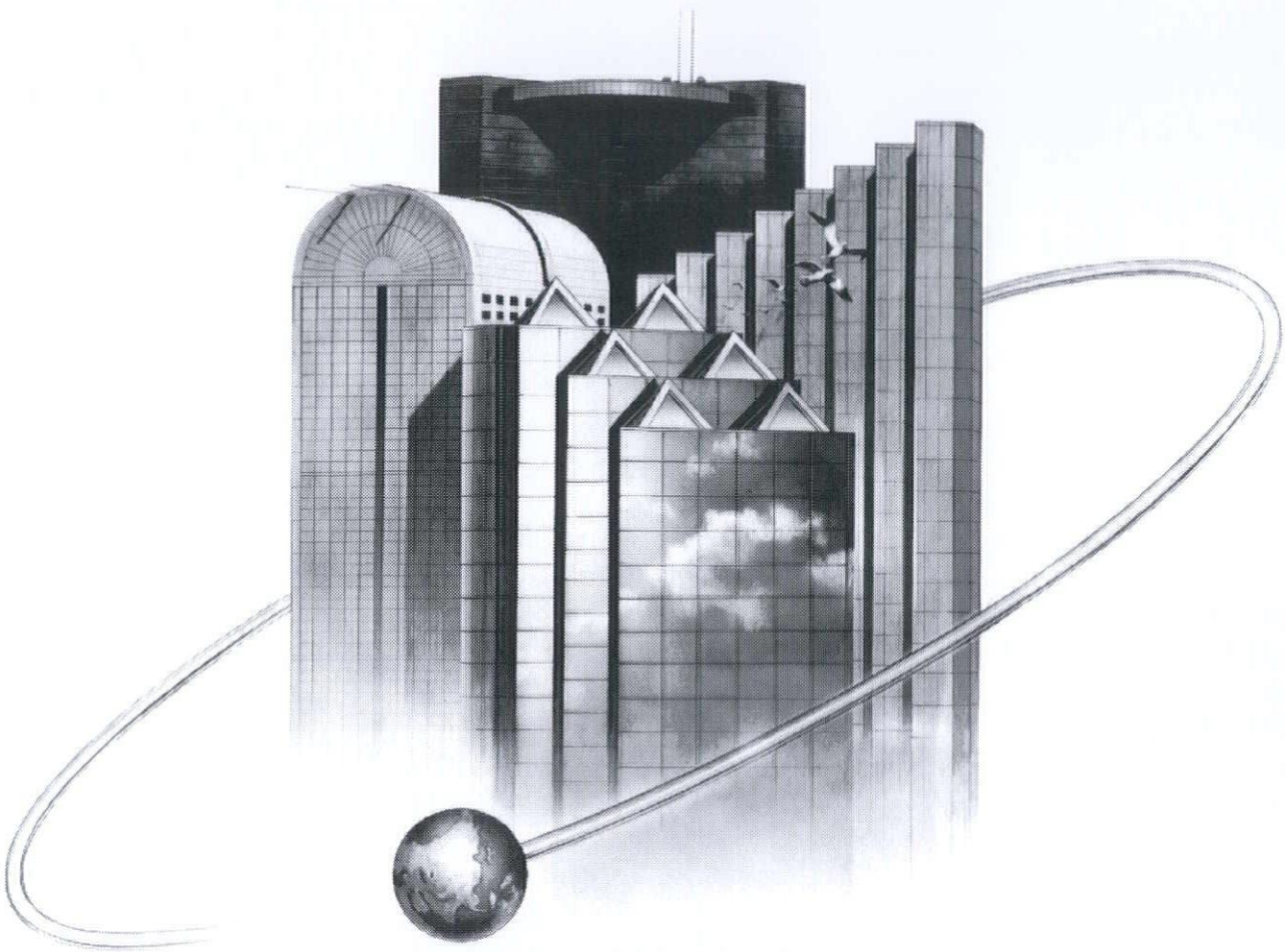
10.Boar Square(detail)
1998 / iron

11.Life cycle,MU-765M,MU-765P
1980 / bronze
120x60x60, 60x30x30cm



11

快適創造



人と自然と機能が調和した理想の快適環境を。

人と自然、そして機能が調和した新しい快適環境を創造する。
それが三機工業のめざす総合エンジニアリングです。
都市、コミュニティ、産業施設…人をとりまくさまざまな環境について考え、
その理想を追いつづけている三機工業は、
いま、地球環境という視点にたって、すばらしい未来にむけての新しい環境のかたちを提案しています。

三機工業株式会社

〒100-8484 東京都千代田区有楽町1-4-1 TEL.03(3502)6111

ニュース

ベトナム・ホイアンでの民家修復

篠崎正彦

南北1700kmに及ぶベトナムのちょうど中ほどにホイアンという小さな街がある。ここには数百軒におよぶ木造の町屋が建ちならぶまち並みが残っている。筆者は1997年12月から1998年6月まで、JICA(国際協力事業団)派遣専門家としてこの街で過ごす機会を得た。この約半年の経験の一端を紹介させていただきたいと思う。

ホイアンという街

ベトナムの片田舎の街になぜ500棟近くもの古い民家が残っているのか。単刀直入に言えば、これはもともとはホイアンが国際商業港として繁栄した街であったということである。

ホイアンは16世紀半ばから19世紀末まで東南アジアでも有数の貿易港であり、アジア各地をつなぐ商業センターであった。交易の中継点としてだけでなくベトナム中部から産出される豊富な農海産物、香木、木材などの輸出元としても機能していた。今でも川沿いの多くの家では荷揚げのための船着き場の跡が残っている。この期間の初めは日本の朱印船貿易の時期と重なり、朱印船渡航先でも一、二を争う場所であり、かなりの数の日本人がホイアンに住み着き、日本人街を形成して自治をおこなっていたという。現在でもホイアンの街には日本人が架けたと言われている日本人橋や日本人墓が残っている。

貿易で集まった富が多くの立派な作りの町屋を建てさせることとなったのであるが、やがて19世紀後半には商船が出入りしていたトゥボン川が堆積して通行が難しくなるとともに、舟の大型化に伴いホイアンは衰退していくことになる。しかし、目立たない田舎町となったことで、建て替える資金もなく、ベトナム戦争でも大きな被害を受けることなく、小さな通りに程よいスケールの町屋が建ち並ぶ「チャーミングなまち並み」(福川裕一千葉大学教授)が残ることとなった。現在まで残る伝統的まち並みでは質・量ともに東南アジアでも随一のものと言える。

ベトナム政府もこのまち並みの保存に力を入れており、1985年というベトナムでは早い時期に史跡に指定したのを初め、遺跡管理センターを設置するなど必要な措置を行っている。今年の6月にはUNESCO世界遺産への申請を済ませており、来年の世界遺産会議でのリスト入りを期待している状況である。

ホイアンへの技術協力

まち並みと家屋調査が1992年以来、昭和女子大学、千葉大学、東京都立大学などを中心とした日本側とハノイ建築大学、ハノイ大学、ベトナム考古学院を中心としたベトナム側とで進められており、これはベトナムではおそらく初めての多分野の研究者が協力して行う国際的総合的調査である。この調査と並行して93年からは日本文化庁を中心とした民家の修復技術協力が進んでおり、これまでに5棟の重要な文化財建築物の修復が完了したほか、雨漏りの激しい約30棟に対して緊急の屋根葺き替え工事を行ってきた。

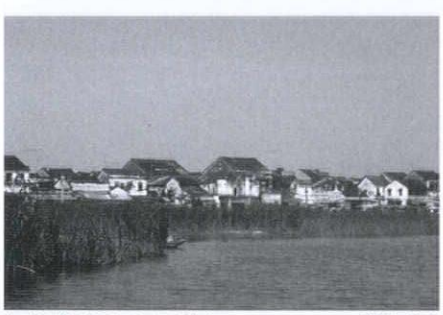
ホイアンの町屋は長年修理の手が入っていないものが多く、雨漏り、蟻害、台風、洪水などの被害を受けて、傷みが激しくなっている。一方でベトナム側だけでは修復・保存を手がけることのできる建築家・技術者が質・量ともに不足しており、能力のある建築家は通常は国宝級のモニュメントの仕事で手いっぱいである。ホイアンの様な地方都市のまち並みの面倒を見ることは不可能である。実際、ホイアンに専任の建築家が配属されたのは今年の5月になってからであり、実際の保存・修復の経験についても、これから実績を積むことが期待されている状況である。

まち並みの保存と民家の修復には人的協力だけでなく、日本からも多くの団体や個人から寄付金・補助金が寄せられており、1997年にはホイアンのシンボルである日本橋の修復に対して在ベトナム日本大使館の音頭で多くの基金が集められている。

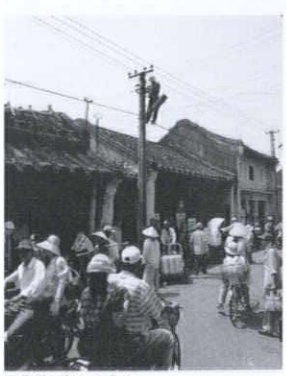
JICA専門家派遣

JICAは青年海外協力隊というボランティアの派遣でよく知られているが、これとは別に専門家派遣という制度があり、各国政府からの要請に基づき3000人近くの方が世界各地で自分の専門を活かして国際協力に活躍されている。

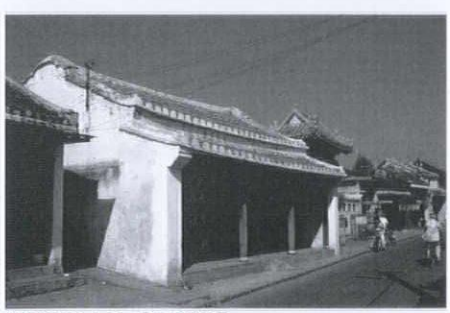
今回、筆者は民家の修復とまち並みの保存を中心とする業務で派遣されたわけだが、これは非常に珍しいケースであると聞いている。専門家派遣の制度は発展途上国からの要請という性格上、通常はインフラストラクチャーや医療、農業、職業指導といった分野での派遣がほとんどであり、文化財に関する事業についての要請はまれである。今回の派遣は、技術協力においても文化という側面が重要視されてきているという近年の流れとともに、我々のチームの数年来の総合的な技術協力の



トゥボン川からのホイアンの眺め　撮影＝筆者



旧正月で賑わう通り



修復後のチャンフー通り48番家屋

成果がベトナム・日本両政府の評価を受けたのだと理解している。自画自賛ついでになるが、筆者の派遣を含めたホイアンでの活動はベトナム側からもJICAからも高く評価していただき、今年度も引き続きこの事業に専門家を派遣することが決定している。これは数カ月という短期の専門家の派遣については希なことである。

ちなみに、ベトナムで調査と技術協力を行っている研究者のチームはいくつかあるが(本誌96年3月号「ベトナム建築大博覧」参照)、いずれのチームも粘り強く活動を続けられており、ベトナム側から高い評価を受けていると聞いている。今やベトナム建築の研究においては日本がもっとも活発に活動している国であると言っても良いのではないか。

ホイアンでの保存・修復

筆者に与えられた課題は単に個々の民家の修復を行うことだけでなく、まち並み保存のための様々な制度や近年急速に進んでいる観光化への対応策へのアドバイスまでも含むものであった。わずか半年間でこれだけのことを、しかも文化・言語の違う場所で行うのは正直難しいことであった。必ずしも全ての問題を解決して帰ってきた訳でもない。しかし、現地の遺跡管理事務所や市当局にも好意的に対応してもらい、ある程度の成果を挙げられたのではないかと考えている。

既に述べた様にベトナムでの建築物の修復は必ずしも良い体制にあるわけではない。ホイアンにおいても同様で、修復以前の基本的な情報がほとんどない。建築年ひとつとっても日本の様に棟札があるわけでもなく、家屋台帳はベトナム戦争後に市が一括管理している間に損傷、紛失してしまっており、いくつかの状況証拠より推定するほかはない。居住者による改造も多い。また、これまでの修理・修復に当たっては事前に調査がほとんどされず、竣工後の報告書もない。設計図面なしに工事が始められる場合も多かった。幸か不幸かホイアンには腕の良い大工がまだ残っており、図面なしでも彼らに任せておけば、見た目はちゃんとした修理が行えたからである。また、街路の舗装や街路灯の工事も行われているが、ベトナム側の計画案が必ずしもまち並みに調和しているとは言い難い状況でもあった。

技術的な問題以前に、この様な環境を是正していくのにしつこく提案をし、自分達のまちをどの様に保存して運営して行ったら良いのかについて話し合いを持ったことが、今となっては最も大切なことだったのではないかと思える。

個々の建物の修復にあたっては、十分な資料や研究成果がまだ蓄積されていないこともあり、現状修復に終始することが多かった。現場ではこちらが必要な指示さえすれば、優秀な職人がきちんとした仕事をしてくれるのでよいのだが、少し目を離すと自分の考えた形を勝手に作ってしまうこともあるのでなかなか油断ならない。彼らは日曜もなく毎日朝7時前から午後5時までびっちり働く上に仕事が速いので、いったん工事が始まるとこちらものんびりと構えているわけにはいかないのがなかなか辛いところではあった。

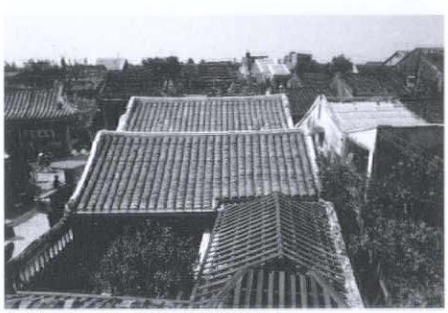
これからの文化財保存と住居の計画

ベトナムでは社会主義経済から市場経済への移行が進むとともに一般の人々の経済水準も上がっており、近代的な生活様式が広まりつつある。ホイアンで古い民家を近代的な生活欲求を汲み取った上でどのように活用していくかという点もまだ多くの住民が納得いく形で見えてきているわけではなく、これが今後の大きな課題となってくるだろう。また、木造の住宅はRC造のものに比べ3倍近いコストがかかり、新築はほとんどなくなっている。近い将来に木造を手がけることのできる職人や必要な材料が枯渇することも心配されている。一方でベトナム人だけでの修復も軌道にのりつつあり、現在も日本ユネスコ協会連盟に予算を補助していただいた町屋の修復が、ベトナム政府所属の修復建築家とともに進められているところである。

現在では我々のチームはホイアンだけでなく、ベトナム各地方での民家調査や都市の集合住宅の調査も進めており、他の研究チームとも共同した上で、より広い視点からのベトナムでの住居の研究と計画につなげていきたいと考えている。

ベトナムは外国人観光客にとって人気のある国となりつつある。興味を惹く文化と建築、料理、人、自然も多くある。もしベトナムに行く機会があったらホイアンという小さなしかし魅力的な街を訪れて頂ければと思う。

●しのざき・まさひこ／昭和女子大学国際文化研究所


修復中のチャンフー48番と瓦屋根の連なり


仮組みして柱と合掌梁の角度を確認

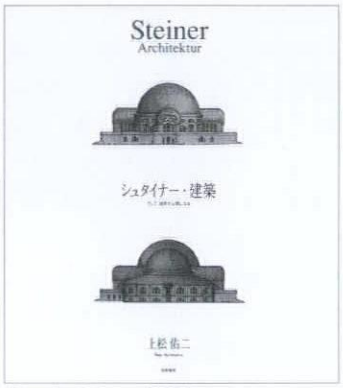

繕いの終わった部材を組み上げる

書評

『シュタイナー・建築』

評者＝子安美知子

日本にも待たれるシュタイナー教育の新しい空間



『シュタイナー・建築』
上松佑二＝著
B4変形　322頁
筑摩書房　12000円

ルドルフ・シュタイナーの名が日本でかなり広く知られるのは、主として教育運動においてだが、実は建築の分野での彼の業績が紹介されたのはすでに70年も昔のことだった。アントロポゾフィーと呼ばれる人間認識の道を説いたシュタイナーが、一方的に神秘思想家であるかのような先入観を打破していくのは、これら教育、建築といった具体・現実的な社会実践の行為においてであった。いずれも1910年代に端を発するふたつの動きは、その後の脈々たる展開を経て、ひとつは世界に700という数のシュタイナー（自由ヴァルドルフ）学校を生み出したが、本書をひろげるともうひとつの建築芸術なる分野での業績が、これまた多数の実例となって多くの国々に息づいていることを知らされる。

建築の専門知識をまったく持たない評者としては、もっぱら住み手ないし利用者、あるいはひとつの町や地域を歩くなかで出会う建物から受ける作用や芸術的インパクトといった観点で、本書を眺めかつ読むことになる。

明るい開放的な広い空間のなかにいくつものさらなる空間が交錯しあい、天井の層にも波がある。多角錘の一部を切り取ったようなダイナミックな照明のもとにゆったりと位置する椅子コーナー——アムステルダムにある〈国際オランダ銀行〉の入口ロビーだ。音楽堂、図書館、文化センター、オイリュトミーホール、セミナー宿舎、学校、農場、レストラン、そして病院までを擁するスウェーデンのヤーナ複合文化施設は、それら個々の建物が、どれも新たな驚きを誘う独自設計でありながら、全体の俯瞰図を見ると本書の副題「そして、建築が人間になる」とはこのことだとうなづく。80、90年代に奔出する斬新なデザインの建築物、戸外の広場、特急列車の客室やビュッフェ——これらは本書の巻末近くにあるが、素人の読者としてまずは最新の状況に息を飲むのも必ずしも邪道とはいえないだろう。

次いで、やおらその源泉をたずね、奥に隠れた理念に迫りたく思う人は、前半に繰り広げられるシュタイナー自身の設計になる〈ゲーテアヌム〉の偉容、そのさまざまな細部、アングル、周囲の自然との共鳴のさまに見入り、彼の哲学、世界観につながる解説を読もう。著者上松佑二氏の筆は、建築というきわめて可視的作品の内部に潜む不可視の生命の世界を密々と解き明かす。

私事に触れさせてもらうと、今から27年前、わが子とともに初めてシュタイナーの名の付く学校に出会った評者は、そこでのユニークな教育内容にもまして、何とも不思議な教室の色や形に驚かされた。これが学校？　と謎に向かうようにして足を踏み入れた校舎は、いつしか日常のものになり、今度は帰国して通常の学校の建物に入ったとき、えっ？　と逆の違和感を覚えたのである。真四角な大きい箱に薄灰色のペンキを塗った入れ物——これが今なお大方の「学校」のイメージだろう。そんな学校の校長先生や父母や自治体の学校建築担当の方々に、ぜひ本書中盤のページを繰っていただきたい。

ドイツ、オーストリア、スウェーデン、ノルウェー、オランダ、ハンガリーの国々で、シュタイナー建築の大御所、そして若手の芸術家たちが、各自個性を発揮して作り上げた12の作品群が紹介される。シュトゥットガルトにある1919年創立の最初の学校（収録されているのは戦後に建てられた祝祭ホール）から社会主義崩壊を待っていち早く誕生したブダペストの幼稚園まで、それぞれの風土に調和しながら「人間を育てる」普遍的なトーンを響かせる作品たち——そのトーンとはまさしくシュタイナーが目指した「自由への教育」という命題なのだ。

日本でもようやく公開された東京シュタイナー・シューレは、ささやかな借家住まいながら教育の内実への努力を続けて12年になる。このシューレにもその内実にふさわしい校舎の実現が、願わくば上松氏の手でなされる日の近からんことを！　本書を見、読みつつ強まる思いはこれである。

●こやす・みちこ／早稲田大学教授

書評

『西洋の建築 空間と意味の歴史』

評者＝五十嵐太郎

空間論と歴史学を横断する思考



『西洋の建築　空間と意味の歴史』
クリスチャン・ノルベルグ＝シュルツ＝著
前川道郎＝訳
B4版変形　250頁
本の友社　12000円

現象学的な建築の読解で知られるノルウェーの学者クリスチャン・ノルベルグ＝シュルツが、古代エジプトから20世紀半ばまでの西洋建築史を一気に記述したのが本書である。すでに邦訳された彼の理論書『実存・空間・建築』(鹿島出版会)は、建築がいかに実存的空間に関わるかを考察したものだったが、これと同じ1970年代の前半に書かれたこともあって、『西洋の建築』は歴史的な建築物を対象としながら思想的に共振しており、ちょうどその応用編として機能している。ゆえに、併せて読まれると良いかもしれない。実際、まえがきにはこう本書の主張が要約されている。「建築は実用的な要求や経済以上のなにものかとかかわっている。それは実存的意味とかかわっている。……建築は幾何学的概念や記号学的概念では満足に記述され得ない。建築は有意味な(象徴的)形式によって理解されるべきである」と。難解な概念をちりばめて抽象的な議論を展開する、いわゆる建築の空間論には、何かしらとっつきにくさを感じている人は多いだろう。しかし、これは歴史書としても読めるし、具体的な作品の分析を積み重ねているので、内容は比較的わかりやすい(訳文も大変に読みやすい)。加えて、豊富な訳註も読解の手助けになるだろう。

終章を除く12章において、それぞれ繰り返される叙述の構成は明快である。「序」ではその時代の要点を述べ、「景観と集住地」では環境や都市といった建築の背景に一瞥を与え、「建物」では一般的な史実をおさえ、「分節法」では形態操作を分析した後に、幾つかのエポックメイキングな作品をとりあげて細かく検証する。そして「空間概念と史的展開」では時代が生みだした空間の特徴をまとめ、最後に「意味と建築」では同時代の哲学や思想と関連づけながら建築の構成や意味を論じる(最近では隈研吾の『新・建築入門――思想と歴史』も、こうした試みだったといえよう)。彼が空間の性格を特徴づける手つきについては、筆者が実見したことがある建物に照らし合わせてみても、充分な説得力をもっているように思われ、その深い洞察力には感心させられる。設計に携わっている人や形態論に関心がある人にとっても、示唆に富む内容になっているはずだ。ただ論理的な数学の証明のような構成だからといって、文章は無味乾燥というわけではなく、ノルベルグ＝シュルツの幅広い学識によって様々な神話、テクスト、エピソードなどが挿入され、詩的な想像力を喚起させるものになっている。そうした意味で記述は一貫性をもち、文章のクオリティは高い。

とはいえ、ムラがないわけではない。彼が得意とするイタリアを中心とした「ルネッサンス建築」から「バロック建築」までの章や、「ローマ建築」と「初期キリスト教建築」の章は迫力をもっているが、「啓蒙思想」以降の近代の章はやや歯切れが悪くまとめきれていないし、「ギリシャ建築」の章はヴィンセント・スカーリーの研究に負っている部分が多いように見受けられる。そして空間論としてではなく、歴史書として本書を見たとき、幾つかの気になる点がある。例えば、しばしばモニュメントから時代や民族の精神を読みとろうとしていること。また少し古い西洋建築史の教科書的な枠組みがほぼ正確に反復されてしまっていること。ピアジェの影響を受けつつ「建築の歴史は個人の心理学的発達と平行している」と語り、そこに「まとまりのない全体の最初の具体化から自然的性格や人間的性格の精密な象徴化にいたるまでの展開」という進化論的な構えがうかがえること。他者の影響を否定し、自律的な発展として西洋建築を描こうとしていること。純粋さを失うがゆえに、建築における後世の改変を否定的にみていることなどだ。こうした歴史観はデヴィッド・ワトキン、スピロ・コストフ、ジョセフ・リクワートらの建築史研究者によって批判されてきたものではなかったか。

いささか批判的な指摘をしたが、これらはあくまでも歴史書とみなしたときの疑問点であり、空間論の方法に対するものではない。全体として非常に興味深い内容であることに変わりはない。筆者自身、大いに刺激を受けたことは告白しておこう。例えば、アジアの建築やクレオールの建築は、いかに語りうるのだろうかと思わず想像をめぐらせた。それは方法自体が開かれており、異なる歴史的な対象の記述にも応用できるものだからである。

●いがらし・たろう／建築史家

Book Review

メトロポリタンライブラリー

1998年の評者＝
渡辺武信／太田佳代子／港 千尋

今月の評者＝渡辺武信



『男と女の家』（新潮選書）宮脇檀＝著
新潮社　1100円



『定年ゴジラ』重松清＝著
講談社　1800円

住まいの夢の原点を問い直す

闘病中の畏友・宮脇檀がまたしても本を出した。癌の告知後だけで3冊目になり、その気力には、感嘆を通り越して呆れてしまうのだが、新刊『男と女の家』にも饒舌な宮脇節は健在だ。内容にはこれまでの著書との重複もあるが、本書は家電製品の普及化グラフとか男性の排尿軌跡図とか夫の家事協力時間の日米差とかの、断片的ながら面白いデータが惜しげなく盛り込まれている点に目新しさがある。いずれも自身の研究成果というわけではなく、あちこちのネタ本からの採集だが、それらを集めてため込んだ着眼点は疑いもなく宮脇檀ならではのものである。

例えば第4章には「住まいというものをもう少し大事にしたい。あるいは文化としてとらえたい……状況はきわめて悲惨で絶望的ですが、そうした中でももう少し住宅や建築のことを教養として身につけましょう」と述べられていて、こうした「建築の文化性」の訴求は著者も他の建築家も散々やってきたことであるが、本書ではそこにフィンランドの小中学校生用の副読本『美しい環境』から採られた「美しい都市と醜い都市」の対照を示す挿絵と、「もしあなたの環境が悪いと思ったら……皆で署名を集めて市長のところへデモしましょう」という引用が添えられることによって論旨に改めて新鮮な説得力を与えている。私も常々、経済的にかなり豊かな友人知人が「文化的」に相当程度の低い家に住んでいる現状を嘆いていたのだが、本書に接して、こりゃやっぱり幼児教育から見直さなければ駄目だ、と思うに至った。子供を教育しても成果が出るのは遠い先だから気の長い話だが、建築に文化性を！と唱えるなら、その裏付けとして建築家が力を貸さなければならない問題だと思う。

『男と女の家』は、日本の妻たちの住まいについての無教養を批判し、返す刀で女をそこへ追いやった男たちもバッサリ斬っている。しかし、そうは言っても日本の高度成長を律儀に支えた男たちは定年にさしかかり、宮脇が指摘する「時間ができるけど所得は減る。そうすると居るところは家しかなくなる……老後の最も熟した時期に人生の集大成をする場所として、電化製品と変な花模様でいっぱいの家で過ごさなくてはならないのはちょっと悲しいのではないか」(第4章)という状況に陥りつつある。そういう人々に対して、建築家は専門職の社会的役割とはいえ、高みから批判だけしていていいのかなぁという懐疑の念もないではない。

そういう気分の中で出会って、「やられましたね」と感じつつ救われたのが『定年ゴジラ』だ。これは高度成長期に住宅を取得し、そのローンのために営々と働き続けて定年を迎えた日本のお父さんたちを描いた小説の傑作だ。

「開発から30年、年老いたニュータウンで日本を支えてきた男たちが、一斉に長い休暇を迎え始めた」という帯のコピーは「いざなぎ景気」の時代から今日までの時間と、その間に過ごされた日本の男たちの人生を見事に凝縮している。

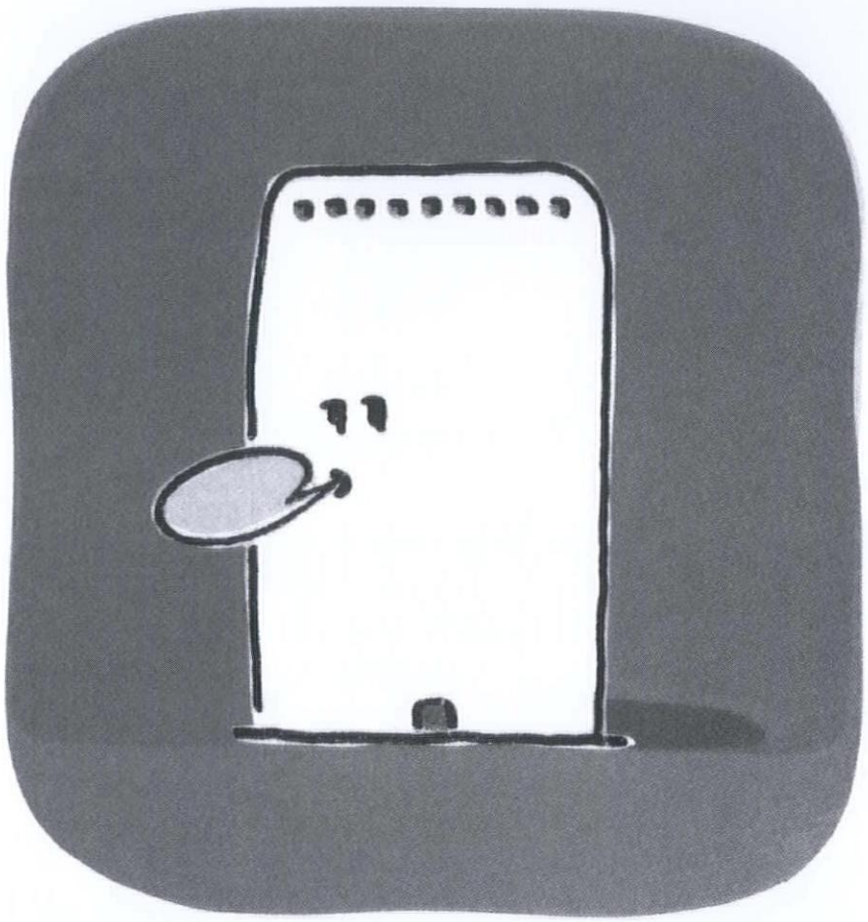
舞台は大手私鉄の沿線に開発されたニュータウンで、描写が街のつくりに集中しているので、住まいの中の様子はあまり分からないが、ここに登場するお父さんたちの家は「電化製品と変な花模様でいっぱい」なのに違いない。

この住宅地は5期にわたる分譲で、その時点で働き盛りの男の家族が入居したため、分譲時期に応じた丁目の区分が住民の世代区分に一致している。こうした街が世代交代の時期にさしかかると「数年前から一丁目が。いま、二丁目が。これから先も三丁目、四丁目、五丁目と順に。かって一家の主としてこの街に移り住んできた中堅サラリーマンたちが、一人また一人と定年を迎えて行く。レミングの行進さながらに……一人ずつ、切れ目なく『老人』になっていく」(p.10)という状況が訪れる。主人公は二丁目、つまりこの街の第二世代として定年を迎えたばかりで、物語は彼が一丁目、つまり第一世代のベテラン定年に出会って老後の心得を学ぶところから始まる。

私鉄の会社でこの住宅地を開発を担当した男もここに住んでいて、定年同期として主人公と出会うのも巧みな設定だ。主人公は彼に「定年退職して初めて知ったこの街のつまらなさ」を並べ立てるが、相手は当時の購入希望者のアンケート調査の結果がこういう街をつくったと答える。つまりこれは住宅開発批判ではなく、開発者も住民も共有していた高度成長期の理想の空しさを描き出した小説で、作者が双方の男たちに注ぐ視線は共に暖かい。後半には本誌の読者の中にも居そうなニュータウンを研究している女性の助教授が学生を引き連れて実態調査に来て一騒動起こすが、彼女もまた「敵役」ではあっても「悪役」にはならず、ニュータウンの夢の空しさを暖かくコメントする立場に置かれている。というわけで、これは小説として楽しいだけではなく、日本の住宅問題、都市問題を考える上での必読文献のひとつであると思う。

●わたなべ・たけのぶ／建築家

人間すう、はく。ビルすう、はく。



私たちの呼吸は
自然の呼吸に
支えられています。

私たち人間が意識しないで呼吸しているように、人をとりまく環境も、知らないうちに呼吸しています。海も陸地も、動物も植物も。この地球全体が、ひとつの完成された空調システムとなり酸素をつくり、酸素を消費しています。

東熱のめざすひとつの頂点が、この自然の摂理を解明し、システム化することです。温度、湿度のコントロールによる環境を超えて、フィジカルな面から、メンタルな面の可能性のヒントが自然の中に隠されています。

ビルも呼吸しています。中にいる私たちのために。さまざまな分野のさまざまな建物が呼吸しています。だから東熱はいつも考えています。次に求められる環境とは何だろう。より私たちに優しく、より私たちに身近な環境の実現のために。山の朝のさわやかな空気や、冬の夜の透明な空気を東熱は忘れません。

宇宙センターからスポーツドームまで、東熱のマインドはあなたのまわりに息づいています。

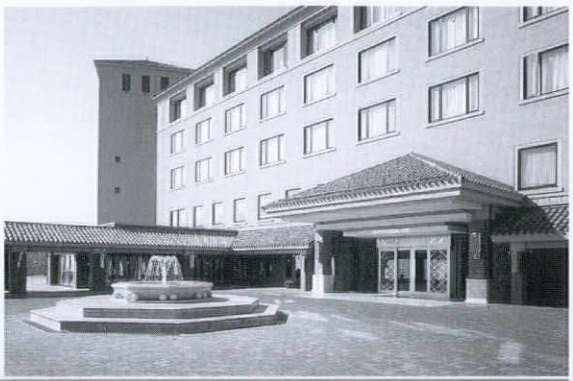
時代、呼吸、マインド

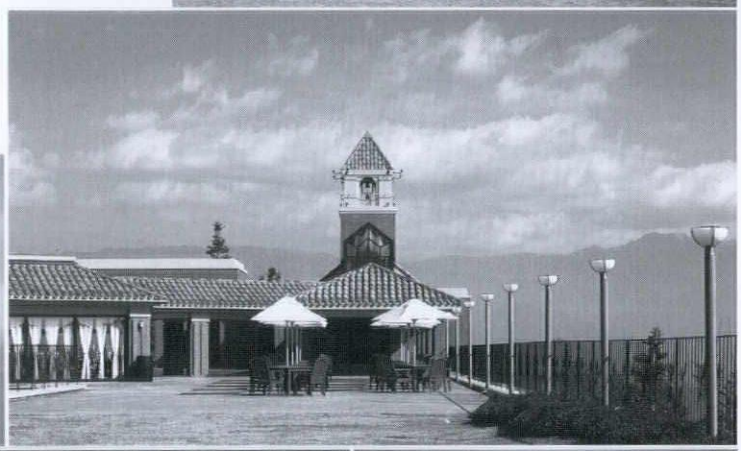
東洋熱工業

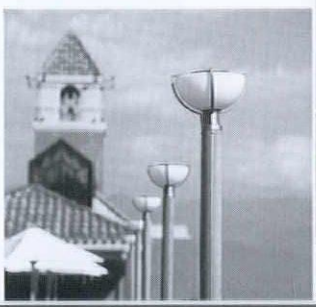
〒104-8324 東京都中央区京橋2-5-12 Tel.03(3562)1351(大代表)

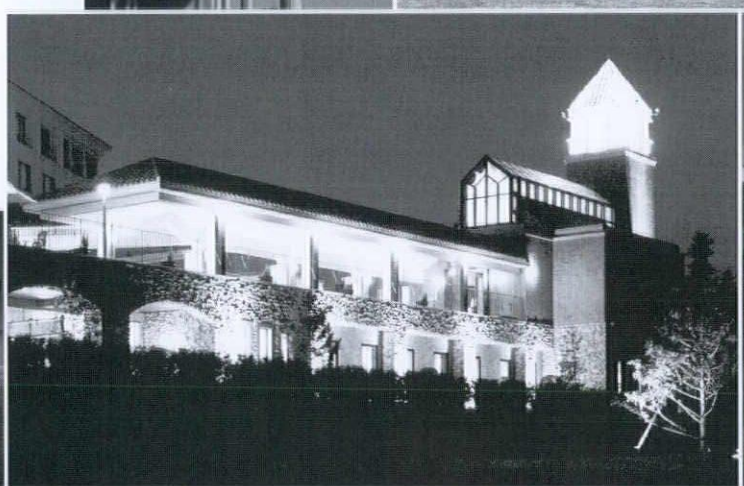
表情多彩

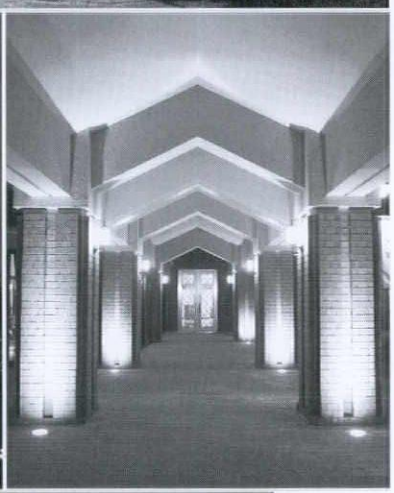
照明は空間づくりの重要なポイント。
人々に、常に気持ちよく空間を利用してもらいたい・・・。
山田照明ではさまざまな条件やニーズを満たすために、
多種多様な照明器具を用意。ベストなあかりで、
ひとつひとつの空間を、個性的・機能的に演出し、
表情多彩な空間創造を力強くバックアップしています。

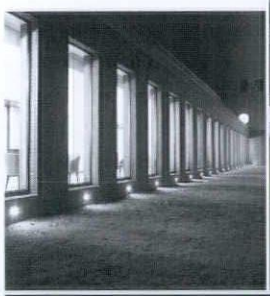


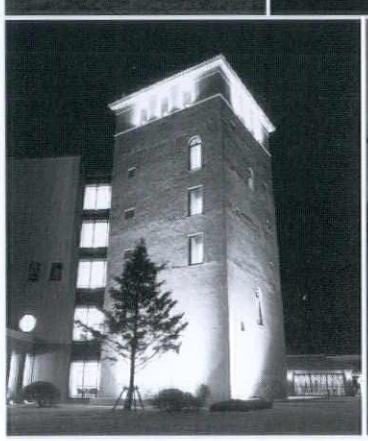


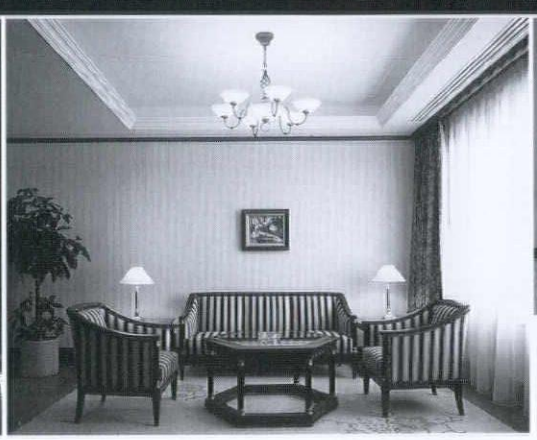


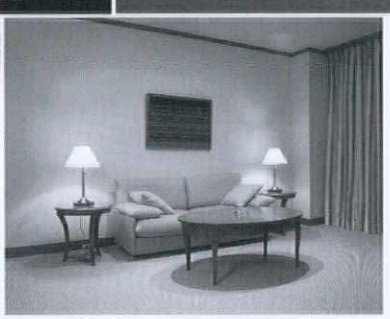












フルーツパーク富士屋ホテル（山梨）

yamada

山田照明株式会社

本　　社／ショールーム 〒101-0021 東京都千代田区外神田 3-8-11 TEL.03-3253-5161
横浜支社／ショールーム 〒220-0005 横浜市西区南幸 2-20-1 TEL.045-311-1731

仙台支社 〒980-0824 仙台市青葉区支倉 4-34 TEL.022-267-1630
札幌営業所 〒003-0807 札幌市白石区菊水七条 2-61 TEL.011-811-2215
広島営業所 〒730-0805 広島市中区十日市町 2-2-34 TEL.082-293-6119
大阪支社 〒577-0006 東大阪市楠根 2-2-6 TEL.0 6-745-6811
北関東営業所 〒370-0851 高崎市上中居町 51-1 TEL.0273-26-4111
鹿児島営業所 〒890-0055 鹿児島市上荒田町 23-10 TEL.099-258-0031
福岡支社 〒812-0042 福岡市博多区豊町 1-9-61 TEL.092-414-8531
名古屋事務所 〒461-0001 名古屋市東区泉1-21-35 TEL.052-963-8411
宇都宮事務所 〒321-0971 宇都宮市海道町 818-2 TEL.0286-60-1381

お知らせ

オーストリア現代建築展「ミニマルを超えて」

会期：1998年9月30日(水)～10月10日(土)
時間：11:00～19:00(会期中無休)
会場：ヒルサイドフォーラム、入場無料
東京都渋谷区猿楽町18-8ヒルサイドテラスF棟1階
シンポジウム
日時：1998年9月30日(水) 14:00～17:30
会場：ヒルサイドプラザ
定員：100名(参加費1500円)
パネラー：ピーター・アリソン、オットー・カッフィンガー、ベッティーナ・ゲッツ、リヒャルト・マナール、アドルフ・クリシャニツ、ミヒャエル・ホーフステッター、ウォルフガング・パウゼンバーガー、フローリアン・リーグラー、ロジャー・リーヴェ、北川原温、内藤廣、川向正人(コーディネーター)
申込み・問い合わせ：アートフロントギャラリー、担当：前田、Tel：03-3476-4868

TAMA VIVANT '98 「リアリティ」展

多摩美術大学のOBや学生が中心となって企画、運営をしている展覧会。これからの美術の方向として「リアリティ」をテーマとする。
会期：1998年9月18日(金)～1998年10月2日(金)
時間：8:00～20:00(入場無料、会期中無休)
会場：多摩美術大学八王子校舎1号館ギャラリー
東京都八王子市鑓水2-1723
問い合わせ：多摩美術大学八王子校舎
Tel：0426-79-5627

ART-LINK上野 谷中'98「エデンの園」展

日系ブラジル人アーティスト、大岩オスカール幸男が上野の森美術館内の展示空間を「森」に変える。ベンチやごみ箱などを置き公園の疑似空間を創る。サウンド・インスタレーションは音楽家セイゲン・オノが担当。
会期：1998年10月3日(土)～18日(日)
時間：10:00～18:00(入場無料)
会場：上野の森美術館　Tel：03-3833-4195


大岩オスカール幸男「エデンの園」、1998年

Poneer 20th Century シャルロット・ペリアン展

ル・コルビュジエの協力者として知られ、日本の建築家やデザイナーにも多大な影響を与えたシャルロット・ペリアンの展覧会。
会期：1998年10月3日(土)～11月3日(火)
時間：10:30～18:30　水曜休館
会場：リビングデザインセンターOZONE 3F
新宿パークタワー内
入場料：一般700円、学生600円
問い合わせ：03-5322-6500

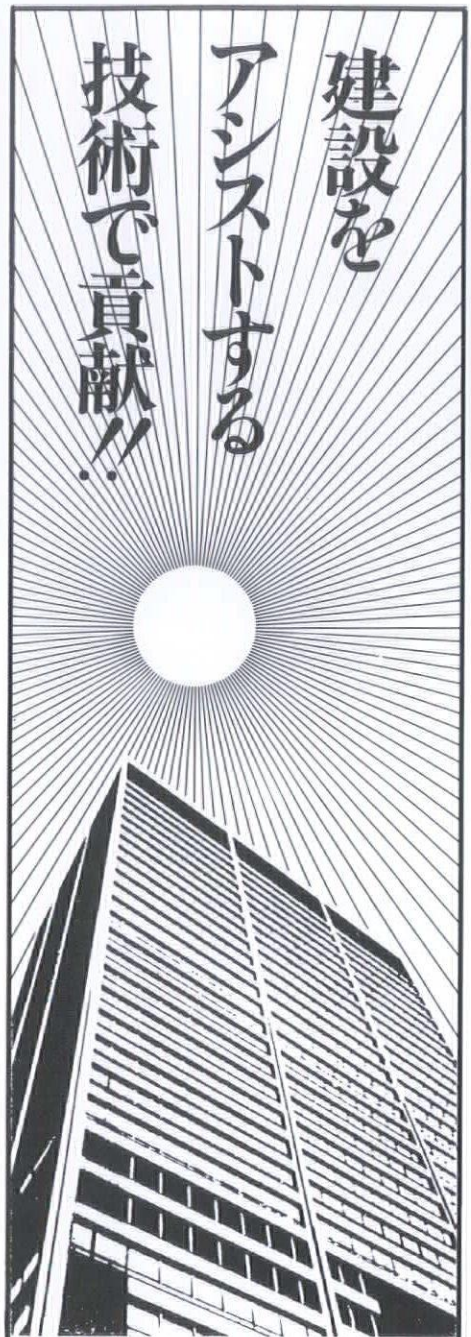

PHOTO：PERNETTE PERRIAND
ARCHIVES CHARLOTTE PERRIAND
CHARLOTTE PERRIAND
ADAGP, PARIS & SPDA, TOKYO, 1998

国立民族博物館「大モンゴル展」シンポジウム：21世紀のゲルづくり

日時：1998年10月31日(土) 14:00～17:00
会場：国立民族博物館講堂(定員450人)
大阪府吹田市千里万博公園10-1
パネラー：Gombin Myagmar、古市徹雄、内藤廣、今川憲英、彦坂満洲男、古谷誠章、太田省吾、藤江和子
問い合わせ：古市徹雄・都市建築研究所
Tel：03-3403-5710、担当：原田

6th JAPAN ART SCHOLARSHIP 作品募集

直径13m×高さ15mの青山スパイラルガーデン内のアトリウムを対象空間とした、オールジャンルのアートコンテスト。
募集期間：1998年9月1日(火)～10月31日(土)
賞：グランプリ受賞者には、作品制作費1000万円を上限に援助と副賞・海外研修旅行
審査委員：福田繁雄(委員長)、隈研吾、立花ハジメ、南篠史生、長谷川祐子
審査方法：第一次審査のファイル審査で10作品を選考、第二次審査のマケットを審査でグランプリを決定する。
応募方法：市販のA4ファイルに2000字以内の提案書、ビジュアル資料、プロフィールなどをまとめて提出
提出・問い合わせ先：JAPAN ART SCHOLARSHIP 実行委員会事務局　Tel：03-3499-3922



●一般電気設備工事＝設計施工
●防爆電気設備工事＝設計施工
●計　装　工　事＝設計施工
●電気加熱保温工事＝設計施工
●静電気接地用リール＝＝販売

ASTEC
SHOWA ASTEC
昭和アステック株式会社
(旧社名　昭和電機工業株式会社)
取締役社長　浦　道　雄
●本社／東京都港区東新橋２丁目７番３号
電話03(3437)3851(代表) 〒105-0021
●支　社＝関東・中部・関西・中国
●営業所＝新潟・鹿島・千葉・四日市・堺
倉敷・岩国・徳山・坂出・松山
新居浜・大分・福岡
●駐在事務所＝ジャカルタ・テヘラン・タイ
シンガポール・マレーシア

海外レポート

給水塔

from New York　セドリック・シェレー

給水塔（Water Tower）
場所：West BroadwayとGrand Streetの交差点から見上げる
期間：1999年の夏まで

ニューヨーク、1998年夏、英国のアーティスト、レイチェル・ホワイトリードはソーホーの屋根の上に、ある透明な物体のインスタレーションを行った。使われてない木製の給水タンクを型枠として用いて、彼女は、透明なポリウレタン樹脂を流し込んでその鋳造物（cast）を造り、そしてそれを、多数の給水塔――それはイエローキャブや、マンハッタン島と他区をつなぐ橋、あるいはホットドッグ・スタンドと共にニューヨークを特徴づけるものだが――が建ち並ぶ中に設置したのだ。

レイチェル・ホワイトリードは主に、食器棚やベッドや木製床、バスタブなどの日用的な物を、石膏や樹脂やゴムなどの様々な材料を用いて鋳造（cast）する。1993年に彼女は「家（House）」と題されたプロジェクトを創った。もはや現存しないこの作品は、ロンドンのイーストエンドにあったビクトリア調の家1軒まるごとの、コンクリート製の鋳造物から成るものであった。ファサードと屋根が取り除かれた時、墓のような重くて硬い量塊（monolith）が姿を現した。窓のニッチは突起となり、付け柱は彫り込みとなり……。消えゆく近隣の最後の証人となるこの構造物は、ほとんどロマンティックに、その個別的な事情を超えて、抵抗の身振り、記憶の身振り――ゴードン・マッタ＝クラークの作品の響きにこだまする身振り――へと昇華していた。

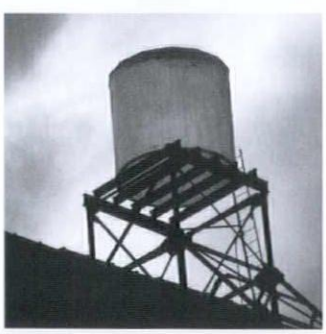
ニューヨークのプロジェクトは、その同じアプローチを、異なったトーンとモードのもとで辿る。給水塔は、ル・コルビュジエが『建築をめざして』の中で、それらのシンプルで正確で直截な様相から発散してくる美と分類した物たちに属するだろう。その使われ方とコード化された製作方法によって、給水塔は「記号（sign）」の領域へと入っていく。そしてそれは、堅苦しく冷厳な事実でもある形態と機能のあり得る関係を超えて、ニューヨークという場所のイメージの特質――例えばハイウェイの風景におけるモーテルや、東京における交番と同じように――となる。しかし、その執拗な図像的な用いられ方によって、最後にはクリシェとなる。そして、おそらくこれがホワイトリードが捕らえたところのものなのである。つまり、彼女は半透明な樹脂へと型取ることで、給水塔のクリシェをベースとして用いながら、再度その意味変換－再定義を行ったのである。材料（material）は物体（object）にとって、透明性とか肌理あるいはたぶん匂いなどの物理的な特性によってだけではなく、工業デザインやファッションデザイン、あるいはたぶんもっと単純にデリの容器といったものへの遡源、共示、連想といった作用において、重大な役割を果たす。

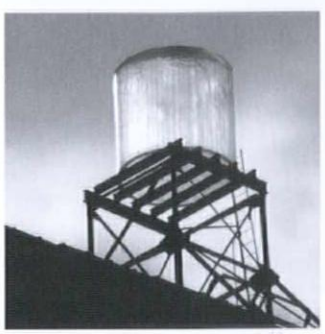
給水塔と樹脂は、厳密なメカニズムをもった鋳造作業（the casting）に曝されていて、理論的には個人や逸話による仲介を一切免れている。鋳型の形態とレリーフは、流し込まれる材料の細やかさの限度内で、抽象作用の働きにおいて、平凡で忘れられやすい物の目録編纂というような体系的手続きの一部として記録される。そして、それが中性的なプロセスとして認識されるとしても、鋳造作業は、その構成要素を中性化することはなく、それらの意味（senses）を変換しているのである。例えば、給水塔をコンクリートで鋳造したとしたら、それはまた違う意味を生んでいただろう。そして、すでにそれ自身の彫刻としてのアイデンティティを「給水塔」が獲得しているにもかかわらず、一目でわかる恒久的な形や外周を囲む厚板の面、少しだけ張り出したとんがり帽、あるいは木製の型枠を突き破った樹脂の跡などは、もともとそれが何であったかを忘れさせることはないのである。もっとも、今や「給水塔」は、その原形を、いくばくかの距離のもとに、ずれを孕みながら凝視しているのであるが。

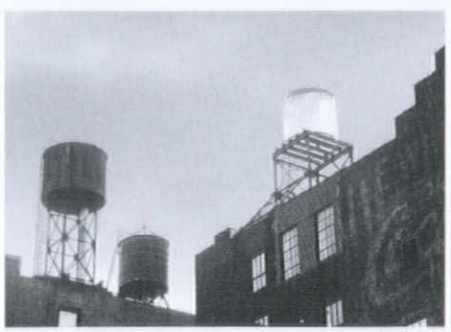
「給水塔」は、曝け出された内臓の危うい美しさを露顕している。時間と天候によってそれは徐々に腐敗していくだろう。太陽光線によってその物質は黄ばんでくるだろうし、雨によって苔むしてくるだろう。また、大気汚染によってはアスファルトが付着するだろう。今はまだぴちぴちで官能的なこの物体はいずれ、ソーホーの空において悲劇的な塊へと変貌していくだろう。そのナイーブな現前こそがその存在理由なのである。それは、この場所――不動産投機と魅惑的なブティックの設立が、そのイメージを養うと同時に歪めていくような――の変異を想起させるものとしてふるまう。細胞組織が老いていくのが避けられないように、自然な進化として、この場所から画廊はチェルシーに、芸術家はどこかよそへと追い出されているのである。最初にクリシェを訪ね、今は短命の美しき存在、そして来たるべき変質のプロセス、というようにこの彫刻は、それ自身が極めてアイロニカルに、この近隣のメタファーとして姿を現しているのである。

そして、もし「家（House）」が死の内在性を持っていたとするなら、「給水塔（Water Tower）」は嘲笑における欺きの軽さを持っていると言えるだろう。

●Cédric Schärer／建築家、ニューヨーク在住
（翻訳＝小野暁彦）


8:47 a.m.


8:53 a.m.


6:19 p.m.

海外レポート

1968年とミラノ
30年前の熱狂と陶酔

from Milan　杉本あり

「IL '68 E MILANO」展
会期：1998年5月8日～7月26日
会場：Triennale di Milano

1998年、イタリアでは新聞、雑誌に「68年」という文字が頻繁に見られた。1968年は、イタリア各都市で学生運動が激しく繰り広げられた年であり、30年経った今、その運動を回顧しているのである。

ミラノのトリエンナーレでは「68年とミラノ」という写真展が、去る5月8日から7月26日まで、途中会期を延長して催された。ミラノの「68年」は、1968年5月30日、第14回トリエンナーレ（3年に1度のデザイン展。パラッツォ・トリエンナーレで催される）会場を、百人近いブレラ美術学校の学生が占拠したことに端を発した。この第14回トリエンナーレ・オープニングにあたり、「ミラノのトリエンナーレは、スノッブすぎて多くのミラノの人たちはその存在を知らなかった。ようやく今年から、一般の人たちのためのものになるだろう」という記事がコッリエーレ・デッラ・セーラ紙に載せられた。違う意味で、一般の人に門戸がこじ開けられるという、皮肉な結果となってしまったのである。

当時学生たちは「アンチ権力」「自由」を求め、激しいデモを繰り返した。そして、工場で働く労働者の「賃金向上」「労働条件改善」を求めるストライキへと飛び火する。さらに、女性の地位向上を求めるフェミニスト運動へ発展する。次第に学生たちは武装を始め、様相は悪化していく。警察との衝突。そして「赤の集団」と名乗る過激派グループによる爆弾テロの勃発。幕は悲劇的に降りた。

30年後の現在、これらの現実を振り返ることにいったいどんな意義があるのだろう。

この写真展は、15人のカメラマンによる500枚以上の写真と2ヶ所のビデオブースで構成されていた。それらの写真は、当時の熱狂、陶酔、惨殺を見る者に痛いほど伝える。そこに写っているドゥオモ広場や、フォンターナ広場は、今私たちが目にするものと何ら変わりはない。しかし、そこで繰り広げられている光景は、鬼気迫るものがある。

女子大生が壇上で踊っている写真があった。周りの若者も喜びであふれているように見える。後に当時の女学生が告白しているように、「一種のお祭りだった」というのも事実だろう。周りに扇動されて、参加した学生もたくさんいたことだろう。しかし、今のミラノでこれだけのお祭りを繰り広げるパワーが若者にあるだろうか。この運動に参加している人々のパワーだけではない。街の力そのものが伝わってくるようだ。

一連の運動がもたらしたものは何だったのだろう。離婚と中絶が法律で認められ、労働条件も賃金も向上しただろう。「それまでのイタリアは階級社会で、どの階級の人間か格好でわかった。それが、ネクタイをはずし、ミニスカートをはいて、自由な格好ができるようになった。でも今はまた後戻りしている。人と同じ格好を好み、権力に従い、財産を持ちたがる。当時、この運動に参加していた人たちは誰に対しても『tu』(君)で喋った。『Lei』(敬称)を使うのをやめたんだ。それがみんな求めていたものだったんだ」とはこの写真展に写真を寄せているフランチェスコ・ラディーノの話だ。彼が見せてくれたトリエンナーレ責任者からの、この展覧会会期延長願いの手紙は「Lei」で書かれていた。確かに時代は少し後戻りしたのだろう。

一旦終わったこの展覧会は秋から、ポリテクニコ建築大学で再び始まる。若い世代が、これらの写真を見て何を感じるだろう。「最後の民主革命を見るだろうか？　それともフォトジャーナリズムとは何であるかを読み取るだろうか？」という新聞評もあるが、決してそれだけではないだろう。自分たちの両親の世代が熱狂した時代を感じ取るに違いない。若い人たちが見たら、ただの回顧趣味に終わらない何かがあると確信する。

血を流す革命が良いとは決して思わないけれど、街の持つ力とは、そこに住む人たちのパワーなのではないかと、感じさせられた展覧会であった。

●すぎもと・あり／ライター、ミラノ在住

Photo: Paola Mattioli



離婚に関する国民投票の結果を読み上げるダリオ・フォー（1974年5月）

Photo: Silvestre Loconsolo



オリベッティ社の労働者によるストライキ（1968年）

Photo: Ugo Mulas



農業銀行の惨事の被害者を見送るミラノの人々（1969年12月15日）

海外レポート

建築教育における アトリエの存在

from Paris

山名善之

J.ヌーベル、R.ピアノ、B.チュミ、C.ド・ポルザンパルクと、日本でもよく知られた建築家がオフィスを構え、その設計活動の拠点としているパリ。この街の建築界の今日的状況は、革命二百周年のグラン・プロジェが計画実現されてきた十年前の様子とはかなり異なる。その頃の状況がまだ続いているのではないかという幻想を持ち、建築修行を積もうと、その修業先を求めて集まってくる若い建築家は、日本から来る者に限らず、後を絶たない。

あるいは、これはグラン・プロジェだけによってつくり出された特殊な状況ではなく、ル・コルビュジエがパリに居たときから、あるいはもっと昔から、あり続けたことなのかもしれない。この街の何が、多くの若い建築家のこころを捉え続けてきたのであろうか。

34年前に南米ペルーからこの街にやって来た建築家に、アンリ・シリアニ(当時27歳)がいる。彼の活動は日本にも紹介されてはいるが、上に挙げた建築家と比べると、あまりメジャーな存在とはまだ言えないであろう。しかし、パリにおける彼の活躍、影響力は相当なものである。とくに建築教育の現場においては。

30年前の五月革命と言われる学生運動によって、エコール・デ・ボザールの建築学科は解体し、それぞれのアトリエはパリ数校の建築学校(UP)として再編されていった。多くの建築学校が旧ボザールの保守的アカデミズムの状況を生みだした根源として、設計アトリエ制度を弱めていった一方、パリ・ベルヴィル建築学校の再編設立者で、ルイス・カーンの弟子でもあるB.ユエットは、このアトリエ制度こそが建築教育に不可欠のものとして重視し続けた。よってベルヴィル建築学校は今日でもアトリエ制度の特徴を色濃く持ち続けている唯一の学校であると言える。

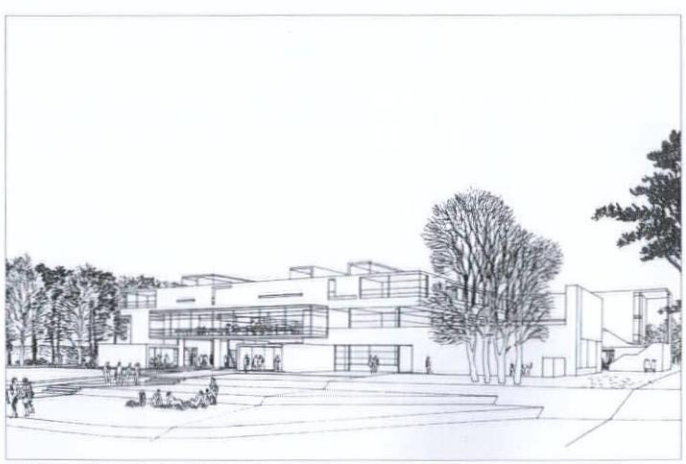
H.シリアニは、そのベルヴィル建築学校のなかで、最大のアトリエであるアトリエUNOの大パトロン(教授)という、もうひとつの顔を持つ。アトリエUNOはフランスで勢力的に活動する建築家E.ジラール、L.サロモン、L.ボードゥアン等をはじめ、教師陣だけでも10人ほどを擁する、かなりの大所帯のアトリエである。また、ここはヨーロッパ各国はもちろん南米、アジア、アフリカから多くの学生が集まり、様々な国のアクセントのついたフランス語が飛び交う、コスモポリタンな雰囲気が漂うアトリエでもある。

M.カガン、J.リポー等の多くのH.シリアニの弟子たちが現在パリを中心として活躍し始めている。いやこの表現は適切ではないかもいれない。革命二百周年のお祭り騒ぎ的なプロジェクトの数が減り、地道ではあるが確実にものをつくり続けてきた彼らの活躍が相対的に注目されてきただけのことであろう。

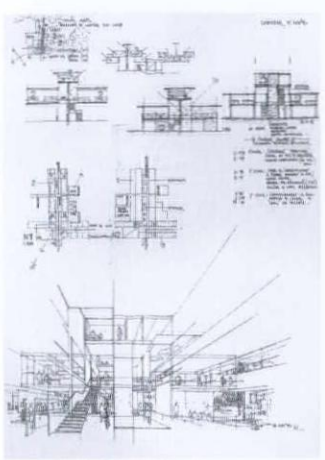
H.シリアニを含めたこれらの建築家たちの作品に共通するものとはどのようなものであろうか。自然光に照らし出された内部、奥行きのある連続した透明な空間、光により建築的重力から解放された壁、あるいは横連窓、白い外壁……。悪意を込めてスタイリスティックに捉えるならば、ネオ・コルビュジアン・スタイルとでも言えるであろう。あるいはフレンチ・モダンと彼らを総称できるのかもしれない。

今日のパリのこの様な状況のなかで、注目されているプロジェクトに、現在、設計進行中のパリ建築学校コンピエンヌ校がある。これはコンペによりH.シリアニの案(下図)が最優秀として選ばれたのであるが、彼はインタビューに対し、「建築学校の中心には自然光に照らしだされたアトリエが存在し、そこは学生同士の、そして建築家である教師との共同の場にならなくてはならない。(中略)この建築を通して、ここで学ぶ建築の学生に、いつの時代を通しても変わらない建築を成り立たせている不変(アンヴァリアント)なものとは何か、それが伝われば」と、このプロジェクトに向けての抱負を語っている。この不変(アンヴァリアント)なものとは彼が設計の場においても、また教育の場においても追求し続けてきたことに他ならないものであろう。またそれは彼の継承者らにより、今後どの様に追求し続けられていくのであろうか。

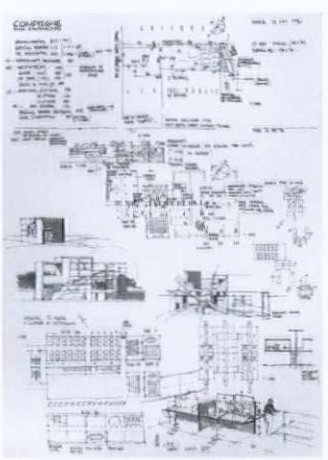
●やまな・よしゆき／パリ・ベルヴィル建築学校DPLG課程、フランス政府給費留学生



〈パリ建築学校コンピエンヌ校〉外観パース



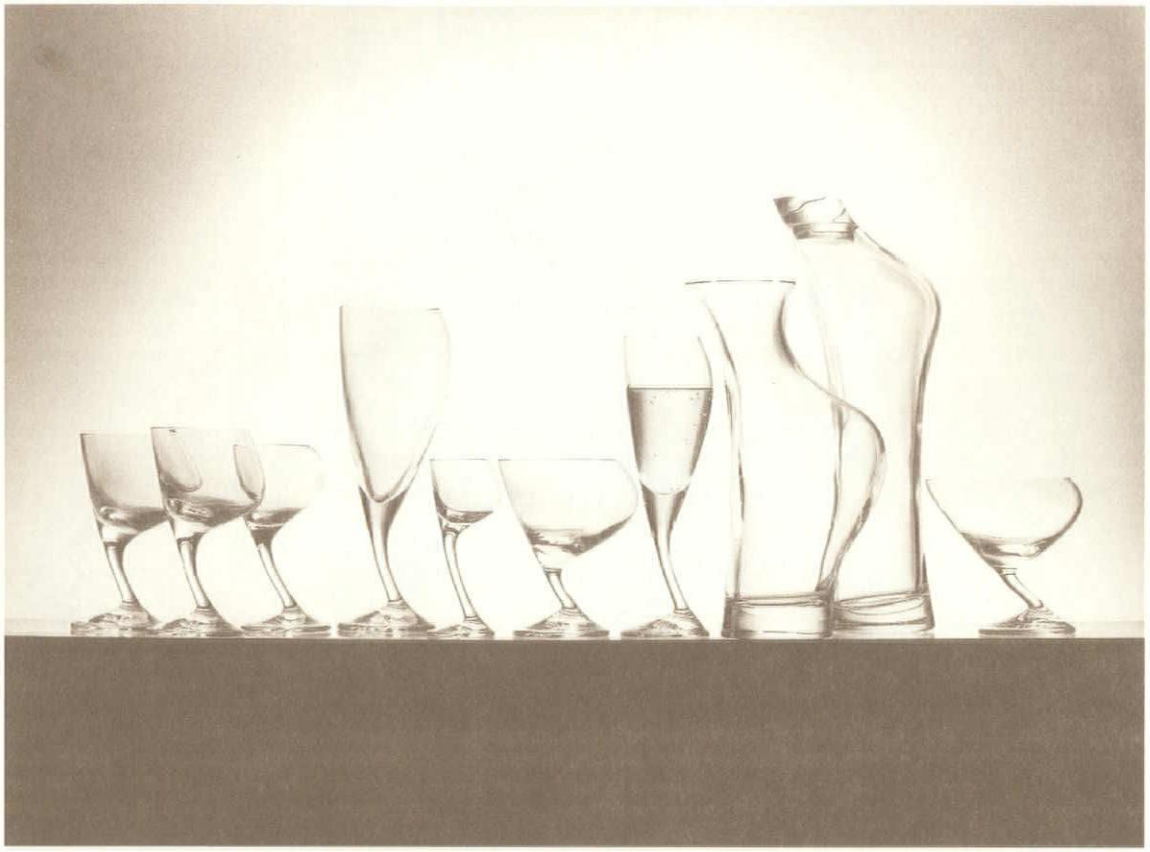
アンリ・シリアニによるスケッチ



同左

SD

11月号予告



Angelo Mangiarotti/ COLLEZIONE BIBULO, PRODUZIONE CRISTALLERIA COLLE/ 1992　　Photo: Aldo Ballo

9811

特集

白いいろ、透明なかたち——生活の中のモダン・デザイン111

私達の生活の中で何気なく使われている小モノたち(ティーポット、ティーカップ、コーヒーカップ、ソーサー、水差し、グラス、灰皿、花瓶など)。そうした小モノたちにも、その素材の特質を生かし、形態的にもすぐれ、デザインの創造力をかきたてるモノたちがある。

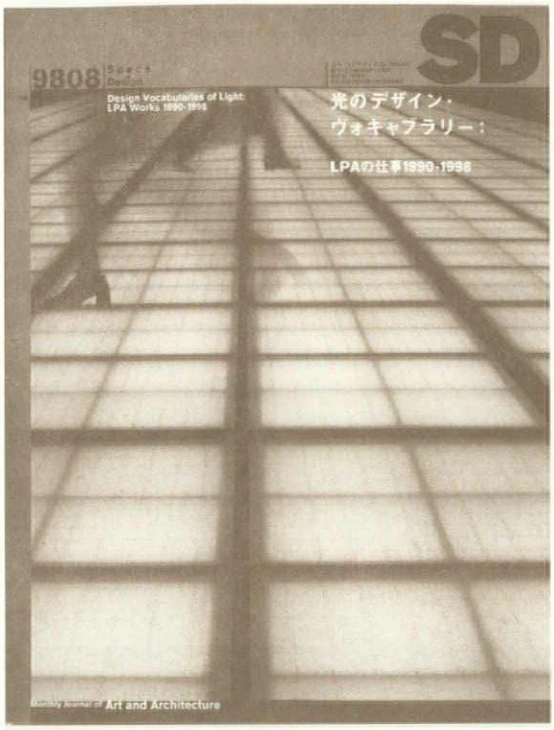
本特集では、そうした小モノたちの中からその特徴を最もストレートに表すものとして、白い陶磁器と透明ガラスのモノに焦点をあて、そうしたモノたちに見るデザインのミクロコスモスを逍遥する。好評を博したSD96年6月号「建築家の椅子111脚」に続くデザイン紹介の特集である。

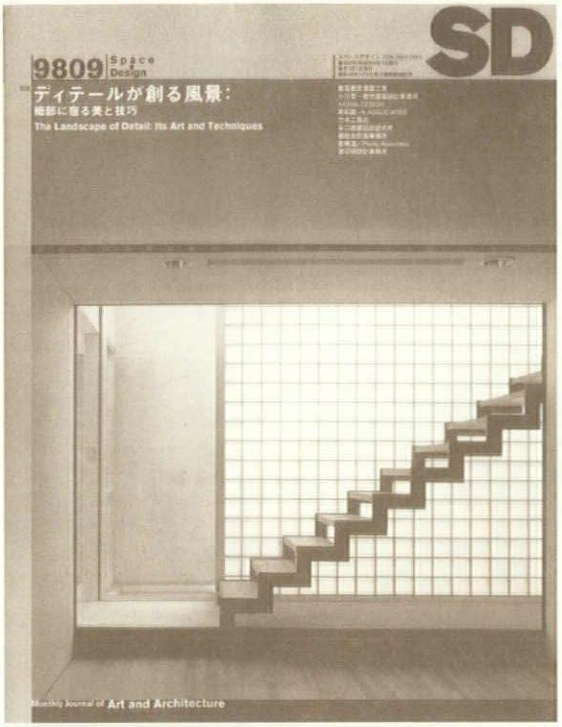
紹介予定作家：
アルヴァ・アアルト、アイノ・アアルト、タピオ・ウィルカーラ、カイ・フランク、ティモ・サルパネバ、ワルター・グロピウス、ウィレム・ワーゲンフェルト、グレス・メイヤー、ヘインリッヒ・ローフェルヘルト、ヨーゼフ・ホフマン、ロベルト・サンボネ、レイモンド・ローウィ、ピーター・シュラボーン、エンゾ・マリ、アンジェロ・マンジェロッティ、アキーレ・カスティリオーニ、柳宗理、森正洋、船越三郎、他

文：
柳宗理、アンジェロ・マンジャロッティ、羽原粛郎、船越三郎、森正洋、長井千春、川上元美、河合俊和、他

連載：
海外レポート：ロッテルダム、上海、サンフランシスコ
世界の現代美術館 13
森島紘史の起こし絵図——日本のかたち紙考 11／森島紘史

SD
バックナンバー





9808

特集

光のデザイン・ヴォキャブラリー
LPAの仕事1990-1998

これまで、主に商業空間の照明計画など限定された空間の照明法については記述されてきた。しかしこれは光が生み出す空間を全般的に考察する本格的な照明バイブルである。

ハードな技術がある程度完成された照明は、その空間デザイン計画となるとまだ黎明期。この領域のパイオニア、LPA(ライティング・プランナーズ・アソシエイツ)は、現日本では数少ない、光デザイナー集団である。そんな彼らのデザイン流儀が、光空間を創造するときの重要な鍵となることにはまちがいない。

ここでは彼らのデザイン言語を40に厳選して紹介する。

第1章　コンセプト
ブルーモーメント「昼と夜の狭間にある青い時空は、照明デザインの原風景だ」、他
第2章　メソッド
光のベルト「歩いてみるまで分からない、光絨毯の踏み心地」、他
第3章　ディテール
定点照射「照明器具の完全消滅」、間接照明「光源と透過・反射材の組み合わせできまる間接照明のヴァリエーション」、他
第4章　アクティビティ
色鉛筆「わたしたちがつかう青い羅紗紙と色鉛筆について」、他

[論文] 磯崎新、面出薫
[座談会] 内藤廣+黒川勉+面出薫+東海林弘靖
[付録] LPA光辞典、LPA照明用語集

連載：
海外レポート：バルセロナ、ロンドン、サンフランシスコ
世界の現代美術館　12／水沢勉
森島紘史の起こし繪図——日本のかたち紙考　8／森島紘史

特別定価＝2,500円／本体2,381円

9809

特集

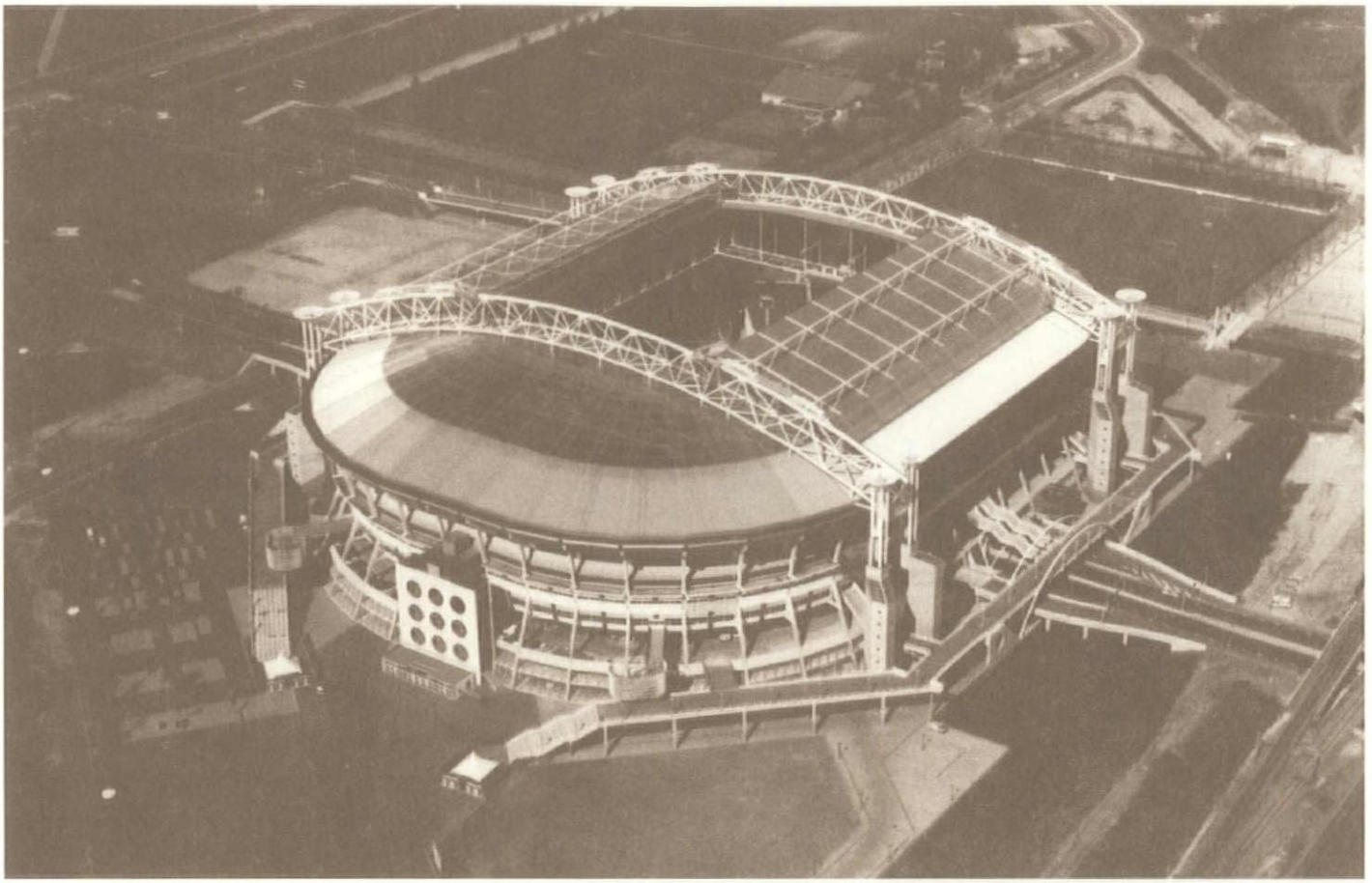
ディテールが創る風景
細部に宿る美と技巧

ある建物に足を踏み入れた瞬間、緊張感と心地よさを無意識のうちに感じることがある。また街を歩いてると、ある建物のファサードが雑然とした街並みを極めてさりげなく純化している情景に出会う瞬間がある。そこには、細部意匠と全体の空間の精緻な均衡の上にのみ成り立つ、寡黙で静謐な風景がしっかりと存在している。本特集では、寡黙で静謐な風景をつくり出す要素であるディテールに焦点をあて、そこに込められた意図を検証しながら、美しい写真と精度の高い図面によって各作品を紹介する。

●作品紹介
飯田善彦建築工房〈川上村林業総合センター 森の交流館〉、小川晋一都市建築設計事務所〈GLASS HOUSE〉、KAJIMA DESIGN〈東京海上東日本研修センター〉、岸和郎+K. ASSOCIATES〈山口大学医学部創立50周年記念会館〉、竹中工務店〈東京自転車健康保険組合会館〉、谷口建築設計研究所〈豊田市美術館〉、横総合計画事務所〈風の丘葬斎場〉、宮崎浩／Plants Associates〈NSP Building〉、渡辺明設計事務所〈成城の住宅1996〉計9作品
●細部への眼差し（コラム集）：現代のディテール・マイスター達が描く情景と射程
和泉正敏／石のアトリエ、新日軽、宮崎浩、小川晋一
●ディテール写真館：写真家が捕らえた桂離宮の細部に息づく美
岡本茂男（写真家）
●対談：赤坂喜顕×宮崎浩

連載：
海外レポート：リスボン、香港、チューリッヒ
森島紘史の起こし繪図——日本のかたち紙考　9／森島紘史

特別定価＝2,300円／本体2,190円



SD別冊32号

スポーツのための空間——スポーツ施設の新しい風

日本設計＋SD編集部　　総頁数：180頁　予定価格：3800円（本体3619円）

スポーツを行い、楽しみ、観戦するための空間は、多くの課題を抱えている。

巨大化する競技イベントへの対応、利用頻度の向上を求めての多目的化、新たな魅力付加を求めての複合化、高度な観戦空間を求めての専用化、あるいは既存施設の再利用や機能の向上など。

また、高齢者、身体障害者、女性など、スポーツ参加層の急激な拡大や変化に対応することも早急に求められている。

本書では、そうした課題の解決に挑戦し、大きな成果をあげている最新事例を豊富に取り挙げ、詳しい解説を付し、今後のスポーツ施設の設計に明瞭な指針を与える内容としている。

第1部：スポーツの空間の新しい風
1：専用または共用
2：屋外または屋内
3：都心または郊外
4：複合化と多目的化
5：再生と改修
6：仮設と転用

第2部：最新事例紹介
海外：ベルリン・オリンピック自転車競技場及び水泳場、フランス競技場、ウィンブルドン新コート、2000年シドニーオリンピック公園、香港スタジアム、アムステルダム・アリーナ、アトランタブレーブズ新球場、オリオールパーク球場、バンク・ワン球場、シアトル・マリナーズ新球場、マディソン・スクエア・ガーデン改修、ミレニアム・ドーム、ナッシュビルアリーナ、ユナイテッドセンター、ユービック地下スポーツホール
国内：横浜国際総合競技場、武蔵野の森競技場、東京ドームシティ、大阪ドーム、西武ドーム球場、Jヴィレッジ、ツインリンクもてぎ、他全40例

第3部：空間の拡張と参加層の拡大
スポーツの空間の拡張：代用、自然、ヴァーチャルリアリティ、放送メディア
スポーツ参加層の拡大：簡易スポーツ、高齢者、身体障害者、女性

SD別冊

庭の楽しみ

――西洋の庭園二千年――

A.S. ジェイムズ＋O. ランカスター著　横山　正訳
四六判　200頁　定価(本体2,700円＋税)

古代ローマから中世，近代，現代に至る庭園のさまざまな様相を楽しいイラストとエッセイで紹介。文中に盛り込まれたさまざまなエピソードからヨーロッパにおける庭づくりと人々のかかわりが生き生きと伝わってくる。

[主要内容]

第1章　ローマ領ブリタニアの庭
第2章　修道院の庭
第3章　世俗の庭
第4章　チューダーとジャコビアン
第5章　旅行家と目利き
第6章　壮大なフランス様式
第7章　オランダ風の庭
第8章　風景式庭園
第9章　ガーデネスク
第10章　ハイ・ヴィクトリアン
第11章　牧師館の庭
第12章　いなか家の庭
第13章　ロンドンのスクエア
第14章　道すじの庭
第15章　サリー派
第16章　日本風の庭
第17章　郊外の庭
第18章　パティオ

見えない庭

アメリカン・ランドスケープのモダニズムを求めて

P. ウォカー他共著　佐々木葉二・宮城俊作訳
A5判　352頁　定価(本体5,200円＋税)

本書は，1925年から1975年の半世紀にわたるアメリカン・ランドスケープ界の歴史を個人作家のみならず組織事務所，さらには大学教育の足跡までを含めての，みずみずしいタッチで描かれた本格的なドキュメント。図版多数。

[主要内容]

序　章－ランドスケープ・アーキテクチュアの伝統：アートそれとも社会貢献？
第1章　社会を映す庭
第2章　アートとしての庭
第3章　トーマス・チャーチによるモダニズムへの転換
第4章　アメリカンドリームの彼方
第5章　裏庭から都市へ
第6章　孤高の古典主義者
第7章　大学教育の近代化
第8章　第1世代の組織事務所
第9章　環境主義：アートに影を落とす科学
第10章　第2世代の組織事務所

庭園の詩学

C.W. ムーア他共著，有岡孝訳
A5判　304頁　定価(本体4,700円＋税)

本書では，まず初めに場所のもつ様々な特質を探求する。次に風景と庭園のスコアを提示。最後に，過去の素晴らしい庭園の伝統を，北アメリカの土壌に移植し適応させる方法を検証する。主に中国，日本，イスラムの庭園を取り上げ，庭園の空間を構成する基本的な手法を解明する。

[主要内容]

1. 場所の精神－山と水／神とカイン／日の光と影／記憶と期待／他
2. デザイナーによってつくられる場所－敷地を領有する／遊戯をつくる／空間に形を与える／気候をつくる／生命を与える
3. 過去の場所－しつらい／収集／巡礼／パターン／他
4. 私たちの場所－再演される楽園／秩序づけるエデン／アメリカ庭園のオシャベリ／他

庭の意味論

M. フランシス他共編・佐々木葉二，吉田鐵也共訳
A5判　320頁　定価(本体4,600円＋税)

本書では30人の米国の知識人たちが，それぞれの専門領域から庭について語っている。
ガーデンのデザインや使われ方，その価値づけをまとめた最初の試み。庭園の意味と共にアメリカ文化論としても楽しめる内容。

[主要内容]

序　章　思想・場所・行為としての庭
信　仰　暗喩としての庭／自然は庭を超えて／他
力　花，力，性／集えよ，されば芽吹かん／他
秩　序　地域からの庭／パーキング・ガーデン／他
文化の表現　鉱山開拓地における移民の庭／他
個人の表現　個人の夢と異教徒の儀式／日常性と個人性／他
癒　し　今日から明日へ：楽観的な一つの展望／庭づくりは癒しの行為／他
あとがき　ある庭の物語

鹿島出版会の建築図書案内



集合住宅原論の試み

黒沢　隆著
B5判　168頁　定価(本体3,800円+税)

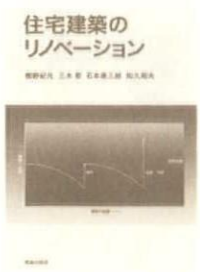
集合住宅論を建築の社会的側面と計画原論との関連を軸に総合的に捉え直した具体的・実践的な書



建築とリアル

松畑　強著
四六判　240頁　定価(本体2,700円+税)

建築や都市デザインを単体として考察するのではなく、広く経済や政治情勢などを接点として捉える



住宅建築のリノベーション

樫野紀元・三木哲・石本徳三郎・知久昭夫著
A5判　208頁　定価(本体3,300円+税)

住宅建築をリニューアルするために、建物の診断方法から計画・工法までを詳細に記述した解説書



都市・住宅論 (SD選書232)

東　孝光著
四六判　224頁　定価(本体1,800円+税)

戦後日本の都市発展とともに変化してきた都市居住の解析をふまえ、21世紀に向けて提案する



同潤会のアパートメントとその時代

佐藤滋・高見澤邦郎・伊藤裕久・大月敏雄・真野洋介著
B5判　260頁　定価(本体3,300円+税)

同潤会の誕生した時代背景、そして代官山アパートを中心にその建築や居住者の生活を記述する



ふれあい空間のデザイン (SD選書233)

清水忠男著
四六判　216頁　定価(本体1,800円+税)

望ましいふれあい環境のデザインについて幅広い調査と実例を駆使し新しい視点と方法を紹介する



これからの家—健康で快適な住まい

快適住居研究会編著
四六判　208頁　定価(本体1,800円+税)

住宅における健康及び快適とは何か、建設省建築研究所及び住宅メーカーの専門スタッフが詳述



北　京—都市空間を読む

陣内秀信+朱自煊+高村雅彦共著
四六判　248頁　定価(本体2,900円+税)

中国の首都北京を対象にその歴史的都市空間の特質を描く。アジアの都市を解析するための手引書



揺れを制する

小堀鐸二著
四六判　384頁　定価(本体2,500円+税)

21世紀に向け自から各種媒体で語り綴られた思考・行動・論理の根幹を文筆成果より収録



庭の楽しみ—西洋の庭園二千年

A.S.ジェイムズ+O.ランカスター著　横山　正訳
四六判　200頁　定価(本体2,700円+税)

古代ローマから中世、近代、現代に至る庭園の様々な様相を楽しいイラストとエッセイで紹介



20世紀の建築思想

キューブからカオスへ

杉本俊多著
四六判　224頁　定価(本体2,800円+税)

20世紀の建築のパラダイムの崩壊から、再生、転生を経て爛熟に至る段階的変化を21世紀に向け示す



地球のためのデザイン

建築とデザインにおける生態学と倫理学

ヴィクター・パパネック著　大島俊三他訳
A5判　288頁　定価(本体4,100円+税)

21世紀のヒトと地球を救うデザインとは?　作られる状況、使う環境を考える独自のデザイン論

建築関連雑誌
ARCHITECTURAL MAGAZINES' BACK NUMBER FAIR
バックナンバーフェア'98

'98.10/3(土)〜11/15(日)

※一部の書店では開催期間が異なります。

全国40書店
同時開催

建築関連雑誌
出版9社の
協賛により、

バックナンバー
19誌を一堂に出品。

全国主要都市の
40書店で同時開催。
(一部の書店では開催期間が異なります。)

■出品出版社・出品予定誌
(株)エー・アンド・ユー [a+u]
(株)鹿島出版会 [SD]
(株)建築技術 [建築技術]
(株)建築資料研究社 [住宅建築・confort・造景]
(株)建築知識 [建築知識・パドマガ・建築知識スーパームック]
(株)彰国社 [建築文化・施工・ディテール]
(株)商店建築社 [商店建築・Wind]
(株)新建築社 [新建築・住宅特集・JA]
(株)マルモ出版 [ランドスケープデザイン・マイガーデン]
※増刊・別冊・ムック含む

札幌市 丸善 札幌南一条店
(TEL011-241-7254)
旭川市 ブックセンター冨貴堂MEGA
(TEL0166-29-2888)
仙台市 ジュンク堂書店 仙台店
(TEL022-265-5656)
宇都宮市 宇都宮ブックセンター
(TEL028-627-7700)
前橋市 煥乎堂
(TEL027-235-8111)
水戸市 ツルヤブックセンター 本店
(TEL0292-25-2711)
浦和市 須原屋
(TEL048-822-5321)
千葉市 千葉そごうブックセンター
(TEL043-245-8331)
(東京)
千代田区 三省堂書店 神田本店
(TEL03-3233-3312)
中央区 八重洲ブックセンター 本店
(TEL03-3281-8203)
新宿区 紀伊國屋書店 本店
(TEL03-3354-0131)
渋谷区 大盛堂書店
(TEL03-3463-0511)
渋谷区 青山ブックセンター 本店
(TEL03-5485-5511)
豊島区 東京旭屋書店 池袋店
(TEL03-3986-0311)
横浜市 有隣堂 本店書籍館
(TEL045-261-1231)
厚木市 くまざわ書店 本厚木店
(TEL0462-30-7077)
新潟市 紀伊國屋書店 新潟店
(TEL025-241-5281)
富山市 BOOKSなかだ 本店
(TEL0764-92-1192)
金沢市 ブック宮丸 金沢南店
(TEL076-244-3211)
長野市 平安堂 新長野店
(TEL026-224-4545)
静岡市 静岡谷島屋 本店
(TEL054-254-1301)
浜松市 浜松谷島屋
(TEL053-453-9121)
名古屋市 丸善 名古屋栄店
(TEL052-261-2251)
京都市 丸善 京都河原町店
(TEL075-241-2168)
京都市 大龍堂書店
(TEL075-231-3036)
大阪市 旭屋書店 本店
(TEL06-313-1191)
大阪市 紀伊國屋書店 梅田本店
(TEL06-372-5821)
大阪市 丸善 なんばOCAT店
(TEL06-635-3225)
大阪市 柳々堂書店
(TEL06-443-0167)
神戸市 ジュンク堂書店 三宮店
(TEL078-392-1001)
松江市 松江今井書店 本店
(TEL0852-24-2230)
岡山市 丸善 岡山シンフォニービル店
(TEL086-233-4640)
広島市 丸善 広島本通店
(TEL082-247-8763)
高松市 宮脇書店 本店
(TEL087-851-3733)
松山市 紀伊國屋書店 松山店
(TEL089-932-0005)
北九州市 井筒屋ブックセンタークエスト 小倉店
(TEL093-522-3924)
福岡市 紀伊國屋書店 福岡店
(TEL092-721-7755)
熊本市 紀伊國屋書店 熊本店
(TEL096-322-5531)
大分市 晃星堂書店
(TEL0975-33-0231)
鹿児島市 ジュンク堂書店 鹿児島店
(TEL099-239-1221)

SD Space Design Back Issues

Home Page Address:
http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm



9706 Takahiko Yanagisawa: The Composition of Theatrical Space: Introduces receent works focusing on the elements. New National Theatre, Tokyo Opera City, etc. Text: Muneshige Nagatomo, Yoshiaki Ogura, Shouzo Motosugi, Junichi Kawamura Disucussion: Masato Kawamukai and Takahiko Yanagisawa **Swedish Good Design: Undecorated Form Design** ¥2,000



9707 Hong Kong 1997: The Accelerating City
Grasping the aspect of Hong Kong through visual works by artists and interview with architects. artists: Alan Chan, Tycoon Graphics, Satoshi Asakawa, Shin Egashira, etc. Supervision: Shin Muramatsu, Kazuhiro Kojima, Hikaru Kinoshita. Text: Naonori Matsuda ¥2,000



9708 Venturi, Scott Brown and Associates: 1990's Works: Focuses on the first work in Japan, Mielparque Nikko Kirifuri and introduces 1990's works such as Seattle Art Museum and Additions, Renovations and Restoration, San Diego Museum of Contemporary Art. **Toward a New Living Environments:** Gifu Kitagata Housing Project ¥2,400



9709 A New Phase of Railway Station Space:
Introduces Railway Stations having additional value and tie with community such as JR Yabuki and JR Ohmagari. Also Introduces JR Kyoto widely noticed as International Competition. Text: Takayuki Miyabayasi etc. Talk: Tadanori Yokoo×Hiroshi Hara ¥2,000



9710 Architecture in Glass: Introducing architectures which adopt the characters of glass in such as optical and structural aspects. Searching for the present situation and possibility in the future: Extension of the Winterthur museum of Art, Hotel P, Konami Nasu Seminar House, etc. Text: Kazuhiko Nanba, Masao Ando, etc. ¥3,000



9711 Kengo Kuma: Digital Gardening: Introduces recent leading works of Kengo Kuma, advocate of post-modern architecture and winner in 1997 of the Architectural Institute of Japan Prize and the Benedicta Prize. Memorial Park and other designs. Articles by Youichi Iijima, Greg Lynn, etc. Discussion: Fumihiko Maki and Kengo Kuma. ¥2,800



9712 SD Review 1997: Publishing the result of SD Review contest with comments from the screening commmittee. Participants: Shigekatsu Takayasu Architects+Tatsuya Sakuma+Hirotada Hashizume+Hiroyuki Shigetomi, Hiroshi Kawahito, Sosuke Hujimoto, etc. **Spaces of Lighit and Color: Glass Artsits of Czecho** ¥2,000



9801 SD Review 1982-96
16th anniversary retrospective of SD Review looks at entries later built, examines relation to and significance in the world of architecture, and considers future directions. Text: Fumihiko Maki, Hiroshi Hara, Youichi Iijima, Osamu Nakasuji, ect. Round-table discussion: Makoto Motokura, Ryoji Suzuki, Akira Kuryu, and Kazuhiro Kojima ¥2,800



9802 Transparency in Architecture and the City: Swiss German Architecture Explores the appeal of the Swiss German sphere through an understanding of the background of Swiss architectural works and the context in which they came into being. Architects introduced are Herzog & de Meuron, Gigon & Guyer, etc. Texts by Momoyo Kaijima, etc. ¥2,200



9803 Czech Cubist/Rondocubist Architecture: A Reappreciation of the Revolution: Featuring extant Cubist and Rondocubist architecture in Prague; original photos. **Hiaso Kohyama: Drawings and space:** introduces Hisao Kohyama's architectural space and handling of detail through the architect's own drawings. ¥2,000



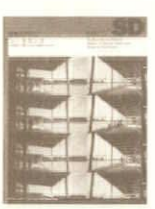
9804 Versatile Architects of the New Generation: Introduces the works and creative activities of young architects in their thirties to portray a sense of the times: INTENTIONALLIES, MIKAN, etc.
Desktop Community
¥2,000



9805 The Cutting Edge in Space Design:
Introduces specific examples of collaboration between architects and designer artists:Kazuko Fujie, Kinpei Nakamura, Susumu Shingu, etc.
House for Frida Kahlo and Diego Rivera:
Juan O'Gorman's Architecture and Mexican Modern
¥2,000



9806 Landscape Creation Today: The Challenges for Landscape Architects: Introduces landscaping set apart from the natural environment and purposefully designed to serve society. Architects introduced are Yoji Sasaki, PLACEMEDIA, Hiroki Hasegawa, Toru Mitani, Makoto Noborisaka, N. Finley+M. chiba, Ken Smith, Kyathryn Gustafson, Douglas Reed, etc. ¥3,000



9807 Coelacanth Architects: Traces their activities over twelve years, mainly through introduction of their works. Kibikougen Elementary School, Suijo Fire Station of Osaka City, Sotogaoka Exchange Forum, etc. Text: Hiroshi Hara, Yoshitake Doi. Interview: Riken Yamamoto ¥2,600



9808 Design Vocabularies of Light: LPA Works 1990-1998: Introducing a selected list of 40 concepts from LPA's design vocabulary, this book is a bible of illumination lore for the overall study of space created by light. Text: Arata Isozaki, Kaoru Mende ¥2,500



9809 The Landscape of Detail:
Its Art and Techniques
Introduces the details of architectural works with photos and drawings. Hiroshi Miyazaki, Akira Watanabe, Takenaka Corporation, Yoshio Taniguchi, Kajima Design, Shinichi Ogawa, Waro kishi, Fumihiko Maki, Yoshihiko Iida.
¥2,300

SD

Space Design
Hardcover Edition
and Order Form

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. **SD** endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of **SD** is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to Space Design and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2560

Or mail the card to:
Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107, Japan
tel: 81-3-5561-2550

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card
Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:
☐ Please enter my SUBSCRIPTION to Space Design, starting in

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of SD:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges(¥1,500 per order)
3. Postage(determined upon receipt of order)

Alvar Aalto
A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life : 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2
His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2
Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work : Tsukuba Center Building. Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake
Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980 : Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2
13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai
Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sassetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo
Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brough forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3
29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2
Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito
9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu
All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiko Hayakawa
His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii
His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany
Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989
Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoei Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut
Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix : List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections : Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates
Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun
Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World
Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

●

カーテン

コントラクトカーテンVOL.3

●

株式会社サンゲツ



㈱サンゲツでは，約4年ぶりに医療・福祉・教育など各種施設向けのカーテンを収録した新見本帳，コントラクトカーテンVOL.3を新発売した．　近年，医療・福祉・教育などの公共施設において抗菌・防臭機能などのハード面に加え，ソフト面として色彩心理学など工学的観点からのカラーセラピーを重視する傾向が強まっている．　同社では業界で初めて両面プリントのメディカルカーテンを開発した．　これは病院のベッドとベッドの間などに間仕切りとしてカーテンを吊るす場合，表裏両面に柄がプリントされているとどちら側からも柄が見え，心理的にもより治癒効果が高まることから，同社が特殊なプリント技術により開発した．

特長

①ＳＥＫマーク付抗菌防臭加工の遮光カーテンを新発売した．

②資源の有効な活用を目指した環境対応型商品．　使用済みペットボトルの再生糸を使用したエコマーク認定商品．

③子供向けのカラフルでポップな動物柄と花柄のプリントなどソフト面を重視したデザイン商品の充実．また，「カーテン総合」「ＡＤ」見本帳から人気の小紋柄，抽象柄を抜粋して収録した．

●

ドア

大型2ウィング自動回転ドア ステンレス仕様

●

ＹＫＫアーキテクチュラル プロダクツ株式会社



ＹＫＫアーキテクチュラル プロダクツ㈱では，スウェーデン・ベサム社より大型２ウィング自動回転ドア(アルミ仕様)を1995年より販売し，受注累計32台に達している．　そこで，新しく意匠性を高めたステンレス仕様をベサム社の協力を得て開発した．　スウェーデン・ベサム社のエンジン・安全センサーを基本に，従来の高い安全性，機能性を保ちながら透明感のあるデザインを実現した．　さらに，強化ガラスを採用することによって，スリムな框ドアとなった．　大量通行とともに意匠性を求められる商業ビル，ホテル，病院などに適している．

●

インテリア建材

ウッデリアＥＧシリーズ

●

三協アルミニウム工業株式会社



三協アルミニウム工業㈱では，インテリア建材ウッデリア天然木タイプと樹脂化粧シートタイプの２タイプに加え，住環境に安全でやさしい材料を使用した普及タイプのインテリア建材，ウッデリアＥＧシリーズを新発売した．

特長

①本体表面材には，ＶＯＣ（揮発性有機化合物）の発生を抑えた化粧シートを使用している．

②基材のＭＤＦ(中質繊維板)，パーティクルボードなどには，健康住宅を意識したホルムアルデヒド対策として，ＪＩＳ規格で定められた放散量Ｅ１基準をクリアした材料を使用している．

③新しい表面材の開発などにより，価格は，従来の中級タイプに比べ，約10％ダウンを図った．

④芯材が木質系なので，ドア開閉時の重量感や音が木質の味わいである．

⑤格調を高めるケーシング枠には，装飾性豊かなウェーブタイプとすっきりしたスタンダードタイプ，シンプルな納まりのノンケーシング枠の3種類から選べる．

⑥クローゼット開き戸タイプは，扉を閉めると丁番が見えないスライド丁番を採用している．

株式会社サンゲツ
名古屋市西区幅下1丁目4番1号
〒451-8575　Tel　052-564-3314

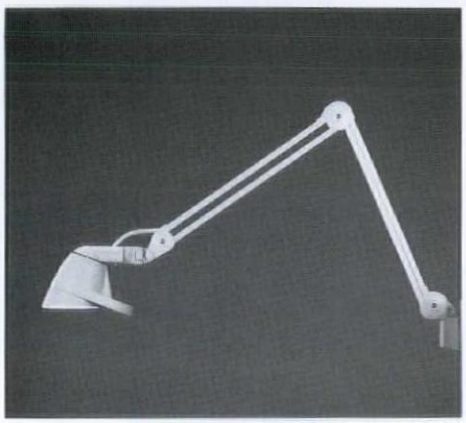
ＹＫＫアーキテクチュラル プロダクツ株式会社
東京都千代田区神田和泉町１番地
〒101-8642　Tel　03-3864-2242

三協アルミニウム工業株式会社
富山県高岡市早川70番
〒933-8610　Tel 0766-20-2332

●
照明

ホスピタルアームライト

●
ヤマギワ株式会社



ヤマギワ㈱では，病室における患者・医療スタッフの双方にとって理想的な照明器具，ホスピタルアームライトを新発売した．

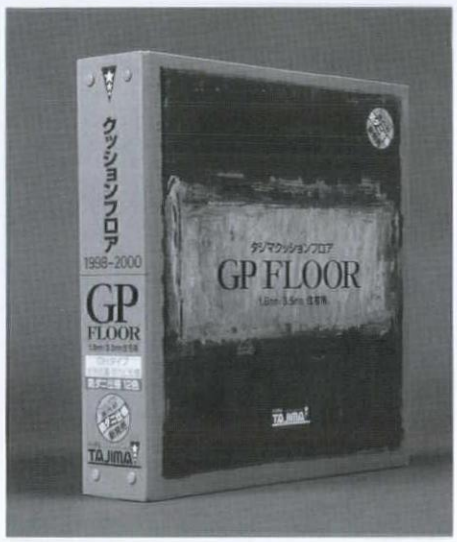
特長

①ランプは，1灯のみであるが，灯体のハンドルを患者側へ回転すると前面ガラスのフロスト部分がランプ位置に移動し，読書などにふさわしい拡散した柔らかい光が得られ，また医療スタッフ側へ回転するとクリア部分がランプ位置へ移動し，介護補助時に手元を照らす集光した光が得られる．
②ダイクロックミラーランプを使用し，熱線がカットされ，高照度にも関わらず熱感は少なくなっている．
③見上げたときにも発光部が直接目に入らず，眩しさのないより良好な照明環境が得られる．
④夜，消灯後にライトを使用したいとき，同室の患者の迷惑にならないように減光することができる．
⑤持ちやすい位置にある大型ハンドルは，LUXOアームとの組合せで自由な位置に灯体を動かすことができる．
⑥LUXOアームはスウェーデン鋼による高品質なバネを使用し，過酷な条件下でも抜群の耐久性を誇る．　長時間の使用でもスムーズに動き，自由な位置で止めることができる．　灯体には抗菌樹脂を採用した．

●
張床

ＧＰフロア1.8㎜ＧＨ

●
株式会社タジマ



㈱タジマでは，ＧＰフロア1.8㎜ＧＨについて，防ダニ加工品を新発売した．　防ダニ効果とともに抗菌性能もある，クッションフロアでは全く新しいタイプである．

寸法

1.8㎜（厚さ）×1,820㎜（幅）×20m

価格

2,640円/㎡
4,800円/m（工事費別）

色数

6柄12色

用途

住宅など

●
木質内装建材

ウッディーラインベーシックDタイプ
ウッディーラインベーシックAタイプ

●
トステム株式会社



トステム㈱では，ウッディーラインベーシックDタイプとウッディーラインベーシックAタイプの木質内装建材2シリーズを新発売した．

特長

①ドア・引戸本体の角をとったRエッジ仕様のため，手や物を傷つけない．
②ホルムアルデヒド対策品で，ＪＩＳ規格で定められた放出量Ｅ１相当基準をクリアしている．
③環境に優しい，非塩ビ系の樹脂シートを採用．
④ドアは新型三次元丁番（特許出願中）の採用で，吊込み，建付け調整が容易にできる．
⑤ドアを閉めると自動的に本体下部のシャッターが下がり，明かり漏れをおさえる．
⑥片引戸の枠の中間にある枠（中堅枠）に，明かり漏れ防止用の調整部材をつけた．
⑦Dタイプは，ドア・引戸の本体は，立体形状の鏡板と無垢調板目柄デザインの高級タイプ．
⑧Aタイプは，業界初のアルミフレーム構造を採用．ドアの四方は，アルミフレームにウレタンを充填，パネル部分はペーパーハニカム（紙製で軽くて丈夫な蜂の巣状の心材）で補強し，反りが少なく軽量で運搬や施工性に優れる．

ヤマギワ株式会社
東京都千代田区外神田4丁目1番1号
〒101-0021　Tel　03-3253-2111

株式会社タジマ
東京都千代田区岩本町3丁目11番13号
〒101-8577　Tel　03-5821-7731

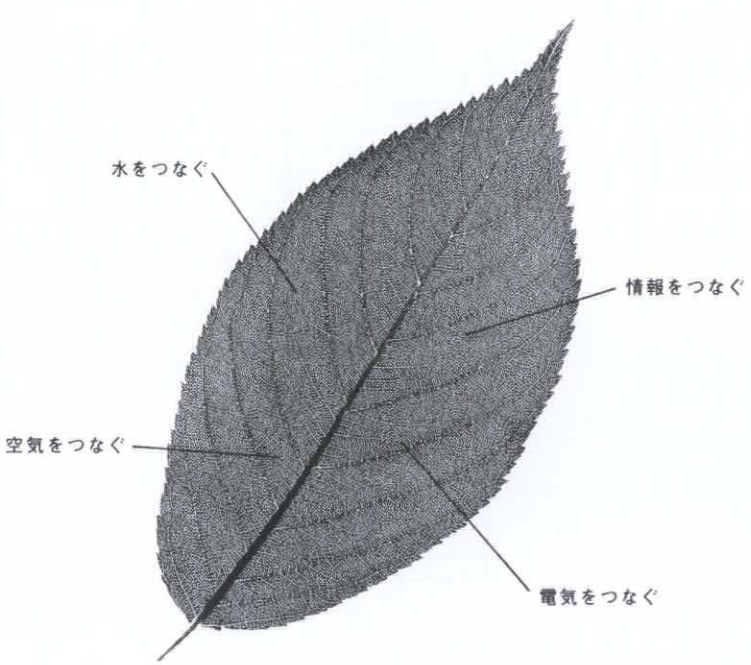
トステム株式会社　広報部
東京都江東区大島2丁目1番1号
〒136-8535　Tel　03-3638-8115

SEM

ビルの、工場の、街の、
すみずみに、つながろう。

私たちの仕事は、ビルに、工場に、
街に、生命を与える葉脈として、
そのすみずみにつながっています。
もっと、人が快適になる環境へ。
総合設備業の
リーディング・カンパニーとして、
先端の技術で、高度な未来を
提案し続けます。

あなたと快適をむすびます。



住友電設株式会社
大阪本社 〒550-0011 大阪市西区阿波座2-1-4 Tel 06(537)3400
東京本社 〒105-0014 東京都港区芝2-2-17 Tel 03(3454)7311

営業種目：電気設備／空調・給排水・衛生設備／
プラント設備／情報通信設備／電力流通設備／その他

OSAKI

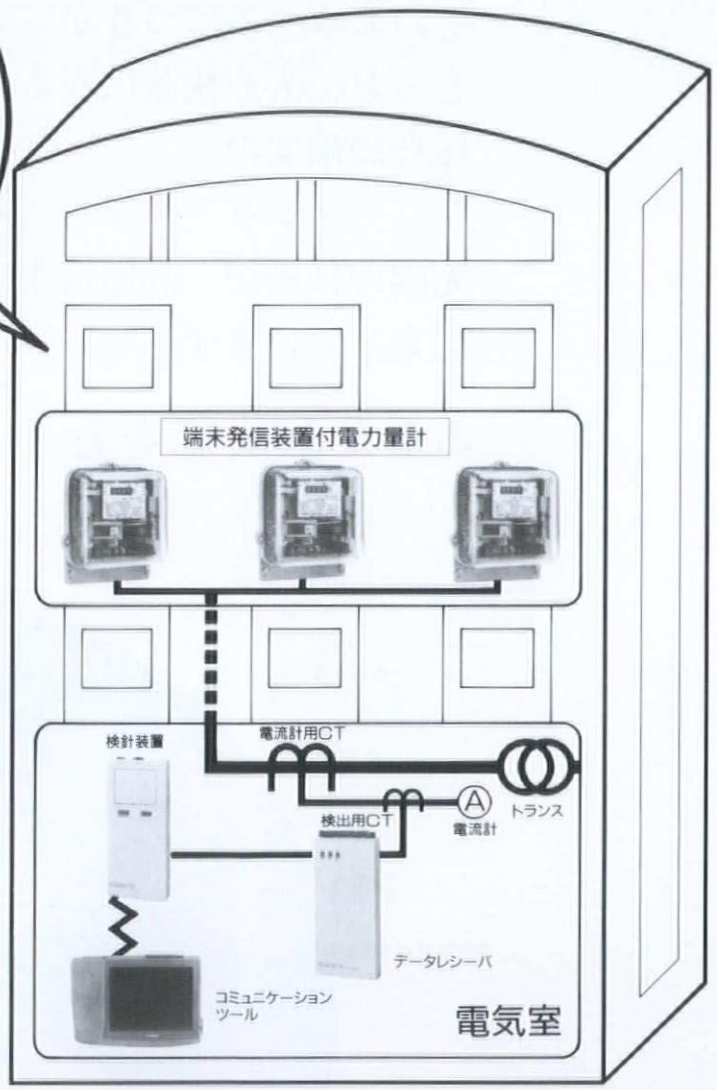
検針の大崎が初めて実用化

電力線通信方式集中検針システム
POWER LINE CARRIER-ONE-O

PLC-10

カンタン　シンプル　ローコスト
の電力線通信検針システム

**リニューアルetc.
既設の建物に
お手軽に
導入できます。**



電力線通信方式とは？

通信経路として、**屋内配電線**を利用します。
ですから……

専用のケーブルの敷設が不要なので……

- ■工事が簡単
- ■システムがシンプル
- ■導入がローコスト
- ■既設の建物(ビル、寮など)に手軽に導入できる
- ■増設にも即対応可能

コンパクトだから……

- ■設置場所を選ばない

検針の大崎だから

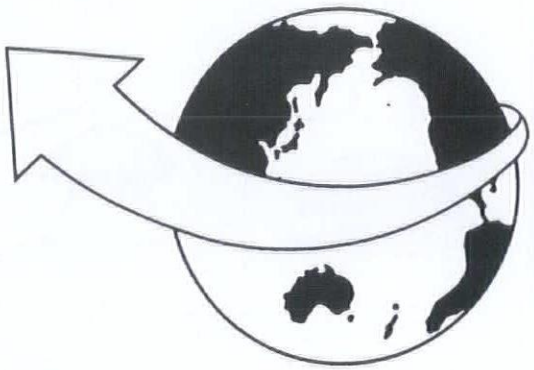
- ■電気のほか水道、ガスも検針

大崎電気工業株式会社

本　　社　〒141-8646 東京都品川区東五反田2-2-7　☎03-3443-7171
システム・機器営業部第二課　☎03-3443-7176　FAX03-3443-0265
大阪支店　☎06-373-2556
営 業 所　札　幌☎011-251-6622／仙　台☎022-223-3747／北関東☎048-653-5901／千　葉☎043-221-5714
横　浜☎045-664-5561／広　島☎082-243-1611／沖　縄☎098-832-7406

未来に向って…

限りある資源
限りある空間の中で
より快適な環境づくりの
ために努力しています。



●営業品目
空気調和・冷暖房・給排水・衛生設備・設計施工

株式会社朝日工業社

本社・東京支社　〒105-0013 東京都港区浜松町1-25-7　電話 03(3434)5711
大阪支社　〒532-0031 大阪市淀川区加島1-58-59　電話 06(302)2273
支店　北海道／東北／北関東／横浜／名古屋／中国／九州

REALパース98（リアル）　10万円均一で作成！！

※REALパースは当社のオリジナルです。



これがCGだ！
我社が常識を変えた。
自動作成だから出来る
この品質・この価格！！

全国から申し込み
殺到中！！
予約はお早めに。

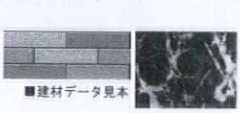


今のご時世 超 が一番!!
●納期は3日～1週間と 超速い!!
●全国どこからでも宅急便とFAXで
簡単に作業依頼が出来て 超便利!!
●更に割り引き制度が有るから 超うれしい!!
そんな事で一度試してチョ～

10万円 で、ここまで描いてくれる パース屋 さんが
他にいますか？



これも。それも。あれも。
みんな 10万円 だよ～



成果品はフルカラーで～す。



■日建システム株式会社　電話 03-3640-0814（小島）
〒136-0073 東京都江東区北砂4-7-24（http://www.remus.dti.ne.jp/~nikken）

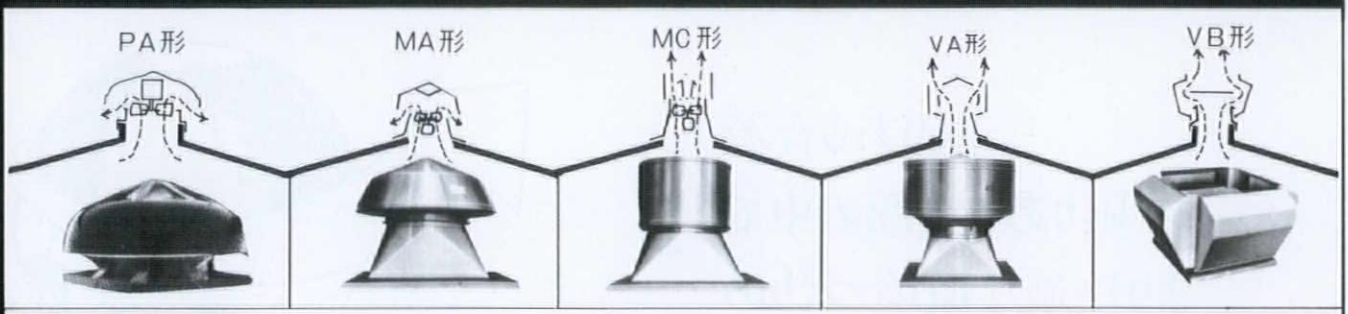
■その他の業務内容
●日影図作成・・・3万円
●3次元日影図

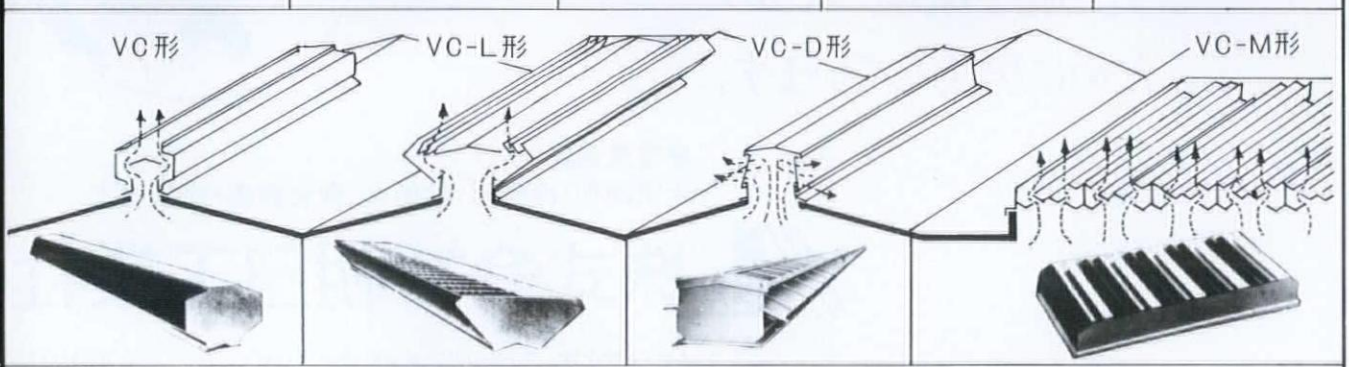
FN=HAN-B02A.TGA

坂本商会は創業80年 **換気・排煙・採光の専門メーカー**です

“自然の風”を効率よく招く坂本式ルーフベンチレータ群

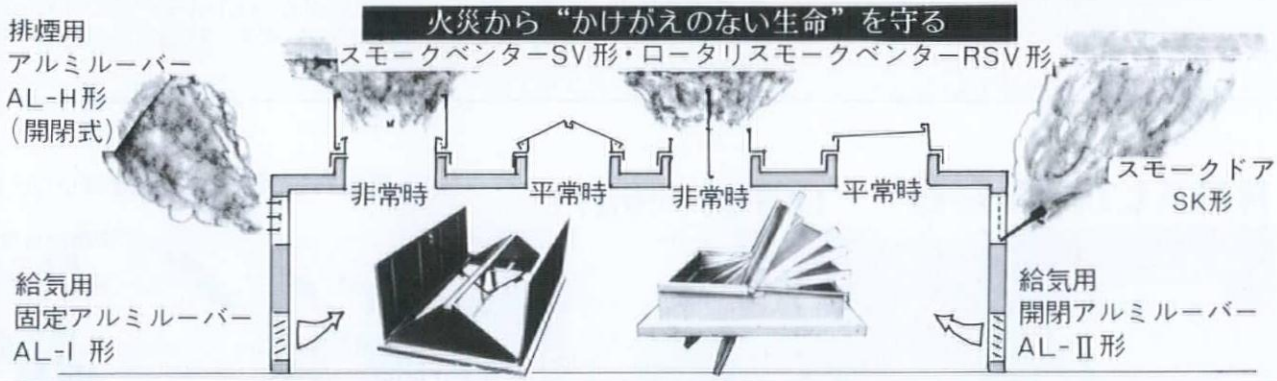
強制換気・自然換気装置





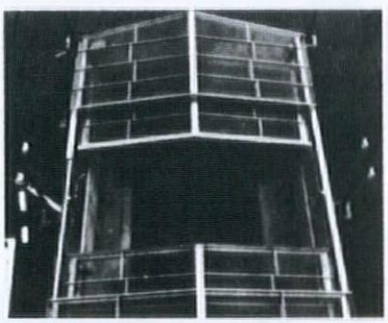
排煙・ルーバー装置

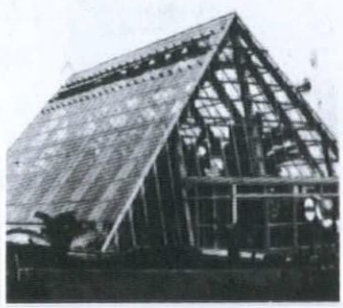
火災から“かけがえのない生命”を守る



採光装置

“太陽の恩恵”を全身でウケとめる坂本式スカイライト







株式会社 坂本商会

本社	東京都中央区日本橋2－16－12(江戸二ビル)	〒103-0027	電話 東京 (03)3271－5591(代)
松戸工場	千葉県松戸市松飛台420番地	〒270-2214	電話 松戸 (0473)87－6595(代)
技術研究所	千葉県松戸市松飛台217番地	〒270-2214	電話 松戸 (0473)87－3148
施工部	東京都墨田区東向島2丁目15番11号	〒131-0032	電話 東京 (03)3619－2221(代)

広告目次

SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命下さい（五十音順）

●共栄通信社

東京――東京都中央区銀座8-2-1
新田ビル（3572）3381
FAX（3572）3590

大阪――大阪市北区西天満3-6-8
笹屋ビル06（362）6515
FAX06（365）6052

●建報社

東京――東京都文京区湯島2-30-8
（3818）1961
FAX03(3818)1968

大阪――大阪市中央区淡路町1-4-9
昭栄ビル06（231）4548
FAX06（227）0268

●新建社

東京都中央区八丁堀2-1-10
ハヤシビル（3552）8247㈹
FAX（3552）8249

●中外

大阪――大阪市北区浪花町14-25
日本生命天六ビル06（379）1791

東京――東京都千代田区神田須田町2-5-2
須田町佐志田ビル（3255）8411

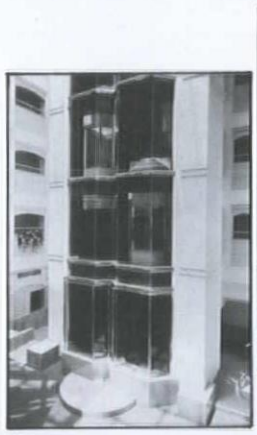
名古屋―名古屋市中区錦2-2-13
名古屋センタービル052（221）7641㈹

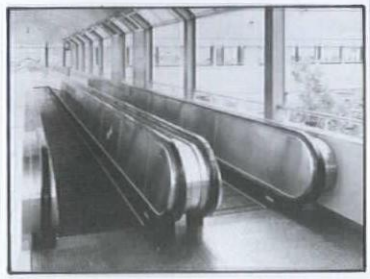
ア　㈱朝日工業社――A21
イ　㈱イトーキ――A12
オ　大崎電気工業㈱――A20
　　㈱岡村製作所――72
カ　鹿島――A4・A5
　　軽井沢ホテル鹿島ノ森――A6
　　川崎電気㈱――A15
　　㈱関電工――A16
コ　コクヨ㈱――80
サ　三機工業㈱――109
　　㈱坂本商会――A22
シ　新日軽㈱――表4
　　新菱冷熱工業㈱――A13
　　昭和アステック㈱――117
ス　住友電設㈱――A19
タ　大興物産㈱――A8
　　大栄電気㈱――A15
　　高砂熱学工業㈱――表3
チ　㈱中電工――A14
ト　東光電気工事㈱――A3
　　㈱トーエネック――A14
　　東洋熱工業㈱――115
　　㈱東芝――A24
ニ　日本電気㈱――A9
　　日新工業㈱――A10
　　㈱西原衛生工業所――A11
　　日建システム㈱――A21
　　日本スチールケース㈱――69
　　日本電信電話㈱――105
フ　㈱ブリヂストン――A1
　　プラス㈱――79
ホ　ホテルイースト21東京――A7
マ　松下電器産業㈱――A2
ヤ　㈱ヤナセ――106
　　山田照明㈱――116
リ　リリカラ㈱――表2



乗る人の気持ちを考える。
そこから始まる技術、
すすめています。

21世紀を生きる、私たちの子供たち、そのまた子供たちが安心して利用できるエレベーター・エスカレーターづくりを。
そのために東芝が理想としている技術をひと言でいえば、それは、技術を感じさせない技術。乗っていることを感じさせない技術こそ、私たちの理想です。
人やモノを運ぶタテの輸送機関から、人の気持ちを考えたアメニティ空間へ。
私たち東芝は、21世紀を見すえた都市環境づくりに取りくんでいます。






東芝エレベーター・エスカレーター

株式会社 東芝　　昇降機事業部

本社 〒105-8001 東京都港区芝浦1-1-1(東芝ビルディング)　TEL (03)3457-4621